

沖縄県文化財調査報告書 第111集

# 湧田古窯跡 (I)

—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査—

1993年 3月

沖縄県教育委員会





巻首図版 1 通防近景 (東側より)



巻首図版2 1地区の遺構 (上：石列と瓦列 下：瓦列)



卷首図版3 II地区の遺構 (上: 1号室 下: 2号室)



## 序

本書は、県庁舎建設局からの分任を受けて、1986年度から1987年度にかけて、県庁舎建設工事に伴って実施した調査成果の報告書であります。

県庁舎の建設は行政棟、議会議棟、警察棟の3棟の主要施設に区分けられ建設が進められていますが、本報告書は最初に着工しました行政棟の建設に関わって発掘された調査記録であります。

湧田古窯跡は17世紀代に開設された窯業地の一つであります。古くは琉球王府が編纂した文献に湧田窯創建の記録があり、その実際の存在が発掘調査によって確認されたこととなります。数々の出土品とともに重要な遺構が検出されました。これまで沖縄の窯業史研究では、登り窯が伝統的な窯の形態であるとされてきましたが、従来の見解を覆す平窯構造が確認され、沖縄窯業史の研究に一石を投じることとなりました。

平窯そのものは日本本土にも古くから見られますが、湧田窯の例のような形状をもつものはなく、その類例は中国、東南アジアに分布すると言われております。湧田窯は、沖縄の窯業技術の源流の解明に、きわめて重要な手がかりをもたらす第一級の考古資料と言えます。また、これまで沖縄各地の近世の村落遺跡から、湧田焼きと目される陶器がかなり出土しておりますが、今回の発掘調査の成果によりその資料の比較研究がある程度可能になりました。これにより、近世琉球の窯業地と生産地の商品流通の構造、範囲の様相の一端を窺い知ることが出来たとと言えます。

今日の壺屋窯は湧田焼、知花焼などの古窯が移転統合してできたものであると文献に記録されておりますが、湧田窯は今日につながる沖縄の伝統的地場産業（窯業）のルーツの一つとしての記念物であったと言えます。

末尾になりましたが、本報告書が文化財保護思想の普及や地域の文化財並びに歴史に対する認識と理解を深め、さらに学術研究の一助ともなれば幸いに存じます。

なお、発掘調査及び資料整理作業にあたり、多大なるご協力を頂いた関係各位に対して深く感謝いたします。

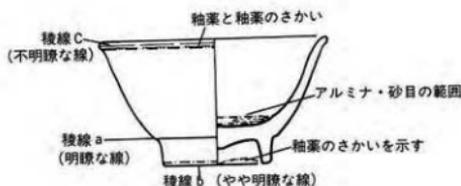
平成5年3月

沖縄県教育委員会  
教育長 津留健二

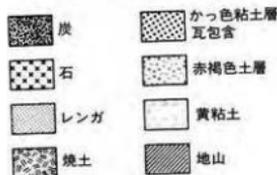
## 例 言

1. 本書は1986年度から1987年度に県教育委員会文化課が県庁舎建設局から分任を受けて、県庁舎行政棟の建設に伴って発掘調査された成果報告書である。
2. 第2号窯と第1号窯の2基の切りとり保存作業については、奈良国立文化財研究所の保存科学研究室の沢田正昭氏と肥塚隆保氏の御協力を得ました。謝意を表します。
3. 第II章で掲載した『那覇読史地図』（明治初年の那覇）は嘉手納宗徳氏の製作によるものである。
4. 第III章で使用した2500分の1の国土基本図は建設省国土地理院発行によるものである。
5. 陶磁器の鑑定は佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長大橋康二氏の協力を得ました。記して謝意を表します。
6. 地磁気年代測定を島根大学の伊東晴明教授と時枝克安助教授の協力を得ました。記して謝意を表します。
7. I地区から検出された人骨の鑑定については長崎大学医学部第二解剖学教室の松下孝幸助教授の協力を得ました。記して謝意を表します。
8. 獣・魚骨の同定については、早稲田大学考古学研究室の金子浩昌氏の協力を得ました。記して謝意を表します。
9. 各章の執筆分担は次の通りである。  
 大城 慧（第I章、第II章、第III章、第V章第16節～第21節、第VI章）  
 島袋 洋（第IV章、第V章第15節）  
 金城亀信（第V章第10節～第14節）  
 豊見山禎（第V章第1節～第3節、第9節、第22節、第23節）  
 長嶺 均（第V章第4節～第8節）  
 金子浩昌（第V章第24節）
10. 本書に掲載した遺物の写真は上原明・矢沢秀雄の撮影によるものである。
11. 発掘調査で出土した遺物及び報告書作成のための実測図・写真類などの記録は全て、県教育委員会文化課資料室にて保管している。
12. 本遺跡の発掘調査にあたって文化庁及び奈良国立文化財研究所の指導・助言を頂いた。記して感謝を表したい。
13. 本書に表した高度値は、海拔高である。
14. 切り取り保存された第2号窯は県立博物館の構内において仮保管中であり、第1号窯については那覇市壺屋地区に保管展示の予定である。
15. 観察表の計測値の単位は全てcm、gである。

遺物実測凡例



遺構図凡例



# 目 次

巻頭図版	
序	
例言	
第I章 調査に至る経緯	
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査体制	4
第II章 位置と環境	6
第III章 調査経過	9
第IV章 層序と遺構	11
第1節 I地区	1. 層序……………11
	2. 遺構……………11
第2節 II地区	1. 層序……………24
	2. 遺構……………26
第3節 III地区	……………31
第V章 出土遺物	……………35
第1節 青磁	……………35
第2節 白磁	……………48
第3節 染付	……………54
第4節 褐釉陶器	……………80
第5節 特殊陶器	……………80
第6節 瑠璃釉	……………81
第7節 タイ産陶器	……………85
第8節 ベトナム産色絵	……………85
第9節 本土産陶磁器	……………86
第10節 沖縄産施釉陶器	……………93
第11節 沖縄産無釉陶器	……………122
第12節 土器	……………134
第13節 陶質土器	……………135
第14節 瓦質土器	……………138
第15節 瓦類	……………145
第16節 金属製品(簪・釘・その他)	……………155
第17節 銭貨	……………155
第18節 鉄滓・羽口	……………155
第19節 埴塼	……………155
第20節 硯・石製品	……………155
第21節 キセルの雁首	……………157
第22節 円盤状製品	……………166
第23節 窯道具	……………170
第24節 湧田古窯跡出土の脊椎動物遺体	……………176
第VI章 結 語	……………192

## 目 次

第1図 沖縄本島及び那覇市の位置	1	第41図 染付② (I地区)	61
第2図 湧田古窯跡の位置と調査地域	2	第42図 染付③ (I地区)	62
第3図 古地図にみる湧田村	7	第43図 染付④ (I地区)	63
第4図 調査範囲とグリット設定	8	第44図 染付⑤ (I地区)	64
第5図 遺構出土状況	10	第45図 染付⑥ (I地区)	65
第6図 層序 (I地区)	12	第46図 染付⑦ (I地区)	66
第7図 け-43~45グリット検出の瓦列と骸骨 集中部 (I地区)	13	第47図 染付⑧ (I地区)	67
第8図 さ・し・ナー-43・44 磚・瓦検出状況 (I地区)	14	第48図 染付⑨ (I地区)	68
第9図 こ-42~さ-42瓦列検出状況 (I地区)	15	第49図 染付⑩ (I地区)	69
第10図 長方形石組遺構と瓦列 (I地区)	16	第50図 染付⑪ (I地区)	70
第11図 石列と瓦列 (I地区)	17	第51図 染付⑫ (I地区)	71
第12図 検出された井戸 (I地区)	18	第52図 染付⑬ (I地区)	72
第13図 検出された井戸 (I地区)	19	第53図 染付⑭ (I地区)	73
第14図 3号窯 (I地区)	20	第54図 染付⑮ (I地区)	74
第15図 4号窯 (I地区)	21	第55図 染付⑯ (I地区)	75
第16図 5号窯と井戸 (I地区)	22	第56図 染付⑰ (I地区)	76
第17図 6号窯 (I地区)	23	第57図 染付⑱ (I地区)	77
第18図 層序 (II地区)	25	第58図 染付⑲ (I地区)	78
第19図 ブタ出土状況 (第5層) (II地区)	26	第59図 染付⑳ (I地区)	79
第20図 帯状遺物集中部 (II地区)	28	第60図 褐釉陶器	82
第21図 1号窯 (II地区)	29	第61図 褐釉陶器・特殊陶器	83
第22図 2号窯 (II地区)	30	第62図 褐釉陶器と瑠璃釉	84
第23図 全体平面の状況 (III地区)	32	第63図 タイ産陶器・ベトナム産色絵	85
第24図 完掘後の地形と断面 (III地区)	33	第64図 本土産陶磁器 (I地区)	87
第25図 層序 (III地区)	34	第65図 本土産陶磁器 (II地区)	89
第26図 青磁① (I地区)	38	第66図 本土産陶磁器 (II地区)	90
第27図 青磁② (I地区)	39	第67図 本土産陶磁器 (II地区)	91
第28図 青磁③ (I地区)	40	第68図 本土産陶磁器 (I・II地区)	92
第29図 青磁④ (I地区)	41	第69図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 碗	107
第30図 青磁⑤ (I地区)	42	第70図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 碗	108
第31図 青磁⑥ (I地区)	43	第71図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 碗	109
第32図 青磁⑦ (I地区)	44	第72図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小碗	110
第33図 青磁⑧ (I地区)	45	第73図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小皿	111
第34図 青磁⑨ (I地区)	46	第74図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小皿・小碗・小杯・大皿	112
第35図 青磁⑩ (II地区)	47	第75図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 大皿・大鉢	113
第36図 白磁① (I地区)	50	第76図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小鉢・大鉢	114
第37図 白磁② (I地区)	51	第77図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小鉢・香炉・火取	115
第38図 白磁③ (I地区)	52	第78図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 酒器・急須・壺	116
第39図 白磁④ (I地区)	53	第79図 沖縄産施釉陶器 (上焼) 蓋 (急須・壺・鍋) 大型急須・片口鉢	117
第40図 染付① (I地区)	60	第80図 沖縄産施釉陶器 (上焼)	

	油壺・瓶子・対瓶・瓶・壺	118
第81図	沖縄産施釉陶器(上焼)	
	油壺・乗櫛・燭台・灯明皿	119
第82図	沖縄産施釉陶器(上焼) 火炉・火鉢	120
第83図	沖縄産施釉陶器(上焼) 鍋	121
第84図	沖縄産無釉陶器(荒焼) 摺鉢	128
第85図	沖縄産無釉陶器(荒焼) 壺	129
第86図	沖縄産無釉陶器(荒焼)	
	壺・徳利・瓶子・花瓶・小壺	130
第87図	沖縄産無釉陶器(荒焼) 水甕	131
第88図	沖縄産無釉陶器(荒焼) 蓋・水鉢・花鉢	132
第89図	沖縄産無釉陶器(荒焼)	
	小鉢・鉢・水注・片口鉢・蓋・碗・ 皿・乗櫛・灯明皿・火炉	133
第90図	陶質土器	137
第91図	瓦質土器	141
第92図	瓦質土器	142
第93図	瓦質土器	143
第94図	瓦質土器	144
第95図	瓦型	147
第96図	軒丸瓦	148
第97図	丸瓦	149
第98図	軒平瓦	150

第99図	平瓦	151
第100図	埴瓦	152
第101図	埴	153
第102図	レンガ	154
第103図	金属製品	158
第104図	銭貨拓影	159
第105図	銭貨拓影	160
第106図	埴塼	161
第107図	羽口	162
第108図	石器(1:たたき石、2:砥石)	163
第109図	硯	164
第110図	キセルの雁首と吸口	165
第111図	円盤状製品の平面分布	166
第112図	サイズ別出土状況	167
第113図	円盤状製品	168
第114図	円盤状製品	169
第115図	竈道具①	172
第116図	竈道具②	173
第117図	竈道具③	174
第118図	竈道具④	175
第119図	ブタ下顎骨	183
第120図	傷のある骨	184

## 表 目 次

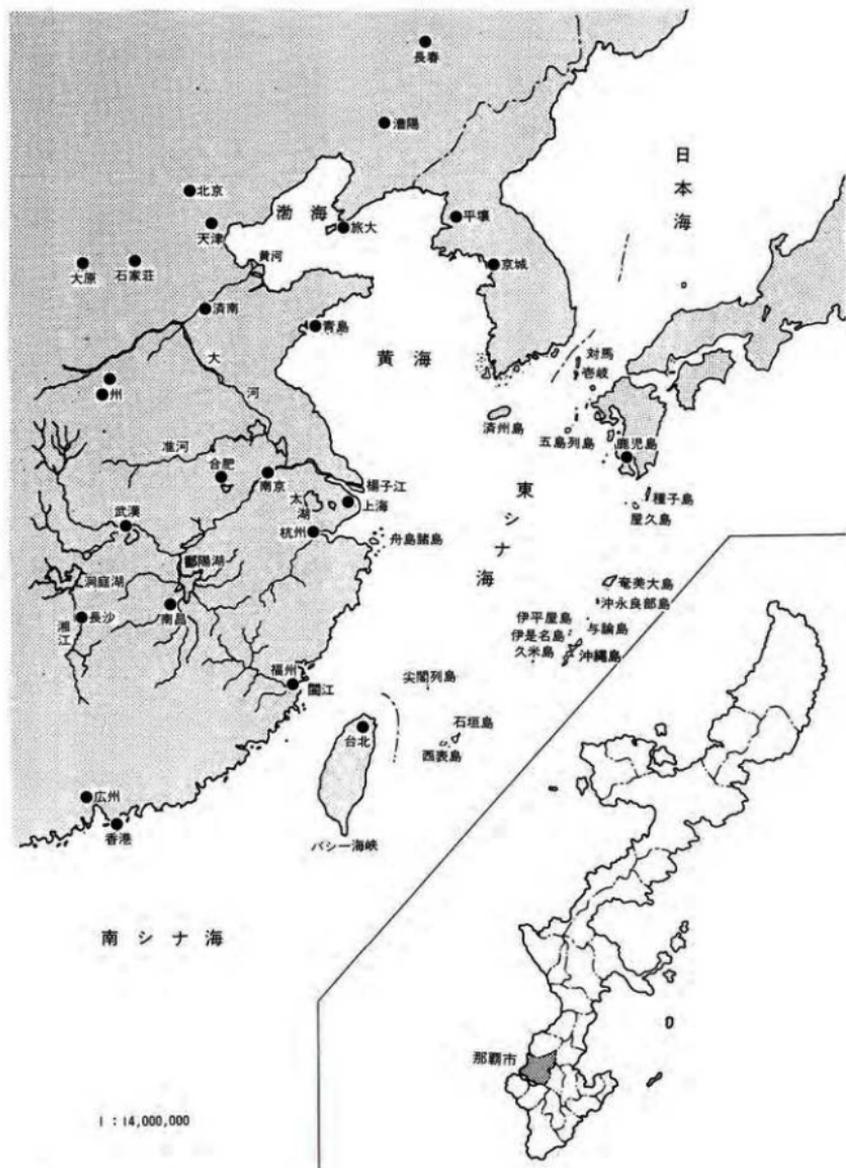
第1表	青磁観察一覧	36
第2表	白磁観察一覧	48
第3表	染付観察一覧	56
第4表	本土産陶磁器観察一覧	88
第5表	沖縄産陶器(上焼)観察一覧	103
第6表	沖縄産陶器(荒焼)観察一覧	126
第7表	瓦質土器観察一覧	140
第8表	摺鉢口径一覧	138
第9表	植木鉢口径一覧	138
第10表	古銭観察一覧	156
第11表	竈道具観察一覧	171
第12表	脊椎動物種名一覧	176
第13表	魚類出土状況	177
第14表	ニワトリ骨出土状況	178
第15表	ジュゴン出土一覧	178
第16表	ヒト出土一覧	178
第17表	ネズミ出土一覧	178

第18表	イヌ骨出土状況	179
第19表	ネコ骨出土状況	179
第20表	ヤギ骨出土状況	181
第21表	各種動物最少個体数出土状況	181
第22表	骨の計測(ブタ、イヌ、ウシ、ウマ)	185
第23表	ブタ歯牙出土状況	188
第24表	ブタ歯牙出土状況 II地区	188
第25表	ブタ歯牙出土状況 II地区(一括)	188
第26表	イヌ歯牙出土状況	189
第27表	ウマ歯牙出土状況	189
第28表	ウシ歯牙出土状況	189
第29表	ヤギ歯牙出土状況	189
第30表	ブタ骨出土状況	190
第31表	II地区ブタ骨出土状況	192
第32表	ウシ骨出土状況	191
第33表	ウマ骨出土状況	191

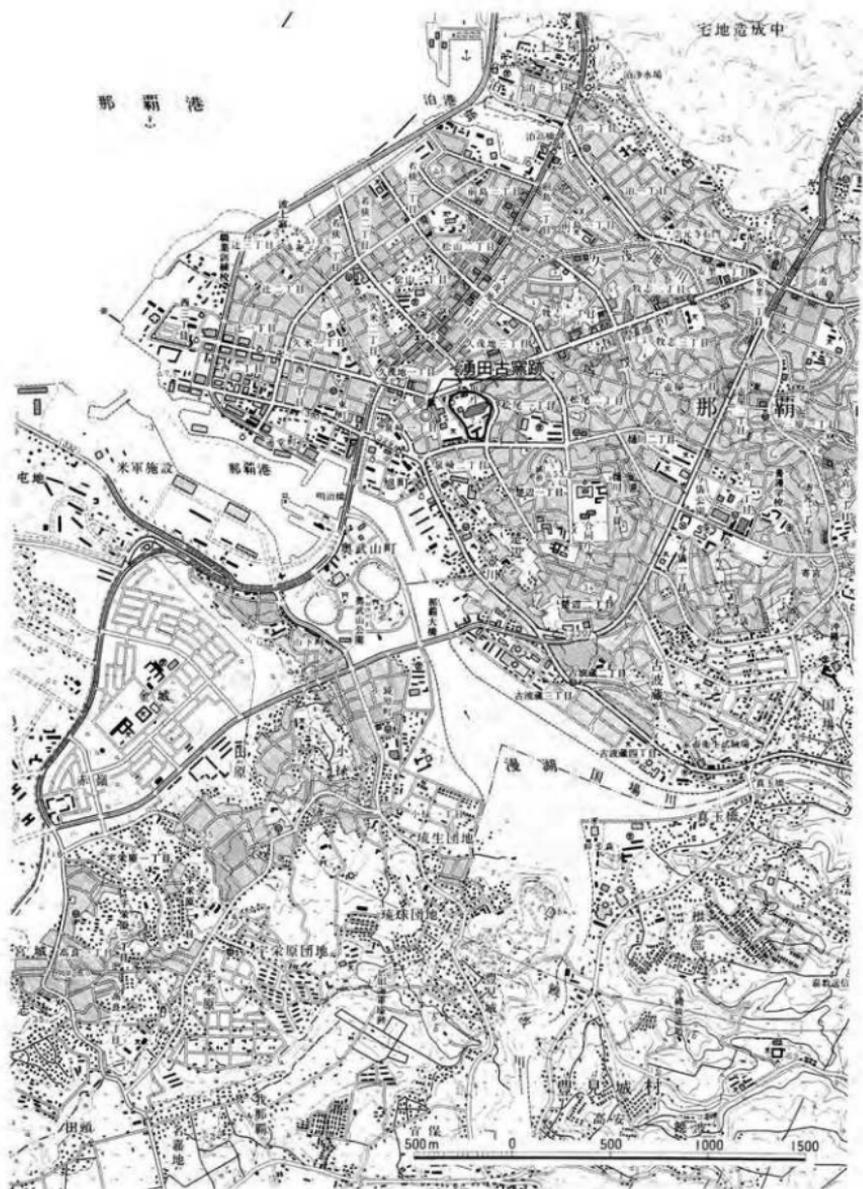
## 図版目次

- |                                        |                             |
|----------------------------------------|-----------------------------|
| 第1図版 表土剥ぎの状況と事前の打ち合せ                   | 第43図版 青磁⑨ (I地区)             |
| 第2図版 I地区作業風景                           | 第44図版 青磁⑩ (I地区)             |
| 第3図版 I地区堆積層の状況                         | 第45図版 白磁① (I地区)             |
| 第4図版 I地区遺物出土状況                         | 第46図版 白磁② (I地区)             |
| 第5図版 I地区遺物出土状況                         | 第47図版 白磁③ (I地区)             |
| 第6図版 I地区 (上: 3号室と4号室検出状況、<br>中・下: 3号室) | 第48図版 白磁④ (II・III地区)        |
| 第7図版 I地区4号室の状況                         | 第49図版 染付① (I地区)             |
| 第8図版 I地区5号室の状況                         | 第50図版 染付② (I地区)             |
| 第9図版 I地区6号室の状況                         | 第51図版 染付③ (I地区)             |
| 第10図版 I地区井戸検出状況                        | 第52図版 染付④ (I地区)             |
| 第11図版 I地区遺構検出状況                        | 第53図版 染付⑤ (I地区)             |
| 第12図版 I地区遺構検出状況                        | 第54図版 染付⑥ (I地区)             |
| 第13図版 I地区遺構検出状況                        | 第55図版 染付⑦ (I地区)             |
| 第14図版 I地区遺構検出状況                        | 第56図版 染付⑧ (I地区)             |
| 第15図版 I地区遺構検出状況                        | 第57図版 染付⑨ (I地区)             |
| 第16図版 I地区遺構検出状況                        | 第58図版 染付⑩ (I地区)             |
| 第17図版 I地区遺構検出状況                        | 第59図版 染付⑪ (I地区)             |
| 第18図版 II地区作業風景                         | 第60図版 染付⑫ (I地区)             |
| 第19図版 II地区堆積層の状況                       | 第61図版 染付⑬ (II地区)            |
| 第20図版 II地区の状況                          | 第62図版 染付⑭ (II地区)            |
| 第21図版 II地区の状況                          | 第63図版 染付⑮ (II地区)            |
| 第22図版 II地区遺物出土状況                       | 第64図版 染付⑯ (II地区)            |
| 第23図版 II地区獣骨出土状況                       | 第65図版 染付⑰ (II地区)            |
| 第24図版 II地区竪前面の状況                       | 第66図版 染付⑱ (II地区)            |
| 第25図版 II地区1号室・2号室の発掘状況                 | 第67図版 染付⑲ (II地区)            |
| 第26図版 II地区1号室(上)と2号室(下)                | 第68図版 染付⑳ (II地区)・磁器 (III地区) |
| 第27図版 II地区1号室                          | 第69図版 褐釉陶器                  |
| 第28図版 II地区1号室内側の調整痕                    | 第70図版 褐釉陶器と特殊陶器             |
| 第29図版 II地区2号室の状況と作業風景                  | 第71図版 褐釉陶器と琉璃軸              |
| 第30図版 II地区2号室                          | 第72図版 タイ産陶器・ベトナム産色鉛         |
| 第31図版 II地区窯体熱残留磁気調査状況                  | 第73図版 本土産陶磁器 (I地区)          |
| 第32図版 II地区1号室・2号室切り取り作業                | 第74図版 本土産陶磁器 (II地区)         |
| 第33図版 III地区発掘風景                        | 第75図版 本土産陶磁器 (II地区)         |
| 第34図版 III地区の状況と遺物の出土状況                 | 第76図版 本土産陶磁器 (II地区)         |
| 第35図版 青磁① (I地区)                        | 第77図版 本土産陶磁器 (I・II地区)       |
| 第36図版 青磁② (I地区)                        | 第78図版 沖縄産施釉陶器 (上焼) 碗        |
| 第37図版 青磁③ (I地区)                        | 第79図版 沖縄産施釉陶器 (上焼) 碗        |
| 第38図版 青磁④ (I地区)                        | 第80図版 沖縄産施釉陶器 (上焼) 碗        |
| 第39図版 青磁⑤ (I地区)                        | 第81図版 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小碗       |
| 第40図版 青磁⑥ (I地区)                        | 第82図版 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小皿       |
| 第41図版 青磁⑦ (I地区)                        | 第83図版 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小皿・小碗・小杯 |
| 第42図版 青磁⑧ (I地区)                        | 第84図版 沖縄産施釉陶器 (上焼) 大皿・大鉢    |
|                                        | 第85図版 沖縄産施釉陶器 (上焼) 小鉢・大鉢    |

- 第86図版 沖縄産施釉陶器（上焼）小鉢・香炉  
 第87図版 沖縄産施釉陶器（上焼）酒器・急須・壺  
 第88図版 沖縄産施釉陶器（上焼）蓋（急須・壺・鍋）  
 大型急須・片口鉢  
 第89図版 沖縄産施釉陶器（上焼）油壺・瓶子・対瓶  
 第90図版 沖縄産施釉陶器（上焼）油壺・乗櫛・燗台・  
 灯明皿  
 第91図版 沖縄産施釉陶器（上焼）火炉・火鉢  
 第92図版 沖縄産施釉陶器（上焼）鍋  
 第93図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）摺鉢  
 第94図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）壺  
 第95図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）壺・徳利・瓶子・  
 花瓶・小壺  
 第96図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）水甕  
 第97図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）蓋・水鉢・花鉢  
 第98図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）鍋・水注・片口鉢・  
 蓋・碗・皿・乗櫛・灯明皿・火炉  
 第99図版 陶質土器  
 第100図版 瓦質土器  
 第101図版 瓦質土器  
 第102図版 瓦質土器  
 第103図版 瓦質土器  
 第104図版 瓦型  
 第105図版 軒丸瓦  
 第106図版 丸瓦  
 第107図版 軒平瓦  
 第108図版 平瓦  
 第109図版 埴瓦  
 第110図版 埴  
 第111図版 レンガ  
 第112図版 金属製品  
 第113図版 銭貨  
 第114図版 銭貨  
 第115図版 カンザシ・鉄滓・埴塀・羽口  
 第116図版 石器（1：たたき石、2：砥石）  
 第117図版 硯  
 第118図版 キセルの雁首と吸口  
 第119図版 円盤状製品  
 第120図版 円盤状製品  
 第121図版 窯道具①  
 第122図版 窯道具②  
 第123図版 窯道具③  
 第124図版 窯道具④  
 第125図版 サメ、魚類、ニワトリ、ジュゴン、  
 ヒト  
 第126図版 イヌ、ネコ、ヤギ  
 第127図版 ブタ  
 第128図版 ブタ  
 第129図版 ブタ  
 第130図版 ブタ  
 第131図版 ウマ、ウシ  
 第132図版 ウマ  
 第133図版 ウマ  
 第134図版 ウシ  
 第135図版 ウシ



第1図 沖縄本島及び那覇市の位置



第2図 湯田古家跡の位置と調査地域

# 第 I 章 調査に至る経緯

## 第 1 節 調査に至る経緯

琉球政府時代に現在の那覇市泉崎 1-2-2 の敷地に建設された県庁舎は戦後間もなく米軍政府、及び民政府として政治の中枢機関が集中した場所であり、現在にまで至っている。

昭和28年に建設された各建物が40年間において、老朽化と新しい県民のニーズに対応できる施設としては狭いことから新庁舎建設が昭和58年12月に決定され現在の地に建設される運びとなった。

新しい県庁舎建設については、昭和58年に県庁舎建設基本構想、昭和59年に基本計画が実施された。建設基本構想の中では、行政棟、議会議棟、警察棟の主要建物に区分され建設が進められている。

昭和61年度からは旧庁舎の建物の解体工事の後、行政棟の建設工事に入っていった。ところが、現庁舎敷地は湧田と呼称した窯業を中心とした村跡でもあった。古くは17世紀の始めに、この地域に窯業が開されたことが文献に登場してくるところであり、琉球最大の窯場であったことで知られていたところである。戦後の焼け野原から復興して近代的な建物が建ち並んだことから、詳細な発掘調査が実施される機会がないまま長い間ペールに包まれてきた経緯がある。但し、付近一帯の様相は文献や焼き物が個人住宅や道路改良工事などからしばしば遺物が採集されていたことから、焼き物の村として早くから周知されていたところでもある。戦時中膨大な戦禍を受けたことから、あるいはその後の旧庁舎建設の際に旧来の地形が大きく変貌したとはいえ構内には、まだ緑地帯として残されてきた場所もあったことから工事の実施の際にも建設局に対して、旧湧田村が存在していたことや工房跡や遺物が地下に存在していることの状況を説明した。

その後、県庁舎建設局側から湧田古窯跡の取扱いについて調整があった。それに対し、県文化課から遺物が出土した時点で連絡方を申し入れた。ところが、実質的な工事が入る直前においても双方の調整がなされないまま工事が先行してしまった状況であった。すでに地下への掘削が始まっており、その中から夥しい量の瓦片が掘り出されたことから県庁舎建設局へ埋蔵文化財としての取扱いとともに発掘調査の必要性があることを申し入れた。発掘調査に入った時には一部土取り工事が入っており搬出が行われていた。協議調整の結果は緊急発掘調査という形で建設局からの調査費で実施された。

調査は遺跡の広がりを確認することから始められた。1986年10月～12月にかけて範囲確認調査を実施し、引き続き同年12月～1987年8月にかけて記録保存の為の発掘調査を実施した。調査面積は約5,000㎡の広大な範囲に及んだ。工事区内は、遺跡に支障のないところは、工事の進捗状況との関連から変則的な発掘調査となった。工事現場内での調査となったことから作業員の安全管理の面に調査員の対応に苦慮した。

調査の途中から工事がストップした中で長い発掘調査が実施された。以後、建設局と文化課との連絡会議もたれた。工事着手前の詳細な協議調整がとられなかったことが、行政棟の竣工を大幅に遅らせる要因であったと考える。

発掘調査の結果は、膨大な量の瓦、塼を中心とする遺物とともに窯跡や工房跡を示す遺構がほぼ完全な形で検出されたことで、一気に湧田村の古窯の形態が浮かび上がってきたといえる。沖縄における窯業技術の系譜と展開を知る上で重要な遺跡の一つであったことがあらためて確認されたと言える。

## 第2節 調査体制

湧田古窯跡は、県庁舎敷地の全域に広がっており作業場、粘土取り場、窯、不良品廃棄場、製品置き場等が確認され、窯場工房の様相が立体的に把握できた。

発掘調査は1986年12月から1987年8月までの約9ヶ月の長期に及び県文化課の職員が調査にあたった。また出土した資料については7年間の歳月をかけて水洗いからナンバーリング、分類、実測、写真等と細分化され整理されてきた。コンテナ総数933箱の膨大な量にのぼった。

調査体制は発掘調査から資料整理、報告書の刊行まで含めて下記の通りであった。

### 調査組織

調査主体	沖繩県教育委員会
教育長	米村幸政 (昭和61年度～昭和62年度)
〃	池田光男 (昭和63年度)
〃	高良清敏 (平成元年～平成2年度)
〃	津留健二 (平成3年度～平成4年度)
文化課課長	比嘉賀幸 (昭和61年度～昭和62年度)
〃	宜保栄治郎 (昭和63年度～平成3年度)
〃	金城 功 (平成4年度)
文化課課長補佐	西平守勝 (昭和61年度)
〃	永数兼治 (昭和61年度)
〃	当間一郎 (昭和62年度～昭和63年度)
〃	平田興進 (昭和62年～平成元年度)
〃	上江洲均 (平成元年度～平成2年度)
〃	伊佐真一 (平成3年度～平成4年度)
〃	知念 勇 (平成4年度)
〃	川満一成 (平成4年度)

### 調査事業事務

文化振興係長	小橋川順市 (昭和61年度～昭和63年度)
〃	仲里哲雄 (昭和63年～平成2年度)
文化振興係・管理係長	大村光仁 (平成3年度～)
主事	本郷公朗 (昭和61年度～昭和62年度)
〃	当間 勉 (昭和61年度)
〃	大山京子 (昭和61年度～昭和62年度)
〃	照喜名玲子 (昭和62年度～昭和62年度)
〃	運天政弘 (昭和62年度～昭和63年度)
〃	波平 淳 (昭和63年度～平成2年度)
〃	上原節子 (昭和63年度～平成元年度)
〃	照屋邦雄 (平成元年度～平成2年度)
〃	新垣昌頼 (平成元年度～平成3年度)
〃	仲里富代 (平成元年度)
〃	伊波盛治 (平成3年度～)
〃	玉村良子 (平成2年度～平成4年度)

- 主事……………比嘉美代子（平成3年度～平成4年度）  
 // ……………上間尚子（平成3年度～平成4年度）

#### 調査事業総括

- 埋蔵文化財係長……………安里嗣淳（昭和61年度～平成2年度）  
 // ……………大城 慧（平成3年度～）

#### 発掘調査員

- 主任専門員……………岸本義彦  
 // ……………島袋 洋  
 // ……………金城亀信  
 専門員……………豊見山禎  
 // ……………長嶺 均  
 臨 任……………島 弘（現那覇市教育委員会）  
 // ……………大田宏好（現北中城村教育委員会）  
 // ……………照屋 孝（現具志川市教育委員会）  
 // ……………大城 剛（現具志川市教育委員会）  
 // ……………松川 章（現浦添市教育委員会）  
 // ……………花城潤子（現沖縄福祉専門学校）  
 // ……………大城秀子（現記念村教育委員会）  
 // ……………上地千賀子

- 発掘調査補助員……………比嘉優子  
 // ……………城間千栄子  
 // ……………西川寿勝（奈良大学学生）

- 発掘調査協力員……………小渡清孝  
 // ……………宮城篤正（浦添美術館館長）  
 // ……………多和田真淳（故人）  
 // ……………池田栄史（琉球大学助教授）  
 // ……………渡辺 誠（名古屋大学教授）

#### 発掘調査作業員

西原春子、嵩田三戸、嵩田春、仲宗根節子、大野幸子、大城輝子、東風平洋子、小橋川幸子、呉屋光子、糸数トヨ、金城吉克、照屋光江、金城洋子、新垣シゲ、上原昭子、儀間トヨ、古波津サト子、糸数文子、仲里敏子、与那嶺良子、宮城サグ子、備瀬枝美子、山崎律子、長嶺洋子、大城帝子、上原由美子、辺土名キヨ子、名城節子、大村由美子、上原美智子、大城鈴枝、比嘉まり子、小橋川恵子、金城敬子、金城登美子、山田由子、並里富子、宮城朝子、大城ひとみ、大濱光子、謝花和子、大城美枝子、運天勝江、川上益子、安慶田和美、仲村トヨ子、名城洋子、瑞慶山峯子、金城文、新垣ふじ子、石嶺弘子、石橋朝子、神門美智子、栗山初美、古波津徳子、城間千鶴子、平良江利子、高野愛子、松本道代、屋宜ミヨ、真境名文子、与那嶺真理子、小嶺禮子、津波キヨ子、西銘パトロシニア、仲村トヨ、与那覇勢津子、平田春枝、前原静江、新川常子、名城文子、松田貞子、佐久間尚美、呉屋光子、金城美枝子、呉屋正一、玉城善徳、幸地ヨシ子、玉城富子、麓幸子、古波津ヨシ子、古波津政子、幸地克信（敬称略）

#### 資料整理事業員

大村由美子、金城敬子、川上益子、宮城サダ子、上原美智子、大城鈴枝、安慶田和美、辺土名キヨ子、比嘉まり子、鳩間利恵子、与儀恵子、仲元知枝、神谷よしえ、池原直美、浜元春江、手嶋永子、金城礼子、上原博美、大城聖子、平良貞枝、小沢紀美子、新垣直美、喜納久美子、高良昌美、宮良栄子、高良三千代、小嶺禮子、玉寄智恵子、瑞慶覧尚美、金武雅子、譜久村郁子、川満美賀子、外間峰子、比嘉優子、大城勝江、黒屋利子、上原園子、城間千鶴子、仲宗根三枝子、我那覇悠子、外間臘、当山慶子、崎原美智子、池田悦子、仲嶺朋恵、杉山知寿子、西銘バトロシニア、平良貴子、津波古良子、備瀬枝美子、石橋朝子、座間味美津子、源河秀子、安和千代子、高宮とり

## 第II章 位置と環境

湧田という呼称は、古くは那覇市の四町（西町、東町、若狭町、泉崎町）の一つで、現在の那覇市泉崎1丁目2番2号（北緯26度12分31秒、東経127度40分59秒）付近の一角を形成し、旧上泉町とされていたところである。湧田焼の窯業生産の地として、湧田村として知られ、活気を呈していた地域の一つであったとされている。

泉崎は識名丘陵の続きで、安里川と國場川との間を走って、古波蔵から城岳の丘阜を越し、那覇江へと突出する半島であったとされている。いわゆる那覇港へ流入する入り江の近くに形成された丘陵縁辺部の村である。地形的には現在の楚辺や城岳一帯が琉球石灰岩の丘陵地が広がり、西側（現在のバスターミナルや那覇市役所）にかけては湿地帯がひろがる水田地であったとされている。さらに通堂町から奥武山一帯は現在でこそ地続きであるが、その昔は小さな浮島を形成する島嶼であり、交通の手段も小舟を利用したものであった。西海の水は若狭町・泊の両丘陵の間に広がって湧原一帯を没し、遠く識名板の下に迫り、近くは上の毛から松尾山、上の蔵に断続する丘陵の裾を洗って久茂地川に落ち、甲辰橋下などは近世まで湾入して爬龍舟を引き上げた位で、中島小掘や、内兼久附近は入江で、東の先一帯は砂濱を為し、中島は名の通り中州で、西東の地は浮島と唱えられ今の通堂町の渡地が川向の垣花渡り口の「スラ場」から奥武山などと共に点々散在する島嶼であった」と『南島風土記』の中の泉崎の目のなかで記述している。

古くは1838年（尚育4）の冊封の冠船渡来に来た中国の人々への飲料水供給のためににも重宝されるなど、湧田井の管理なども行われている。その碑文などが1865年（高泰18）に建立されているが去る第二次大戦で破壊され、現在はその跡形もない。この地が首里王府のお抱えの窯業生産地として多くの焼き物を生産しており、特に1616年に尚豊の王命により、薩摩から朝鮮（高麗人）の一六、一官、三官などの陶工を連れて帰り、焼き物の技術を伝授している。沖縄の代表的な陶工である平田典通・仲村渠致元らもここ湧田村で作陶業に精を出したと言われている。

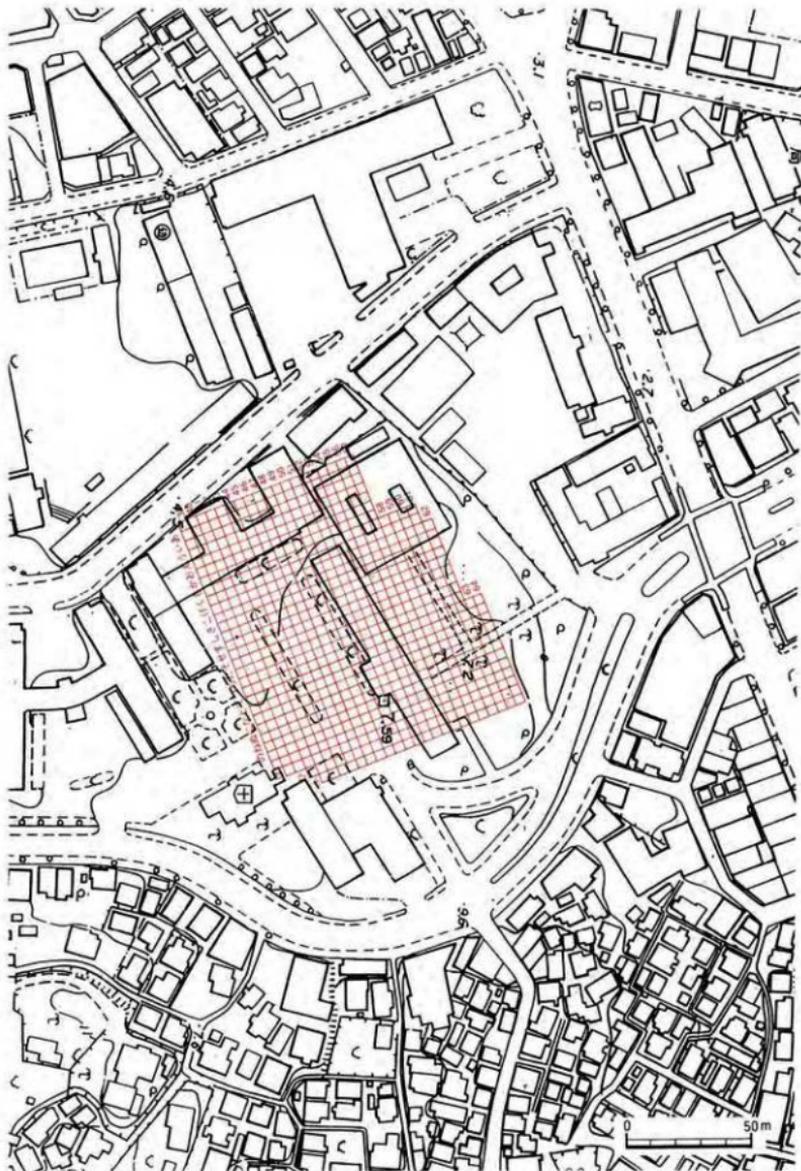
1682年に現在の壺屋町に窯場が統合されるまでの65年余の間、古窯を形成した陶業の村としての琉球最大の中心的役割を担った窯業地の一つであったとも言える。また、壺屋への統合は1682年を境に一度に移されたものではなく段階的に移っていったとする見方もある。

その後、明治期から大正、昭和の初め（戦前）に至るまで沖縄県庁や県立図書館などが建ち並ぶ那覇市の中心地であった。しかしながら去った大戦において那覇市はもとより、沖縄全域が「鉄の暴風」が吹き荒れまったくの虚塵と化した。戦後の復興の中から再び現在の地に民政府が設置され、文字どおり政治、経済の中核を占め現在に至っている。県庁周辺には旧来の古いたたずまいが急速に消失し地形や自然環境が大きく変貌した。

球儀をみるための  
 原野歴史地図  
 (明治初年の形勢)



第3図 古地図にみる湯田村



第4図 調査範囲とグリッド設定

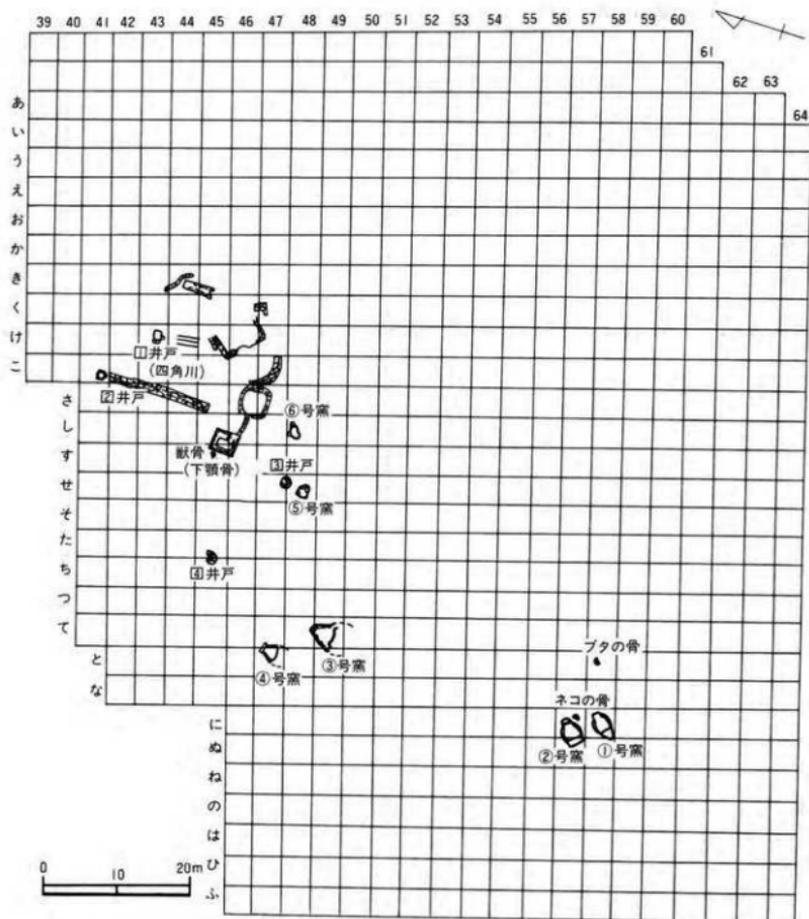
### 第三章 調査経過

調査は昭和61年度に湧田古窯跡の範囲確認調査を実施するとともに、同年12月には遺物の量とその広がりから記録保存のための緊急発掘調査が実施された。行政棟建設工事に伴う範囲確認調査については、グリッド掘りによる坪掘りによったところが大きい、遺構の確認は出来なかったものの瓦、磚を中心とした荒焼の焼き物が数多く出土した。

行政棟が建設される場所は、楚辺、城岳あたりの丘陵地から次第に泉崎あたりにかけてゆるやかに傾斜していく地形であり丘陵地の縁端部にあたる。その昔は丘陵の西側端部にかけては泥地などの海岸線が複雑に入り組んだ場所であった。湧田村が形成されていた場所は広範囲に及んでおり窯跡も広範囲に及んでいる。行政棟地区に限定して見るならば瓦窯と埴、上焼等其他日常に利用した製品が出土している。工房と窯場が同一面において検出されたことで、窯業地の形態の一端を把握することが出来た。

調査の中では窯と製品の保管、粘土の採取場、工房とそれぞれの状況が把握されたことから湧田の窯業生産地としてのセット関係が明確に把握することが可能になった。発掘調査は約9ヶ月間を要した。当初予想していた以上に遺物の量が膨大にのぼり、遺跡の残存状況が良好であることが確認された。その結果を示すものとして、窯、瓦列、井戸、建物跡の一部等が検出された。中でも第1号窯から第6号窯が検出されたことは驚嘆の念を念じえなかった。特に第3号窯についてはほぼ原形を保った状態であったことから切り取り保存で処理することが調査の中途において決定された。窯業の構造形態から切り取り保存の第1号となった。窯の構造については、これまでの登り窯と考えられていた形態に逆行するもので平窯の構造で造られたものであった。旧建物と建物の間やグリーンベルト地帯として使われていた場所については遺構がよく残っていた。

しかしながら工事との関連から現地に残存できるまでの調整には至らず全て記録保存による調査で消滅することになった。中途からの調整に入ったことから、建設局と文化財保護当局との協議が頻繁にもたれたが、結果は一部工事を続行しながら長期間に亘る調査となった。一部の切り取り保存の遺構の他は全て写真、記録、などが残り報告書にその状況をまとめた。



表示	遺構名	挿図番号	表示	遺構名	挿図番号
①	1号窟	第21図	□	1号井戸	第13図
②	2号窟	第22図	□	2号井戸	第12図
③	3号窟	第14図	□	3号井戸	第12図
④	4号窟	第15図	□	4号井戸	第13図
⑤	5号窟	第16図	□		
⑥	6号窟	第17図			

第5図 遺構出土状況

## 第IV章 層序と遺構

### 第1節 I地区

本地区は今回の調査対象地域の北側一帯で、瓦層やジャリ層、焼土層などが部分的な広がりで認められたり、中国産陶磁器の集中部や瓦を縦に積み重ねた瓦列遺構、石積み遺構、レンガを積んだ遺構そして4基の窯跡、5基の井戸（掘りぬきのもので、周囲に石灰岩を配す）など多種多様な遺構が検出されている。また、出土した膨大な遺物量もさることながら、多岐にわたる豊富な内容も本地区の空間的な位置付けを物語っているようである。以下、本地区で確認された層序と検出された遺構の概略を記す。

#### 1. 層序

全体的にみると瓦層、ジャリ層、焼土層が互層をなすような堆積の状況であった。しかし、部分的な広がりのものが多く、全体的な層位の把握は困難であった。また、本地区の西側で青灰色粘土（クチャ）層と第3紀砂岩（ニービ）層の境目が略南北方向に走る。これら基盤層を覆うように黄褐色粘土層がみられるが、東側では青灰色粘土層の上面で中国産陶磁器や土錐の集中部、埴敷きの遺構などが検出された。ちライン東壁と43ライン南壁の土層断面を第6図に示した。以下、確認された層序について簡記するが、第1層は旧庁舎に伴う客土や造成層であり、重機で剥ぎ取った。

第2層—本地区のほぼ全面にみられる赤褐色の瓦層。上部では瓦の少ない部分もあり、下部には約10cmの厚さのジャリ層がみられる場所もある。厚い所で30cm前後であるが、上部はかなり削られた場所も見受けられ、本来の層厚は判然としない。

第3層—黄灰色の粘土層で、本区の中央部に広がる。途切れ途切れに確認され、厚い所で約30cmを有する。下部に同じような厚み、堆積状況を示すジャリ層と瓦層がみられ、第8図の瓦列はこの瓦層から積まれている。

第4層—部分的にみられる焼土層。ち-45・46グリット付近では60cm前後の厚さを有す所もみられる。本層も下部ではジャリや瓦類の集中する箇所が見受けられた。

第5層—本地区の中央付近から西側に広がる黄褐色土層で、厚い所で60cm前後を測る。窯跡は本層を掘り込んでいる。本来的には無遺物層と考えられるが、上部で部分的に炭の集中するところや瓦類の集中する箇所がみられる。

第6層—いわゆる地山層。東側では青灰色粘土（クチャ）、西側では第3紀砂岩（ニービ）である。東側では上面において遺構の検出や遺物の集中部などがみられた。

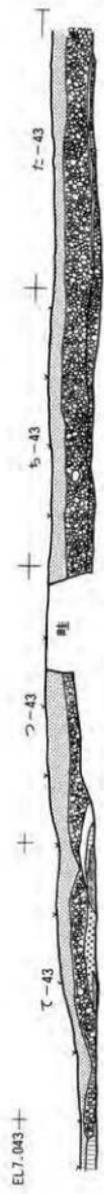
#### 2. 遺構

瓦や埴、レンガなどを縦に積んだ瓦列遺構（第7・9図）、長方形石組遺構（第10図）、長方形の石積みとレンガ・埴積み遺構（第11図）、5基の井戸（第12・13図）、4基の窯体（第14図～第17図）など多様な遺構が検出されている。しかし、それぞれの遺構がどのように関連していたのかを把握するのは困難であった。以下、検出された遺構のうち数ヶ所で確認されている瓦列遺構、井戸、窯体の概要について略述する。

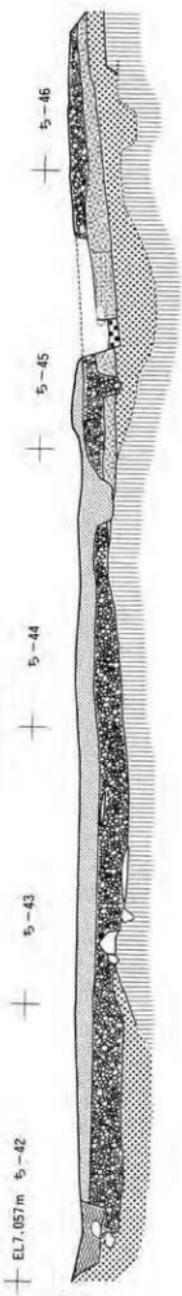
##### 瓦列遺構

本地区中央部で多方向に検出されており、特徴的なものを第7～第10図に示した。直線的なもの（第

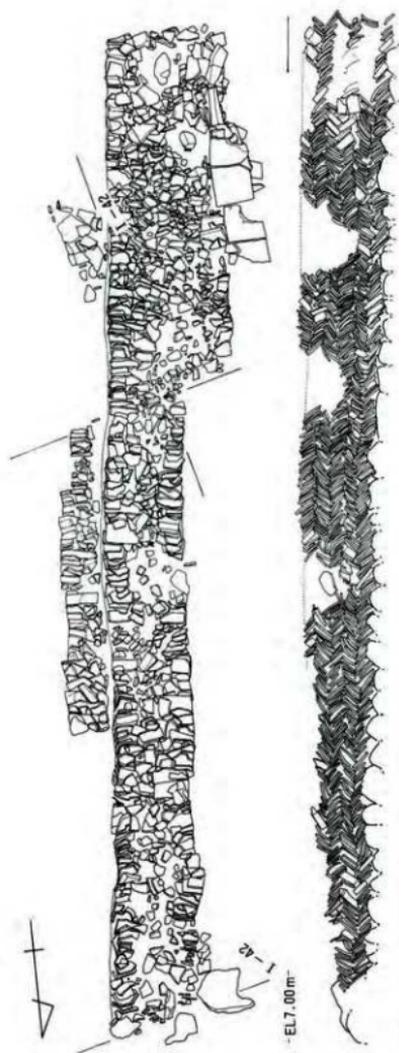
43ライン南型



ちライン東型



第6図 層序 (1地区)



第7図 窯体（I地区）

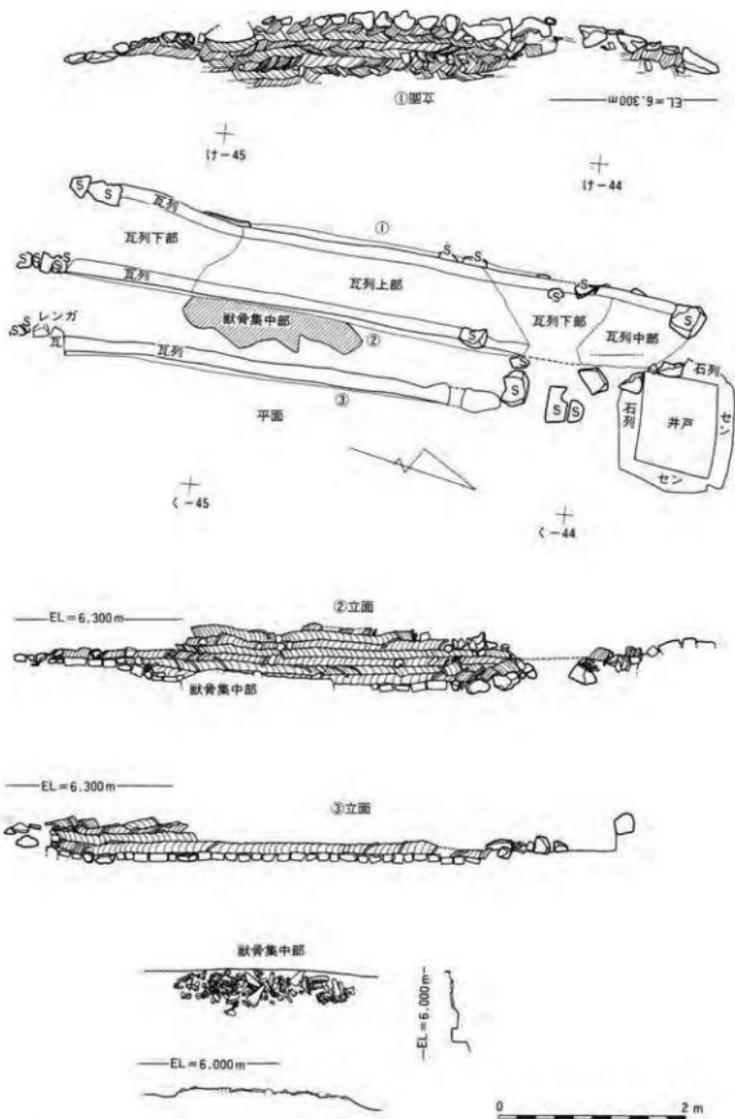
7図・第8図）やL字状になるもの（第9図・第10図）などが見受けられるが、本来的な形状は判然としない。前者のものをみると下部に石灰岩礫やレンガなどを配し、その上から一段一段傾く方向を変えて積んでおり、6・7段確認できる。第7図は約80cm幅で長さ約14m検出されたもの（略南北方向）の北側半分である。瓦を主としており、○に大の字のスタンプが付された瓦類も認められる。第8図は塼が主体で、略南北方向に3列（約40cmの間隔）みられ、両端に石灰岩礫が認められる。第9図は瓦の集中部の外側に斜めにたてられている塼の列がみられる。下部はこれといったものはみられない。

#### 井戸

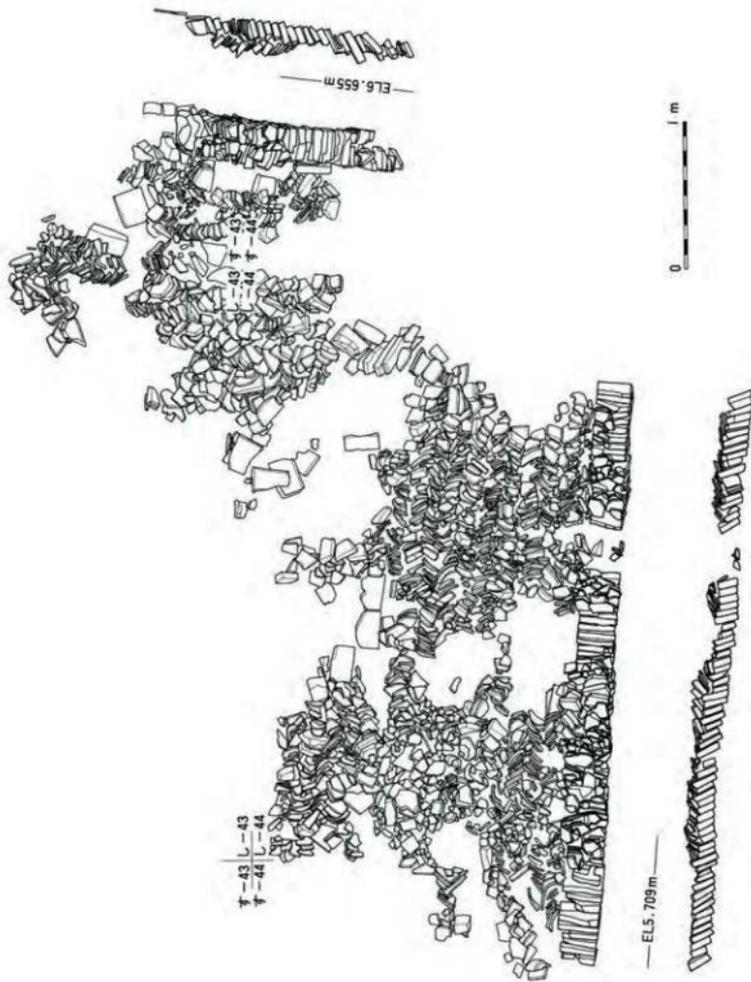
5基検出されており、第13・第14図に示した。いずれも石灰岩礫を周囲に廻らしているが、1号井戸だけが方形の囲みで、他は円形状のものである。前者は約70cm四方の広さで、深さが約100cm、他は直径が約50cmで、深さ100cm以上のものである。1号井戸は片側に面を有する礫が多いようであるが、他のものはそういうことにはあまり気を使っていないようである。5号井戸（第12図）は周囲に塼などの列もみられ、井戸を取り巻く広場のようなものをつくっていると考えられる。

#### 窯体

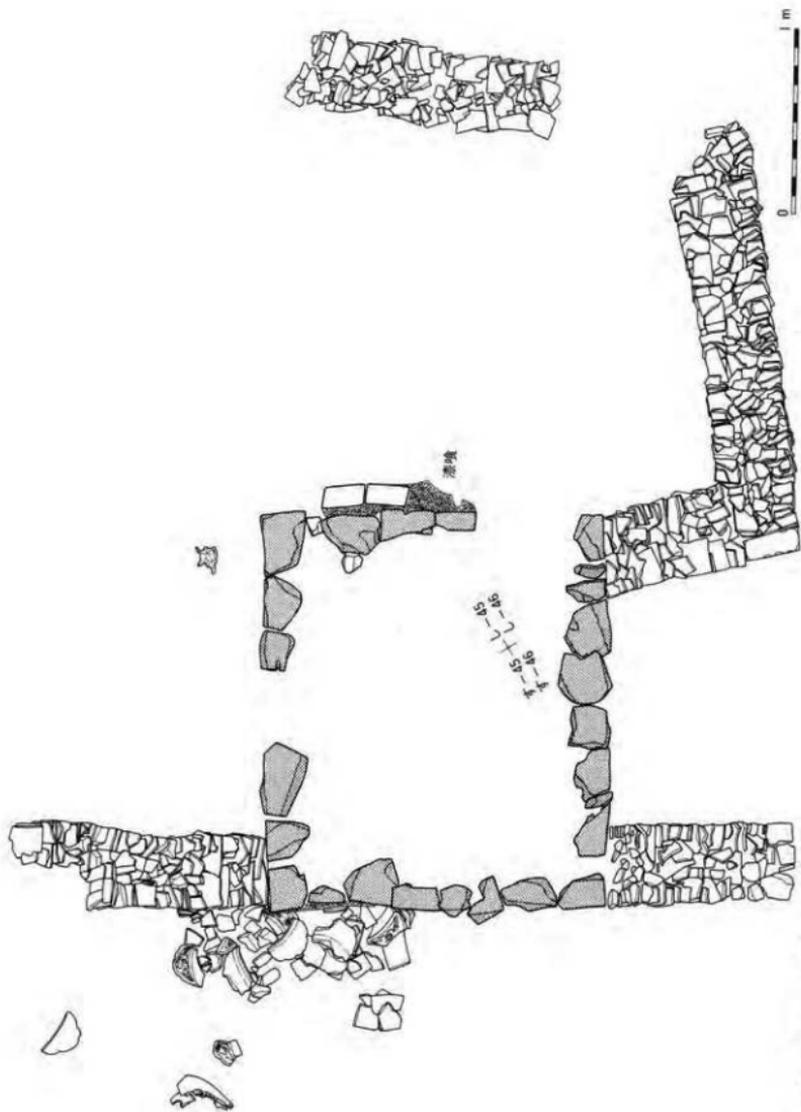
西側で2基、中央部南側で2基がそれぞれ近接して検出されている。いずれも下部構造だけであり、全体的な形状など判然としない部分も多い。周辺の状況などをみると瓦を主に焼いた窯かと考えられる。西側で検出された2基は単室の平窯のようで、焼成室が丸く膨らみ、燃焼室は焚口の方へ直線的にすばまり逆三角形の空間をつくるというほとんど同じような形状が想定される。南側にある第3号窯（第14図）は壁沿いおよび焼成室と燃焼室の境目にはレンガが配されている。焼成室と燃焼室の境目は30cm前後の比高を有しており、焼成室側に弧を描いてつくられている。焼成室の壁沿いには20cm幅ぐらいの浅い溝状



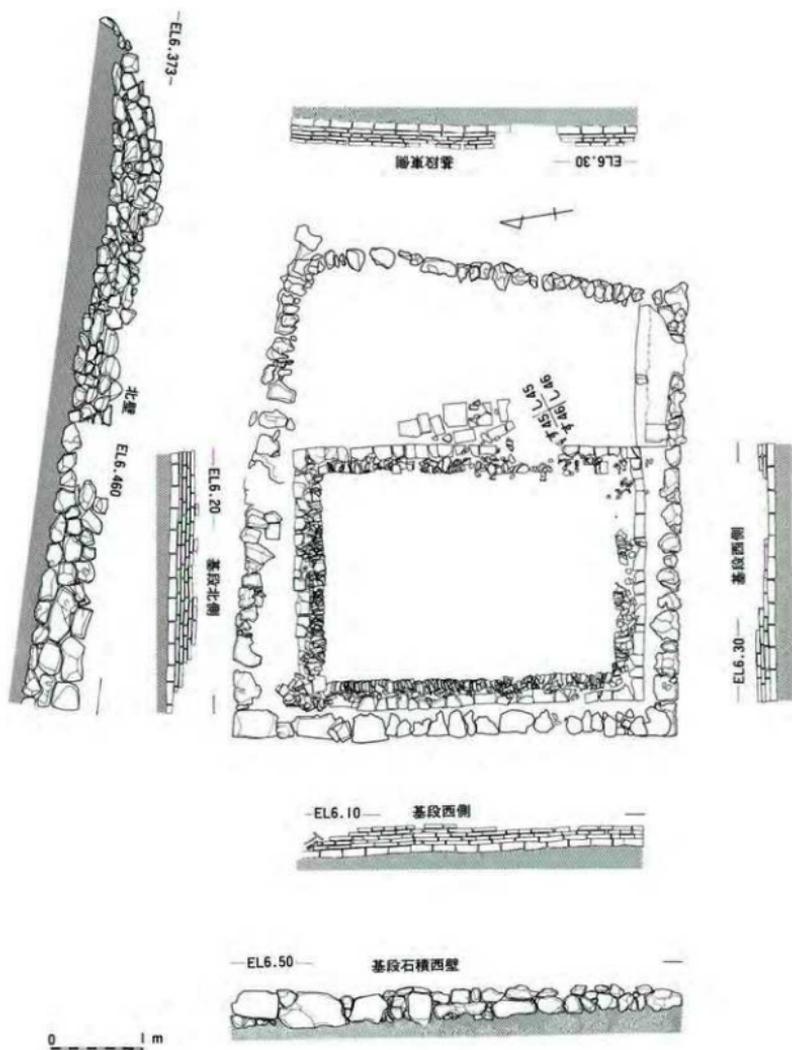
第8図 け43~45グリット検出の瓦列と獣骨集中部 (1地区)



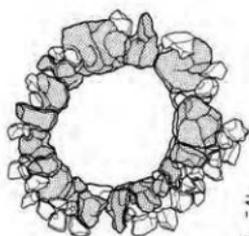
第9図 さ・し・子-43・44磚・瓦棟出状況 (1地区)



第10圖 長方形石組遺構之瓦列（1地区）

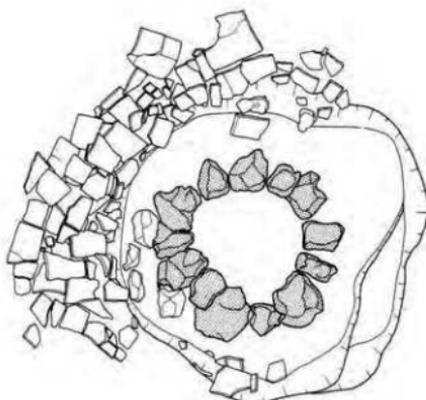


第11図 石列と瓦列 (寸・L45~寸・L46) (I地区)



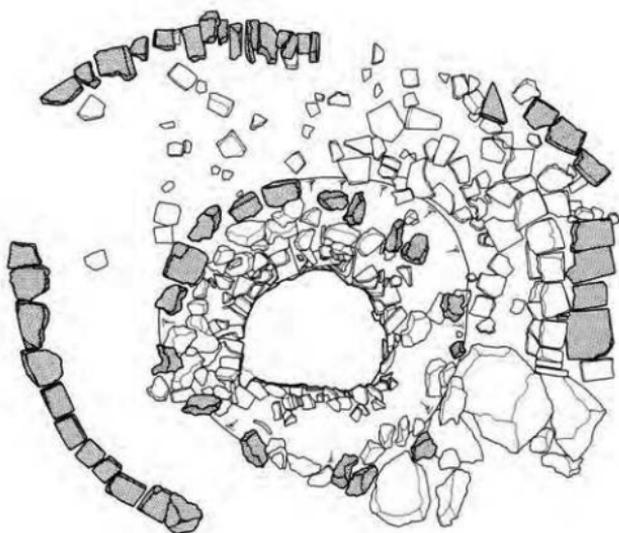
ニ-41グリッド検出の井戸(2号)

さ41  
ニ41  
さ42  
ニ42



せ47 す47  
せ48 す48

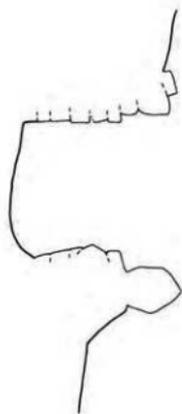
5号窟南側の井戸(3号)



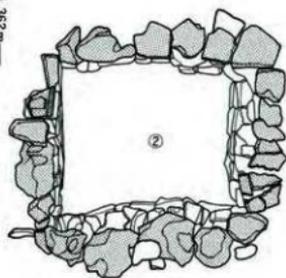
井戸(5号)

0 1 cm

第12図 検出された井戸(1地区)



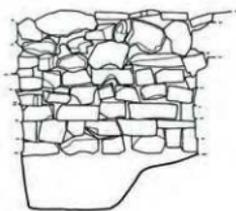
—EL. 6.362m—



—EL. 6.262m—

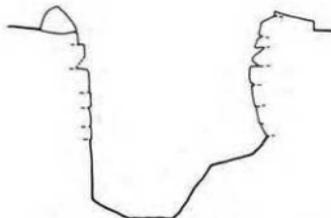
①立面

—EL. 6.314m—

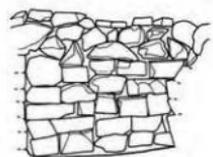


②立面

—EL. 6.262m—



(ヶ-43グリット検出の溜井(1号))



第13図 検出された井戸 (1地区)

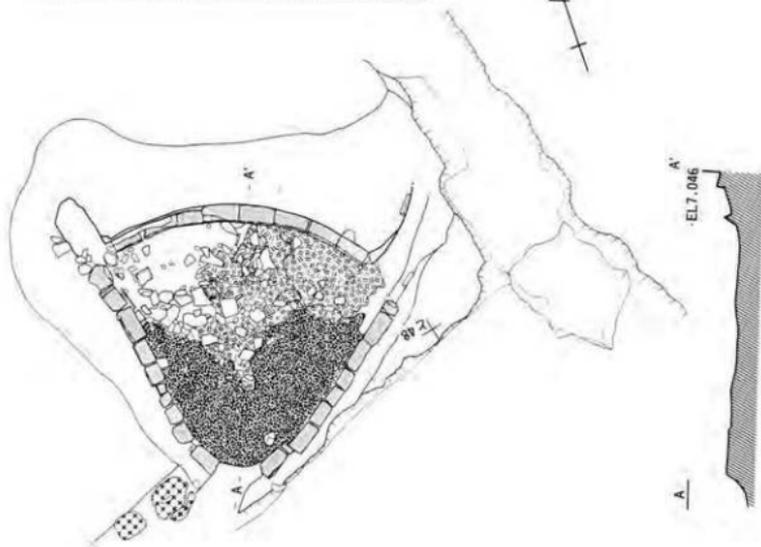
-EL7.148-

正面観



-EL7.248-

正面見通し



A'

-EL7.046-

A

-EL7.224-

東側西見通し



西側面見通し

-EL7.224-

西側面見通し

-EL7.224-



0 1 m

第14図 3号窟(1地区)

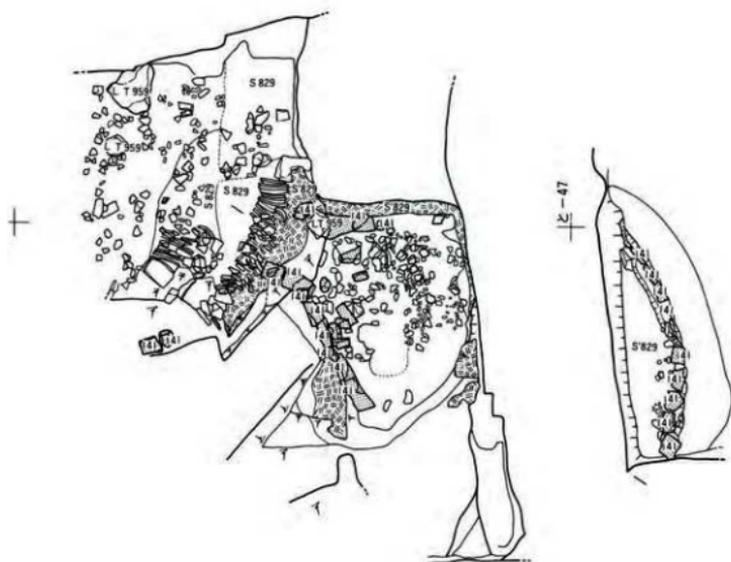
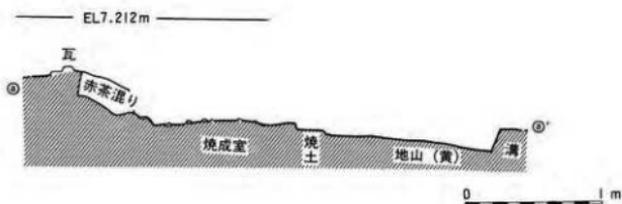
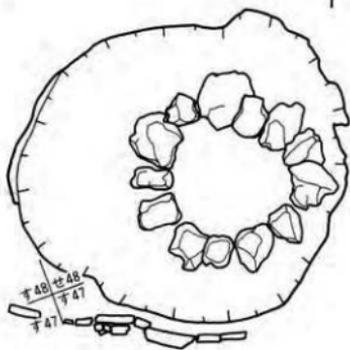
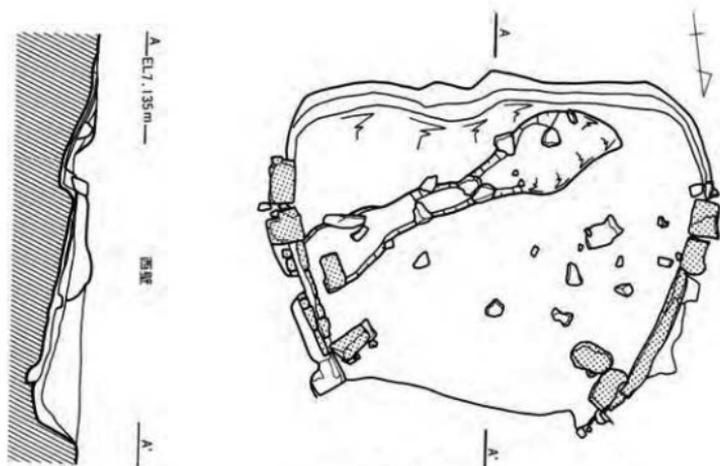


图-46

图-47

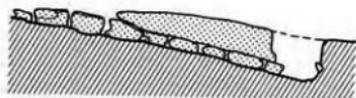


第15图 4号窟 (I地区)



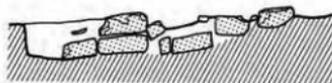
—EL7.135m—

西壁



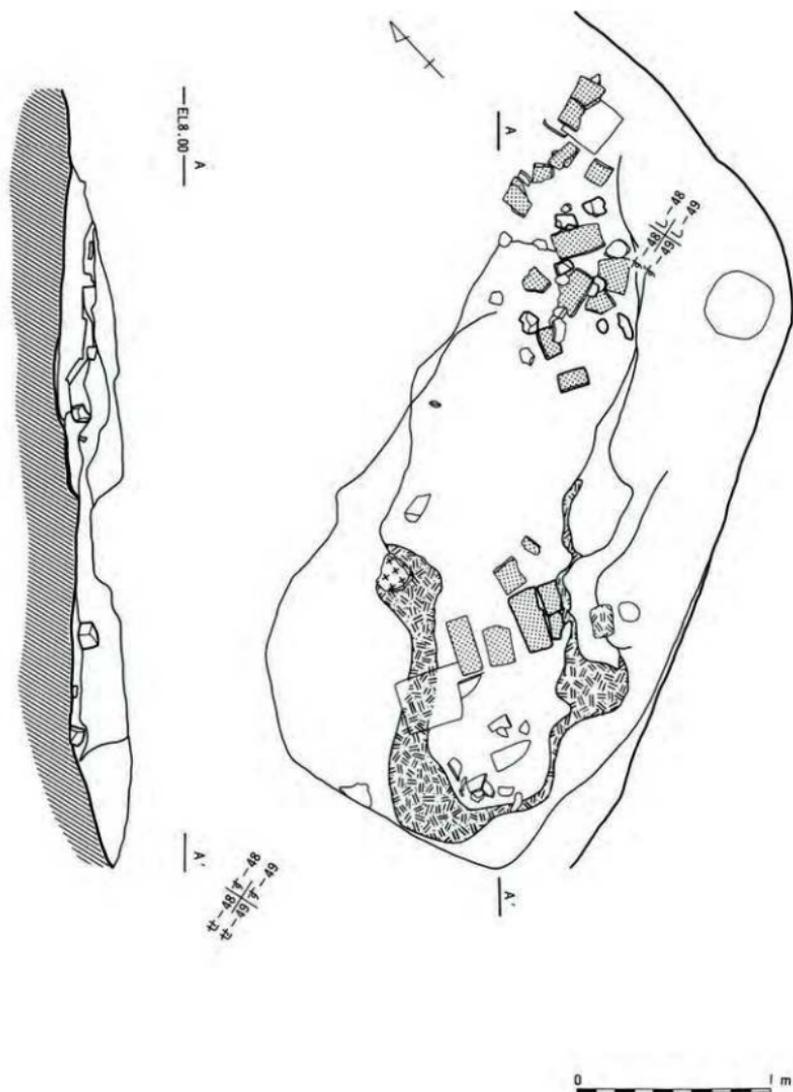
—EL7.135m—

東壁



0 ————— 1 m

第16図 5号窯と井戸（I地区）



第17图 6号窟 (I地区)

の凹みが廻るようである。焼成室と燃焼室の境目付近の幅が約250cmで、そこから焚口まで約200cmである。本窯は焼成室がほとんど削られており、焼成室の大きさは判然としなない。第4号窯(第15図)からすると焼成室と燃焼室の境目から焼成室の奥までと焚口部までの距離はほぼ同じようである。両者とも主軸は略南北方向にあり、焚口は北側に設けられている。煙道部は判然としなない。

中央部南側の2基の窯は全体的な形状や大きさ、内部構造など不明である。ただ、床面が若干傾斜するなど第3号・第4号窯とは趣を異にし、別形態の窯の可能性も考えられる。第5号窯(第16図)は主軸が略南北方向にあり、幅約200cm×長さ160cmの範囲で確認された。ほぼ中央付近で窯道具が出土しており、床面が若干南側へのぼるような傾斜を示す。第6号窯(第17図)は主軸が略東西方向になるようで、幅約100cm×長さ約400cmの範囲である。床面は若干東側へのぼるような傾斜を示す。

## 第2節 II地区

本地区は今回の調査区の南側に位置している。西側は第3庁舎が建っていた関係で、かなり下方まで攪乱を受けていた。東側は駐車場で平坦になっており、西側に比べ攪乱されているレベルは浅い。しかし、部分的には排水管や電気ケーブルなどの埋設により比較的深く掘り込まれた所も見受けられている。

全体的にみるとかなり攪乱を受けていたものの、発掘調査の結果、比較的保存の良好な状態で検出された2基の平窯、土採り場と考えられる大きな凹部、穴を掘って埋められたブタの骨の検出など当時の湧田古窯の様子を窺わせるような状況が確認できた。以下、本地区の層序および検出された遺構について略述する。

### 1. 層序

第18図に示した。東側の堆積層と西側のそれでは第5層以下の状況に差異がみられる。つまり、前者の場合には量的に多くないが瓦などの遺物を含んでおり、後者の場合にはまったく遺物を含まない。以下に本地区の層序について概要を記すが、第1層はアスファルトやその下部のコーラル層および建物の基礎部分であり重機で剥ぎ取った。

第2層一部分的にみられる暗褐色混雑土層。旧庁舎建設に伴う攪乱層で、厚い所で約30cmを測る。遺物はあまり得られていない。

第3層一黒褐色混雑土層で、本層も比較的小範囲にみられる。部分的に拳大ぐらいの石灰岩礫が多い箇所と数センチほどの石灰岩礫が多い箇所がみられる。厚い所で約100cmあり、沖繩産陶器や瓦などが多く得られている。

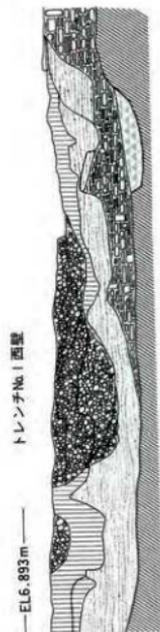
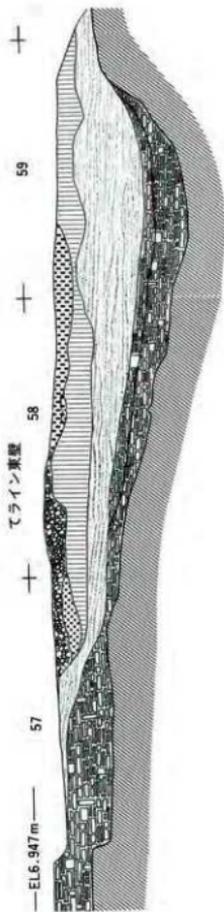
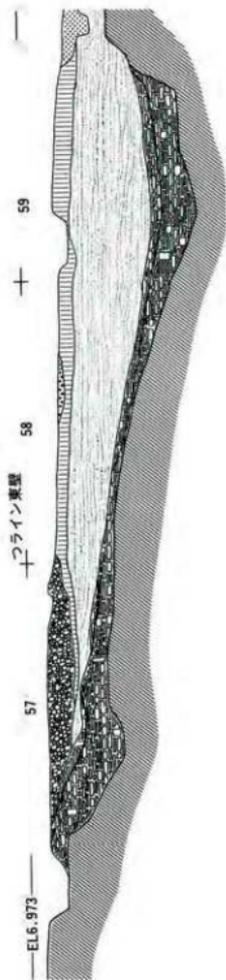
第4層一本層も部分的な範囲を示し、厚い所で約20cmの黄褐色土層である。遺物は少ない。

第5層一本地区全体にみられる層で、ひとつの基準層として把握される、赤褐色の瓦層である。ほとんど灰色瓦で、瓦の間を土が埋めるという感じの箇所も見受けられる。比較的水平方向に堆積しているが、上部が削られ本来の層厚は不明。厚い所で約60cmである。本層の下部ではブタの骨が検出された落ち込み部(第19図)もみられた。

第6層一部分的にみられる黄褐色土層で、遺物はほとんど含まない。

第7層一黄褐色土層で無遺物層。西側で検出された窯は、本層から掘り込まれている。図示した箇所の厚い所で約60cmを測る。東側では厚い所で約100cmあり、散発的に瓦などの遺物が得られ、二次的な堆積を示している。

第8層一黄白色の粘土層。本層も本来的には無遺物層。南側の方へやや傾斜し、40cm前後の厚さを有



第18図 II地区 層序

す。東側では瓦類が散見され、二次的な堆積の状況を示す。

第9層—本地区の基盤をなす第3紀砂岩（ニービ）層。

## 2. 遺構

本地区ではブタ骨の検出された落ち込み部（第19図）、带状遺物集中部（第20図）、2基の窠体（第21図、第22図）などがある。以下、それぞれについて概略を述べる。なお、2号窠の煙道付近で検出されたネコの骨については割愛した。

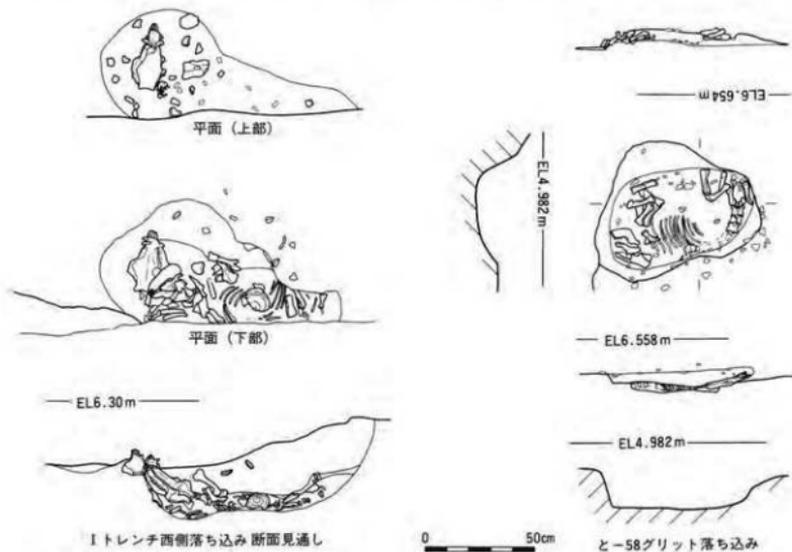
### 落ち込み部

と-58、な-57グリッドで確認されており、第19図に示した。両者とも第5層の時期のものと考えられる。と-58グリッドの落ち込み部内は略楕円形状になっており、長軸が約80cm、短軸が約40cmを測る。深さは15cm前後で、比較的浅い。検出されたブタの骨は頭部を東側に向け手足は南側に位置していた。ブタDとされているものである。

な-57グリッドのものは東側部分が削られている（排水管の埋設）ものの隅丸長方形の平面が想定される。長軸は南北方向にあり、100cmを越すようである。深さは約50cm掘り込まれ、前者のものに比べかなり深い。上顎・下顎骨が南側で集中的にみられ、それから北側へは四肢骨が多く検出された。数個体分の骨があり、ブタA・B・C・Eとされる。第1号窠の東（主軸ライン近く）約3mと近い距離にあり、窠との関係も注意されるところである。

### 带状遺物集中部

灰色瓦の破片を主に搏やサンゴ礫などが50cm前後の幅で集中し、带状に長く南西～東北方向へ延びて検出された（第20図）。約10cmの浅いナベ底状の凹部に堆積しているものと判明したが、性格的なものな



第19図 ブタ出土状況（第5層）（II地区）

ど詳細は判然としなかった。

### 窯 体

本地区の西側で平行して(約250cmの間隔)2基確認できた。南側のものを1号窯(第21図)、北側のものを2号窯(第22図)とした。この2基他に1号窯に南接するように煙道部を形づくっただけの部分もみられた。1・2号窯とも単室の平窯で、同じような大きさ、形状であり、同じ時期につくられたものと考えられる。この2基の窯をみると各部屋の仕切りにレンガが残っている2号窯の方がより操業時の形状を残しているものと考えられ、1号窯はレンガが取り去られた状態かと解された。1・2号窯とも主軸は東北-南西方向にあり、焚き口は南西側に、煙道は東北側に位置している。

レンガの残る2号窯をみると燃焼室の半分ほどが壊されているものの、平面形がたまご形に近い形状を呈していたかと想定される。中央よりやや西側付近で約140cmの段差を設けて燃焼室と焼成室にしており、その段の部分にはレンガを積んでいる。レンガは横にして積んでいるが、上1段だけは縦にしている。レンガは下段よりも上段が約30cm焼成室側に入り込むように積み上げられ、平面的には焼成室側の方へ弧を描くように積まれている。燃焼室では積まれているレンガの半分ぐらまで炭の堆積があり、下部では炭化した木片もみられた。

焼成室は床面の面積が概ね4㎡で、壁沿いに浅い溝状の凹部が廻る。床面にはレンガが立っているところが数ヶ所みられる他、レンガの抜け跡やその部分だけ灰色になった箇所などが見受けられた。焼成室と燃焼室の境目に積まれたレンガの上でもそのような箇所がみられることから、通気孔や分炎柱、坑道など内部の構造についてもあるていど想定できるようである。1号窯では床面に残る灰色部分の痕が2号窯のものに比べ細く、塀が利用されたものと考えられる。高いところで100cmほど残る壁をみると若干弧を描いており、ドーム状の天井が想定される。天井は常設のものではない可能性が高いようである。また、床面にたてられるレンガの高さとあうように壁面に若干のどづばりを設けている。煙道は焼成室の先端中央部に設けている。幅約60cm、奥行が約50cmで、やや東側へ斜めに掘っている。焼成室との境目にはレンガを配している。窯壁は7cm前後の厚味があり、1号窯では内側の面の削り調整の痕が明瞭に残る場所も見受けられる。1号窯もその規模や形状、内部の構造などほとんど2号窯と同様であり、同じような窯の構築技術のもとに両者がつくられたことが窺える。

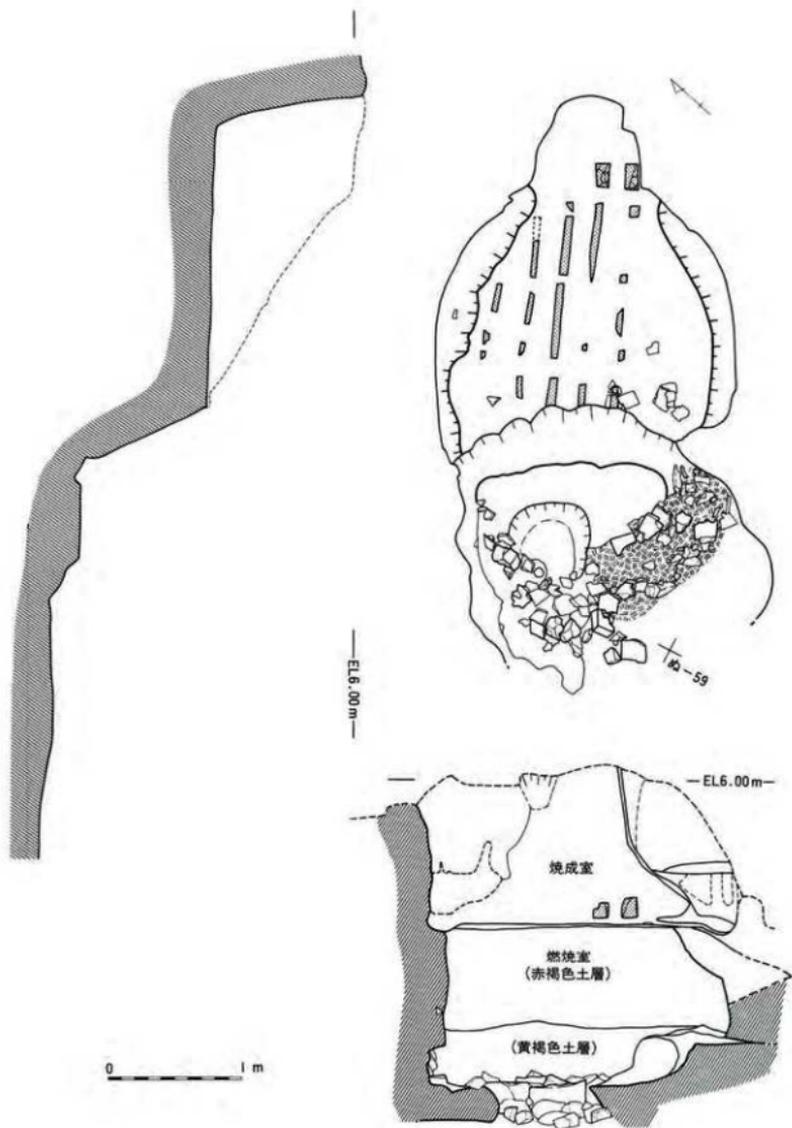


59

59

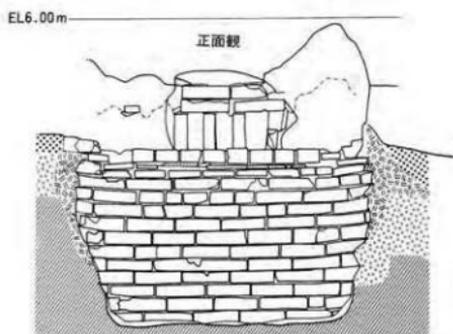
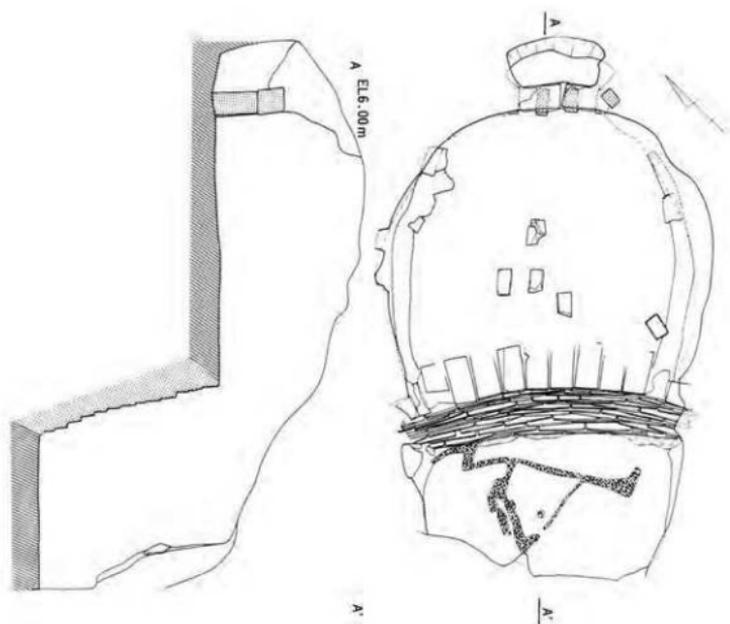
II区

第20回 帯状遺物集中部 (II地区)



西側から奥を見通した正面図

第21図 1号窯 (II地区)



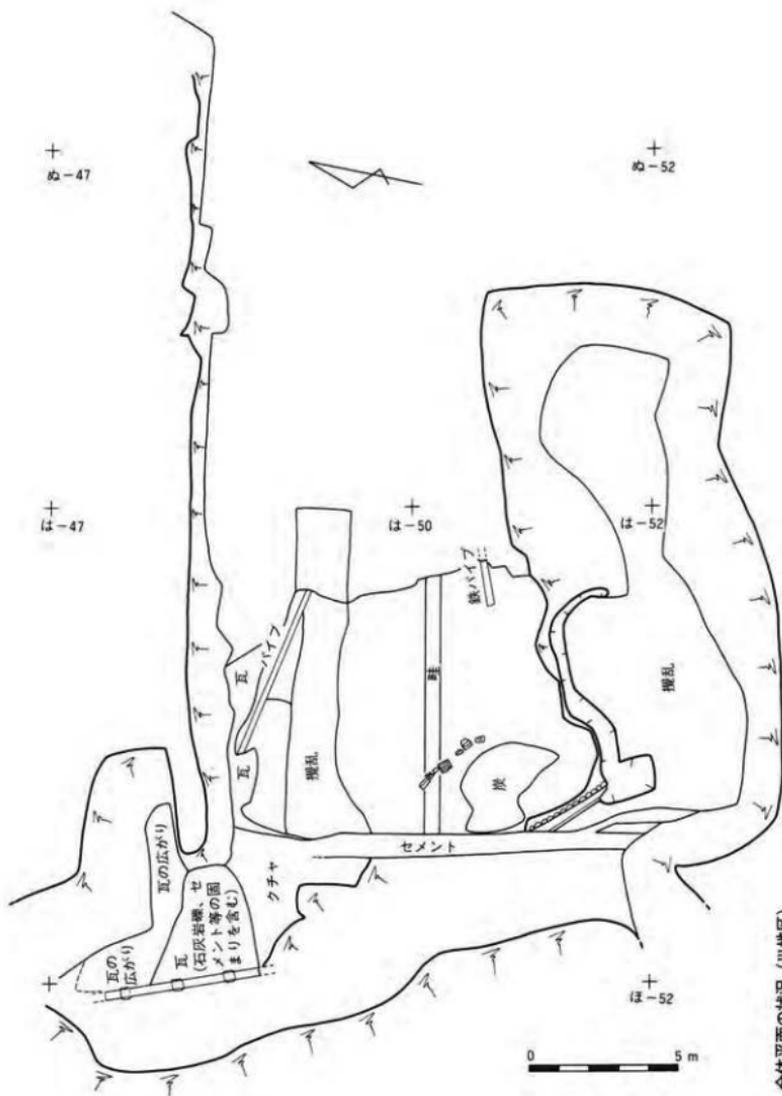
第22図 2号窯 (II地区)

### 第3節 III地区

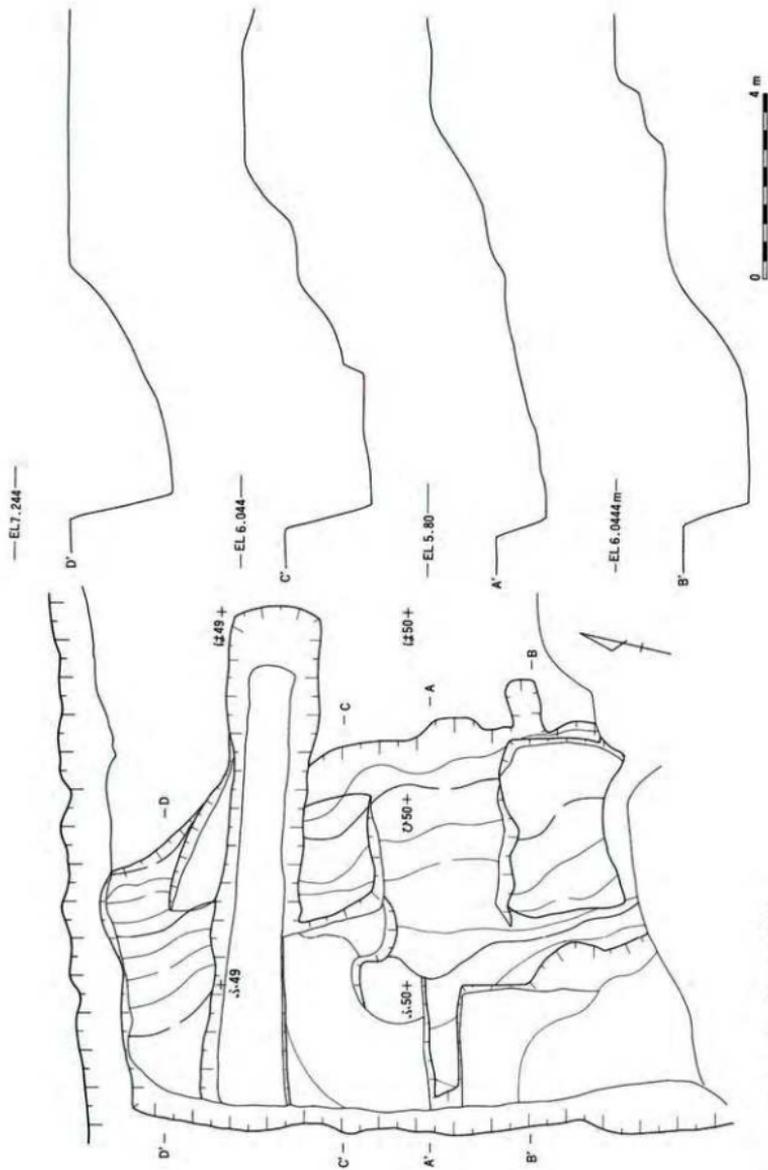
本地区はI地区の西側にあたり(第23図)、瓦類が廃棄された場所として捉えられた。東側の方はかなり平坦に削られており、基盤の第3紀砂岩(ニービ)層が露出している。そのため本地区の上方がどのような状況であったのか不明である。南側は旧第5庁舎の建設で下方まで掘り込まれ、西側は止水壁をつくる際に大きく攪拌されている。また、瓦類の堆積している場所のやや北側寄りに排水管が埋設されており、その部分も下方まで掘り込まれている。

本地区は全体的に西側へ傾斜しており、その傾斜に沿うように堆積層が確認された。50ラインに設けた畦の北壁と排水管理設のために掘り込まれた箇所(南壁)を第25図に示した。全体的に南東側の方から北西側の方への流れが想定され、北側まで及ばない層も認められる。本地区からはほとんど瓦類だけが出土しており、他の焼き物としては第2層上面から壺屋焼きの碗が出土しているぐらいである。以下、今回確認された層序について簡単に述べる。

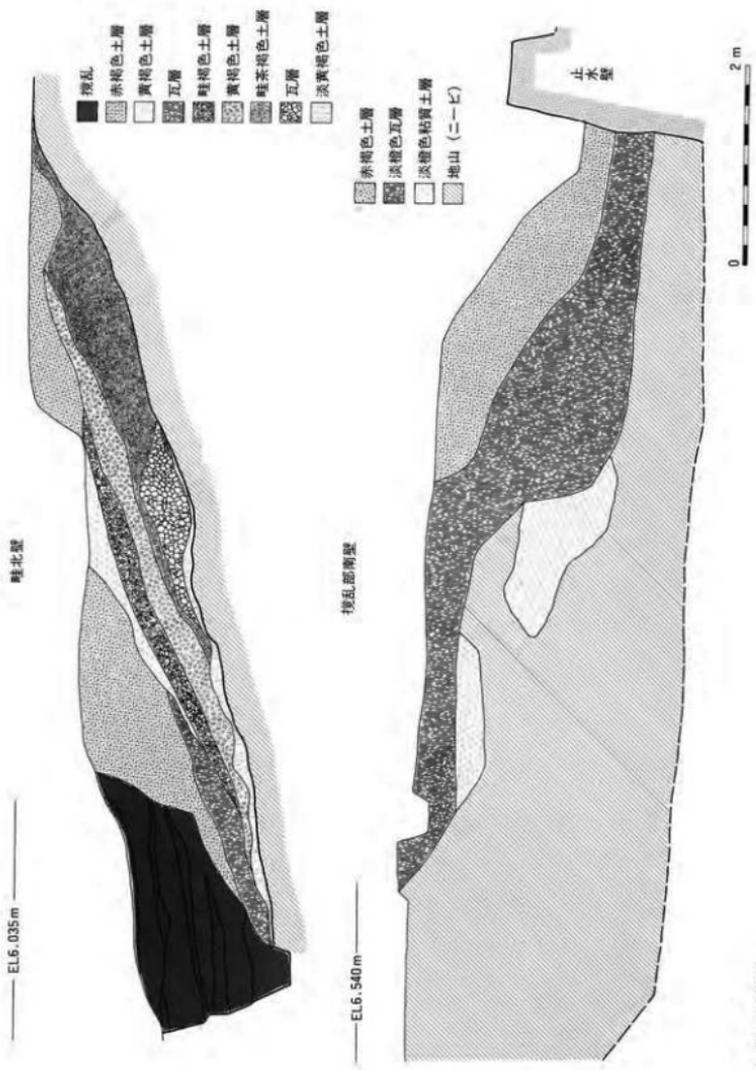
- 第1層—赤褐色土層。上部が平坦に削られており、本来の層厚は不明。両方の断面に比較的厚く認められることから、本地区の全面を覆っていたものと考えられる。50ラインでは上部が削られ、2ヶ所に分断された形になっている。土は堅くしまり、瓦の小破片を含む。
- 第2層—本区の西側、攪乱部付近にみられる赤褐色の瓦層である。厚い所で約30cmを測る。瓦は割りと小さ目の破片が主体で、上面からは壺屋焼きの碗が数個体分がまとも出土している。
- 第3層—本地区の中央部付近にみられる黄褐色土層である。50ラインの断面にみられるものの、上部が削られており、本来の層厚は不明。
- 第4層—本地区の中央付近にみられる暗褐色土層で、厚い所は30cm前後を測る。堆積している瓦が割りと大き目で、瓦の間にやや隙間がみられる。
- 第5層—黄褐色土層。斜面の上部から下部までみられるが、本地区の南側に広がり、北側には及んでいない。厚い所で約30cm、瓦の包含量は第4層とあまり変わらない。
- 第6層—斜面上部の方にみられる暗茶褐色土層で、上方で厚く約60cmの層厚を有している。出土する瓦の破片はやや大き目である。
- 第7層—本地区の中央付近から北側へ広がる淡橙色混土瓦層で、北側の厚い所では100cmを越す。出土する瓦も破片の大きなものが目立ち、数枚が溶着したものなども見受けられる。瓦の堆積した中に土が入り込んだような状況である。
- 第8層—本地区の北側にみられる淡橙色粘質土層で、範囲はそれほど広くない。厚い所で90cm前後を測るが瓦の包含量はそう多くない。
- 第9層—第3紀砂岩(ニービ)層。本地区の基盤をなす層で、無遺物層のいわゆる地山。



第23図 全体平面の状況 (III地区)



第24図 発掘後の地形と断面（Ⅲ地区）



- 峰乱
- 赤褐色土層
- 黄褐色土層
- 瓦層
- 畦褐色土層
- 黄褐色土層
- 畦茶褐色土層
- 瓦層
- 淡黄褐色土層

- 赤褐色土層
- 淡褐色瓦層
- 淡褐色粘質土層
- 畑山(二一七)

第25図 層序 (III地区)

## 第V章 出土遺物

### 第1節 青磁

第26図～第34図がI地区、第35図がII地区の出土である。第26図～第30図1は碗形である。第26図1・2は口縁部端反りの碗である。同図2は見込みに印花文（草花文）を施す。年代は14世紀末～15世紀中葉である。同図10は外面篋描き蓮弁文で見込みに印花文を施す。年代は15世紀中葉である。他は見込みに印花文を施す碗で、年代は15世紀中葉～16世紀初頭及び15世紀後半～16世紀中葉である。

第27図～第29図1～9は剣先形蓮弁文碗である。この種の碗は、蓮弁文の文様形態によって大きく3種に細分できる（註1）。剣頭と蓮弁の間隔が密で剣頭と蓮弁がほぼ一致するもの（第27図）、剣頭と蓮弁の間隔が広くなり、剣頭と蓮弁が一致しないもの（第28図）、蓮弁の間隔が広く剣頭を持たないもの（第29図1～9）である。第29図10・11は雷文帯をもつ大振りの碗である。見込みに鹿文様、内面には窓絵を印花により描く。年代は15世紀である。

第30図2・3は小碗で剣先形蓮弁文を描く。

第30図4～19、第31図1～6は皿形である。第30図7は篋描きによる蓮弁文を施す。年代は14世紀後半～15世紀初頭。同図4～6、8・9は小型皿である。10～12は菊花形皿である。13は口縁部が外反する皿で見込みに印花文を施す。高台内に窯道具の熔着痕がある。同図14・16、17・18は腰折皿で年代は15世紀後半～16世紀中葉である。15は口縁部外反の皿である。15・16は見込みを丸く軸刺ぎを行う。19は景德鎮窯産の皿である。素地は緻密で器壁が非常に薄い。高台内のみ透明釉を掛けている。第31図1～6は稜花皿である。同図4は見込みに線描きで「太」字を描く。同図5は高台内に窯道具の熔着痕がある。同図6は焼成不良のため釉薬が発色せず、濁った白色を呈する。

第31図7、第32図1～3は盤である。第32図1は口縁部を稜花形に作り、外面に丸彫りの蓮弁を施し、内面に篋描きで唐草文を描く。同図4・5は酒会壺で、外面に片切彫りの蓮弁を施す。第33図1～6は小坏、同図7～16は瓶である。同図3は外面片切りの蓮弁を施す。同図7・8は瓶の胴部で胴下半部に片切りによる蓮弁を施す。同図15は口縁部を輪花形に形作り、頸部に蕉葉状の文様を施す。同図14と16は同一個体の可能性がある。

第34図1～5は蓋、6は小壺、7～10は特殊器形、11は香炉、12は鐘形？である。同図5は非常に珍しい形態のもので残存部から想定すると八角形を呈するようである。7～10は瓶等の装飾に使用されたようであるが、実際どのような器種に伴うのかは不明である。12は鐘形？で上面に一孔を穿いた後軸掛けを行っている。内面に熔着痕様のものが4か所みられる。

第35図はII地区出土のもので、全体的に出土量は少ない。同図1～4は碗、同図5～7は皿、8は燭台、9は水注の注口、10は摺鉢、11は器種不明、12が盤である。8は灯芯の周囲に片切りの細線を巡らし、脚部の周囲には雷文が巡る。脚は残存部から想定すると6本脚となるようである。脚部内面は無釉である。

第59図26はIII地区出土の碗である。無文の碗で、見込みを丸く軸刺ぎを行っており、窯道具の熔着痕がみられる。高台無釉である。

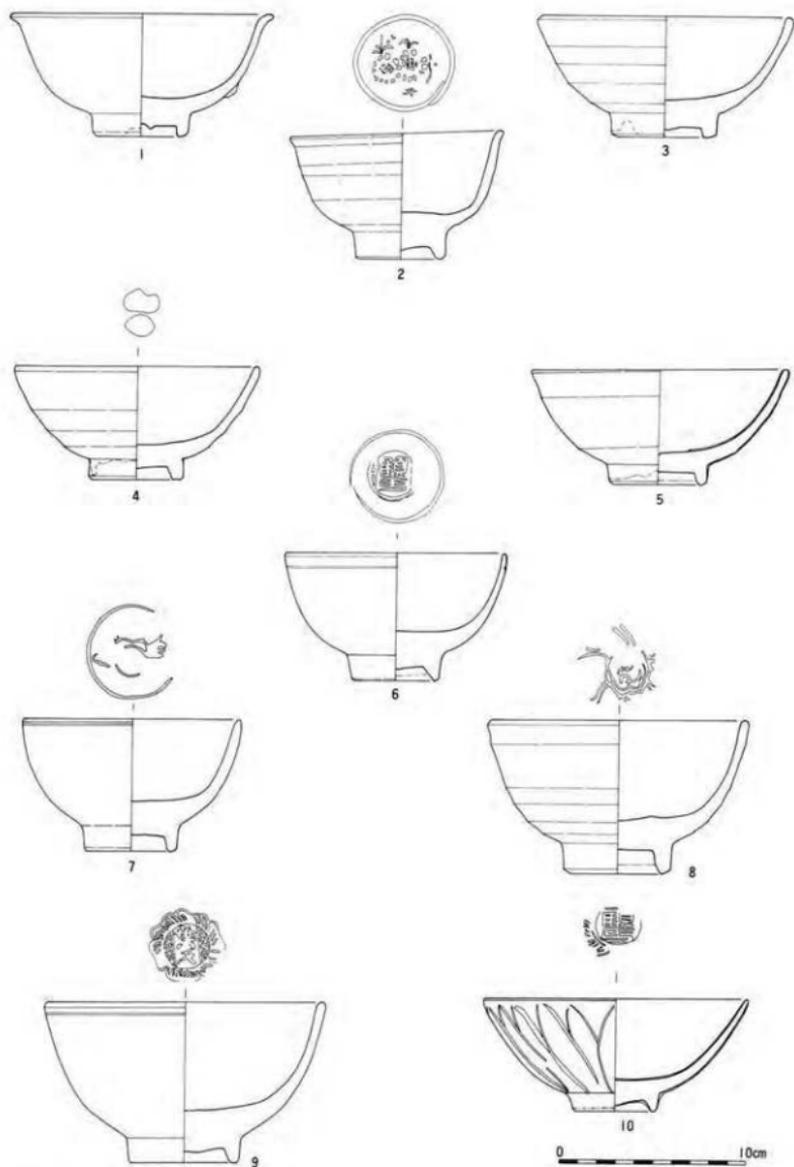
#### 註

註1、大橋康二氏の御教示による。

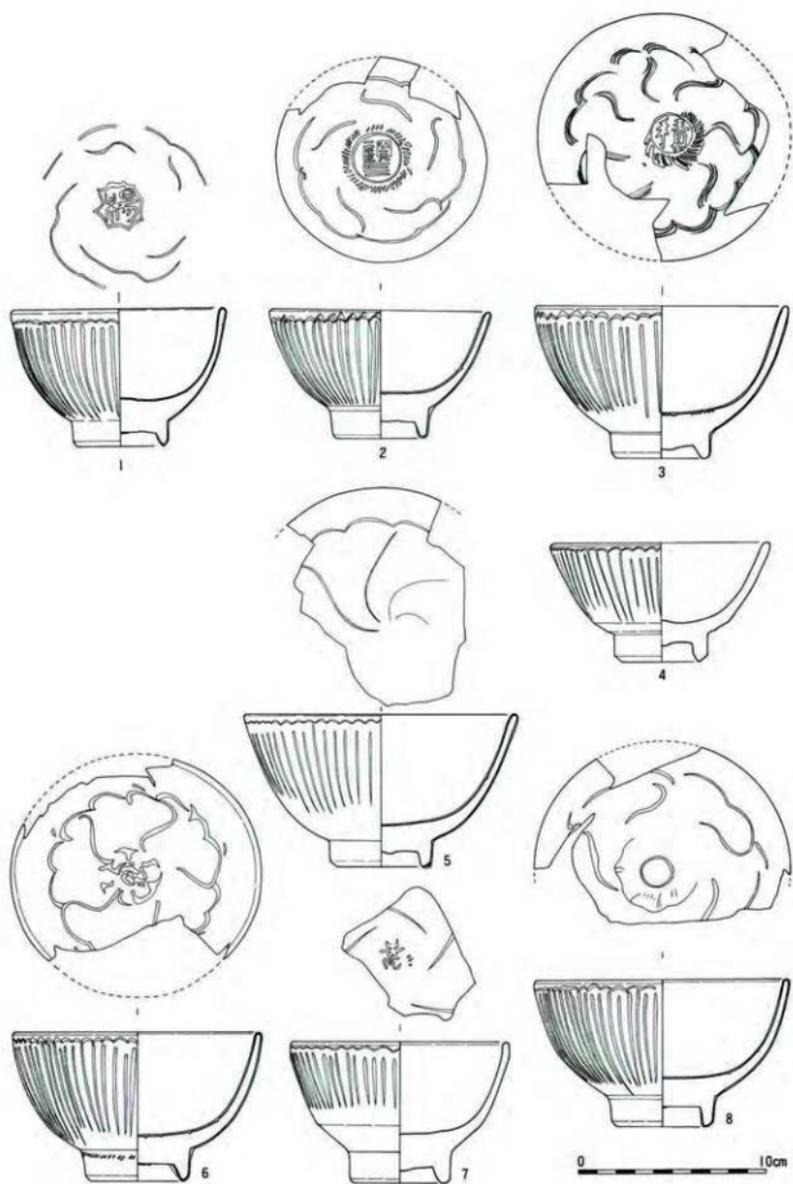


第1表2 青磁観察一覧

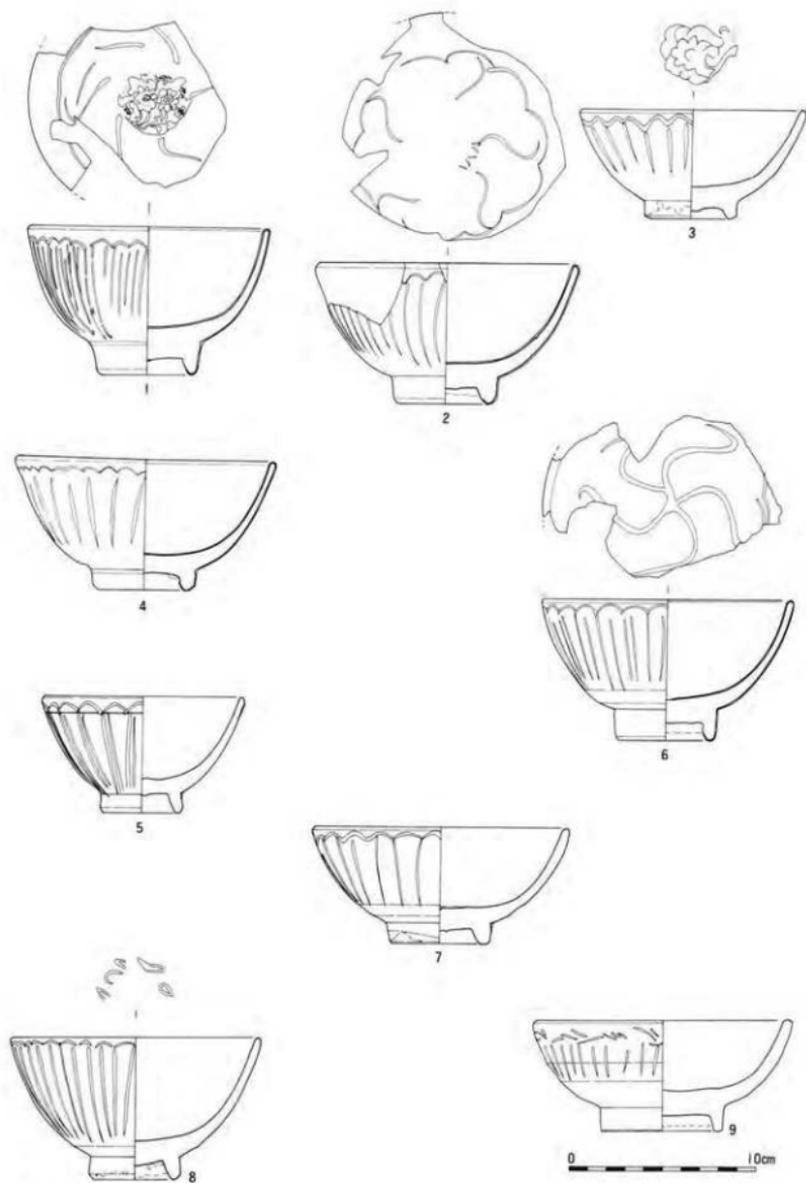
器名	製作年代	F. No.	形状	部位	口径	底面直径	特徴	資料	年代	備考
第360号 PL. 41	13	44-43	3層、第2瓦層	底	18.2	3.5	9.4	裏縁縮窄。	18代	高台内腔/目録割り。
1	2	47	3層	底	11.2	3.1	5.4	内面に4層の透草文、見込みに印瓦文、緑花面。	電算系系 15代前半-16代 前半	高台内腔/目録割り。
2	1	45, 48	3瓦方形、 第2瓦層	底	11.2	3.1	5.4	内面に4層の透草文、見込みに印瓦文、緑花面。	電算系系 15代前半-16代 前半	高台内腔/目録割り。
3	1	45	第2瓦層	底	11.4	3.2	5.5	内面に4層の透草文、緑花面。	電算系系 15代中-16代 前半	高台内腔/目録割り。
4	1	48	瓦層中部	底	11	2.8	5	内面に4層の透草文、見込みに「太」字の縮幅帯、緑花面。	電算系系	高台内腔/目録割り、高台内腔縁部、高台内腔縁部の透草文あり。
5	1	45	4層	底	11.8	2.9	4	内面に緑目文。	福徳-広 13代-16代	見込み丸く輪割り、高台無縁。
6	1	C-177	黄褐色	底	14.2	3.4	4.8	内面に4層の透草文、緑花面。	福徳-広 13代-16代 前半	高台無縁、構成不良。
7	1	44	3瓦層中	底	10			見込みに4層の透草文。	電算系系 14代中-15代 前半	高台内腔/目録割り。
第361号 PL. 41	1	44	3層	底	10			内面に4層の透草文。	電算系系 14代中-15代 前半	
2	1	44-43/74 上-44	瓦層、第2瓦層	底			13.1		電算系系 14代中-15代 前半	高台内腔/目録割り。
3	1	44	3層	底			16.1		電算系系 14代中-15代 前半	高台内腔/目録割り。
4	1	44	8	酒会	口縁部				電算系系 14代	
5	1	44	酒会	酒会	底面				電算系系 14代	
第362号 PL. 42	1	44	1瓦	小杯	口縁部	4.8			電算系系 14代前半-15代 前半	
2	1	44	1瓦	小杯	口縁部	4.8			電算系系 14代前半-15代 前半	
3	1	43	3瓦層上部	小杯	口縁部	4			電算系系 14代前半-15代 前半	
4	1	44	黄褐色	小杯	口縁部	3.8			電算系系 14代中-15代 前半	
5	1	44	4	小杯	口縁部	3.1			電算系系 14代前半-15代 前半	
6	1	43	底	小杯	底面		3.1		電算系系 14代前半-15代 前半	
7	1	47	1瓦、1砂利	底	10				電算系系 14代中-15代 前半	破片。
8	1	47	3瓦層	底	10				電算系系 14代中-15代 前半	破片。
9	1	44	1瓦層内腔状	底	10				電算系系 14代中-15代 前半	破片。
10	1	44	2瓦層	底	10				電算系系 14代前半-15代 前半	
11	1	43	1層	底	10				電算系系 14代前半-15代 前半	
12	1	44	4層上部	底	10				電算系系 14代中-15代 前半	
13	1	44	中央瓦列部	底	10				電算系系 14代中-15代 前半	
14	1	43	3層	底	10				電算系系 14代中-15代 前半	
15	1	47	3層	底	10				電算系系 14代中-15代 前半	
第363号 PL. 43	1	44	3層	底	10		8.2		電算系系 14代中-15代 前半	底縁縮幅あり。
1	1	44	2瓦	底	5.1	3.3			電算系系 14代中-15代 前半	非常に珍しい。
2	1	43	2瓦	底	5.4				電算系系 14代中-15代 前半	「非常に珍しい」。
3	1	43	赤土	底	5.5				電算系系 14代	
4	1	43	7代黄褐色	底	5.8				電算系系 14代中-15代 前半	
5	1	43	2層、瓦列下部	底					電算系系 14代中-15代 前半	非常に珍しい青磁。
6	1	43	黄褐色	底					電算系系 14代前半-15代 前半	
7	1	44	3層	底					電算系系 14代中-15代 前半	
8	1	47	1瓦、1砂利	底					電算系系 14代中-15代 前半	
9	1	43-44	3層、黄褐色	底					電算系系 14代中-15代 前半	
10	1	44	4層	底					電算系系 14代中-15代 前半	
11	1	43-44	4層、3層	底	11.2				電算系系 14代前半-15代 前半	
12	1	44	3層-中央瓦列部	底					電算系系 14代中-15代 前半	
第364号 PL. 44	1	1号表	底	底	13.8	7.2	5.4	見込みに印瓦文、口縁縁縮幅あり。	福徳-広 14代末-15代 前半	高台内腔無縁。
2	1	1号表	底	底	4.3			内面に4層の透草文、見込みに印瓦文。	電算系系 14代末-15代 前半	高台内腔/目録割り。
3	2	457	赤褐色土	底	3.7			見込みに印瓦文、周面に「透し瓦文」縮幅帯あり。	電算系系 15代前半-16代 前半	高台内腔/目録割り、2次的大割り。
4	2	457	赤褐色土	底	12.4	7	5	見込みに印瓦文。	電算系系 15代前半-16代 前半	非常に珍しい。
5	2	457	3層	底	13	5.8	6.8	内面に4層の透草文、見込みに印瓦文。	電算系系 14代中-15代 前半	高台内腔/目録割り。
6	2	456	1層底	底	11.9	3.2	3.7	内面に4層の透草文、外面に4層の透草文、見込みに「七宝文」縮幅帯あり。	電算系系 15代	高台内腔割り。
7	2	457-458	1層底、4層	底	10	3.4	4.1	見込みに印瓦文で「七宝文」縮幅帯あり。	電算系系 14代中-15代 前半	高台内腔無縁。
8	1	2号裏、9-11	黄褐色	底				外面に透草文、上面に4層の透草文。	電算系系 14代	縮幅帯を全て6部分も6角形に反ると認められる。
9	1	745	水注の口	底					電算系系 14代	
10	1	45	下段透草内	底					電算系系 14代-15代	内面下部無縁。
11	1	456	黄褐色	底					電算系系 14代中-15代 前半	器縁不揃い。
第365号 PL. 44	1	456	黄褐色	底	16.2	8.1	12.4		電算系系 14代末-15代 前半	底面の透草文、見込みに縮幅帯。高台内腔無縁。



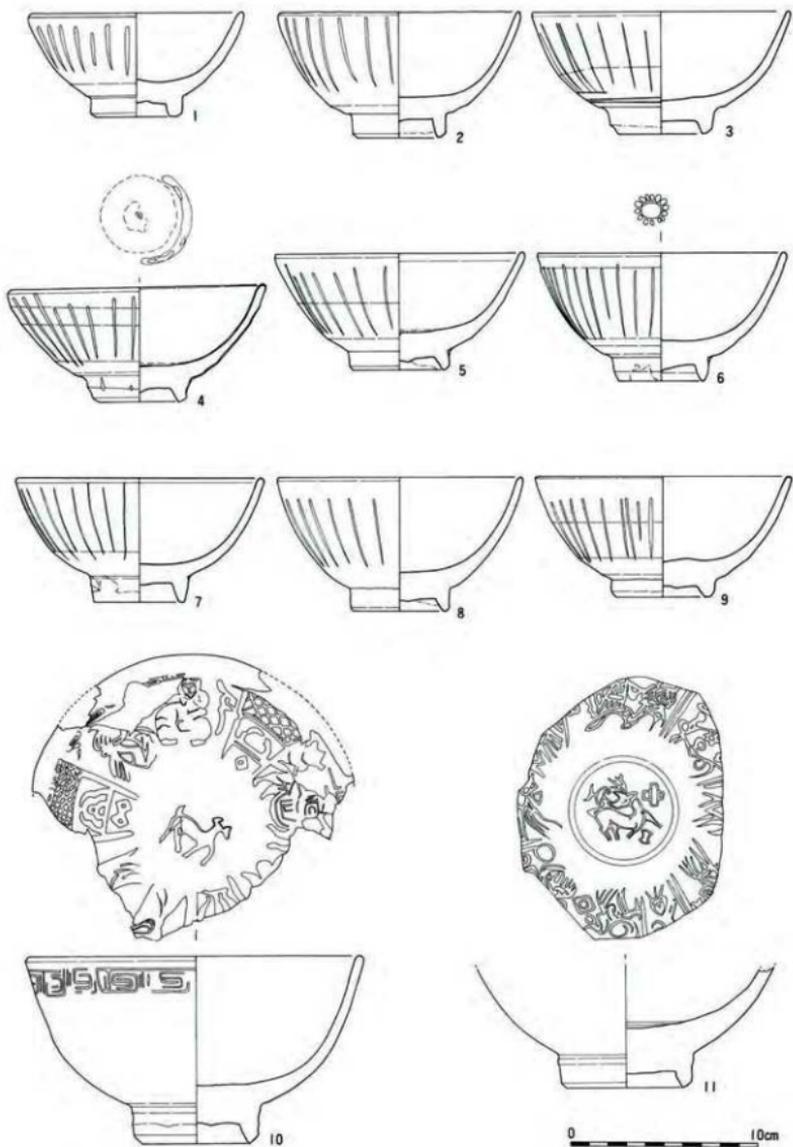
第26图 青磁①(1地区)



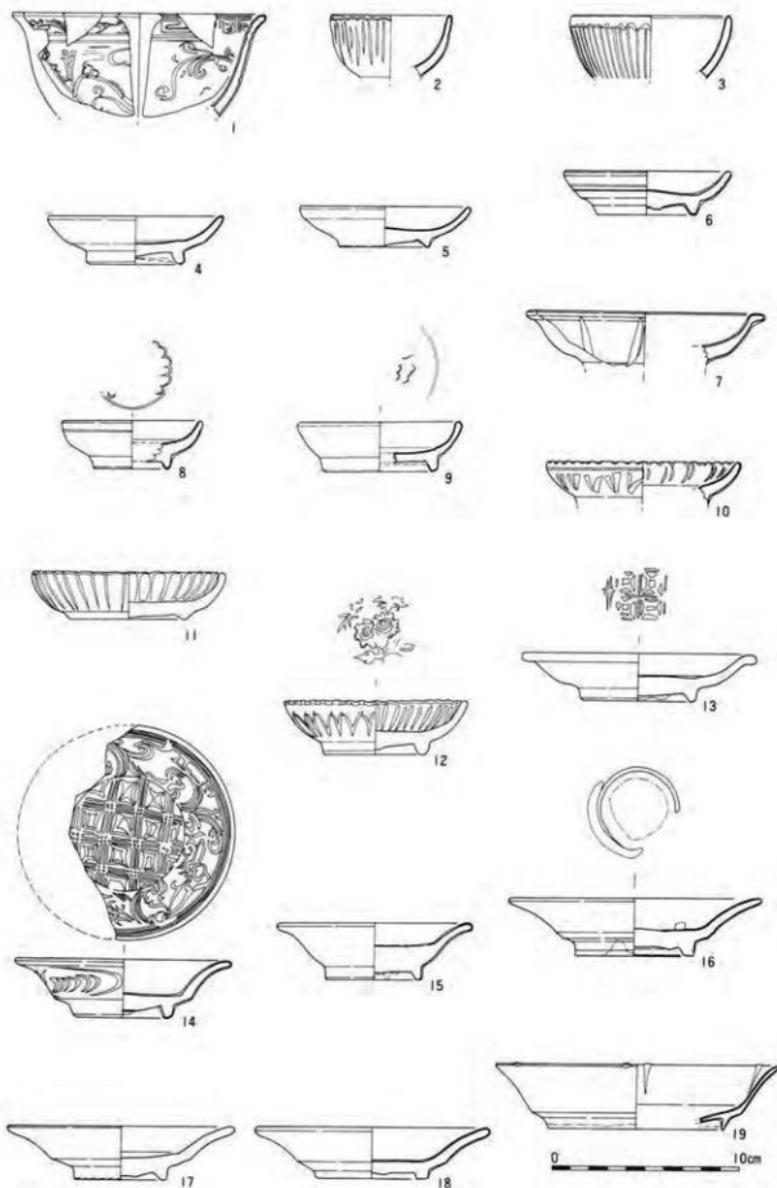
第27图 青磁②(1地区)



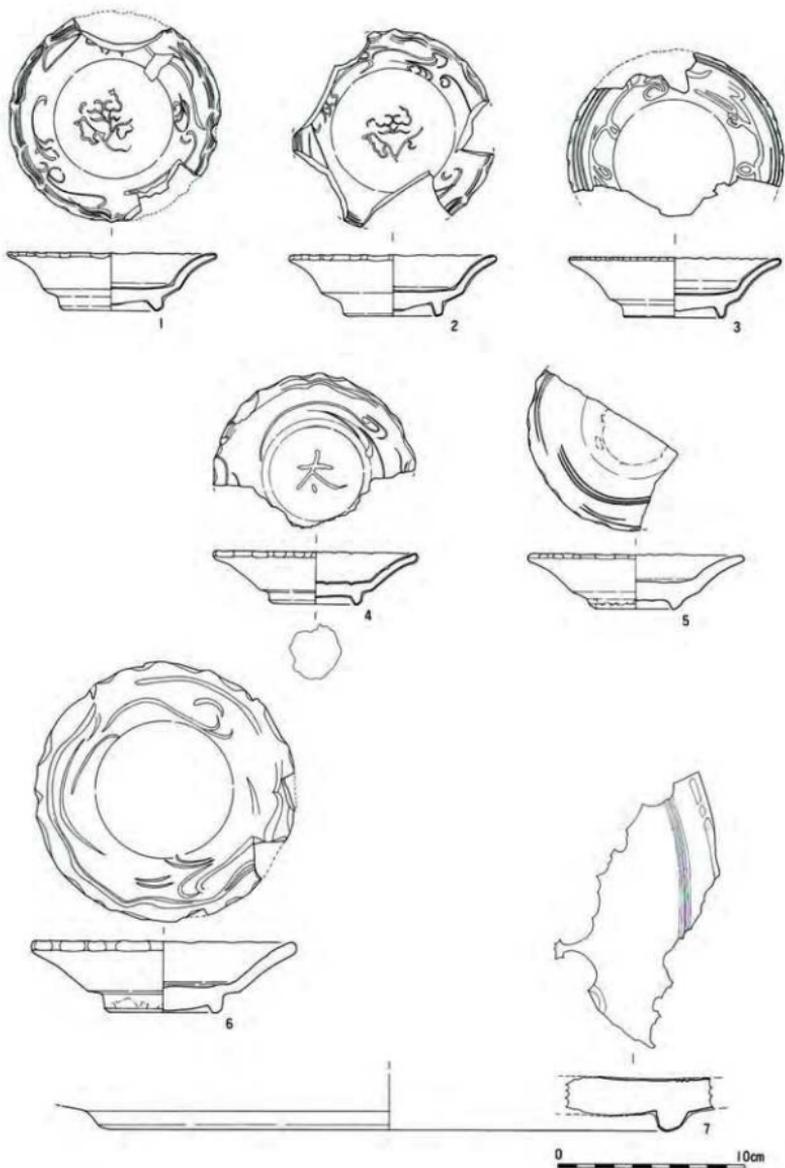
第28图 青磁③ (1地区)



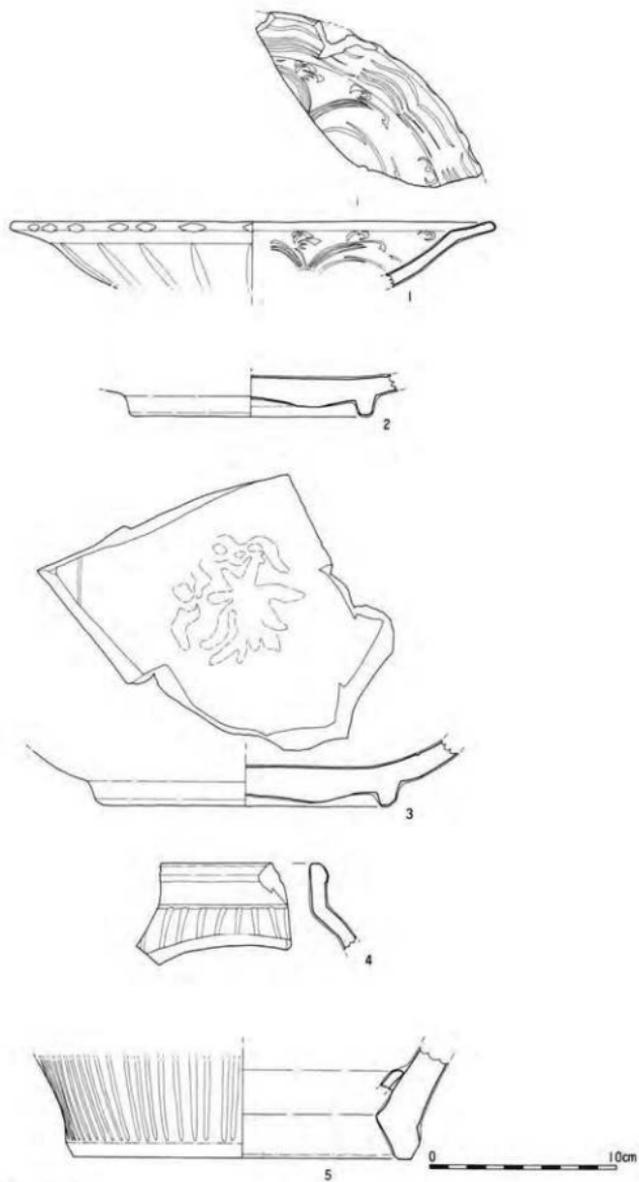
第29图 青磁④ (I地区)



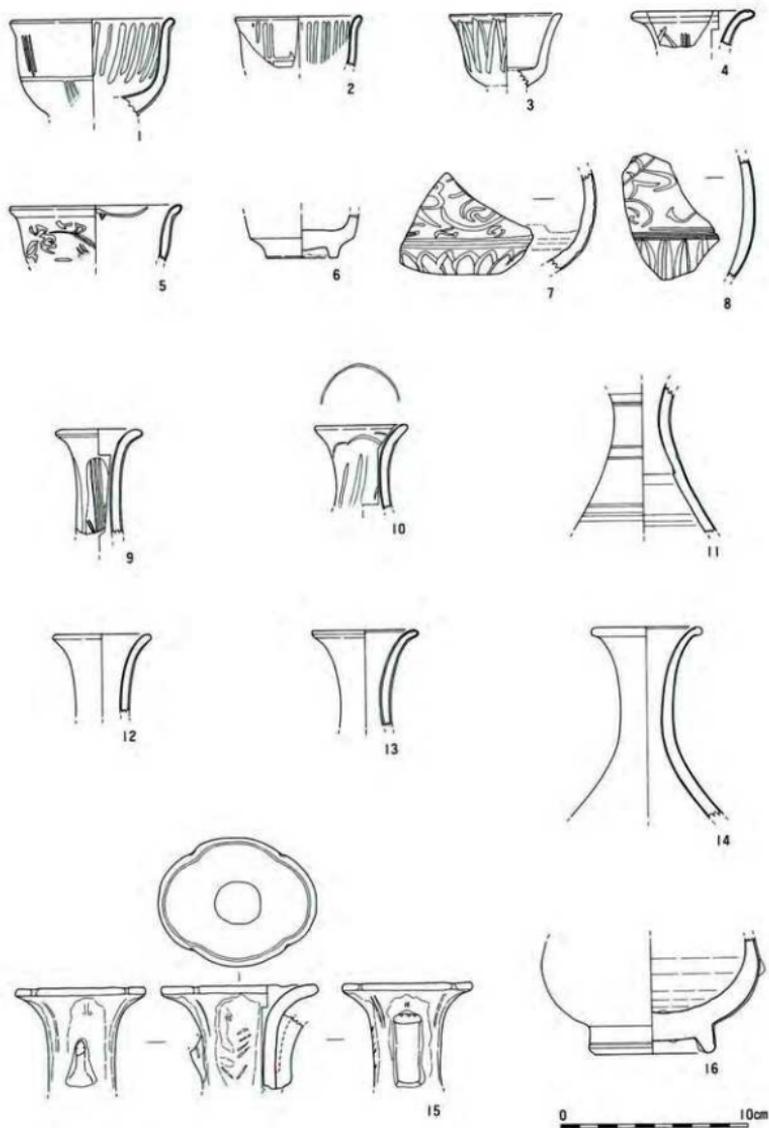
第30图 青磁⑤ (I地区)



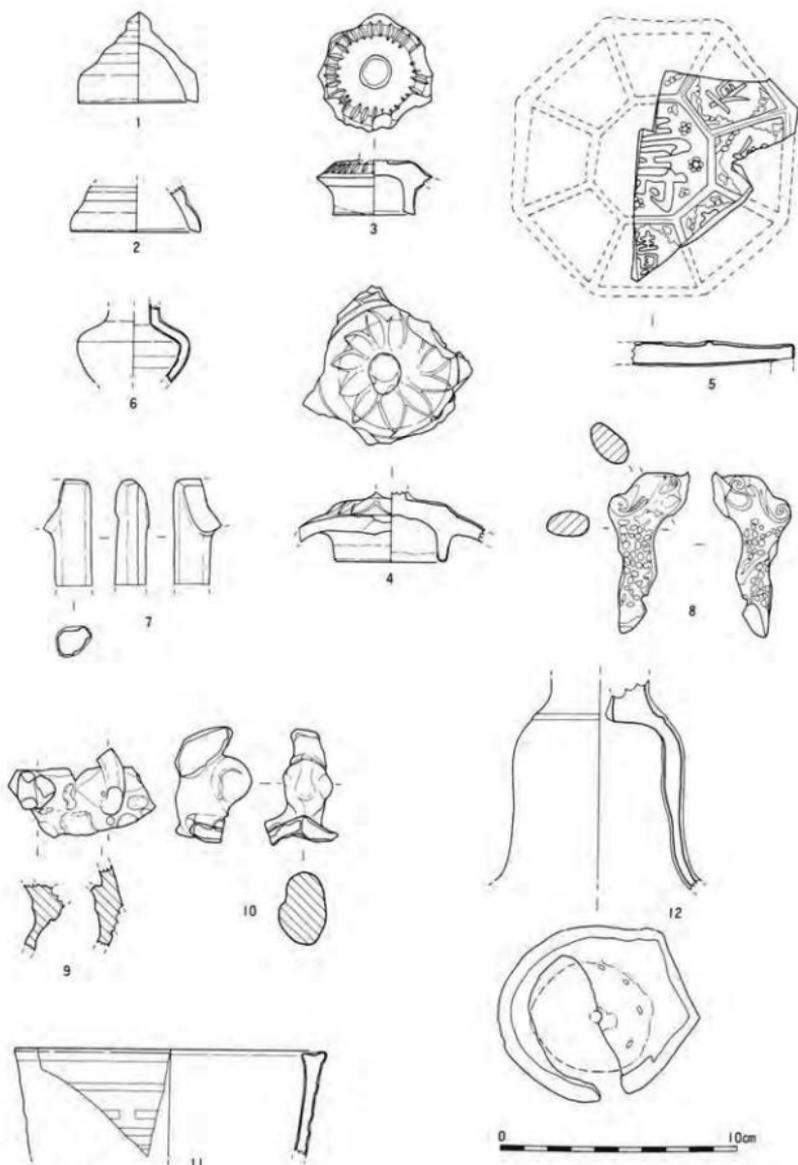
第31图 青磁⑥ (I地区)



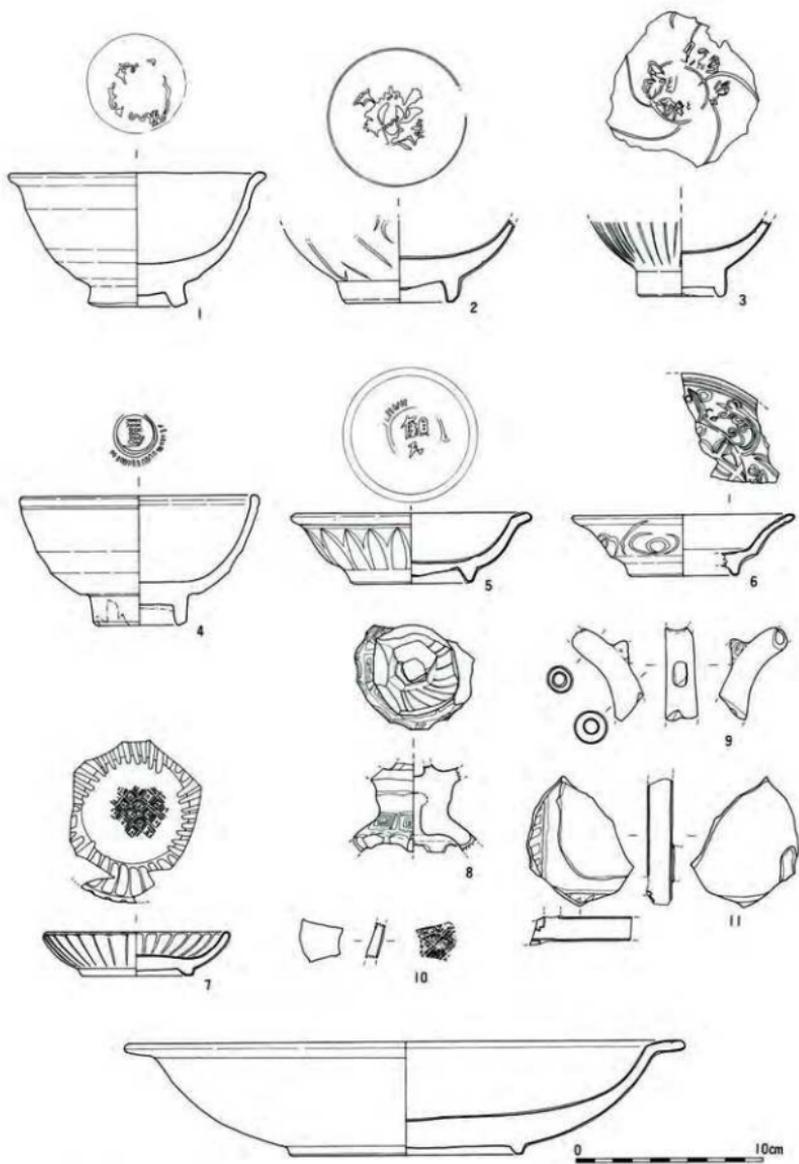
第32图 青磁⑦ (I地区)



第33图 青磁⑧ (1地区)



第34图 青磁⑨(1地区)



第35图 青磁碗 (I地区)

## 第2節 白磁

第36図～第38図はI地区、第39図がII地区、第39図24がIII地区出土である。III地区では小片が数点出土しているのみである。

第36図1・2は口禿の碗である。1は内面に青海波を陽刻する。同図3は外面中位に菊花を配する。同図4は端反りタイプの碗の底部である。畳付付近に砂が付着している。同図5は腰折れの碗である。同図6は景德鎮窯系の製品で、口縁部を外側に曲げるタイプの碗である。同図7は福建・広東系の碗である。腰部に削りの際のカンナ痕が残る。見込み、高台は無軸である。同図8も福建・広東系の碗で、見込みは蛇の目状の軸刺ぎを行う。高台は無軸である。同図9は見込み・高台無軸の碗である。同図10～13は端反りタイプの皿である。11は高台内に銘を染付する。14・15は福建・広東系の皿である。14は見込み・高台無軸、15は見込み蛇の目軸刺ぎ、高台無軸である。第37図1～3は葎筒底の皿である。同図3は見込み・高台無軸である。同図4・5は口禿タイプの皿である。4は小皿の転用とみられ、割口を磨いている。5は内外面に煤の付着が見られ、灯明皿へ転用したとみられる。同図6～10は切り高台の皿である。6は腰部が丸味を帯びて立ち上がるものである。7～10は一般的な切り高台の皿である。8は口唇部に煤の付着がみられ、灯明皿に利用したものともみられる。11は切り高台ではないが見込みに切り高台の熔着痕がある。口唇部に煤の付着がみられ、灯明皿に利用したものともみられる。同図12・13は菊花形の皿である。12は平底で見込み蛇の目軸刺ぎ、底部無軸である。13は高台内無軸である。同図14は稜花形の皿である。高台無軸で、内面から外面にかけて化粧掛けを行う。

第38図1は小坏である。同図2は見込み蛇の目軸刺ぎを施す。高台内に銘を染付する。同図3・4は型成形の製品で口唇部は口禿である。同図5は特殊な器形で用途は不明である。同図6は合子の身で、釉薬が黄ばんでいる。同図7は小盃で胴部に圈線、胴部に唐草文を陽刻する。同図8は高足杯の脚部とみられる。脚台内は無軸である。同図9は瓶で、内面に成形の際の継ぎ目が2箇所みられる。同図10～13は壺である。10は胴部外面下位に削りの際の篋跡が残る。11は高台無軸である。12はアンピン壺と呼ばれるものである。高台無軸である。

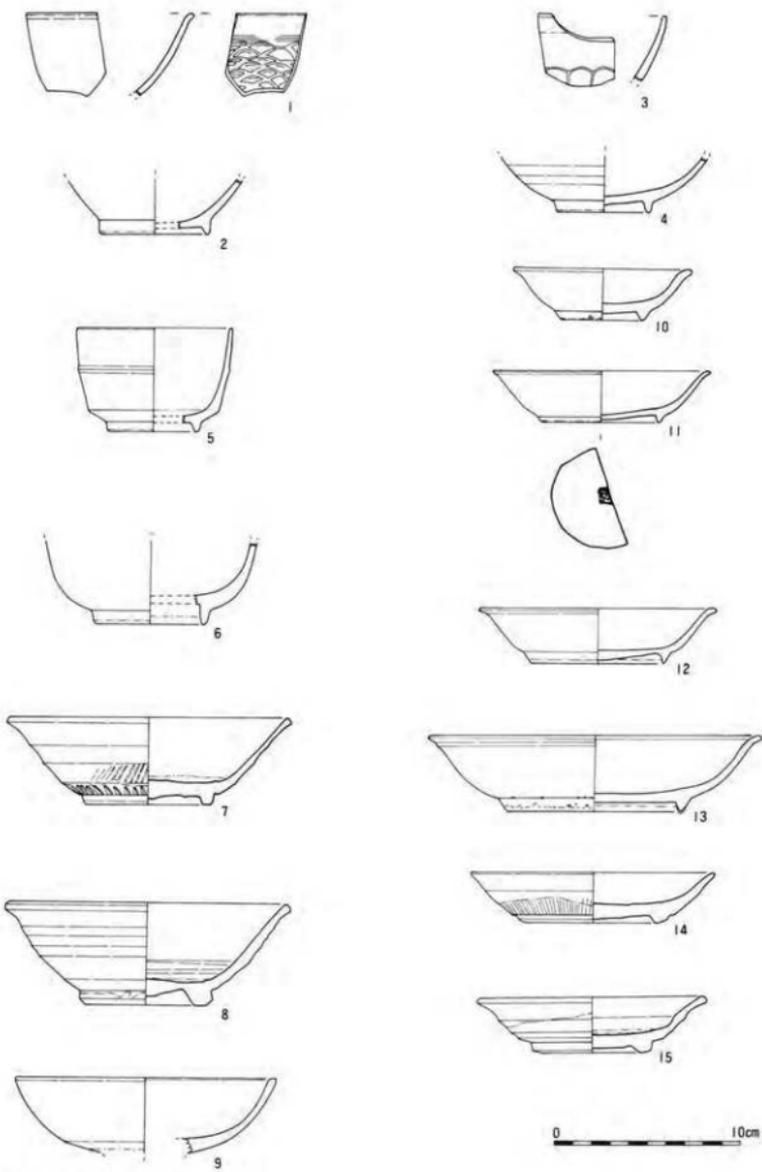
第39図1～5は碗の底部である。同図1～4は高台無軸、1・4は見込みは蛇の目状の軸刺ぎを行う。2・4は見込みは無軸である。同図5は、見込みは蛇の目軸刺ぎを施す。外面は畳付のみ無軸である。同図6・7は高台の高い碗で、色絵の可能性もある。同図8～20は型成形の製品である。10は鉄釉による口鋳装飾を施す。11は高台内に陽刻に銘がある。9～12、14～17、19・20は口禿である。15・18は高台内無軸である。同図21は燭台の脚部とみられる。同図22は八角小坏である。高台無軸である。同図23は焼成不良の皿で内側面に篋彫りの菊花状の蓮弁文をほどこす。見込み蛇の目軸刺ぎ、畳付のみ無軸である。同図24はIII地区出土の製品である。器種は皿とみられる。高台無軸である。

第2表1 白磁観察一覧

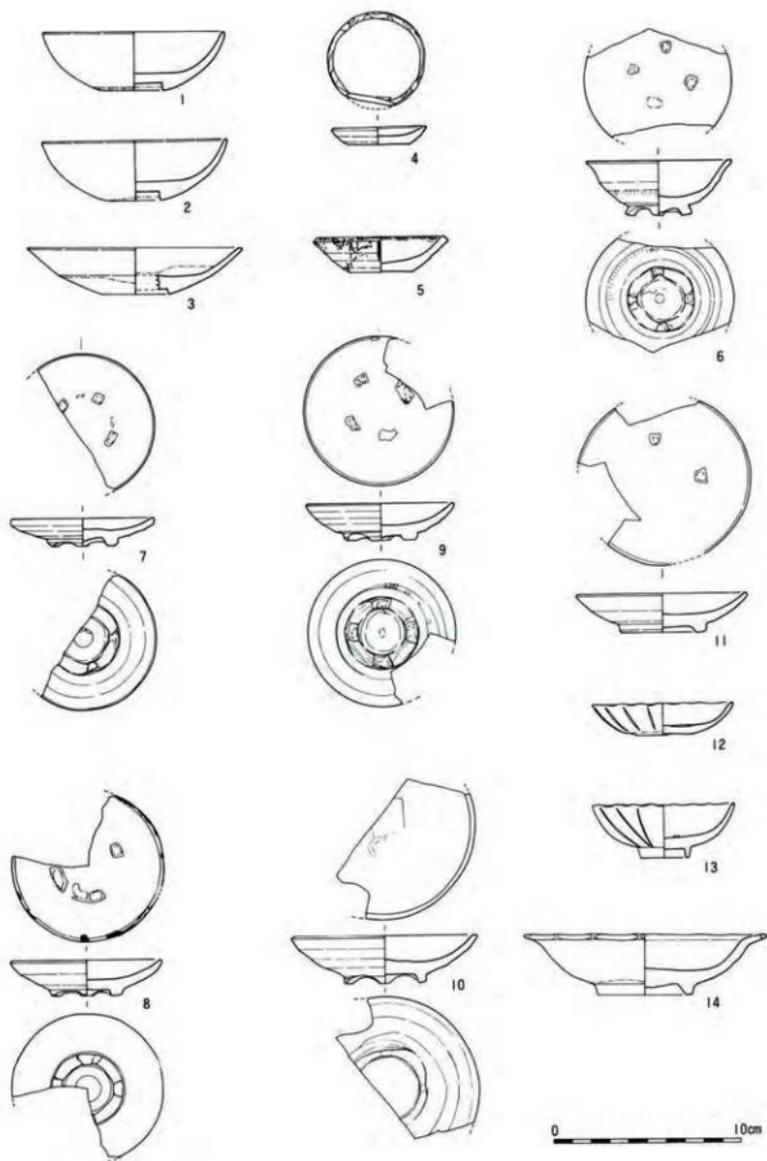
図号	器種	形式	形状	窯所	口径	高さ	底径	特徴	産地	年代	備考
図36(1)	碗	口禿	碗	口縁部				青海波、内面に型による陽刻文様、口禿。	中国産	10c～14c	
1	碗	第1皿類	碗	底底				口縁部の底底。	中国産	10c～14c	高台無軸。
2	碗	第2皿類	碗	底底				内面中央より下側に篋跡も残る。	中国産	10c～14c	
3	碗	第3皿類	碗	底底				口縁部が外反するタイプ。	中国産	10c～14c	畳付のみ無軸。
4	碗	第4皿類	碗	底底				口縁部が外反するタイプ。	中国産	10c～14c	畳付のみ無軸。
5	碗	第5皿類	小鉢	底底	8.4	3.8	4.3	腰部を削って直線的に立ち上がる。胴部に沈着層を帯びる。	中国産(産地不明)	16c～17c	
6	碗	第6皿類	碗	底底				口縁部を内側に曲げる型成形品。漢字の印。	中国産	16c～17c	高台無軸。
7	碗	第7皿類	碗	底底	15.4	4.7	4.8	口縁部が大きく開く直下の部、腰部にキツク痕が出る。	福建・広東系	16c～17c	見込み高台無軸。
8	碗	第8皿類	碗	底底	15.2	4.8	5.2	口縁部が大きく開く直下の部、腰部にキツク痕が出る。	福建・広東系	16c～17c	見込み蛇の目軸刺ぎ。高台無軸。
9	碗	第9皿類	碗	口縁部	14			腰部が見込みを帯びて立ち上がる。	福建・広東系	16c～17c	見込み高台無軸蛇の目状の軸刺ぎ。高台無軸。
10	碗	第10皿類	小鉢	底底	9.4	3.8	4.2	口縁部は外反する。やや厚手の作り。	中国産	14c	畳付のみ無軸。
11	碗	第11皿類	小鉢	底底	12.2	3.8	4.2	口縁部は外反する。厚手の作り。高台内に銘を染付する。	中国産	14c	畳付のみ無軸。
12	碗	第12皿類	小鉢	底底	12.3	3.7	4.2	口縁部は外反する。10以上やや厚手の作り。	中国産	14c	畳付のみ無軸。

第2表2 白磁観察一覧

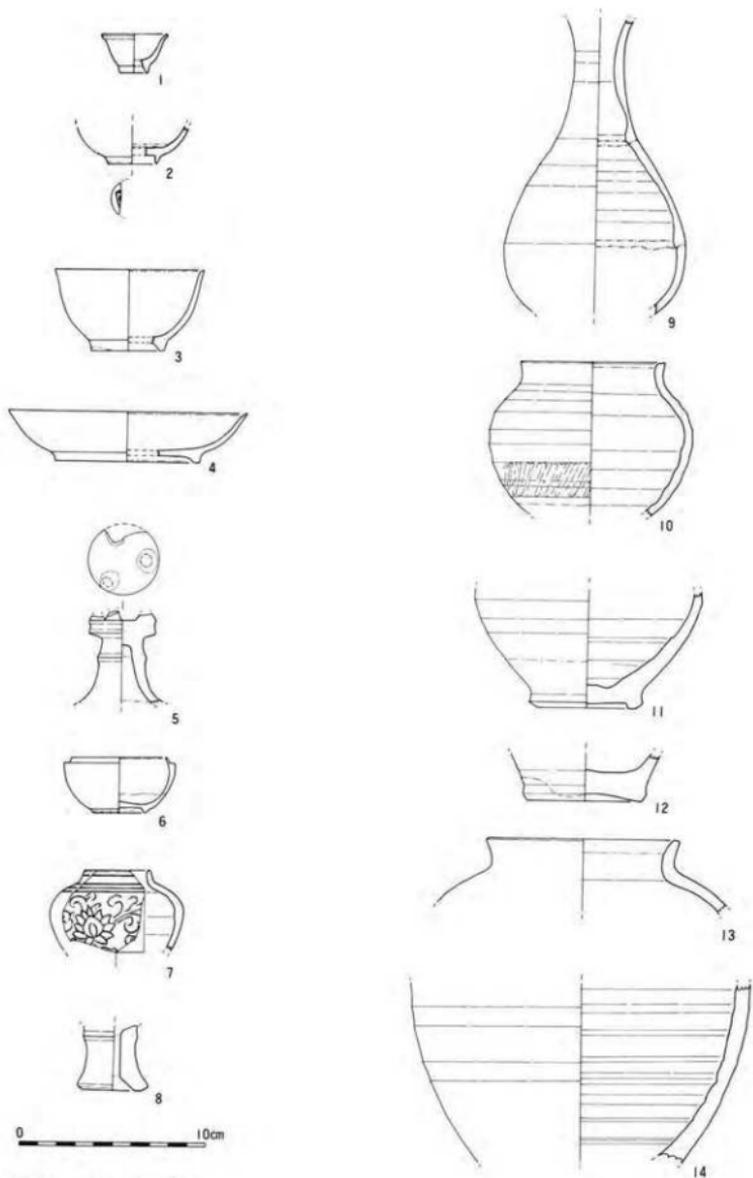
国名	年号	品名	形状	部位	口徑	高さ	直径	特徴	産地	年代	調査			
北朝鮮	PL 45	13-1	L44	高筒土器	底	定形	18	4.2	5.4	口縁部は反戻する。薄手の作り。	中国(福建)	13c後半~14c前半	貸付のみ観察。内面に重ねの痕	
		14-1	443, 444, 2, 443	第1瓦層, 第2瓦層, 第3瓦層	底	定形	11.2	2.7	6	腰部にキナシ痕が走る。發行を輪広に作る。	中国(福建)	明初~15c	見込みの目録あり。高台無縁。	
		15-1	244	第4層	底	定形	11.4	3	4.4	發行を輪広に作る。	福建(広東)	16c~17c	見込みの目録あり。高台無縁。	
		16-1	244	第3層	底(特殊)	定形	9.8	3.2	3	ごけ底の部。	中国(福建)	16c~17c初		
		17-1	244	第3層	底(特殊)	定形	10	3.3	3.4	ごけ底の部。	中国(福建)	16c~17c初		
		18-1	L44	第1瓦層	底	定形	11.7	2.7	3.4	ごけ底の部。灰色に発色している。様子が17cである。	明代			
		19-1	L44	第1瓦層	小底	定形	8.1	3.7	3.8	口縁部に二次的な加工を施して1.5。	中国	13c代		
		20-1	443	第3層	小底	定形	3.2	1.3	1.4	口縁部から外面にかけて隆起。右明面に利用あり。	中国	13c代		
		21-1	443	第3層	小底	定形	8	2.3	2.8	隆起か。切縁あり。	中国	13c代	全面無縁。	
		22-1	443	第3層	小底	定形	7.8	3.1	3.8	隆起か。切縁あり。	中国	13c代	全面無縁。	
北朝鮮	PL 47	11-1	443	第3層	小底	定形	8.1	3.7	3.8	口縁部に隆起あり。右明面に利用あり。切縁あり。	中国	13c代	全面無縁。	
		9-1	443, 444	第3層, 第4層	小底	定形	8	2	4	切縁ありの小底。	中国(福建)	13c代	全面無縁。	
		10-1	444	第3層	小底	定形	10	2.3	4.4	切縁あり。	中国	13c代	全面無縁。	
		11-1	L48, 194	第3層, 第4層	小底	定形	9.2	2.1	4.4	見込み以上の製品の隆起あり。右明面に利用あり。	中国	13c代	高台無縁。	
		12-1	444	第3層	小底(特殊)	定形	7.4	1.7	2.8	菊花形の口。口縁を輪広に成形。			見込みの目録あり。底平字で無縁。	
		13-1	444	第3層	小底(特殊)	定形	7.4	2.3	2.9	菊花形に作った小底。口縁部を輪広あり。	福建(福建)	16c~17c前半	高台内無縁。	
		14-1	L43	第1瓦層	底	定形	11.1	3.3	3.1	縁状で高台無縁の型製の面。内面から外面上部にかけて隆起がわかる。	中国(福建)	13c~17c前半	高台内無縁。	
		15-1	442	覆瓦	小底	定形	3.8	2.1	1.9		中国(清州)	17c~18c代	發行のみ観察。	
		16-1	447	第3層	小底	底面				腰部が長く立ち上がる。高台内に發行の跡あり。	中国(福建)	18c後半~17c前半	見込みの目録あり。	
		17-1	443	第2層	小底	定形	8	4.4	4	凹成形。口亮。	中国	13c~13c		
北朝鮮	PL 48	4-1	443	第2層	小底	定形	13	2.7	3.4	凹成形。口亮。	中国(福建)	13c~13c		
		5-1	443	第1瓦層	不明	底面				特徴。	中国か?	13c後半~14c前半	調査代?	
		6-1	443, 444	第2瓦層, 第3層	合子	定形	415	2	2.9	輪が重ぼんている。(特殊17c)。合子の身。	中国か?	14c~明代まで		
		7-1	443	第3瓦層	小底	口縁部				湯文字を施す。	中国	13c~18c代		
		8-1	444	第3層	高足杯?	底面			1.8		中国	明代13c~15c前半		
		9-1	CR43404	第2層覆瓦	底	底面					中国	16c~17c		
		10-1	L44	第1層	覆瓦?	口縁部	7.4			裏は凹み発色。口縁部無縁。	中国	明代		
		11-1	443, 444	第1瓦層, 第2瓦層	覆瓦?	底面				裏は凹み発色。	中国	明代	高台無縁。	
		12-1	443	第3瓦層	覆瓦?	底面				裏は凹み発色。			16c~17c前半	高台無縁。
		13-1	L43, 2	第3層, 第4層	覆瓦	口縁部	10.4			裏は凹み発色。	中国	明代		
北朝鮮	PL 49	11-1	443	第3層	底	底面			裏は凹み発色。	中国	明代			
		12-1	234	第3層	底	底面			7.3	高台發行き輪広。	中国	16c~17c代	見込みの目録の輪あり。高台無縁。	
		1-1	234	第3層	底	底面				3.1	隆起の部。	中国	17c~18c代	見込み高台無縁。
		2-1	243	第3層	底	底面				4.5	高台發行が広い作り。	中国	16c~17c代	高台無縁。
		3-1	243	第3層	底	底面				1.7		中国	17c後半~18c前半	見込みの目録あり。高台を丸くする。裏面に高台無縁。
		4-1	243	第3層	底	底面				4.4	腰部にキナシ痕が走る。	中国	17c後半~18c前半	發行に4.1の發行。
		5-1	243	第3層	底	底面				1.7		中国	17c後半~18c前半	見込みの目録あり。發行に4.1の發行。
		6-1	243	第3層	底	底面				4.4		中国	17c後半~18c前半	見込みの目録あり。發行に4.1の發行。
		7-1	243	第3層	底	底面				1.4	口縁部に鉄輪あり。發行のみ無縁。	中国	17c後半~18c(後期)	
		8-1	237	第3層	底	底面				4.1	凹成形。口亮。	中国(福建)	16c~19c	
北朝鮮	PL 50	10-1	237	第3層	底	底面			4.1	凹成形。口亮。	中国(福建)	16c~19c		
		11-1	237	第3層	底	底面			4.3	凹成形。口亮。高台内に隆起の跡あり。	中国(福建)	16c~19c		
		12-1	237	第3層	底	底面			3.8	凹成形。口亮。	中国	16c~19c		
		13-1	238	第3層	底	底面			4.3	凹成形。口亮。	中国	16c~19c		
		14-1	238	第3層	底	底面			5.4	凹成形。口亮。	中国(福建)	16c~19c	發行のみ無縁。	
		15-1	247	第3層	底	底面			5.9	凹成形。口亮。	中国(福建)	16c~19c	高台内無縁。	
		16-1	247	第3層	底	底面			8	凹成形。口亮。	中国(福建)	16c~19c	高台内無縁。	
		17-1	247	第3層	底	底面			9.2	凹成形。口亮。	中国(福建)	16c~19c	發行のみ無縁。	
		18-1	247	第3層	底	底面			7.4	凹成形。口亮。	中国	16c~18c	高台内無縁。	
		19-1	247	第3層	底	底面			12.8	凹成形。口亮。	中国(福建)	16c~19c	全面無縁。	
北朝鮮	PL 51	10-1	247	第3層	底	底面			12.8	凹成形。口亮の部。	中国(福建)	16c~19c		
		11-1	247	第3層	底	底面			12.8	凹成形。口亮の部。凹成形。17c發行。	中国(福建)	16c~19c		
		12-1	247	第3層	底	底面			3.8	内面に重ねの痕跡あり。	中国か?	13c代	高台無縁。	
		13-1	247	第3層	底	底面			3.8	内面に重ねの痕跡あり。	中国	16c~17c代後半	見込みの目録あり。發行無縁。底面凹。	
		14-1	247	第3層	底	底面			3.7	内面に重ねの痕跡あり。	中国	16c後半~18c	高台無縁。	



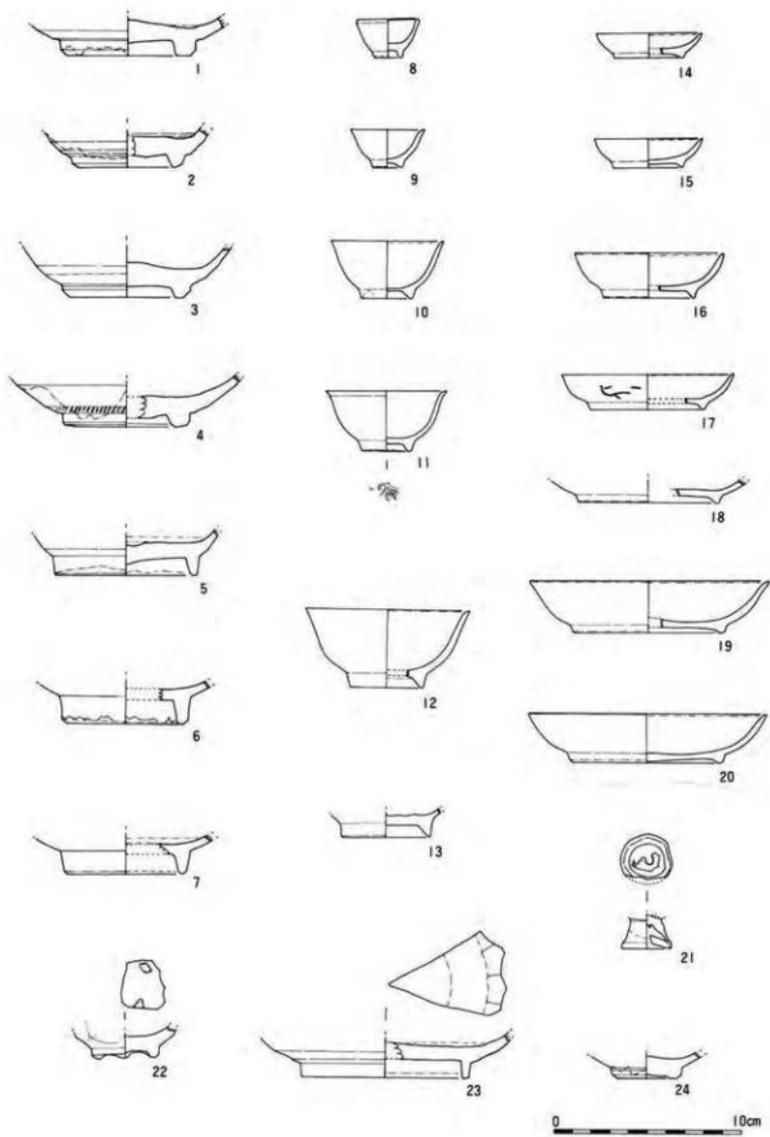
第36图 白磁① (I地区)



第37图 白磁② (I地区)



第38图 白磁③ (1地区)



第39图 白磁④(II·III地区)

### 第3節 染付

第40図～第50図がI地区、第51図～第59図1～20がII地区、第59図21～25がIII地区の出土である。

第40図～第43図、第51図～第55図が碗、第44図～第49図、第56図～第58図14～17が皿及び鉢、第50図4～18、第58図1～13、第59図がその他の器種である。

第40図、第41図1は端反り型と直口型の碗である。第40図1・5・6、第41図1は高台施釉、第40図4は高台無釉である。第41図2・3は口縁部に波濤文、胴部に蕉葉文、見込みに青海波に法螺貝を描く。同図4・6・7・8は腰が若干張って真直ぐ立ち上がるタイプで、外面は口縁部に波濤文、胴部に唐草文、見込みに花文を描く。同図5は蓮子型碗の底部である。第42図3は、「梅にうぐいす」の文様がある珍しいタイプである。同図4は見込みに花鳥文を描く。高台内に二重方形枠内に「正」字を書き込む。同図7は見込みに人物文を描く。同図8は高台が「ハ」字状に開くもので、見込みに樹下人物文を描く。同図10は第42図6と同種の底部である。同図11・12は見込みに花唐草文を描くものである。第41図6と同種の底部であると思われる。第43図2～4は16世紀後半・末～17世紀前半に属する。2は饅頭心型の膨らみがなくなっている。同図3は見込み蛇の目軸割ぎを施す。同図5～10は腰折れの坏である。同図5・7・8・10は外面草花文、6・9は如意頭繫ぎ文を描く。見込みの文様は草花文と十字花文の2種ある。以上はいずれも明代の製品である。

第43図11～16は清代の製品である。同図11～15は小碗である。同図11は口唇部の釉が掻き取られている。焼成不良で全体的にくすんだ色調を呈する。同図12・13・15は二重描線により唐草文を描く。高台内に銘を有し、12は「成」、13は「全」、15は「玉」の各種ある。同図14は仙芝祝寿文を描く。

第44図1・2は端反りタイプの皿で、外面唐草文、内側面・見込みに草花文を描く。同図3・4は葶筈底の皿で、3は見込みに十字花文を描き、その周囲に花を巡らす。第45図と第46図は見込み十字花文の皿で、口径10cm前後のものと口径12cm前後のもの2種がある。第47図と第48図は見込み玉取り獅子文の皿である。第49図1～6・8・9は葶筈底の皿である。同図1～3は外面は波濤文と蕉葉文の組み合わせであるが、同図4～6は外面は無文となる。同図8・9は内面に花模様を描き、その周囲に点描地文を配する。7は皿または鉢と見られる。文様は同図8・9と同様である。以上は明代の製品である。第50図2は福建・広東系の粗製の皿で見込みに「玉」字を描く。高台外面は無釉であるが、高台内は釉掛けを行う。見込み蛇の目軸割ぎである。同図3は皿か鉢とみられる。福建・広東系の製品で呉須手で見込みに「飛馬文」を描く。以上は明末・清初の製品である。第49図11・12、第50図1は清代の製品である。第50図1は見込みに「志在書中」図を描く。第50図4は口縁部が輪花状をなす角形の鉢である。同図5～13は明・清代の小坏である。同図10は高台内「宣徳年造」、同図11は高台内「正徳年製」である。同図14～16は高足坏である。同図17・18は蓋で崩れた蓮弁文・蕉葉文を描く。

以上がI地区出土の製品である。次にII地区出土の製品について述べる。

第51図は明代の製品である。第51図1～6は端反りタイプの碗である。同図5は見込みに「福」字を描く。同図7・8は口縁部外面に波濤文、胴部外面に蕉葉文、見込みに青海波に法螺貝を描く。同図7は高台内に一重長方形枠内「太平」字を書き込む。同図9は腰が若干張って真直ぐ立ち上がるタイプの碗である。同図10は饅頭心型碗の底部である。高台内の銘は不明である。第52図1は大振りの碗で、外面の図柄は不明である。見込みは花文を描く。高台無釉である。同図2～10、第53図1～3は福建・広東系の粗製の碗である。呉須の発色が悪く、黒味がかかった色調を呈する。文様はかなり崩れており、図柄は不明である。見込み及び高台は無釉で、見込みは蛇の目状の削りを行う。同図10のみ見込みは施釉である。これらの製品の年代は16世紀後半～17世紀前半である。

次に清代の製品について述べる。

第53図6～14、第54図1～9、第56図1は福建・広東系の碗で、高台が高く、高台径の大きい大振りの碗である。第53図6～13は草花文を描くグループである。このグループには草花文のみを描くものと同図9のように腰部に蓮弁文を巡らすものがある。年代は18世紀頃である。第54図1～6は寿字を巡らすグループである。このグループは外面を「寿」字と花文を交互に配し、腰部には蓮弁文が巡る。またこのグループは高台内に「和美」・「合利」・「盛」等の銘を有する。年代は18世紀～19世紀後半である。同図7は丸文のグループに属する。同図8は草花文または唐草文に「寿」字の崩れを配する。第55図1は文様の崩れがひどく、図柄は不明である。第54図9は見込み蛇の目軸剃ぎ、高台内は無軸であるが、高台中央のみ施軸されている。文様は崩れがひどく、図柄は不明である。年代は18世紀～19世紀頃である。

第55図2～5は内外面に仙芝祝寿文を施す。同図6～17は染付の青色の発色が強い小碗である。この種の碗は高台内に意味不明の銘を有する。年代は同図6～9が18世紀末～19世紀、同図10～17が18世紀～19世紀である。同図18は外面に青磁釉を掛けるもので、内側面に八卦文、見込みに太極図を描く。

第56図・第57図はII地区出土の皿形である。第56図1・3は見込みに十字花文を描く。同図2は見込みに玉取り獅子文を描く。以上は明代の製品である。

第56図4～9、第57図は清代の製品である。第56図5は染付に辰砂を加えたものである。網目状の部分が辰砂で描かれている。高台内は無軸である。第56図8・9、第57図1・2・8は見込みに志在書中図を描く。第57図3～7は18世紀後半～19世紀に属する小皿である。同図3～5は型成形とみられる。同図9は内面に仙芝祝寿文を描く。

第58図14～17は福建・広東系の大振りの鉢の底部である。見込み中央に印花文、その周囲は蛇の目軸剃ぎを施す。第59図1～15は小坏である。同図16は角形の皿である。高台は貼り付けである。年代は17世紀前半、同図17～20は蓮華で清代の製品である。第58図1～3は瓶である。1・3は頸部に蕉葉文を巡らす。2は肩部に蓮弁文、胴部に唐草文を配する。1・3はII地区、2はI地区の出土である。年代は15世紀～16世紀。4は小壺で口鏤裝飾を施す。同図5は合子の身である。やや焼成不良気味の製品である。胴部は篋彫りによる蓮弁文を配し、圏線は染付である。年代は15～16世紀。同図6～8は蓋である。7は蓋物の蓋、8は壺の蓋である。これらの製品はII地区出土で、年代は清代である。同図9・10は用途不明の製品である。9は胴部に「平安散□」と書かれている。年代は18世紀後半～19世紀頃。10は年代不明（明代・清代か）である。同図11～13は小瓶である。11は焼成不良気味の製品で口鏤裝飾を施す。13は胴部に「同」と書かれている。年代は11が16世紀末～17世紀前半、12・13は18世紀～19世紀である。

以上がII地区出土の製品である。次にIII地区出土の製品について述べる。

第59図21～22は皿、同図23～24が碗、同図25がその他の器種である。21は内外に唐草文を施す。年代は明代である。22は基筒底の皿で、呉須の発色が不良である。外面に波濤文と蕉葉文、見込みに花文を配する。23は清代、24は明代の碗の底部である。25はコーヒークップ状の製品である。外面に雲か霞の文様を紺色に近い呉須で描き、その中を上絵付けで渦巻文を描く。周囲の花文は赤絵で描く。全体的に古伊万里を真似たようなモチーフ、色調を呈する。年代は清代とみられる。



第3表2 染付観察一覧

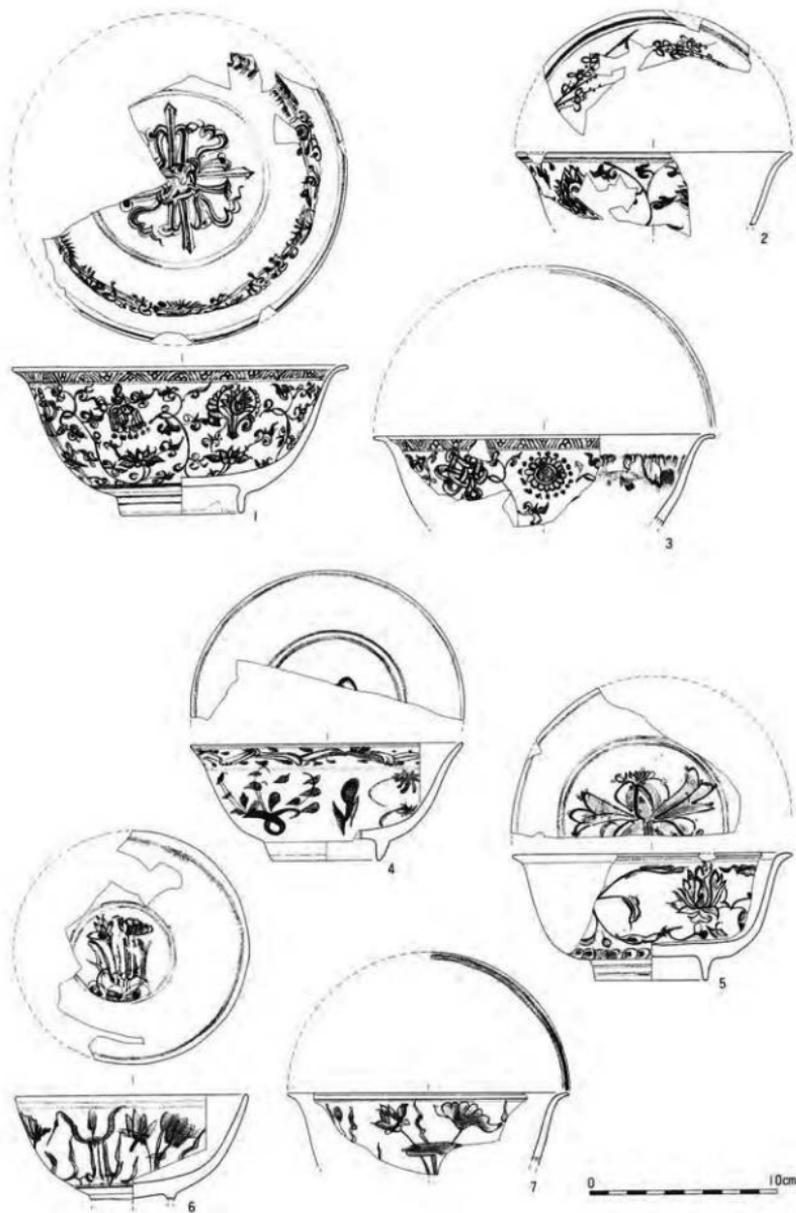
図号	表裏	寸法	形状	図柄	図柄	図柄	図柄	図柄	特徴	産地	年代	備考	
第0046 PL 17	1	1	8.44, 9.44	第2巻, 第2巻	圓	宛形	11.9	2.4	4.1	「玉取子」刷文字。	中国産	16c末~16c中葉	
	2	1	8.44, 9.44	第1巻, 第1巻	圓	宛形	12.4	2.7	8.55	「玉取子」刷文字。	中国産	16c末~16c中葉	
	3	1	8.44	興地土巻	圓	宛形	12.2	2.9	7.1	「玉取子」刷文字。	中国産	16c末~16c中葉	
	4	1	8.44	共内裏心巻	圓	宛形	11.8	2.7	7.1	「玉取子」刷文字。	中国産	16c末~16c中葉	
	5	1	7.44	4巻	圓	宛形	13.4	3.15	1.1	「玉取子」刷文字。	中国産	16c末~16c中葉	
	6	1	7.44, 7.43	1瓦扇, 第3巻	圓	宛形	8.4	2.3	2.3	見込みに花文を飾る外面に裏葉文を施す。「花文」の配置方法が定かでない。	中国産	16c後半~16c中葉	ゾケ底。
	7	1	7.44, 7.43	第1巻, 瓦扇中折捲込	圓	宛形	8.4	2.35	2.3	見込みに花文を飾る外面に裏葉文を施す。	中国産	16c後半~16c中葉	ゾケ底。
	8	1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに文様は不明。	中国産	16c末~16c中葉	ゾケ底。
	9	1	7.44	内戸心巻	圓	宛形	11.2	2.1	2.1	「人形」刷文字。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施さない。	中国産	16c代	ゾケ底。
	10	1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
	第0047 PL 18	1	1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代
2		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
3		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
4		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
5		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
6		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
7		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
8		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
9		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
10		1	8.44, 7.43	第1巻, 捲込, 第3巻	圓	宛形	9.8	2.4	2.4	外面「成徳文」を施す。見込みに「寿字」を人の形にして施す。裏面に裏葉文を施す。	中国産	16c代	ゾケ底。ゾケ底。
第0048 PL 19		1	1	11.44	捲込	圓	宛形	15.2	3.1	8.1	「志在善中」である。	中国産	16c代
	2	1	7.44	第1巻	圓	宛形	10.4	2.9	5.49	見込みに「玉」字。	福建・広東系	17c代	
	3	1	8.44		楕圓形	宛形			1.2	「周馬文」。「貞徳字」白化粉を塗ってその上に赤粉を施す。	中国産	16c末~17c前半	鏡片。
	4	1	8.44	2巻 (瓦裏中)	楕圓形	縁			1.2	「周馬文」。「貞徳字」白化粉を塗ってその上に赤粉を施す。口縁部を輪花状に作る。角形の縁。	中国産	16c~16c中葉	鏡片。漆文が押しタイプである。
	5	1	8.44	2巻	小杯	成扇形	5.4		2.1	外面に裏葉文を施す。	中国産	16c末~16c中葉	高台無縁。
	6	1	8.44	捲込 (5号製)	小杯	宛形	4.4	2.7	2.1	外面に裏葉文を施す。	中国産	16c~17c前半	高台無縁。
	7	1	不明		小杯	成扇形			2.4		中国産	16c~17c前半	高台無縁。
	8	1	7.44	井戸中	小杯	成扇形			2.2		中国産	16c~17c前半	高台無縁。
	9	1	6.44	1瓦扇	小杯	成扇形			2.4	外面に裏葉文を施す。口縁部「貞徳字」の縁が入っている。「貞徳字」自体は16c年代であるが、この場合は16c代。	中国産	16c後半~16c代	高台無縁。
	10	1	7.44	1瓦扇	小杯	成扇形			2.4	外面に裏葉文を施す。口縁部「貞徳字」の縁が入っている。「貞徳字」自体は16c年代であるが、この場合は16c代。	中国産	16c後半	高台無縁。
	第0049 PL 20	1	1	7.44	1号表	圓	宛形	13.44			環状リリリ。見込みに「福」字を施す。	中国産	16c中葉~16c前半
2		1	8.44	第3巻	圓	宛形	14.8			環状リリリ。	中国産	16c後半~16c中葉	
3		1	5.59	第8巻	圓	成扇形				環状リリリ。	中国産	16c後半~16c中葉	
4		1	5.59	第9巻	圓	成扇形				環状リリリ。内面縁の文様を施す。	中国産	16c後半~16c中葉	
5		1	5.59	第10巻	圓	成扇形				環状リリリ。見込みに「福」字を施す。	中国産	16c後半~16c中葉	
6		1	5.59	第11巻	圓	成扇形				環状リリリ。	中国産	16c後半~16c中葉	
7		1	5.59	第2巻, 捲込, 2号裏	圓	宛形	12.3	6.2	5.1	外面に成徳文と裏葉文。見込みにお目玉を施す。	中国産	16c後半~16c前半	高台内付に「玉」字の縁あり。
8		1	5.59	第1巻	圓	宛形	12.4	4.35	4.8	外面に成徳文と裏葉文。見込みにお目玉を施す。	中国産	16c末~16c中葉	
9		1	5.59	第3巻	圓	宛形	12.4	4.4	4.35	外面に成徳文と裏葉文。見込みにお目玉を施す。	中国産	16c末~16c中葉	
10		1	5.59	第1巻	圓	成扇形			3.21	「貞徳心巻」。	中国産	16c後半~16c中葉	
11		1	7.59	第10巻	圓	成扇形			4.8	外面に文様はすれがはどく不明。見込みに「徳」字を施す。	中国産	16c後半~17c前半	内面に一層輪が施されている部分がある。
第0050 PL 21	1	1	7.59, 7.57	第8巻, 第9巻	圓	宛形	14.8	8.4	8.4	外面に文様はすれがはどく不明。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c代	見込み, 高台無縁。
	2	1	7.59	第9巻	圓	宛形	15.1	6.3	6.3	外面に文様はすれがはどく不明。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c代	見込み, 高台無縁。
	3	1	7.59, 7.58, 7.58	表上, 第1巻, 8号, 5.59	圓	宛形	13.4	5.7	5.7	外面に文様はすれがはどく不明。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c代	見込み, 高台無縁。
	4	1	7.59	第1巻	圓	宛形	14.2	5.4	5.4	外面に文様はすれがはどく不明。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c代	見込み, 高台無縁。
	5	1	7.59, 7.57	第5巻, 第6巻	圓	宛形	14.3	5.8	4.21	外面に文様はすれがはどく不明。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c代	見込み, 高台無縁。
	6	1	7.59, 7.58	第1巻, 第3巻	圓	宛形	14.33	6.2	5.8	外面に文様はすれがはどく不明。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c代	見込み, 高台無縁。
	7	1	7.59	第3巻	圓	縁部	11			外面に列点文を配する。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c前半	見込み, 高台無縁。
	8	1	7.59	第3巻	圓	成扇形			3.1	外面に列点文を配する。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c前半	見込み, 高台無縁。
	9	1	7.59	第3巻	圓	成扇形			3.1	外面に列点文を配する。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c前半	見込み, 高台無縁。
	10	1	7.59	第3巻	圓	成扇形			3.1	外面に列点文を配する。粗製の鏡。	福建系	16c後半~17c前半	見込み, 高台無縁。

第3表3 染付観察一覽

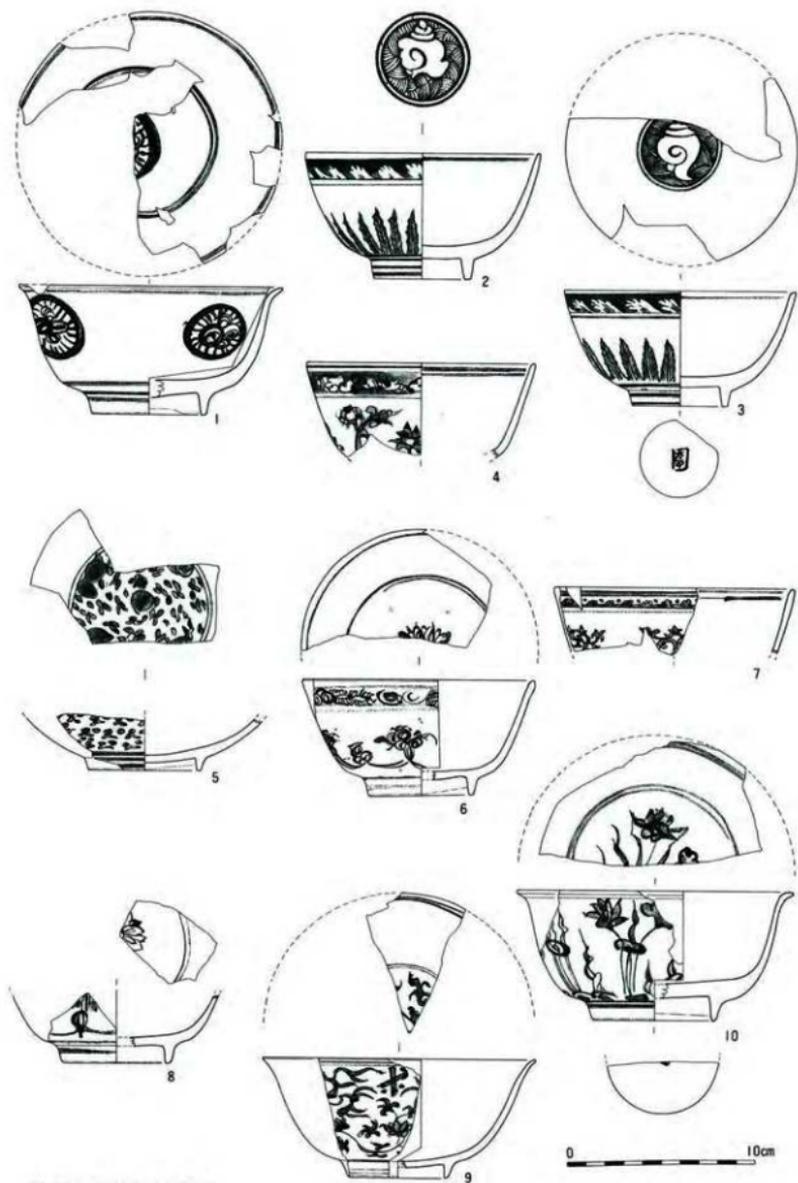
図号	群号	番号	種別	種名	目録	頁数	頁数	頁数	備考	備考	備考	備考	
MS104 PL 42	第9類	12-2-533	第9類	染付	文形	12.2	4.4	3	複製の類。	複製	14(複製)~17(前半) 複製	高台無軸。	
		7-1-539	第9類	染付	文形	11.8	3.1	3	複製の類。	複製	14(後半)~17(代) 複製	見込み、高台無軸。	
		2-1-537	第9類	染付	文形	15.4	0	8.7	内外の文様はくすねれり不明、複製の類。	複製	15a~16a 複製	見込み、高台無軸。	
		2-1-538	第9類	染付	文形	12			複製の類。	複製	15a~16a 複製	複製	
		2-1-535	第9類	染付	文形			4.4		複製	15a~16a 複製	複製	
		2-1-536	第9類	染付	文形			6.9		複製	15a~16a 複製	複製	
		2-1-537	第9類	染付	文形	12.7	5.4	8.9	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-538	第9類	染付	文形	13.2	5.9	8.4	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-539	第9類	染付	文形	12.8	5.3	5.9	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-540	第9類	染付	文形	12.1	5.5	6.1	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
MS105 PL 44	第4類	2-1-541	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-542	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-543	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-544	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-545	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-546	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-547	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-548	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-549	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-550	第4類	染付	文形	13.8			内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
MS106 PL 46	第3類	2-1-551	第3類	染付	文形	13.8	4.4	6.9	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-552	第3類	染付	文形	13.8	5.1	7.6	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-553	第3類	染付	文形	13.8	5.2	7.7	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-554	第3類	染付	文形	13.8	5.3	7.8	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-555	第3類	染付	文形	13.8	5.4	7.9	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-556	第3類	染付	文形	13.8	5.5	8.0	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-557	第3類	染付	文形	13.8	5.6	8.1	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-558	第3類	染付	文形	13.8	5.7	8.2	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-559	第3類	染付	文形	13.8	5.8	8.3	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-560	第3類	染付	文形	13.8	5.9	8.4	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
MS107 PL 48	第5類	2-1-561	第5類	染付	文形	9.11	2.4	0.2	見込みは「十字文」を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
		2-1-562	第5類	染付	文形	11.2	2.1	0.1	見込みは「五輪文」を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
		2-1-563	第5類	染付	文形	12.2	2.1	0.1	見込みは「十字文」を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
		2-1-564	第5類	染付	文形	16.4	2	8.2	内外に華文を添く。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-565	第5類	染付	文形	17.2			見込みは華文を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
		2-1-566	第5類	染付	文形	17.8			見込みは華文を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
		2-1-567	第5類	染付	文形	18.1			見込みは華文を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
		2-1-568	第5類	染付	文形	18.1			見込みは華文を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
		2-1-569	第5類	染付	文形	18.1			見込みは華文を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
		2-1-570	第5類	染付	文形	18.1			見込みは華文を添く。	複製	15a後半~16a 複製	複製	
MS108 PL 49	第3類	2-1-571	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-572	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-573	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-574	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-575	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-576	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-577	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-578	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-579	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-580	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
MS109 PL 47	第3類	2-1-581	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-582	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-583	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-584	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-585	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-586	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-587	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-588	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-589	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	
		2-1-590	第3類	染付	文形	11.2	5.8	7.5	見込みは「志在書中」印である。	複製	15a 複製	複製	

第3表4 染付観察一覧

図例	器名	寸法	部位	形状	口径	底径	高さ	特徴	産地	年代	備考	
第502号 丸. 47	1	7.54	第7層	蓋	内径 4.4 外径 5.4				中国産	18c~19c	蓋の裏。	
	8	6.60	第3層	蓋	内径 2.1 外径 3.1				中国産	17c~18c	蓋の裏。	
	9	1	襷足	小瓶	底径		1.4		中国産	18c後半~19c頃	「平安朝?」とかかれてい る	
	10	9.63	第2層	母差 不明	底径				中国産	不明 産地?		
	11	1.34	第1層, 赤褐色	瓶	口径部	2.3			中国産	16c末~17c前半	中空模成不真まら。	
	12	5.37	襷足 2	小瓶	底径		1.6		中国産	18c~19c		
	13	1.33	第3層	小瓶	口径部	2.23			中国産	18c~19c		
	14	5.37	襷足	鉢	底径		3.4		中国産	17c~18c	見込糸瓶の目輪割き。	
	15	1.30	第3層, 黄褐色	鉢	底径		1.9		中国産	17c~18c頃	見込糸瓶の目輪割き。	
	16	1	表土付	鉢	底径		13.1		中国産	17c~18c頃	見込糸瓶の目輪割き。	
	17	1	表土付	鉢	底径		12.1		中国産	17c~18c頃	見込糸瓶の目輪割き。	
	第508号 丸. 48	1	4.94	襷足	小瓶	口径部	3.3	1.6	2.3	中国産	17c	
		2	7.63, 7.64	第4層黄褐色粘土 面付	小杯	口径部	5.4			中国産	明~清代	
		3	1.43	第3層	小杯	口径部	6.75			中国産	明~清代	
		4	1.74	面付	小杯	口径部	3.0			中国産	明~清代	
		5	1.43	第3層	小杯	口径部	5.2			中国産	明~清代	
		6	1.43	第2層黄褐色中	小杯	口径部	6.2			中国産	明~清代	
7		1.43	第3層黄褐色粘質	小杯	口径部	6.3			中国産	明~清代		
8		2	2号黄褐色土付	小杯	底径		2.25		中国産	17c		
9		2	5.39	小瓶	小瓶	口径部	3.31	2.3	3.55	中国産	17c~18c	「白雲製」跡入り。
10		2	5.39	第5層	小杯	底径		2.1		中国産	17c~18c	
11		2	襷足	小杯	底径		2.43		中国産	17c~18c		
12		5.37	襷足 2	小杯	底径				中国産	17c~18c		
13		2.43	第2層	小瓶	口径部	3.4				18c~18c		
14		2.59	第5層	小瓶	口径部	3.32	1.8	1.4		18c~18c		
15		2.59	襷足	小瓶	口径部	3.8	2.0	1.8		中国産	18c~18c	
16		5.34(2区), 44(1区), 5.35(2区)	第4瓦輪, 第2層	小皿					中国産	17c前半	裏面をほりつけてある。内側 に窪である。	
17		2.60	第3層	蓋					中国産	18c~18c		
18		2.60	第3層(行)ノ中	蓋					中国産	18c~18c	透割(5リ透割)	
19		1.37	襷足	蓋					中国産	18c末~18c	透割(5リ透割)	
20		1	襷足	蓋					中国産	18c末~18c	透割(5リ透割)	
21	1	襷足	蓋					中国産	清代			
22	12.41	瓦輪	底	口径部	10.5	2.4		4.4	内面に透割文、外面に花糸文を施す。	中国産	16c末~16c中葉	ゾケ。
23	1.31	黄褐色土層	底	底径				3.1	外面に透割文に黄褐色。見込糸に花文を施す。	中国産	16c後半~16c中葉	
24	1.41	赤	底	底径				3.1	見込糸化。	中国産	清代	
25	1.41	特種	底	底径	6.1	3.3	3.51		胎地の花の部分を手締で施す。黄褐色の上絵付けの色 は不明。	清代?	古伊万里をまねたものか?	



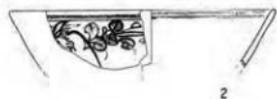
第40图 染付① (I地区)



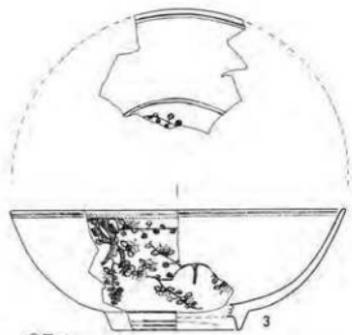
第41图 染付② (1地区)



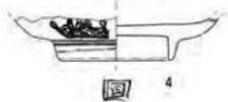
1



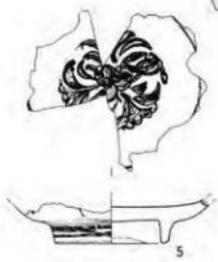
2



3



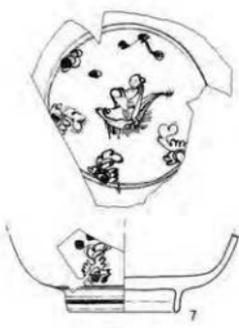
4



5



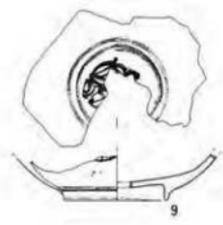
6



7



8



9



10



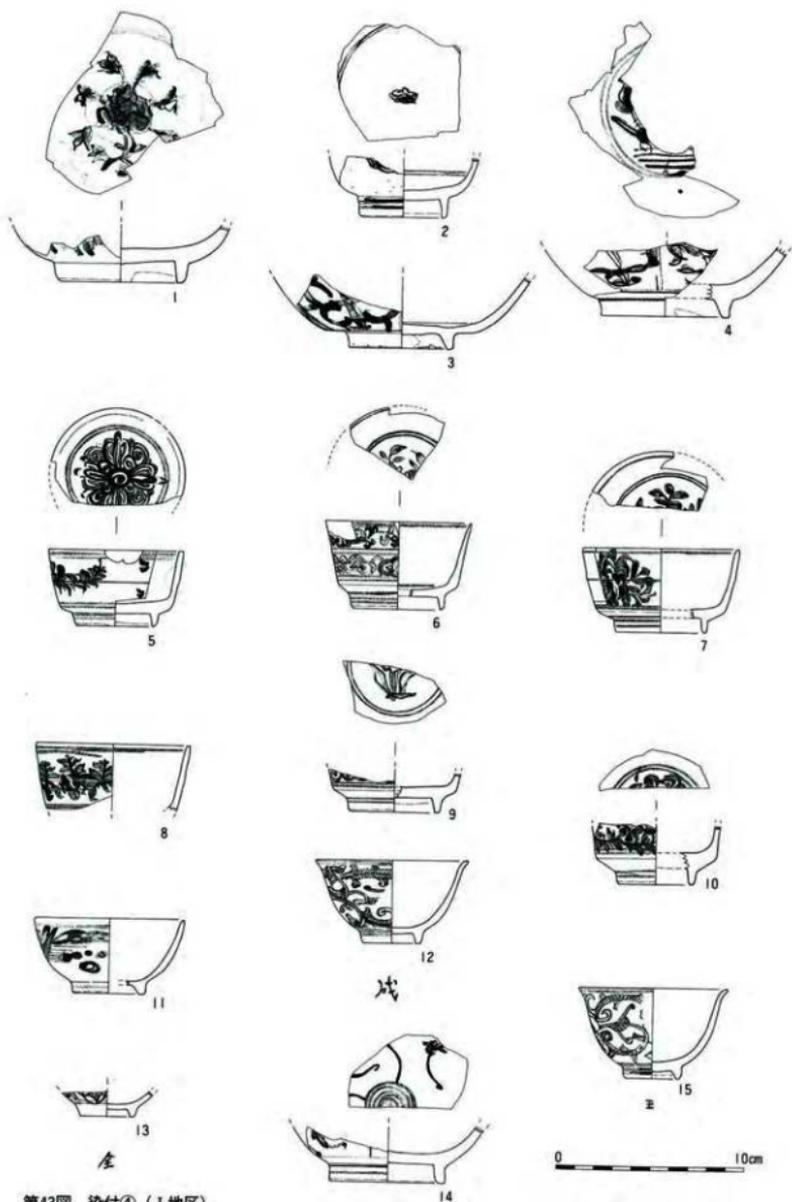
11



12



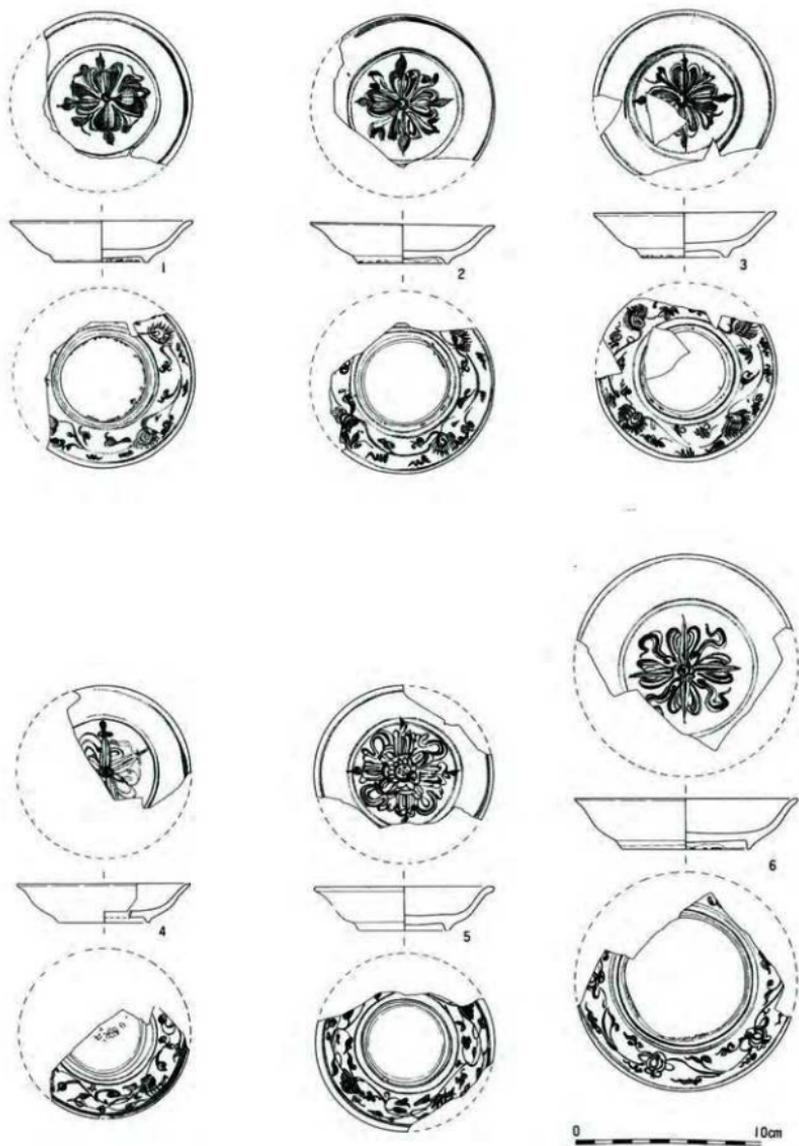
第42图 染付③ (I地区)



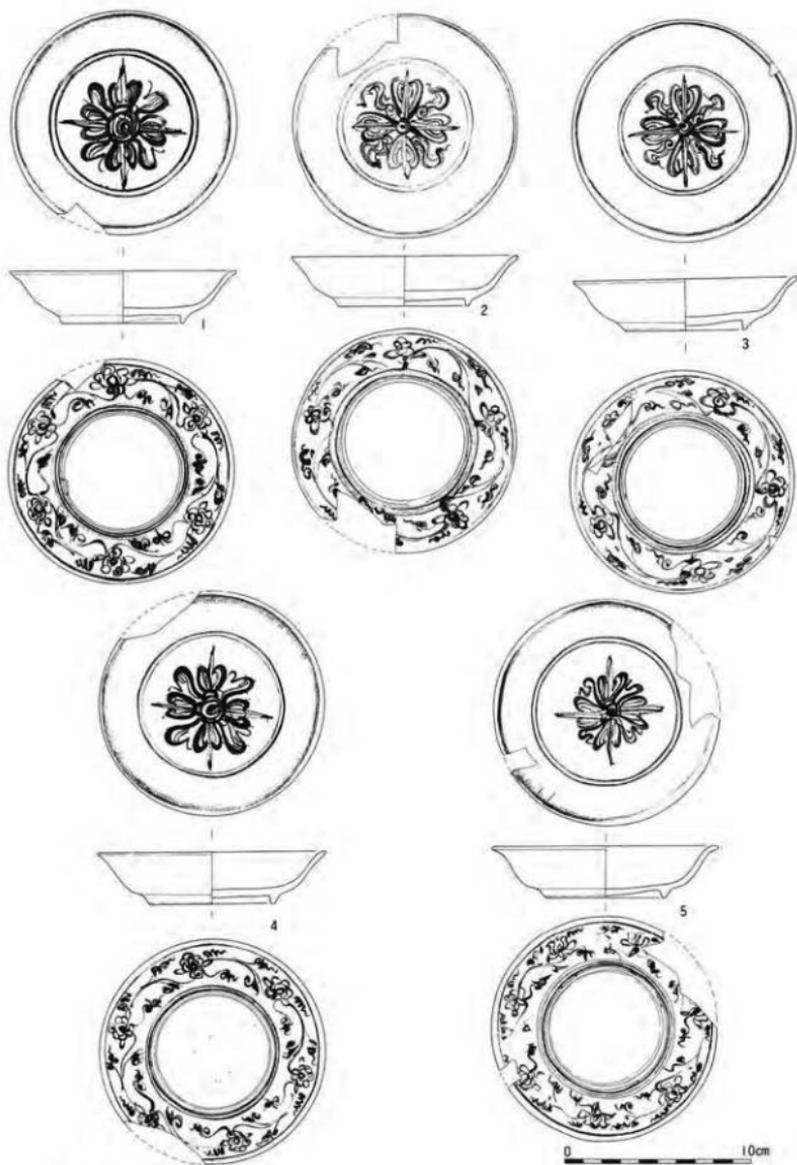
第43图 染付④(1地区)



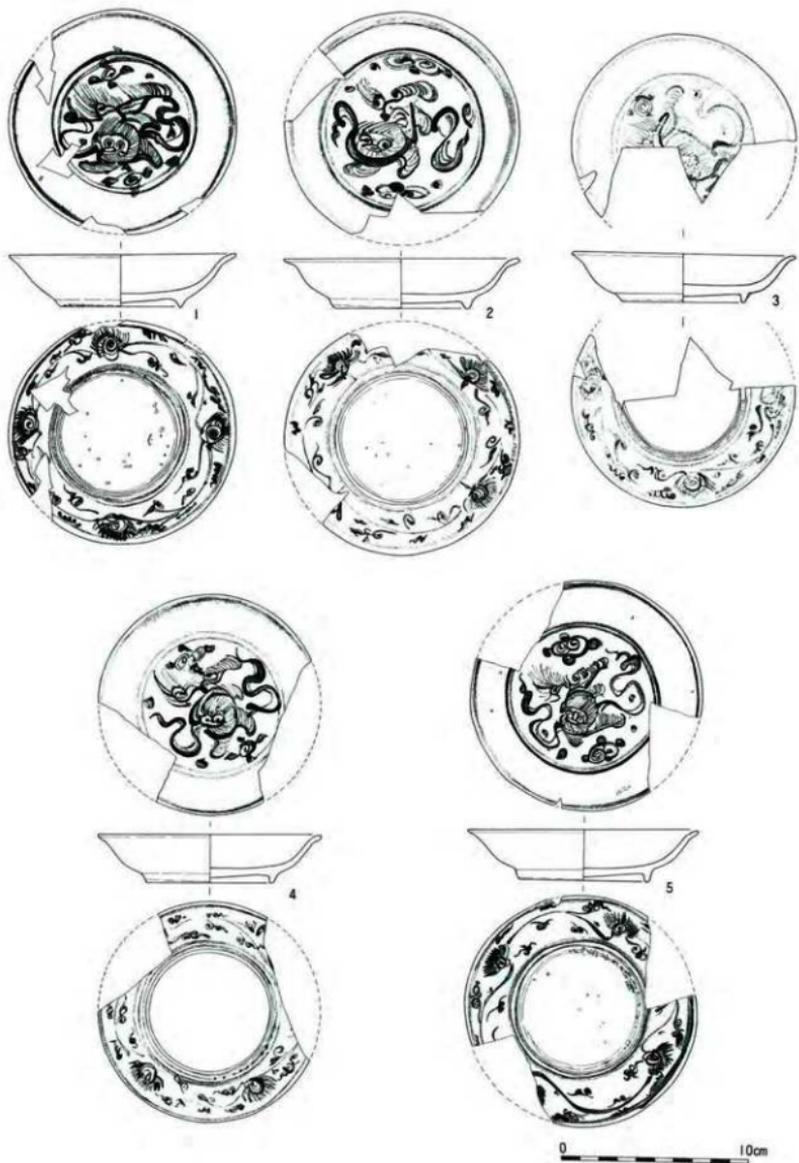
第44图 染付⑤ (I地区)



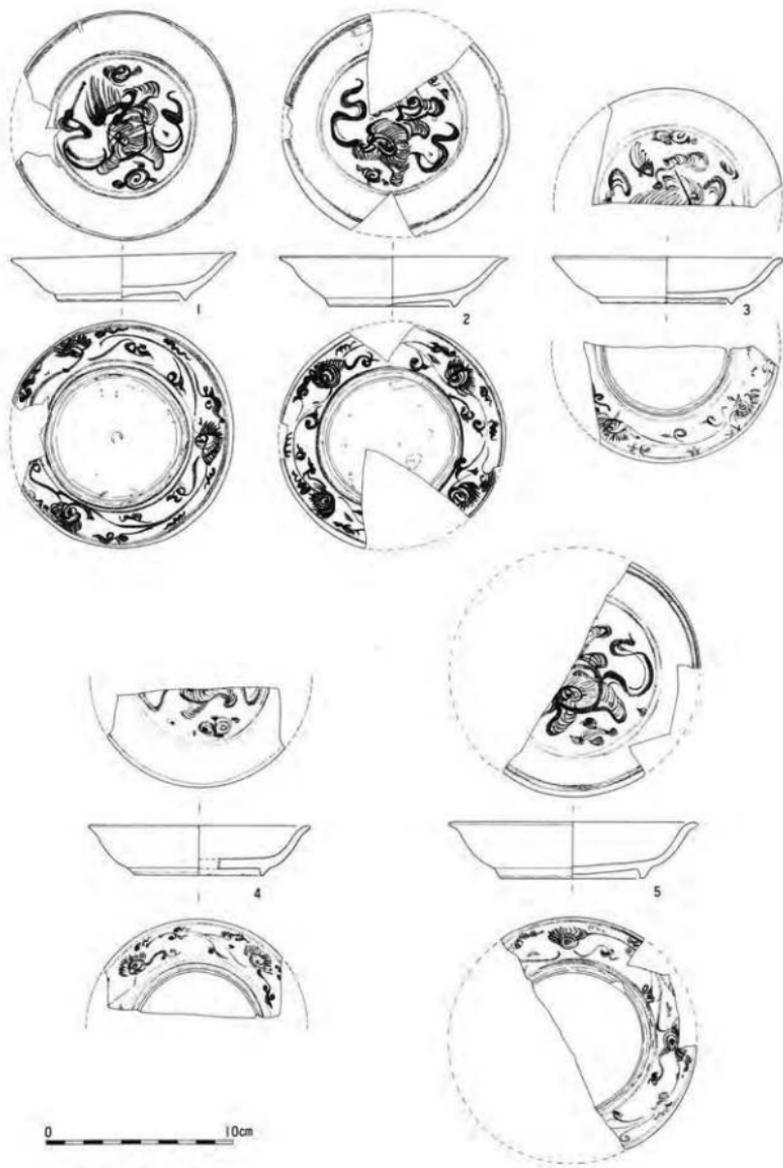
第45图 染付⑥ (I地区)



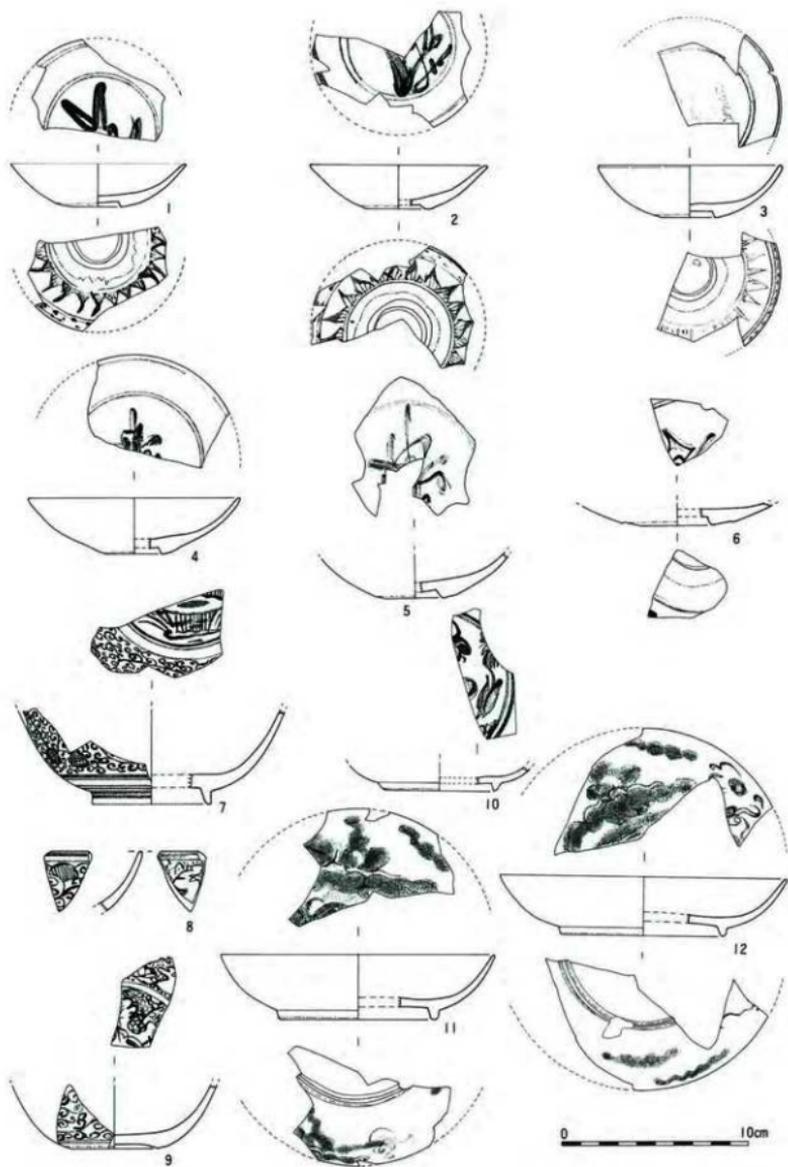
第46图 染付⑦(1地区)



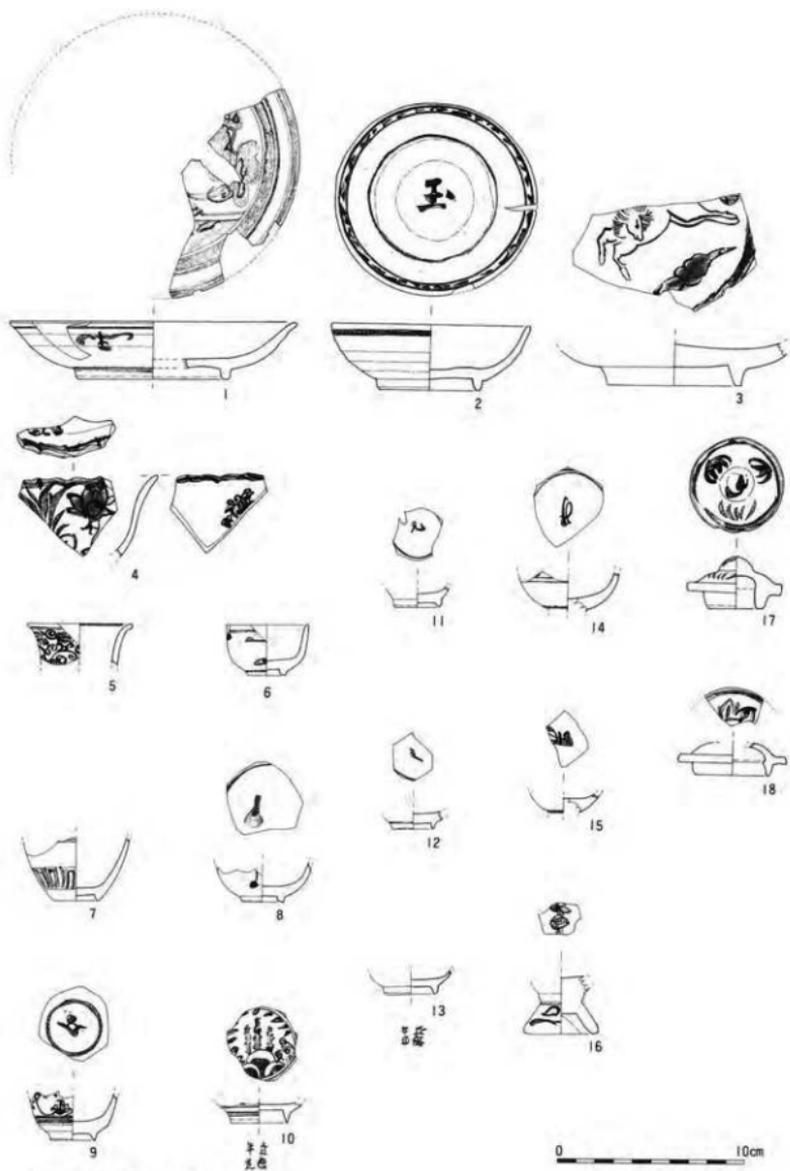
第47图 染付⑧ (1地区)



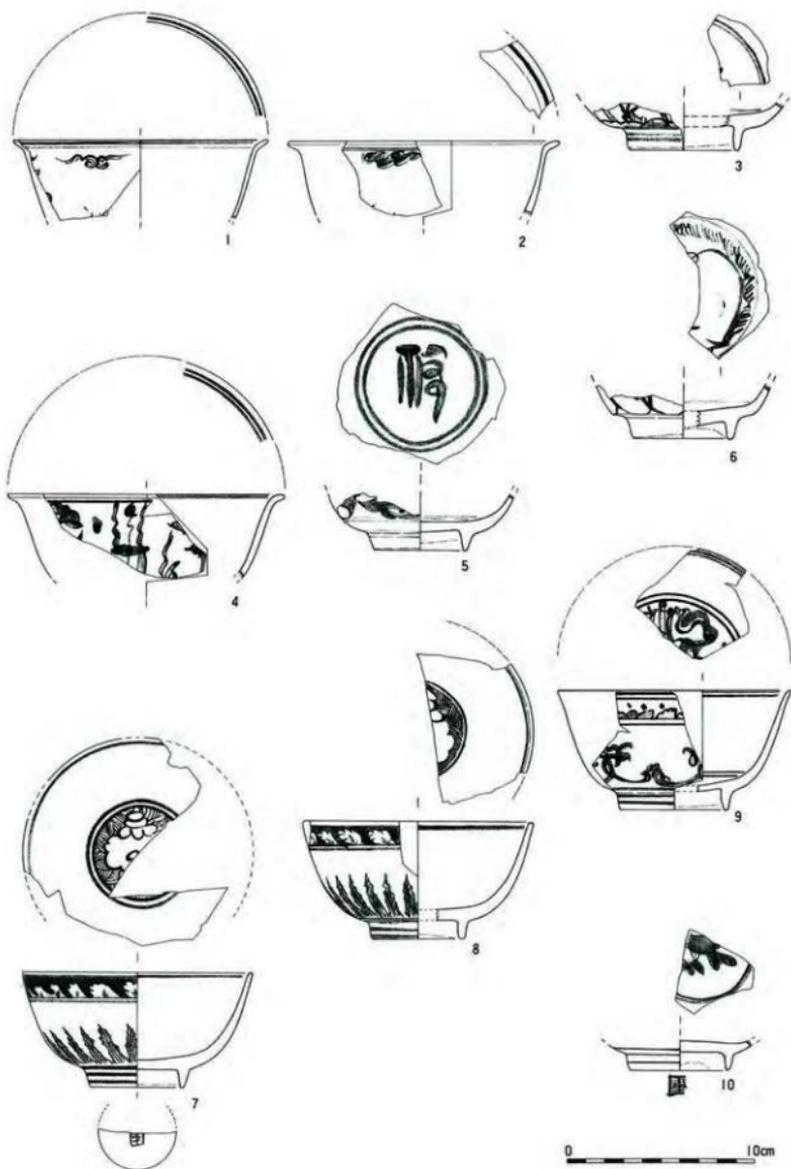
第48图 染付⑨ (I地区)



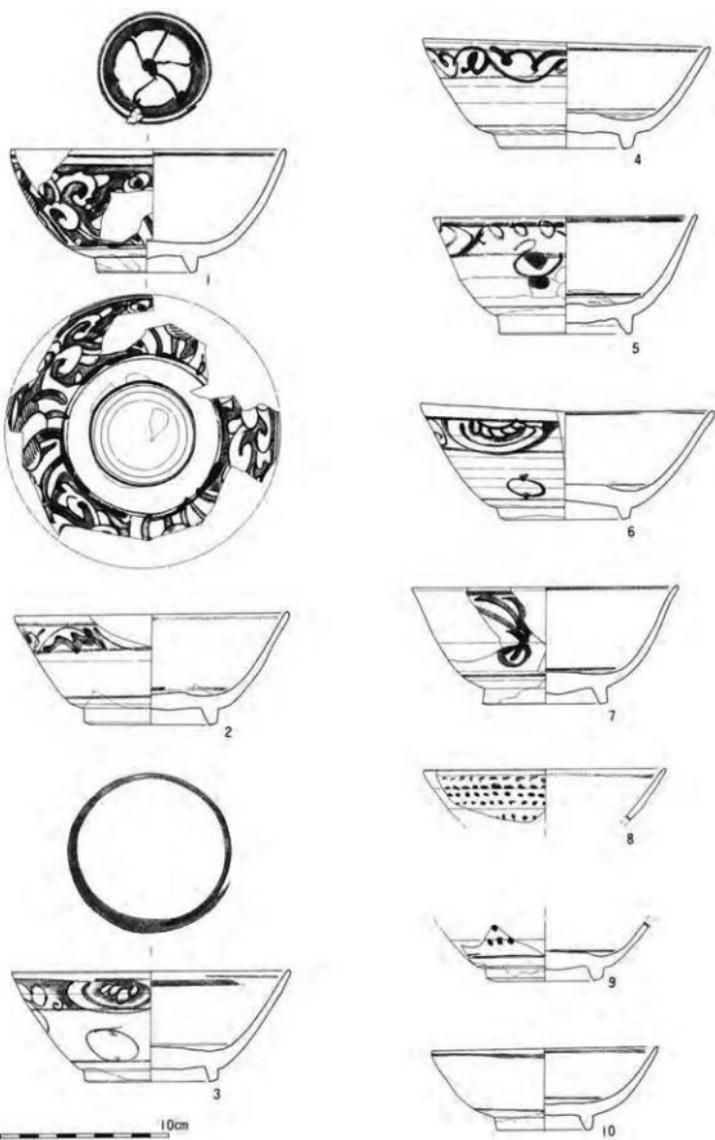
第49图 染付⑩ (I地区)



第50图 染付①(1地区)



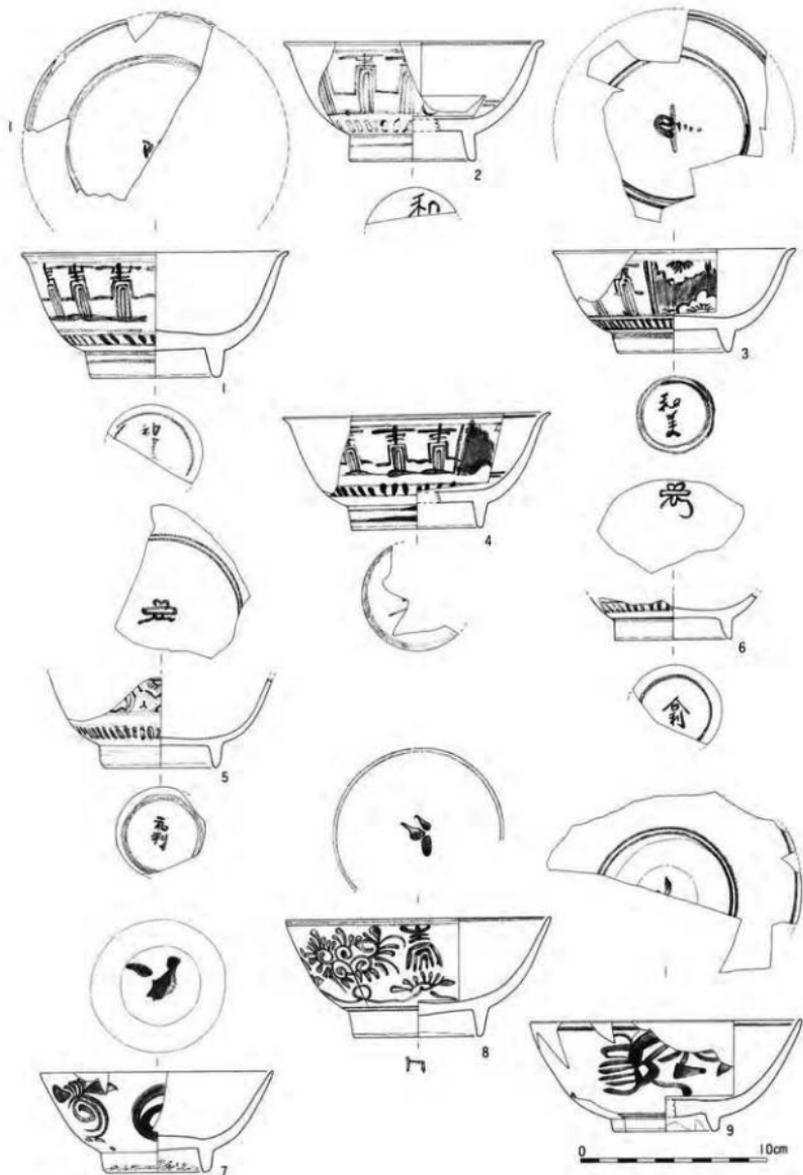
第51图 染付②(II地区)



第52图 染付⑬ (II地区)



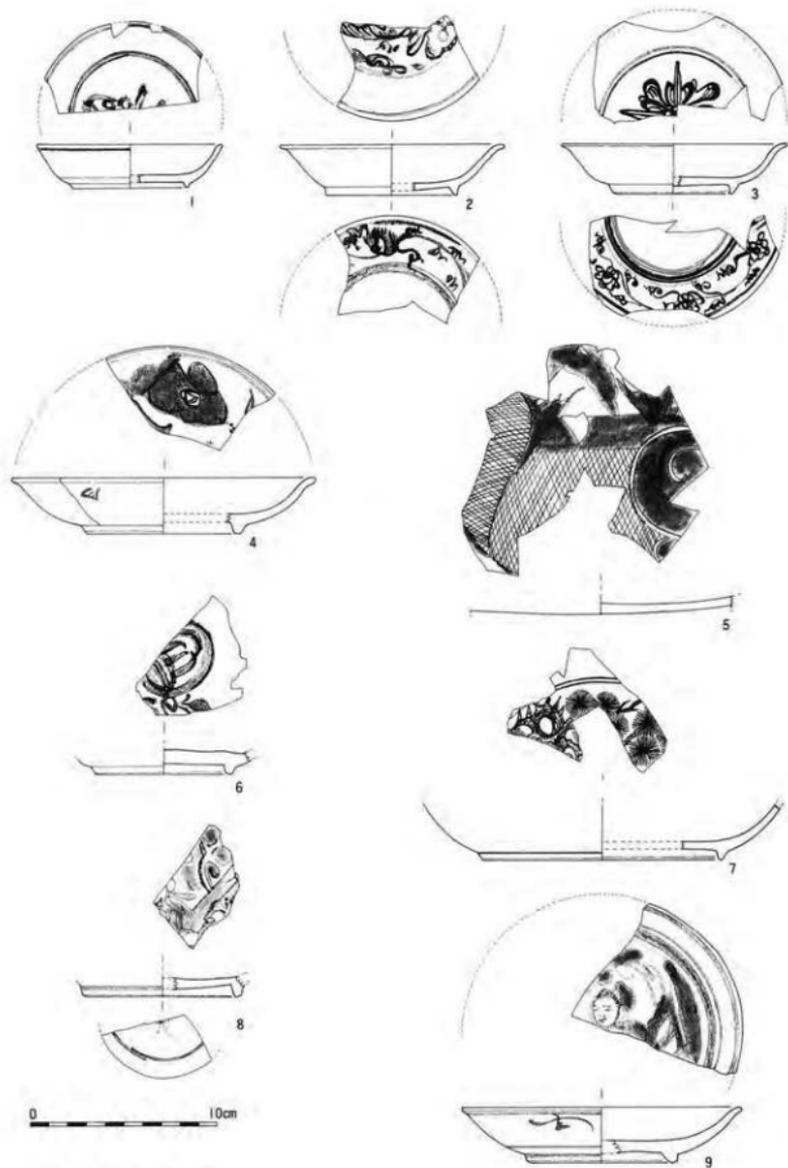
第53图 染付④(II地区)



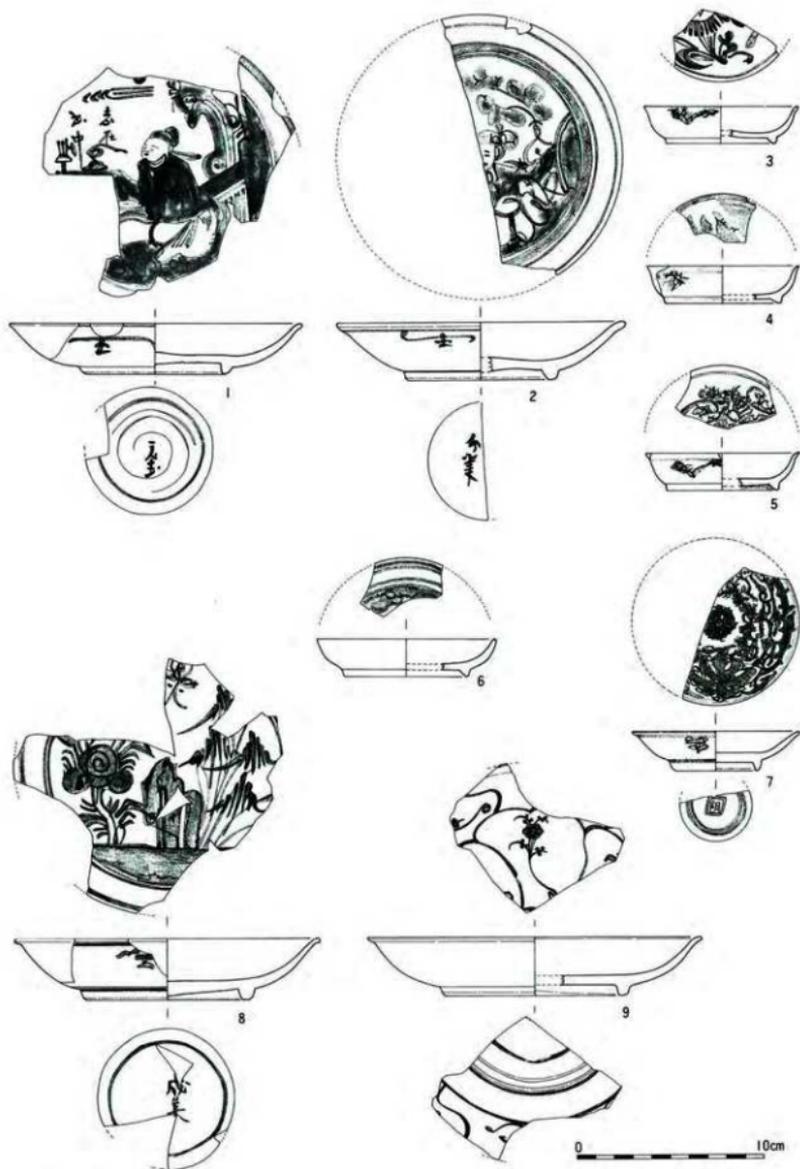
第54图 染付⑨ (II地区)



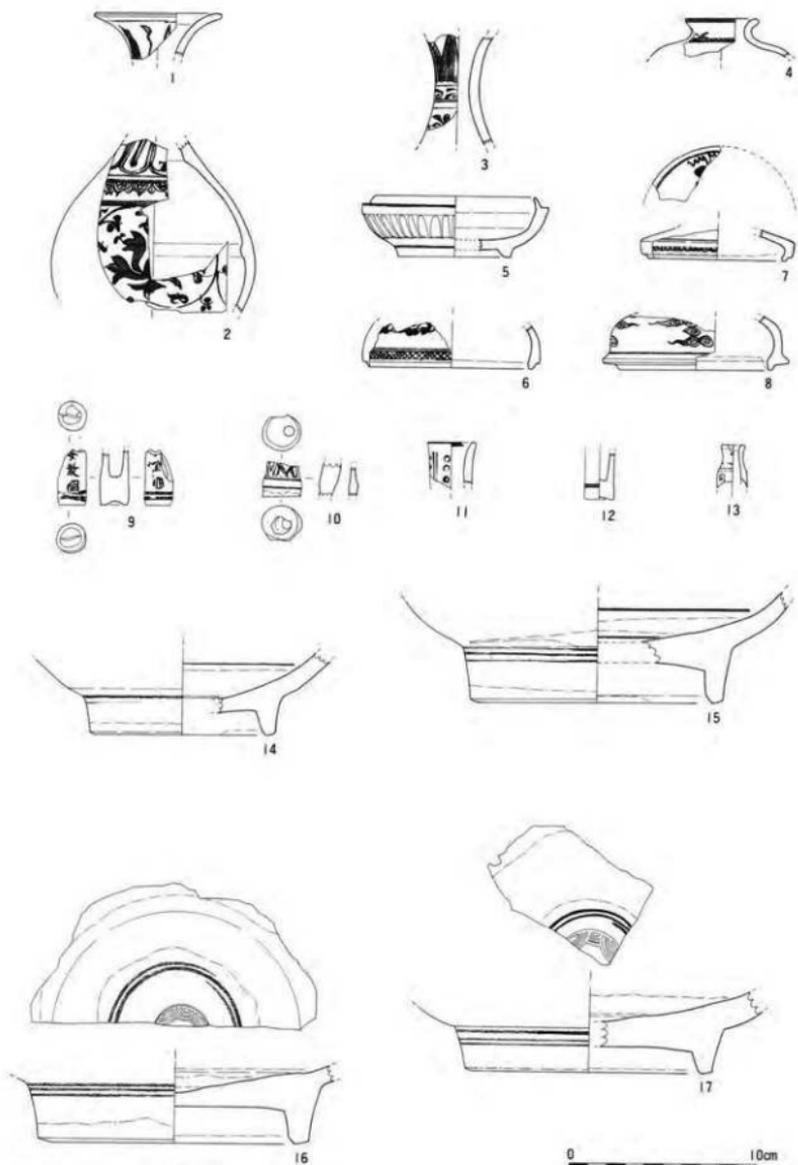
第55图 染付⑩(II地区)



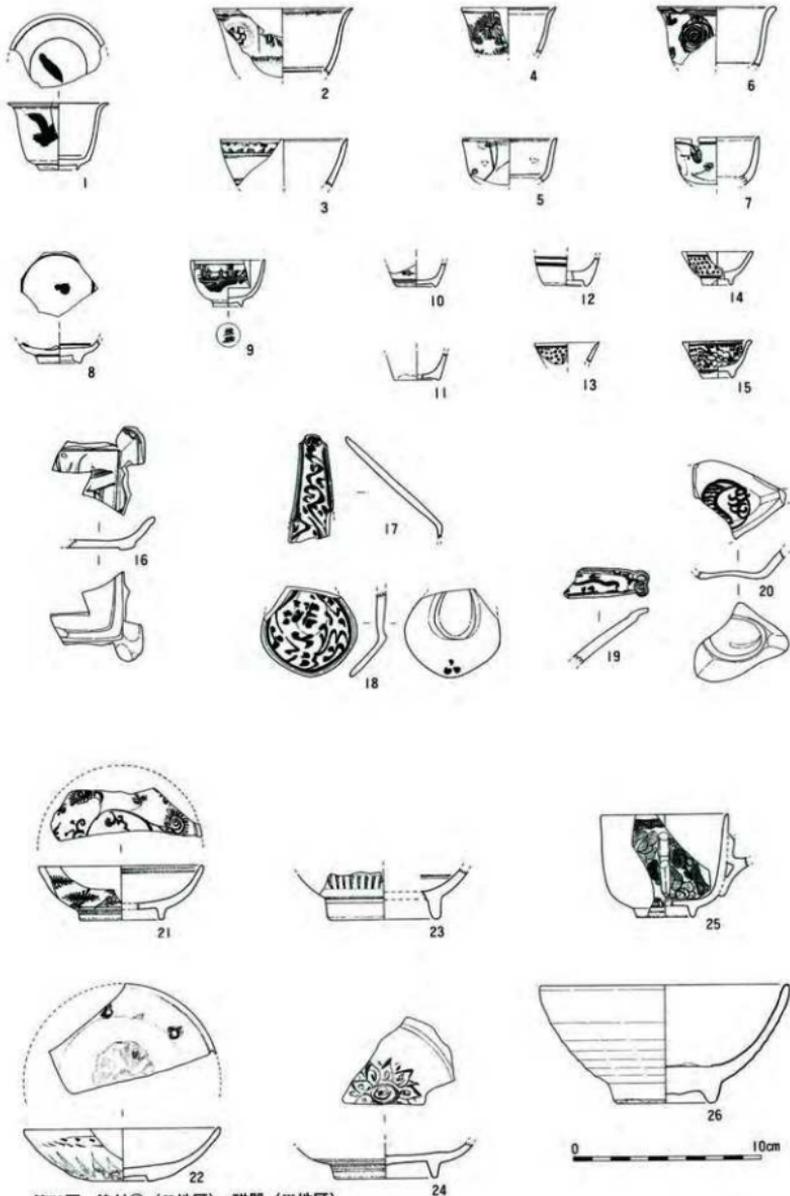
第56图 染付碗(II地区)



第57图 染付⑧(II地区)



第58图 染付钵(II地区)



第59图 染付碗(II地区)·磁器(III地区)

## 第4節 褐釉陶器

ここで取り上げた褐釉陶器は15～17世紀以降に位置付けられる外国産の資料で、判明した器種は壺・鉢・急須の3器種であった。壺の口縁状態は豊富で出土量は比較的少ないことから、胴部・底部との接合作業によって、全形が窺える資料が確認されると考えられたが、壺・鉢1点のみに限られた。

第60図1は口縁形態が直口状を呈するものである。推算口径は7.8cmで、口唇を平坦に成形する。素地は淡橙色の細粒子、釉色は黒褐色。口唇部の釉は大雑把に掻き取っている。

第61図1は推算口径10.6cmを測り、口縁の肥厚は三角形状となる。口唇部は内側に緩やかに傾き、蓋を受けるためと考えられる出っ張りが付いている。素地は淡橙色で外面の釉は剥落し、内面に灰白色の釉を若干残すのみとなっている。

第61図2は推算口径11.4cmを測る資料で頸部を持つ資料である。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸みを帯びる。肩部に横位の耳を貼り付ける。焼き縮めの状態は悪く表面はあばた状となる。素地は暗褐色。

第62図1は口縁の肥厚部の形状が「L」字状を呈し、ほぼ完形に近い資料である。口径は16cm、器高は24.8cm。素地は淡橙色、釉色は黒褐色、外面に耳を伴わない。

第60図3は肥厚部の形状を「L」字状に成形した後、さらに下側に折り曲げて仕上げている。口唇部は平坦で、丁寧に釉を掻き取っている。釉色は灰白色に近く、所々淡緑褐色の釉だれを残す。

第60図2は肥厚部が概ね三角形状を呈し、推算口径が13cmを測る。釉色は黒褐色で、器外面部の稜線は顕著である。

第60図4は推算口径17.2cmで、口縁部からのラインは頸下部で折れて、肩部へ移行する。口唇部は平坦で幅広となる。釉色は茶褐色。

第60図5は口縁部が玉縁状をなし、ほぼ垂直気味の頸部から折れて、肩部へ緩やかに移行。頸部に沈線の圓線を数条めぐらせる。さらにその上から横位の耳を貼り付けている。釉色は淡黒褐色で、頸部中途より下側にのみ施釉する。素地は淡橙色。

第62図4は器高が約17.8cmの鉢である。器壁は全体的に薄く、口唇部は「T」字状を呈する。灰白色の釉が器外面に施釉され、その上から鉄絵の草文が描かれている。胴下部には波状の突帯を貼り付ける。素地は淡橙色。

第62図3は注口が付いた急須である。口径推算は7cmを測る。器外面の肩部には菊花様の印花文を有する。素地は淡青灰色、釉色は黒褐色を呈する。諸特徴から外国産のものとする。

## 第5節 特殊陶器

外国産と思われる特殊陶器類をここでは取りあげた。全て壺形で、文様構成から下記の3点を典型的な例として略述する。

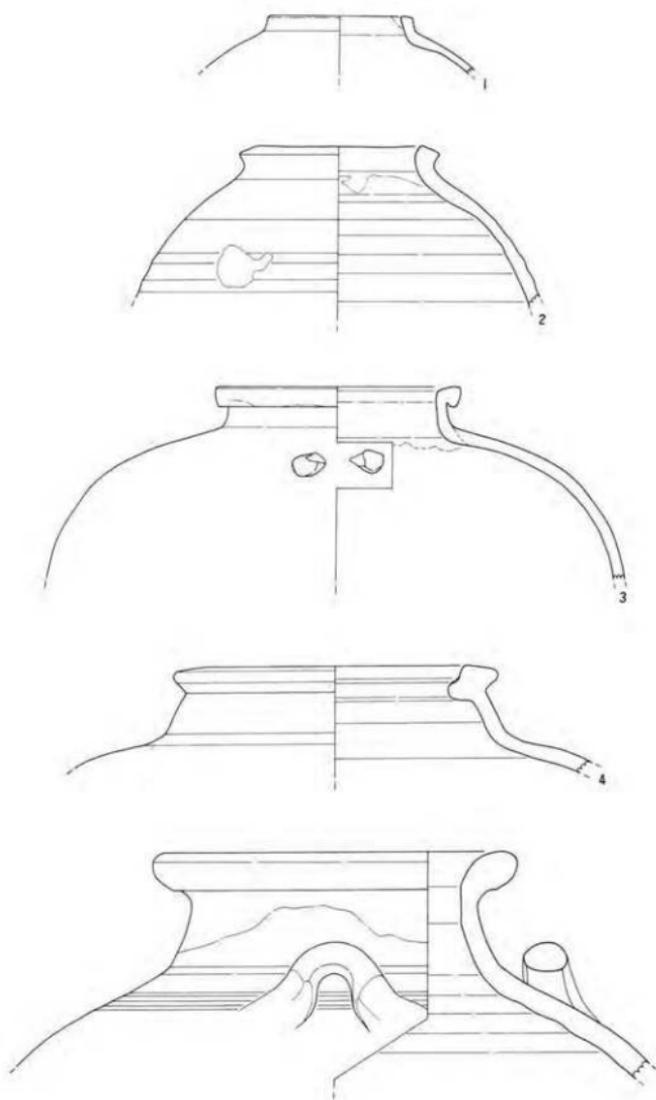
第61図3は器内外面に文様を有する施釉陶器である。素地は灰白色、釉色は淡緑褐色を呈する。器外面には線状陽刻の叩き目を肩部上部より下方に密に施す。器内面にはその際に用いられたと考えられる同心円状のあて具痕が観察される。器内外面とも肩部上部から口縁部にかけては無文となっている。

第61図4は器外面の肩部より下方に同心円状の文様を有する無釉陶器壺である。器内面へのあて具痕は確認できない。口縁部は逆「L」字状で、頸部はほぼ直立する。素地は淡橙色、器外面は赤褐色を呈する。

第61図5はゴ盤目状の叩き目を有する資料である。口縁部は器内面に向かって僅かに「フ」の字状に突き出して整形されている。素地は褐色で白い鉱物が多量に含まれている。

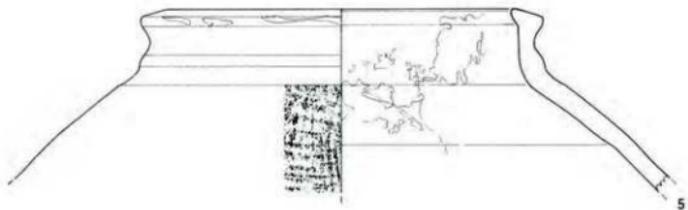
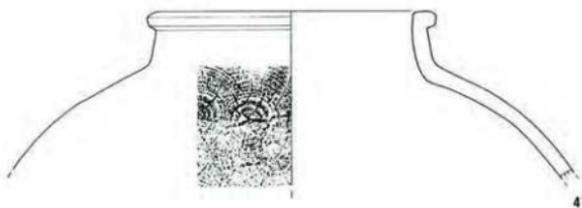
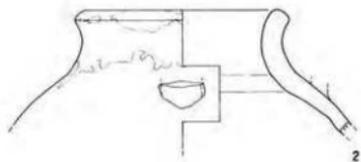
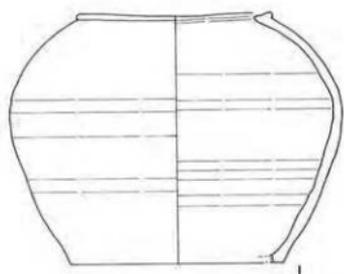
## 第6節 瑠璃釉

いずれも小破片で、器形は瓶・小碗・小杯である。ここでは図上復元が可能な小碗1点について記す。第62図2は推算口径9.4cmを測り、素地は白色、微粒子である。釉は外底面を含む全面に施し、外面が濃青色、内面は淡青白色を呈する。疊付の形状が逆三角形状で外底面中央部が雷鉢状にへこんでいることから、型押しによる成形と考えられる。



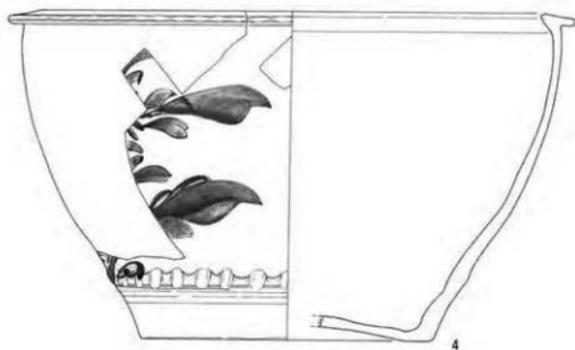
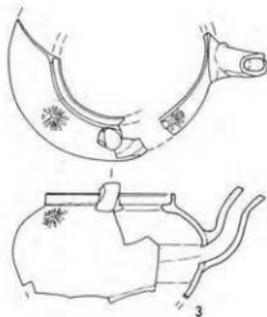
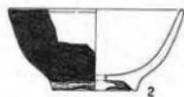
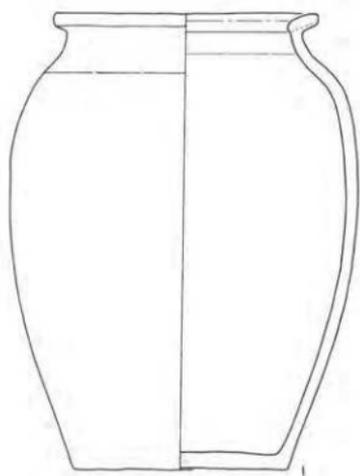
0 10cm

第60圖 褐釉陶器



0 10cm

第61图 褐釉陶器と特殊陶器



第62図 褐釉陶器・瑠璃釉

## 第7節 タイ産陶器

タイ・サワンカローク窯系の鉄絵陶器の袋物と小壺が出土した。大きめの資料を取り上げた。時期的には15・16世紀に位置づけられる。

第63図1～4は蓋か身か判然としない資料である。素地は灰白色の粗粒子で、細かい黒色鉱物を含む。外面に黒色の釉で文様を描いた後に透明釉を施す。図上復元による推算口径は、同図2が8.9cm、同図3が7.5cm、同図6が8.9cmを測った。

第63図5は身の部分の底部資料で、文様は判然としないが草花文かと思われる。

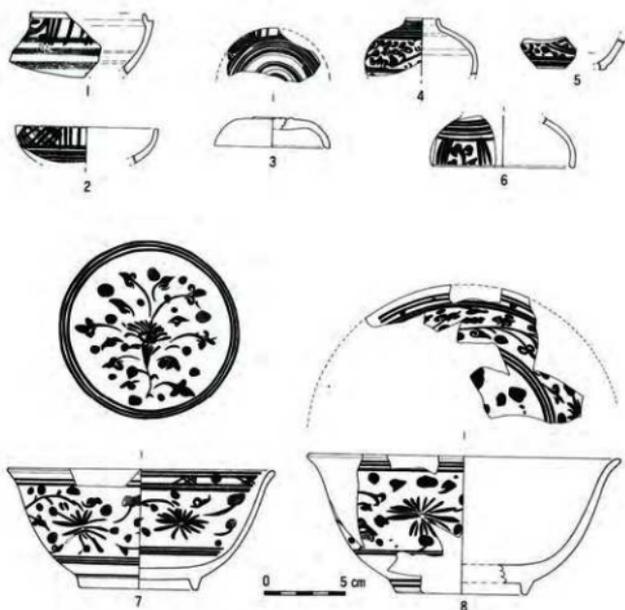
第63図6は小壺の口縁部資料と考えられる。外面には数条の圏線と草花文を描く。

## 第8節 ベトナム産色絵

色絵は小破片が多く、ここでは2点について略述する。

第63図7は口径推算16.2cmを測る碗である。ベトナム産赤絵とされるものである。色彩は赤と緑の2色を基調としており、器内外面に圏線に囲まれた草花文が描かれる。

第63図8は口径推算が19.0cmを測る。その他の特徴は図1と同じである。



第63図 タイ産陶器・ベトナム産色絵

## 第9節 本土産陶磁器

第64図～第68図に主要なものを示した。本報告では図上復元が可能な遺物を紹介することとし、明治期以降の遺物は今回の報告では割愛する。遺物については大橋康二氏の御教示を得た。

本遺跡出土の本土産陶磁器は、I地区及びII地区より出土しており、III地区での出土はみられない。産地は、肥前産および肥前系（薩摩系の可能性もあるものも含む）によって占められる。製品の大部分は染付であり、青磁・白磁及び陶器は染付の出土量に比して稀少である。年代は16世紀代から19世紀後半代まで各時期の製品が出土しているが、特に17世紀後半～19世紀後半の製品の出土が目立つ。

各遺物の詳細な年代・特徴・産地等については第4表を参照されたい。以下年代順に各区の概要を述べる。

### 16世紀代

I地区では、この時期の製品は肥前産陶器である（第68図7・10～12・15・18）。器種は碗形と皿形があるが、主体は皿形である。碗形・皿形はともに高台部無軸で装飾技法は鉄絵装飾で植物文を描いたり、口鏤を施すものがある。

II地区においても、I地区と同様に肥前産陶器が出土しているが、大型の皿形が1点（第68図19）出土しているのみである。この時期の製品はI地区での出土が顕著である。

### 17世紀後半代

この時期の製品としては碗形では見込み荒磯文碗がI・II地区で出土している（第64図1・2、第66図1～3）。皿形ではII地区で染付芙蓉手皿（第66図12・13）が出土している。色調が灰色がかった粗放な作りで、嬉野町吉田山の製品（註1）とみられる。この種の染付芙蓉手皿は東南アジアへ輸出されたことが知られており、インドネシアのバサリカン遺跡で出土（註2）している。この時期に属する陶器には肥前産の京焼風陶器の出土がみられる（第68図17）。同製品は色調が卵黄色を呈し、高台内無軸で、高台内に「木下弥」とみられる印銘を押し、見込みに呉須絵で山水文を描く。この時期以降、I地区での出土は散発的となり、II地区での出土が目立つ。

### 18世紀代

この時期の製品は、コンニャク印判を施した製品がI・II地区で出土している（第64図5、第65図7・9）。また見込み蛇の目軸刺ぎを施した碗形・皿形の出土もみられる（第64図6・7・11・第68図3～5・7）。特に、白磁の碗形・皿形の中には蛇の目軸刺ぎ後泥状の砂を塗った製品が見られる（第68図6・8）。陶器では青緑軸陶器の碗形・皿形がみられる（第68図13・14）。また、蓋物・蕎麦猪口など碗・皿形以外の器種がこの時期にはみられる（第64図13、第66図5～8）。

### 19世紀～19世紀後半代

この時期の製品はほとんどが碗・皿形である。特にII地区での出土が目立つ。まず碗形では、広車型（第65図10）、端反り型（第65図12・13、第66図17）の他、小型の碗形（第66図1～4）がある。皿形は、見込みに山水図を描くものが多く出土している（第67図1～3・6・7・9・12）。この時期の製品の産地は、肥前産のものは少なく、肥前系のものが大半を占めており、大橋氏の御教示によれば薩摩産の可能性があるという。

### 小 結

まず、I地区では16世紀代の肥前産陶器がまとまって出土しているほかは、極めて散発的な出土状況を示している。一方、II地区においては17世紀後半～19世紀後半の製品が各時期を通じて出土している。17世紀後半代においては、荒磯文碗・染付芙蓉手皿等東南アジア向けの製品が出土していることが目をひく。18世紀代においては、主要器種である碗・皿形の他に蓋物・蕎麦猪口等の他の器種の出土がみら

れる。19世紀～19世紀後半代においては再び碗・皿形が主体となる。特にこの時期の製品は、他の時期と比べて出土量が多く、産地もこれまでの肥前産から肥前系(薩摩産の可能性を含む)へと産地に変化がみられる。

### 註

註1. 「嬉野町吉田2号竈跡」『肥前地区古窯調査報告書 第6集』佐賀県立九州陶磁文化館 1989年

2. 「海を渡った肥前のやきもの」展 佐賀県立九州陶磁文化館 1990年

### 参考文献

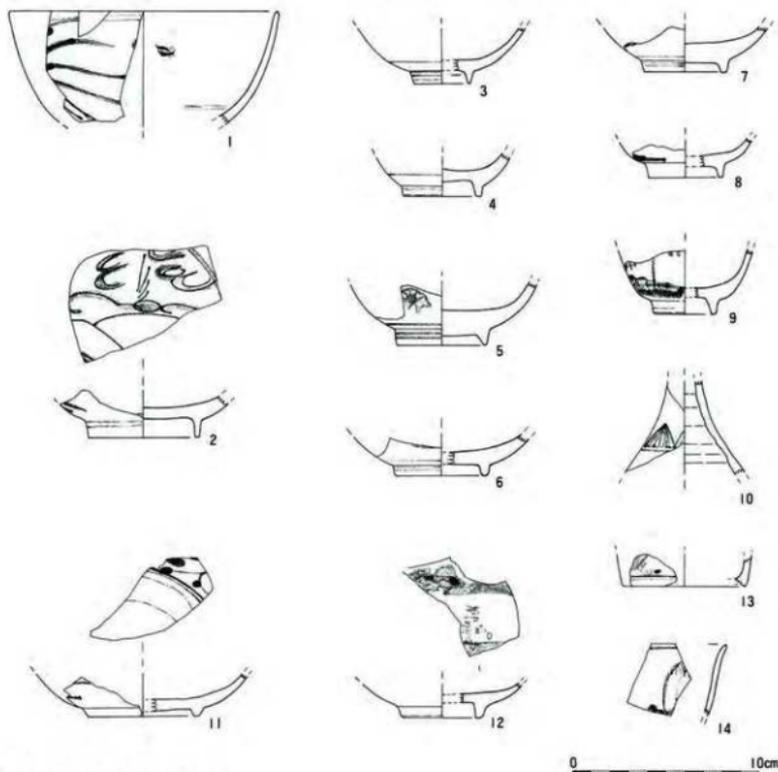
(1) 「海を渡った肥前のやきもの」展 佐賀県立九州陶磁文化館 1990年

(2) 「国内出土の肥前陶磁」 佐賀県立九州陶磁文化館 1984年

(3) 大橋康二 「肥前陶磁」 ニューサイエンス社 1989年

(4) 大橋康二 「肥前磁器碗の形態の変遷」 乙益重隆先生古稀記念論文集

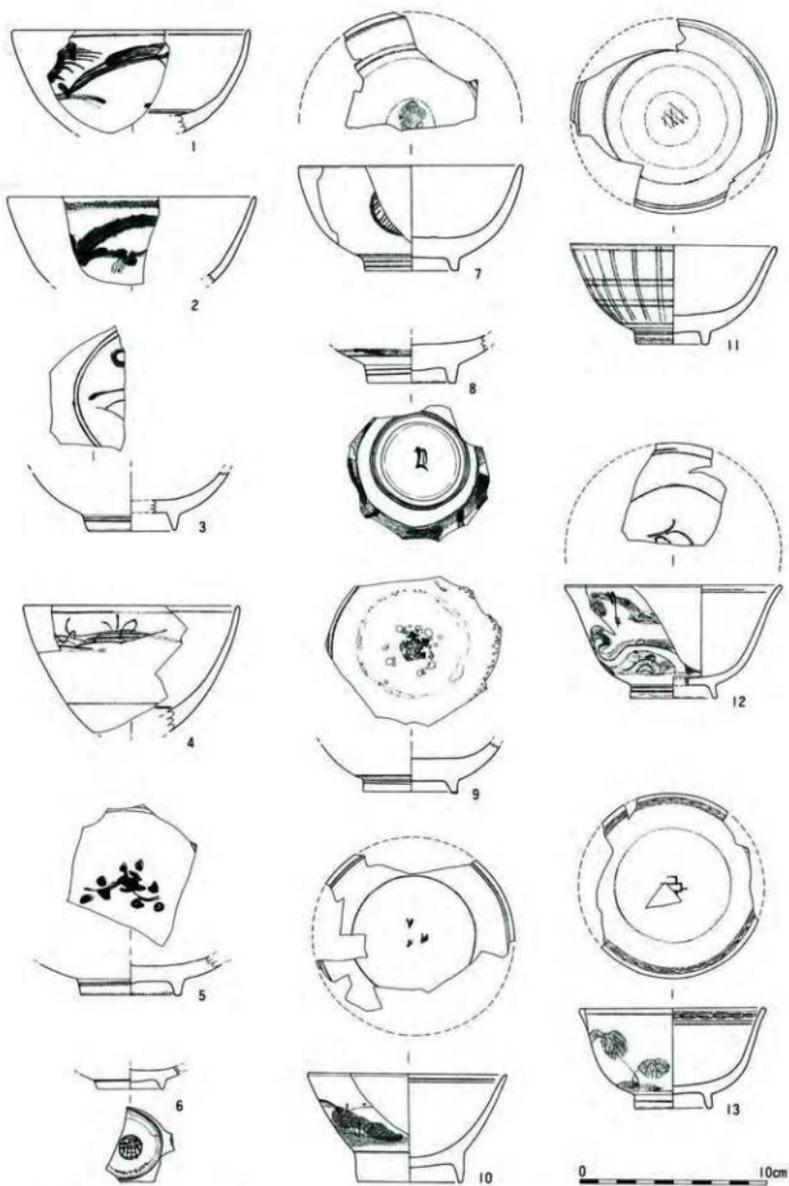
『九州上代文化論集』 乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会 1990年



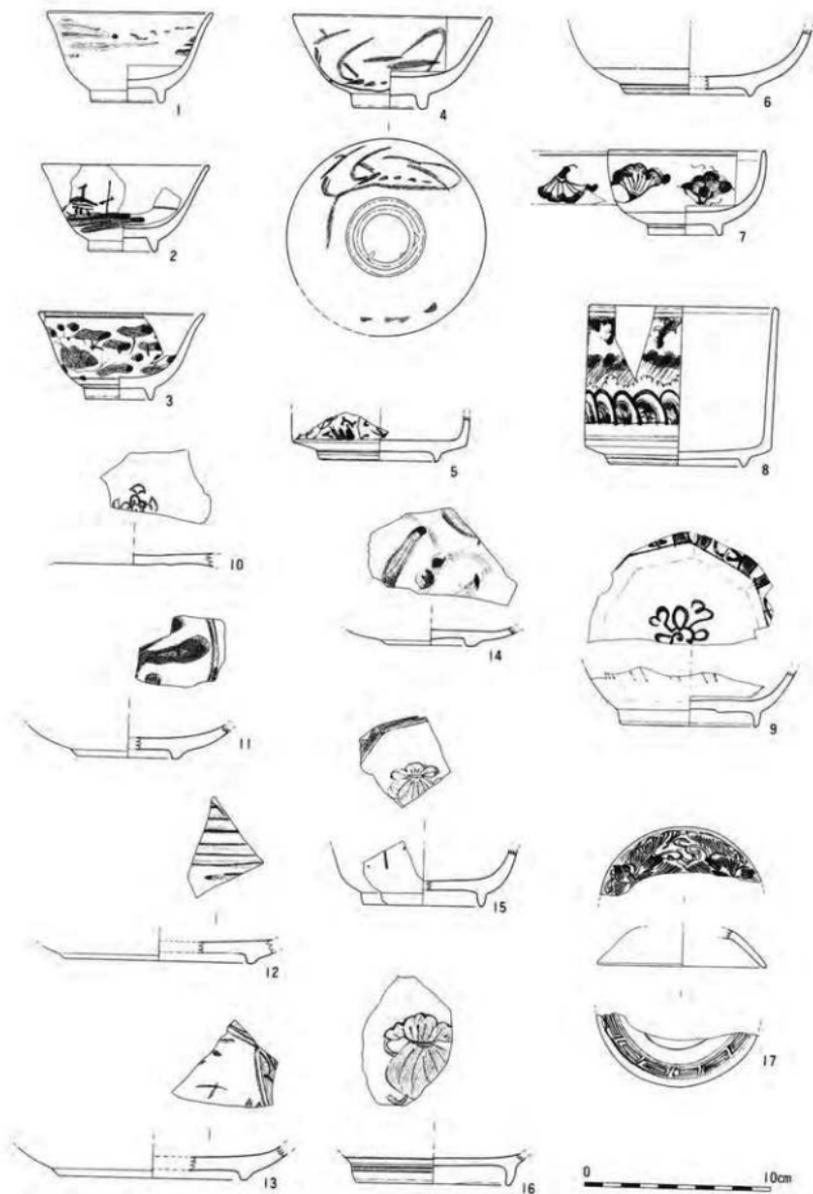
第64図 本土産陶磁器 (I地区)

第4表 本土陶器観察一覧

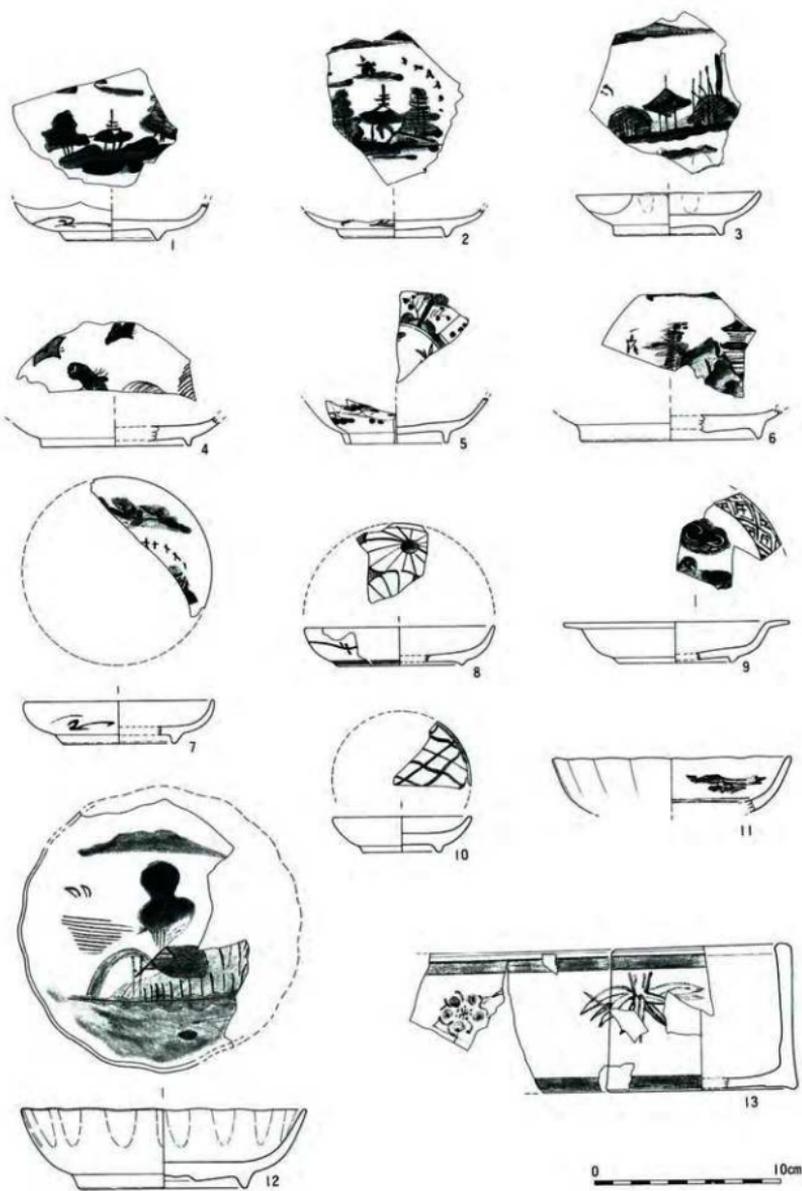
器名	器種	年代	出所	形状	口径	高さ	底径	特徴	備考
第6001 PL 73	1	1-44	第1層	甕	口径部	14.1		見出しが変換文。	
	2	1-44	1層	甕	底部			見出し変換文。	文獻(1)
	3	1-44	1層	炊煮器(1字土器上)	甕	底部		3.内縁部下平に1線。高台外面に2線の溝。高台内に1線の溝。	文獻(1)
	4	1-44	第1層	甕	底部			4.1.内縁部下平に3線。溝が外面に2線の溝。裏付けに砂打痕。	
	5	1-44	第1層	甕	底部			4.2.内縁部下平に1線。	
	6	1-44	第1層	甕	底部			4.3.内縁部下平に1線。	
	7	1-44	第1層	甕	底部			4.4.見出しの目録制。高台砂打痕。	
	8	1-44	第1層	甕	底部			4.4.見出しの目録制。	
	9	1-44	第1層	甕	底部			4.4.見出しの目録制。	
	10	1-44	第1層	甕	底部			4.4.見出しの目録制。	
	11	1-44	第1層	甕	底部			4.4.見出しの目録制。	
	12	1-44	第1層	甕	底部			4.4.見出しの目録制。	
	13	1-44	第1層	甕	底部			4.4.見出しの目録制。	
	14	1-44	第1層	甕	底部			4.4.見出しの目録制。	
第6002 PL 74	1	5-41	甕	口径部	12.9			甕	文獻(1)
	2	5-41	2層	甕	口径部	13.8		甕	文獻(1)
	3	5-41	甕	底部				甕	文獻(1)
	4	5-41	甕	口径部	11.7			甕	文獻(1)
	5	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	6	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	7	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	8	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	9	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	10	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	11	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	12	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	13	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
	14	5-41	甕	底部				3.4.見出しの目録内に内文。裏付けに砂打痕。	
第6003 PL 75	1	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	2	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	3	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	4	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	5	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	6	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	7	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	8	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	9	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	10	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	11	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	12	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	13	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	14	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
第6004 PL 76	1	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	2	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	3	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	4	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	5	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	6	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	7	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	8	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	9	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	10	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	11	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	12	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	13	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	14	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
第6005 PL 77	1	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	2	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	3	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	4	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	5	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	6	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	7	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	8	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	9	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	10	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	11	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	12	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	13	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)
	14	10-18	甕	口径部	10.8	1.1		甕	文獻(1)



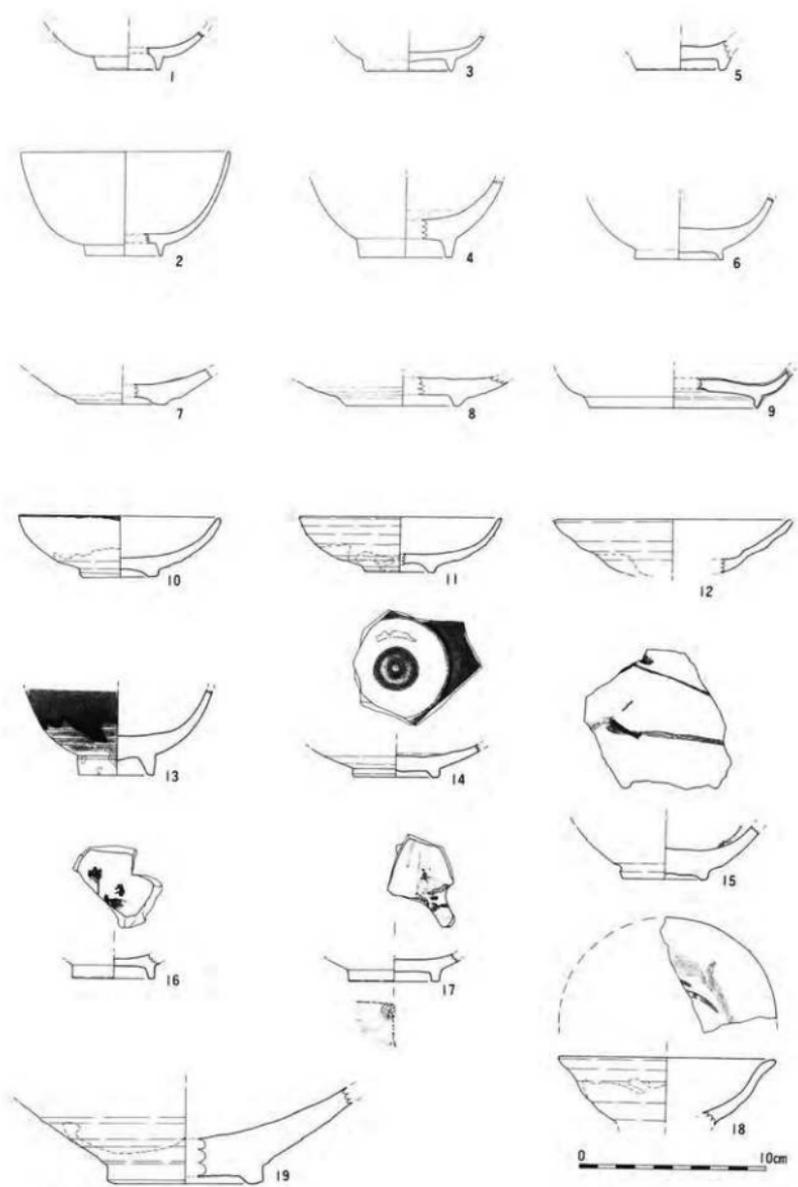
第65图 本土産陶磁器 (II地区)



第66图 本土産陶磁器 (II地区)



第67图 本土産陶磁器 (II地区)



第68图 本土産陶磁器 (I・II地区)

## 第10節 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器として取り扱ったものは、器の表面に釉を掛けた一群であり、いわゆる「上焼」（註1）と称されるものを中心とするものである。

本遺跡から出土した沖縄産施釉陶器の器種は、碗（小碗も含む）・皿・香炉・火取り（火舎）・酒器（カラカラ）・急須・壺（油壺・瓶子・対瓶・花瓶）・灯明具（灯明皿・燭台）・火炉・鉢などが確認されていて、出土した大部分は小振りのものが多くを占めている。その他に本項では、沖縄産施釉陶器の発生段階で若干の影響を与えたとみられる中国産白磁と青磁を参考資料として図化した（第69図1・4）。

釉の種類として確認されたものについては、灰釉・透明釉・鉄釉・鉛釉・緑釉・黒釉・瑠璃釉が存在する。その他に素地に白色や茶色の化粧土を塗付するものがあり、白色のものはいわゆる白化粧を施すものであり、その場合は一般的に透明釉が掛けられている。茶色の化粧土を施す際は、釉掛けを行わないようである。釉の種類と関係する資料として、赤絵・三彩・染付（呉須）を施した碗・瓶子などが出土している。

施釉の方法として上記の釉の単軸掛け以外にそれぞれ異なる釉を掛け分けて施すものが、碗・皿などに認められる。単軸掛けの場合は、「フィガキー」（註2）と称される手法を用いているものが多い。

文様の種類としては、線彫り（釘彫り）・片切り彫り・印などの施文具で器面に草花文・格子文・花文などを描くものと鉄釉・呉須・緑釉を筆（指など）で描く絵付けや釉の流し掛けなどで花文などを表現するものがある。これも文様表現の一種として扱った。他に陰刻された文様に白色土を埋め込む白土象嵌（三島手）の資料も得られている。

以下、各器種について、器形や釉の種類などで分類し、必要に応じて細分類を行った。主な特徴を掲げて分類概念や分類基準とし、個々の特徴については観察表（第5表）に示示することにした。

### 1. 碗

器形や施釉などから I～VII類に分類できた。

#### I類（灰釉無文碗）

直口口縁の碗で高台脇から口縁にかけて、外側に開きながらストレートに移行する器形である。高台が高い無文碗である。いわゆる灰釉碗である。施釉の手法は「フィガキー」である。（第69図2・3）

#### II類（灰釉有文碗）

外反口縁の碗で高台脇から外側に幾分丸味を持たせる器形である。見込みを浅く窪ませるのも特徴のひとつである。外面に鉄釉で草花文を描く。（同図5）

#### III類

外反口縁の碗であるが、外反の度合いに強弱があった為、釉掛けや釉の掛け分けなどでa～cの3種類に分けられる。その特徴を略記する。

a種…外面鉄釉、内面灰釉。見込みに丸文と圏線を鉄釉や白釉で圏線を描く。（同図6・8）

b種…両面鉄釉、フィガキーで施釉。見込みに鉄釉で丸文を描く。（同図7）

c種…外面鉄釉、内面透明釉（下地に白化粧土）。（同図9）

#### IV類

口縁の外反の度合いは微弱となり、直口する碗も含まれている。釉色の違い（掛け分け）や施釉の範囲にも変化が見られたので、a～cの三種類に細分した。これらに共通する点は両面に総軸した後に内底面や塗付の釉を除去することである。

a種…外面淡青色、内面透明釉（白化粧）。外底面に透明釉を施す緑釉の碗。（第70図1）

b種…両面透明釉（白化粧）。外底面に透明釉を施す。有文と無文があり、有文の場合は線彫りや丸彫り

で丸文に三葉・花文などを組み合わせる。中には文様に具須を施す「釘彫染付」も含まれている。(同図7～11・第71図4)

c種…両面鉄軸。外底面も鉄軸を施している。(第70図3)

#### V類

外反する碗で他と共通するが、白化粧との施し方などに違いが見られたので、a・bの二種類に分けた。これも両面に総軸後に内底面や畳付の軸を除去する点で共通する。

a種…外面透明軸(白化粧)、内面透明軸。(第70図4)

b種…外面透明軸、内面透明軸(白化粧)。このタイプには有文と無文があり、有文の場合は線彫りで草花文を描いた後に文様へ具須を施す。(同図5・6)

#### VI類

このタイプは、口縁造りから外反口縁・内彎口縁の二種類に分けられるが、口縁の造りが微妙な違いである為、軸色や施軸などの方法でa・bの二種類に分けた。

a種…両面透明軸(白化粧)、外底面透明軸を基本とするが口縁や文様帯にアクセントをつける為に三彩や鉄軸を施すものがある。これは全て有文の外反碗で、文様構成等に類似点が認められる。文様は刻文・点刻文や圈線で構成されている。(第71図1～3)

b種…両面に灰白色の軸を施す。内面への軸の掻き取りはない。文様は線彫りで刻文と圈線を描いた後に白土で象嵌する内彎碗。(同図4)

#### VII類

外反口縁と内彎口縁の二種類が含まれているが、両面及び外底まで白化粧を施した後に具須を主体に胎軸・緑軸などで草花文・花文などを描き透明軸を施す。この中には三彩碗や赤絵が含まれている。これらの類似点は両面に総軸した後内底面と畳付の軸を除去することである。(第71図6～10)

## 2. 小碗

茶碗としての利用が主体とみられたので、碗と区別した。小碗も器形や施軸などを基本にI類～V類に大別し、必要に応じて細分した。

#### I類

外反と内彎の小碗がある。前者をa種、後者をb種と二種類に分けた。

a種…両面透明軸(白化粧)のものと外面透明、内面透明軸(白化粧)を施すものを主体とするが、器にアクセントをつける為に胎軸と緑軸を施したものがある。軸の掻き取りは総軸後に見込みと畳付を除去するものと畳付のみ除去するものも含まれている。この手は口縁が外反するものである。(第73図1・2、同図9)

b種…両面透明軸(白化粧)を施すものと外面に鉄軸・透明軸、内面が透明軸(白化粧)を施すものがある。有文と無文の両者があり、有文の場合は具須や白軸で花文・渦巻文などを描く。この種は内彎する小碗である。(同図3・4・7・10・11)

#### II類

I類a種と同様に外反する小碗である。外反の度合いに強弱の変化が認められる。施軸の手法などから2種類の変化が認められた。これは外面鉄軸、内面透明軸(白化粧)のタイプと外面鉄軸、内面透明軸のみを軸掛けするものがある。いわば異色の軸を掛け分けているものである。(同図5・6)

#### III類

内彎気味の有文の小碗である。文様の構成や器形などから三鳥手の範疇にはいるものとみられる。文様は圈線・菊花文・縦沈線を描いた後に鉄軸?もしくは茶色の化粧土で象嵌を施す。(同図8)

#### IV類

腰部を篋で面取りした小碗で、口縁が外反する。有文と無文があり、後者のものが多い。釉掛けは両面に透明釉（白化粧）を施すものを基本とするが、透明釉（白化粧）以外に黄緑色や淡緑色の胎釉でアクセントをつけるものがある。異色の釉で器に加飾するものも文様的一种として把握し、このグループに含めた。（同図12～15）

#### V類

V類は肩部が「く」の字状に折れ、口縁で外反する。文様は線彫りによる圏線と刻文を描いた後に白土で象嵌を施す。（第74図2）

### 3. 小皿

銘々皿の可能性もあったので大皿（盛り付け）と区別し、小皿と分類したものである。小皿は器形や施釉手法などからI類～V類までに大別し、状況に応じて細分した。

#### I類

I類には内彎するものと外反もしくは直口するものに分けられ、内彎する小皿は有文である。外反もしくは直口するタイプの小皿は無文であった。これらの特徴以外に施釉手法などからa～cの3種類に分けた。

a種…両面に緑灰色の透明釉を施す。いわゆる灰釉皿と称されるものに含まれるものでフィガキー手法で施釉。内彎する小皿で外面に白釉で花文を描く。（第73図1）

b種…外面無釉、内面透明釉（白化粧）を施す。口縁が外反するものと直口のものがある。

直口のものが高台から外側に大きく開き、若干丸みを持ちながら口縁に移行する。一見、蓋を想像させる。この種は無文である。（同図2・11）

c種…両面に透明釉（白化粧）を施す。釉は外底面まで総釉した後に見込みと畳付の釉を除去する。口縁で僅かに外反する無文の小皿である。（同図3）

#### II類

口縁造りが口縁端部に指圧を加え稜花状に仕上げる小皿で、口唇に篋を加え面を取るものもある。釉掛けの状況などからa・bの2種類に分けた。

a種…両面に透明釉（白化粧）を施す。外底面にも施釉。内面は呉須を施す際は雲文・花文などを描く。線彫りの場合は草文・圏線を描いた後に呉須で文様を沿って筆書きを行っている。（同図4・7・8）

b種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。無文と有文があり、有文の場合は線彫りによる圏線を描く。（同図5・6）

#### III類

口縁の外反が微弱な小皿である。施釉や釉色などの組み合わせの違いでa・bの二種類に分けられる。

a種…外面鉄釉、内面透明釉（白化粧）。無文の小皿である。中には口縁端に三角形の突起を貼り付けた灯火皿と判断できるものが含まれているが釉色や煤などが無い為、灯火以下に使用されたものと理解されたので本種に含めてある。（同図9・12）

b種…a種と同様に鉄釉・透明釉（白化粧）を施すが、内面に緑釉を筆書きで花文状に施す三彩小皿である。（同図10）

#### IV類

内彎の小皿で、両面に鉄釉をフィガキーの手法で施している。（同図13）

#### V類

赤絵小皿で、両面に透明釉（白化粧）を施した後に赤茶色や明緑色の釉で草花文を描いている。（第74図1）

#### 4. 小杯

一例のみ確認されている。両面に濃緑色の釉を疊付を除いて総軸する。外面に白釉で「区」の一字を施していることが確認できる。(第74図1)

#### 5. 大皿

盛り付け用の皿とみられるものを大皿と仮に分類した。口縁形態や釉色も変化に富んでいる為、I類～IV類までの4種類に大別し、必要に応じ細分した。

##### I類

内彎する大振りの皿で、施釉などの状況からa～cの三種類に細分した。

a種…両面に透明釉(白化粧)を施す。白化粧を施した後に鉄釉で圏線・斜沈線を筆書きする。大振りの内彎皿である。(第74図4) b種…外面透明釉、内面透明釉(白化粧)を施すものと両面に透明釉(白化粧)を施すものが含まれている。内面に線彫りの丸文に縦沈線文・波文などを施したものとや文様に淡緑色・淡茶色の釉を施すものがある。外反のきつものものとゆるく微弱なものがある。(同図5・6)

C種…両面に透明釉(白化粧)をフィガキー手法で施す。大振りの内彎皿である。(同図8)

##### II類

口縁端部に指圧を加えて稜花状に仕上げる。両面に透明釉をフィガキーの手法で施す。内面には鉄釉で圏線を二本描いた後に圏線の間白色の釉を施している。また、見込みには鉄釉で丸文を描く。(同図7)

##### III類

口縁が肥厚する大皿で、疑似肥厚口縁タイプと肥厚口縁のタイプがある為、施釉・釉色などからa・bの二種類に分類した。

a種…外面透明釉、内面透明釉+白釉。内面は下地に透明釉を施した後白釉を掛けていて、圏線を下地の透明釉で表現する。口縁外端を三角状に成形する。見込みに明茶色の化粧土で手書きの丸文を描く。(同図9)

b種…両面に鉄釉を施す。口縁は玉縁状に肥厚する。(同図10)

##### IV類

この手の大皿は口縁を三角形に肥厚させて仕上げているもので、釉の掛け分けや釉色などからa～cの三種に細分した。

a種…外面鉄釉、内面透明釉。外面の釉は高台脇で止まり、内面が総軸後に蛇の目状の掻き取りを行っている。(同図11)

b種…両面に鉄釉や透明釉をフィガキー手法で釉掛けする。見込みに丸文や圏線を鉄釉・茶色の化粧土で描いている。(同図12・13)

c種…外面鉄釉、内面透明釉(白化粧)。外面は高台脇で釉が止まる。内面は総軸後に蛇の目状の掻き取り。内面及び内底面に青緑色の釉で花文を表現する。(第75図1)

#### 6. 大鉢

大振りの鉢を仮称して大鉢とした。他器種との特異な点として高台に3～7程度の孔を穿っていて、紐通しの小孔とみられる。口縁部の特徴を掲げると外反口縁、肥厚口縁、輪花口縁などが認められる。口縁形態や釉の状況などからI～IV類に大別される。

##### I類

口縁形態から口縁を外反させるもの、口縁を三角形状に肥厚させるもの、口縁を逆「L」字状に肥厚させる3つのタイプに細分できる。

a種…外面鉄釉、内面透明釉(白化粧)。口縁を外反させて口造りを行っている。(同図2)

b種…外面鉄軸、内面透明軸。口縁を三角形状に肥厚させる。(同図3)

c種…外面に鉄軸、内面が透明軸を施す点はb種と共通するが、口造りが口縁を逆「L」字状に肥厚させている。また、緑軸で花文を表現する点などで相違がみられる。(同図4)

## II類

この大鉢は口縁の内端部に指圧を加え輪花状に仕上げている。施軸や軸掛けなどからa・bの2種類に分けられる。

a種…外面鉄軸、内面透明軸。内面は口縁の袂れに沿って白色の軸掛けを行ない、さらに同種の軸で圏線を筆書きで描き、花文を表している。(同図5)

b種…外面は透明軸、内面に透明軸を施す以外に外底面にも透明軸を施している。内面は呉須で草花文を描いている。(同図6)

## III類

口縁の肥厚が大きくなり、大鉢I類c種より強調される。口縁は逆「L」字状に肥厚させるが、肥厚の突出が外側に摘み出される為、鐙状の口縁となる。施軸や軸色の違いなどからa・bの二種類に分けた。

a種…外面鉄軸、内面透明軸(白化粧)。内面に青緑色や鉄軸で花文を描く。外面に凸帯状の陽圏線を施す。(同図7)

b種…両面とも鉄軸をフィガキーの手法で施軸する。内面に茶褐色の化粧土で丸文と圏線を描いている。(同図8)

## IV類

高台から丸味を保持しながら胴上部まで立ち上がらせた後に口縁を内側にきつく内彎(内傾)させる大振りの鉢である。外面には鉄軸を施し、内面が透明軸(白化粧)を施しているものである。(第77図6～8)

## 7. 小鉢

本品は口縁形態や製作手法などでI類からIII類に分類し、必要に応じ細分類を実施した。

### I類

このタイプは口頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁が外側に開き傾いている。鐙付きの口折れ小鉢で、口縁内面は蓋を受けやすくする為に窪みをつける。高台脇からの立ち上がりの状態や施軸手法などからa～cまでの3種類に細分した。

a種…両面の黄緑色の軸を施す。外面に線彫りによる刻文・圏線・縦沈線(櫛描き)を施した後に白色釉(化粧土?)を文様に象嵌する「三島手」の手法である。(第71図1)

b種…両面は透明軸(白化粧)を総軸した後に置付を露胎させたり、内底軸を蛇ノ目状に掻き取っている。(第76図1)

c種…両面ともb種と同様に透明軸(白化粧)を施す。内面に線彫りの格子文と波濤文を描いた後に呉須や鉄軸(胎軸の可能性あり)を文様に施す。(同図2)

### II類

腰部が「く」の字状に折れる面取りの小鉢である。面取りは口縁から腰部まで面で面を削り取り、面数を八面に仕上げている。内面は面同志の折れの部分(面の角)に青緑色の軸を流し花卉を表現しているものである。(同図3)

### III類

この手は口縁が内側に強く内傾する内湾の小鉢である。施軸手法や器形の変化などからa～cの3種類に分類した。

- a種…両面に濃緑色の釉を施すもので、外面の釉は高台脇で止まる。内面は鉄釉。(同図4)
- b種…外面鉄釉、内面透明釉(白化粧)。器形や施釉の範囲はa種と類似する。(同図5)
- c種…両面に黄褐色の釉「フィガキ」に類似した手法で施す。器形はa・b種と若干異なり高台脇から内側に閉じ気味に丸味を持ちながら胴上部に移行する。(第77図1)

## 8. 香炉

香炉は足が三つ貼り付けられていて、三足香炉と称されるものである。底部は丸味のある平底や外底面に浅い枒りを入れ碁笥状に仕上げるものがあるが、全体的な形は底部から丸味を持たせながら立ち上がり、胴中央部で、外側にきつく突出させて丸味を強調させている。丸味は頸部下で消えている。口縁はきつく外反するものや「く」の字状に折れるものがある。釉色や他の釉との掛け分けなどに変化が見られ豊富である。(第77図2～5)

## 9. 火取

円筒状で高台を持つ器形のみである。外面に丸彫りによる圏線と緻密な縦沈線や波文を施すものと線彫りで圏線・縦沈線と型押し of 三華文を施すものの2種があり、前者をa種とし(同図6・7)、後者をb種とした(同図8)。b種は文様に白土で象嵌する三島手の手法のものである。

## 10. 酒器

いわゆるカラカラと俗称されるもので、その用途は酒入れである。器形や文様の有無でa・bの2種類に分けられる。a種は無文の酒器で、胴部に丸味を持たせ頸部で極端に細まっている。口縁が酒を入れやすいように口縁を外端に一端強く突出させた後に口縁端部を撮み上げている。(第78図1)。b種は有文の酒器である。胴部中央で算盤玉のように成形させる為、屈曲がきつくなっている。文様は丸彫りによる緻密な縦線と圏線を施す。(同図2)

## 11. 急須

確認された急須は全て三角形の突起を3個貼り付けて脚とするものであった。急須は文様の有無や釉色・複数の釉を釉掛けするなどを基本としてI類からIII類に大別した。

### I類

無文の急須で、底部に三角形の突起を三個貼り付けて脚とするものである。釉色や釉掛けの相違からa・bの2種類に分けた。

a種…両面に透明釉を施す。外面は口唇と底面を除き施釉し、内面は口縁のみ露胎する。(同図3)

b種…外面に黒釉を施し、釉は外面が口縁から胴下部まで施している。内面は頸部の釉垂れを除き露胎する。(同図4)

### II類

有文の急須で、異色の釉で文様などを表現するものや線彫りによる格子文・圏線・丸文などを描いた後に異色の釉を文様に掛けているものがある。このタイプは全て三彩急須として把握できるものであり、三彩急須の範疇に入るものとして考えられた。(第78図5～7)

### III類

三島手の急須である。外面や把手の部分に線彫りによる沈線・圏線などを描いた後に白土を文様に埋め込んでいる(象嵌技法)。(同図8)

## 12. 蓋(急須・壺・水滴・鍋)

急須の蓋が得られていて、いずれも被せ蓋であった。文様や釉色などから急須の分類と一致することが確認できた。蓋の分類は急須の身の分類に準じた。(第79図1～4)

壺の蓋も出土していて、蓋の形状(特に撮み)などからa～bの2種類に分けた。a種は高台状の撮みを造り、透明釉(白化粧)を施す。線彫りによる草花文を描いた後に具須を施すものである(同図5)。

b種は蓋甲頂上に紐状の把手を貼り付けている。鉄軸（白化粧）を施す無文の蓋である（同図6）。a・b種とも被せ蓋である。

水滴の落とし蓋とみられるものが1点のみ得られている。素地や釉色などから無文の三島手の青磁水滴の範疇にあることが予想された。（同図7）

鍋の蓋は高台状の撮をもつもので、線彫りや櫛描きで草文を描いている。（同図8）

### 13. 大型急須

大振りの急須で「アンピン」と称されるものである。軸は黒軸のみを用いている。（同図9・10）

### 14. 油壺

小振りの油壺とみられるものが出土している。口縁がきつく外反し、頸部で締まっている。黄緑色の軸を胴下部まで施している。（第80図1）

### 15. 瓶子

瓶子は器形や釉色などの変化が著しい為、a～c種の3種類に分けられた。a種は外面に透明軸（白化粧）＋緑軸＋胎軸を施した三彩の瓶子で、器形は長胴のナデ肩で、頸部から口縁方向に向かって細まってくる（同図2）。b種は外面に黒軸と透明軸を掛け分けて施している。頸部は細長く、胴部で丸味を帯びている（同図6）。c種は両面に明茶色の軸を施し、器形が円筒形となる瓶子である。口縁は逆「L」字状に屈曲し、一端をつまみ出して注ぎ口とする。（同図4）

### 16. 対瓶

対瓶は怒り肩のものが全てであった。特徴として脚状に底部を仕上げている、底部の成形などから高台状に内削りを入れて仕上げるものとベタ底状に仕上げたものがある。前者をa種（同図3）、後者はb種（同図4）の2種類に分けた。a種は三彩対瓶、b種は瑠璃軸瓶子である。

### 17. 花瓶

大型の花瓶の破片が1点得られている。底部資料であるが、底造りや文様などから花瓶として推定した。高台は「ハ」の字状に大きく成形する為、脚を思わせる。高台外底の内削りは深く、壺付も幅広くである。外面に透明軸（白化粧）を施し、線彫りの圏線と縦沈線を描き、蓮弁を表現する。（同図5）

### 18. 壺

器形や釉色などからⅠ～Ⅲ類の3種類に分類した。分類概念は以下に略記する。

Ⅰ類 外反する黒軸の壺である。全体的に円味を帯びている。内面に茶褐色の化粧土を塗付する。（同図7）

Ⅱ類 いわゆる嘉瓶と称されるもので、黒軸の軸を施す。胴中央で一端細まる。（同図8）

Ⅲ類 広口の壺で、食用油専用の四耳壺である。耳は穿孔され縦長に貼り付けられる。（同図9・10）

### 19. 油壺

この小壺は髹付け油用とみられるもので、すべて黒軸である。器形や底造りなどからa～cまでの3種類に分けた。a種は怒り肩気味の壺で、高台外面を削り出し、底造りを意識して強調するもの（第82図1）。b種はナデ肩気味の壺である。底造りはベタ底のまま終了しているもの（同図2）。c種は肩部が屈曲するが、全体的には円筒形状に近い壺である。底面ののみ削り出して、壺付を造っているものである。（同図3）

### 20. 灯明具（乗燭・燭台・灯明皿）

灯明具として乗燭・燭台・灯明皿の三種類があった。中でも灯明皿には蓋や皿からの転用品も含まれていた。乗燭・燭台・灯明皿の順に記述を行うが必要に応じて分類を試みた。

#### イ. 乗燭

「ウドンモー」と称されているもので、器内に灯心を支える切り込みのある円筒状の突起をもつもの

である。円筒状の突起は貼り付けである。脚付きの乗燗である為、脚と身の製作過程にも注目し、I a～I cの3タイプに分類した。

I a類：両面に灰緑色の釉を施す。口縁が直口し、脚上部から丸味を持っている。脚と身（器）は同一工程で製作され、脚から身までは一挙に造り上げている（同図4）。

I b類：両面に灰緑色の釉を施す点は、I a類と同じであるが、口縁を内側にきつく内傾させている。脚は中空である為、脚と身は別工程で製作し、最終的に身に脚を貼り付けて完成させている（同図5）。

I c類：両面に黒釉を施す。器形はI b類に類似するが脚が短く、身と脚は同一工程で一挙に造り上げている。（同図6）

#### ロ、燗台

燗台が1点のみ出土している。黒釉を外面の畳付を除き総釉する。脚は中空で脚から先細りする円筒状の筒まで中は空である。脚と身（器）の製作は別工程とみられる。（同図7）

#### ハ、灯明皿

灯明皿と分類したものには、製作段階から灯明専用の皿として意識して製作されてきたもの以外に鍋の蓋や皿などを利用した転用品も含まれている。分類に関しては前述の転用品を含めてあり、これについては灯明皿として使用される以前の用途や器形などを基準に行った。その結果、I類からIV類までの4種類に分けられた。

#### I類

内彎するベタ底の皿で、両面に黒釉を施している。小皿から灯明用に転用されたものか、あるいは今帰仁城跡（註2）や上村遺跡（註3）などから出土している白磁の灯明皿と器形が類似していることから白磁の灯明皿の影響を受けて登場したものとして考えられる。仮に後者であれば、湧田古窯の灯明皿で最も古いものになる。（第81図1）

#### II類

高台を持つ内彎口縁の灯明皿である。口縁端部分に三角形状の突起を貼り付けて、灯心を支える。釉は透明釉（白化粧）を両面に施している。口縁外面や外底面には煤けたり、煤の炭化物が付着している（同図9・10）。その他にこのタイプと類似する特徴（器形・口縁端の三角形状の突起）をもつものが前述の小皿III a種に含まれているが、煤などの付着が確認されていないことなどから灯明皿から小皿に転用されたものが存在することが判明している。（第73図12）

#### III類

器形的には染付の碁筭底皿と類似するものであり、両面に緑灰色の釉を施している。（同図11）

#### IV類

鍋などの蓋を灯明用の皿として転用したもので、蓋甲頂部に高台状の臺を造っている（実測図では天地を入れ変えてある）。口縁（蓋甲の縁端）端部に煤が帯状に付着している。（同図12）

### 21. 火炉

急須や鍋などを置いて炭火で保温（再加熱を含む）する炉で、両面の口縁端部に三角形状の大型の突起を貼り付けている。また、炭を入れやすくする為に、口縁を「U」の字状に抉り取っていたり、穿孔された把手を外面部に貼り付けているのも特徴である。把手には獅子面が施されているのも特徴である。獅子面が彫りによるものか型のよるものかは今回確認できなかったが、状況から考えられたのは後者の型物の可能性であった。器形の変化などからI類～III類に分けた。

#### I類

高台から丸味を持ったまま立ち上がり、胴上部から口縁には内側へ強く内傾する。全体的に丸味のある器形となっている。有文と無文の二者が確認され、有文の場合は口縁から胴部に片切り彫りの緻密な

縦沈線を施している。軸色は黒褐色や茶褐色を帯びたものを両面に施していて、中には天目茶碗にみられる褐錆斑が認められるものもある。(第82図1・3)

#### II類

高台から内側に閉じ気味に丸味を持って立ち上がり胴下部までそのまま移行する。胴下部から若干、丸味がゆるくなり、口縁部まで移行する円筒状の火炉である。口縁の両端部が肥厚し、「T」の字状となっている。(同図3)

#### III類

口縁を欠くが胴下部で「く」の字状に屈曲する火炉と考えられる。外面に透明釉(白化粧)を施す。内面は軸掛けがなく、露胎する。(同図4)

### 22. 火鉢

口縁を欠くが全体の状況から外反する火鉢が考慮できる。両面に透明釉(白化粧)を施している。外面には線彫りの縦沈線文と片切彫りの圏線を描いた後に文様に具須を施している。内底面を深く削り取る為、段状となっている。(同図5)

### 23. 鍋

鍋は口頸部が「く」の字に折れ曲がり、底部に三角錐状の突起を貼り付けたものである。これらの鍋は口縁の造りや把手の貼り付けなどからI類からII類に分類した。

#### I類

器形は胴下部で膨れ、胴中央から若干、内側に閉じ気味になりながら頸部に移行する。口縁部で外反させている。底部は丸底で三角錐状の突起を三箇貼り付けている。紐状の把手を口縁に貼り付ける点でもII類と区別出来る。軸色は茶褐色・黄緑色・灰緑色の透明釉を両面に施している。(第83図1～5・7)

#### II類

器形は底部が平底で、底部から丸みを保持しながら胴下部へ移行し、胴下部から頸部まではほぼ垂直に立ち上がっている。口縁は外傾し、口縁外端を尖り気味に突出させている。口縁内縁は浅く、窪みを造り蓋受とする。口唇がI類よりも幅広であり、口唇に紐状の把手を貼り付ける点などが、このタイプの特徴である。(同図6・8)

### 小結

本遺跡出土の施釉陶器の中で三島手技法の縦沈線文は襷描きによるものとして最終的に考えられた。今回、確認された器種は碗・皿・香炉・火取・酒器・急須・壺・灯明具・火炉・鉢・鍋などの10種類を越えている。まとめに入れる前にII地区の出土層位の検討を行うことにしたい。第3層と平行する土層は黒褐色土層・攪乱I層・攪乱2層と記述したものである。第5層に平行する土層は赤褐色土層と記したものであった。第6層は第1・2号窯を掘り込んだ時期である。第7・8層は竈構築以前の時期であるが、施釉陶器が出土していない。

II地区の第3層からは小皿II a、小皿II b、大皿IV c、大鉢I b、酒器 b、花瓶、乗燭I b、火炉IIIが出土していて、平行期の土層を含めると多種に及ぶ。これらの釉薬を観ると鉄釉・青緑釉・透明釉・(白化粧)の釉以外に緑灰色・灰緑色・の軸色が認められる。またこの時期に平行するものとみられる軸色や技法をみると黒褐色土層や攪乱1・2層のものを含めると「フィガキー」の灰釉碗・三島手技法がみられる。釉薬は緑釉・鉛釉などが施される。

同地区の第5層及び平行期の赤褐色土層からは碗VII・小皿V・小鉢I c・急須II(蓋)・壺IIIが出土していて、釉薬などは透明釉(白化粧)を施すものが主体で、稀に黒釉が認められた。他に透明釉(白化粧)を施したものは具須や赤絵で草花文を描く、線彫染付の場合は文様に具須と鉄釉ないしは鉛釉を組

み合わせている。

I地区からは層の比較的安定した場所から火鉢（方形状下部埦二段目北側）が出土している他に第1瓦層から鉄絵の大鉢I aが出土している。前者の火鉢は透明釉（白化粧）に三島手技法の櫛描き文と圈線を施した後に具須を施している。また内面には青緑色の釉掛けが認められている。この他に同地区の攪乱層や攪乱2層からは碗IV a（緑釉）・香炉（緑釉）・小碗I b（黄緑釉）が出土している。

以上の状況からは時期的な結論は出せないが、I地区出土の火鉢は遺構と直接結びつく資料である。この遺構時期は時代幅が大きく、15世紀後半から17世紀中ごろに位置づけられるようであり下限の17世紀中のものは肥前の瓶が伴っていることからこの火鉢は17世紀中頃に比定される公算が出てきている。

#### 註

註1、釉薬に浸して掛ける手法で見込みと高台が露胎のままである。

註2、金武正紀・宮里末廣ほか「今帰仁城跡発掘調査報告I」今帰仁村教育委員会 1983年

註3、大城慧・金城亀信ほか「上村遺跡」沖縄県教育委員会 1991年

#### 参考文献

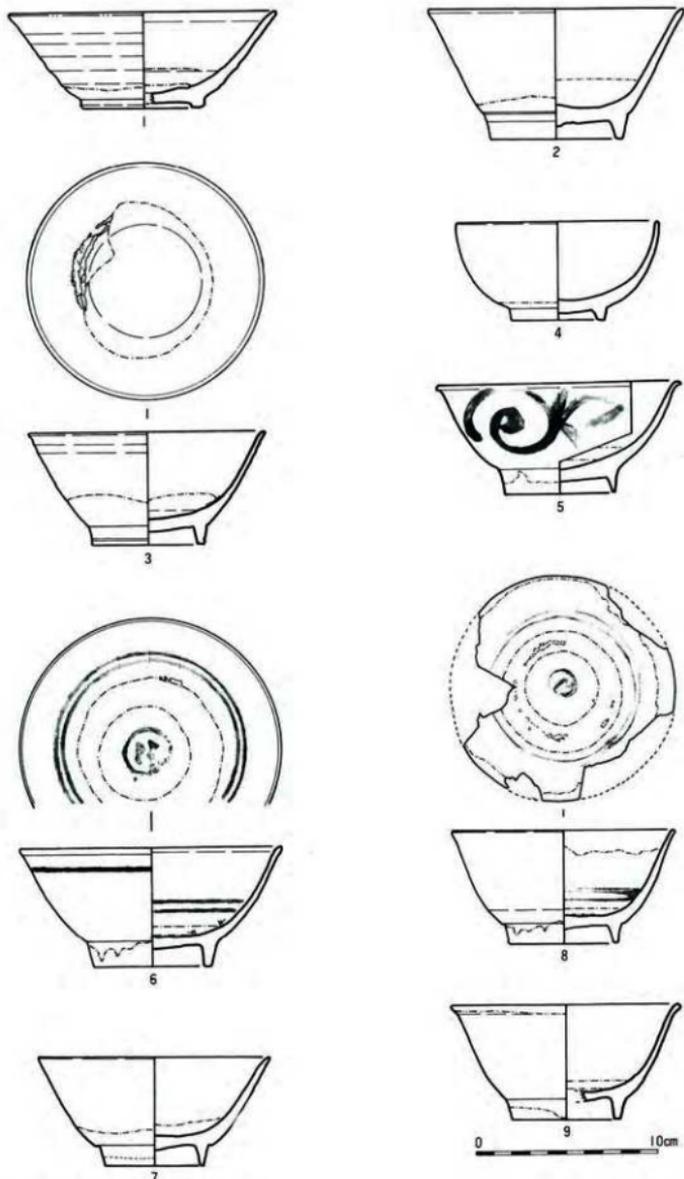
1. 知念勇・池田栄史・江藤和幸「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」沖縄県立博物館紀要 第14号 1988年
2. 池田栄史・津波古聡「灰釉碗の話」沖縄県立博物館紀要 第17号 1991年
3. 当真嗣一・上原静ほか「首里城跡」沖縄県教育委員会 1988年
4. 盛本勲「松田遺跡」沖縄県教育委員会 1986年
5. 金武正紀・島弘・玉城安明・内間靖・島袋春美「御細工所跡」那覇市教育委員会 1991年
6. 島弘・内間靖・玉城安明ほか「壺屋古窯群I」那覇市教育委員会 1992年



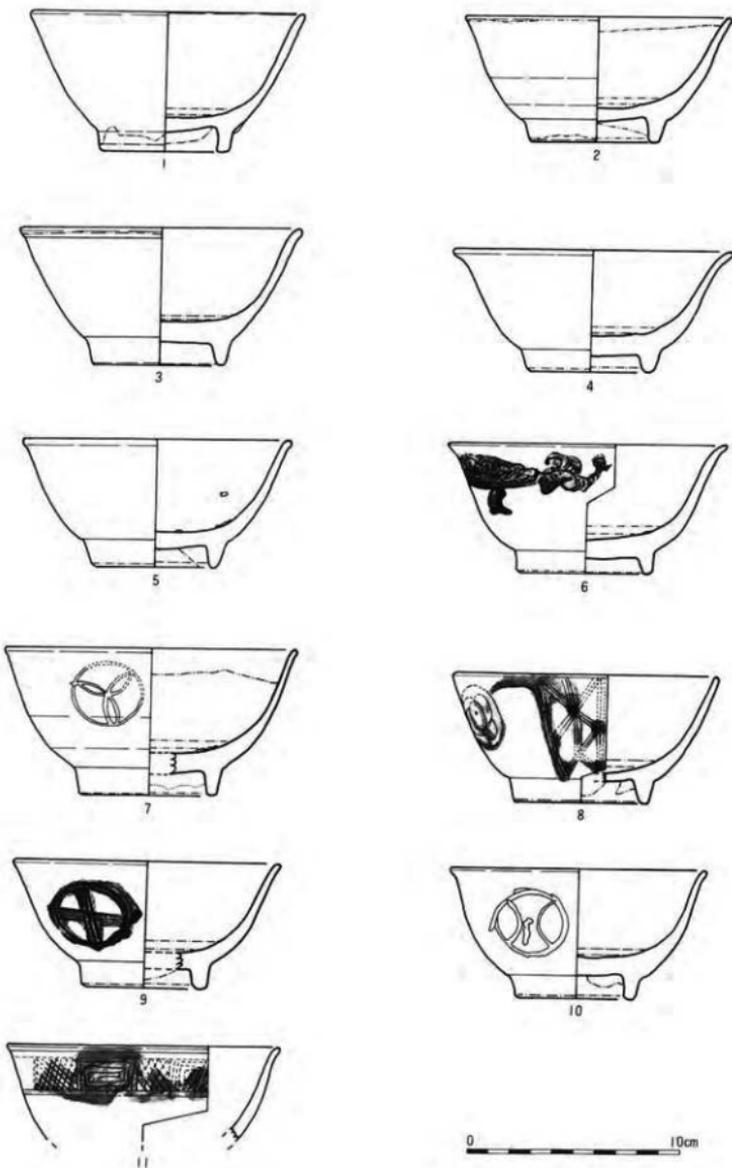




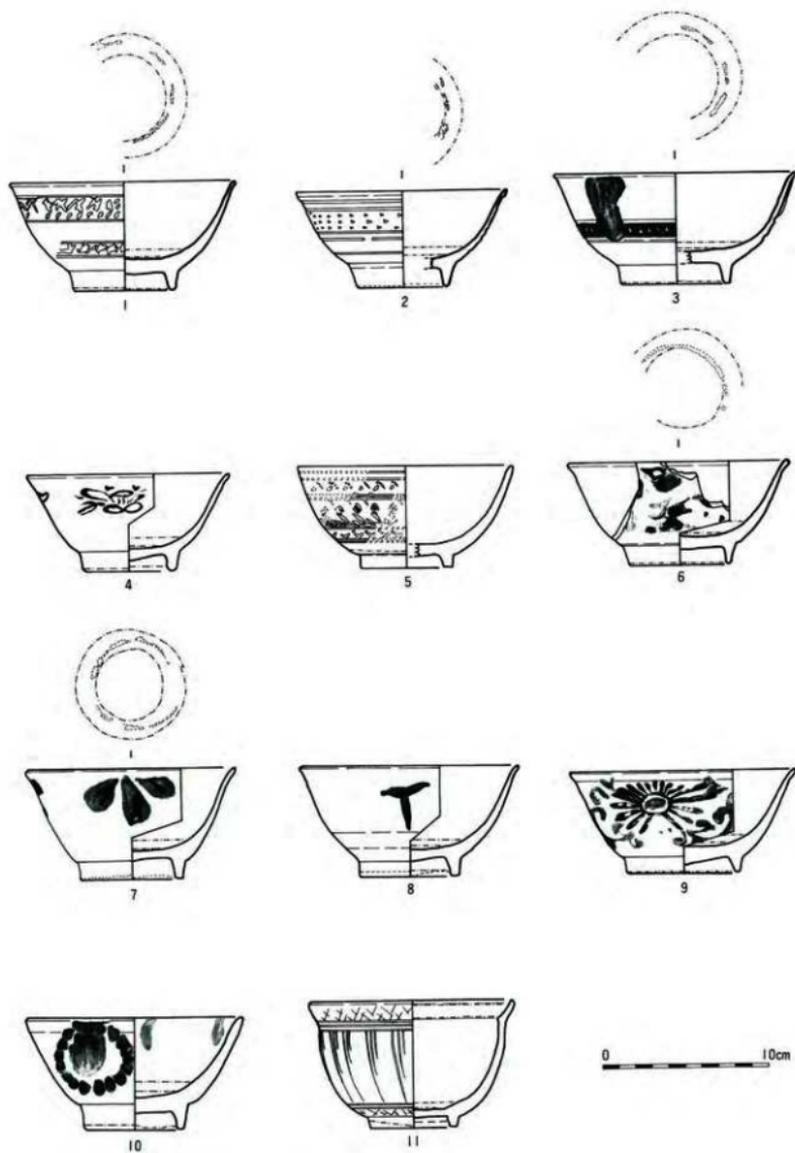




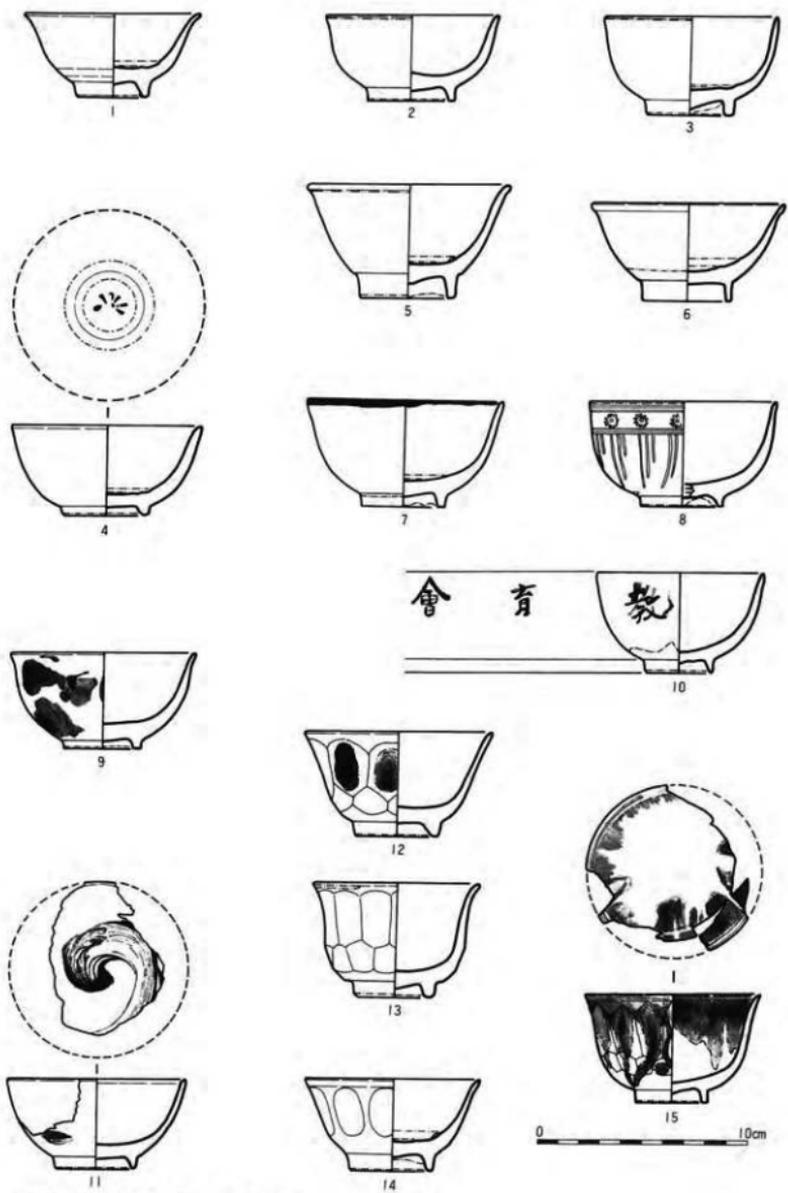
第69図 沖縄産施釉陶器（上焼）碗



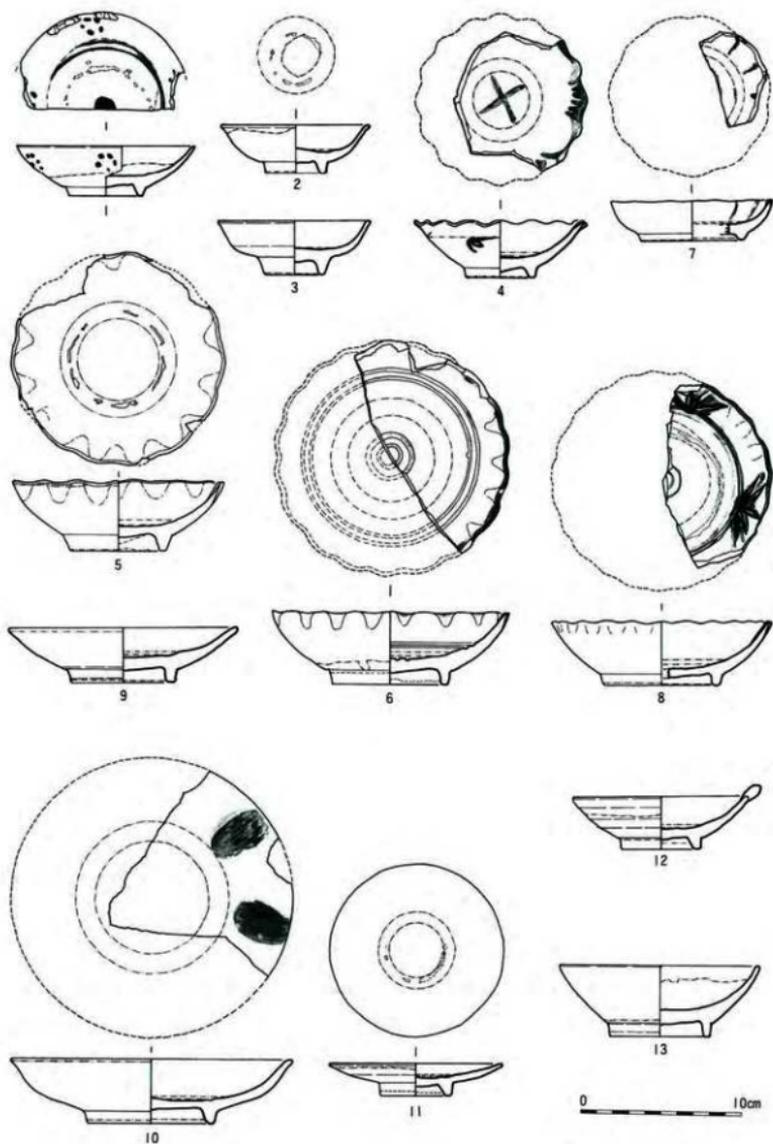
第70図 沖縄産施釉陶器(上焼)碗



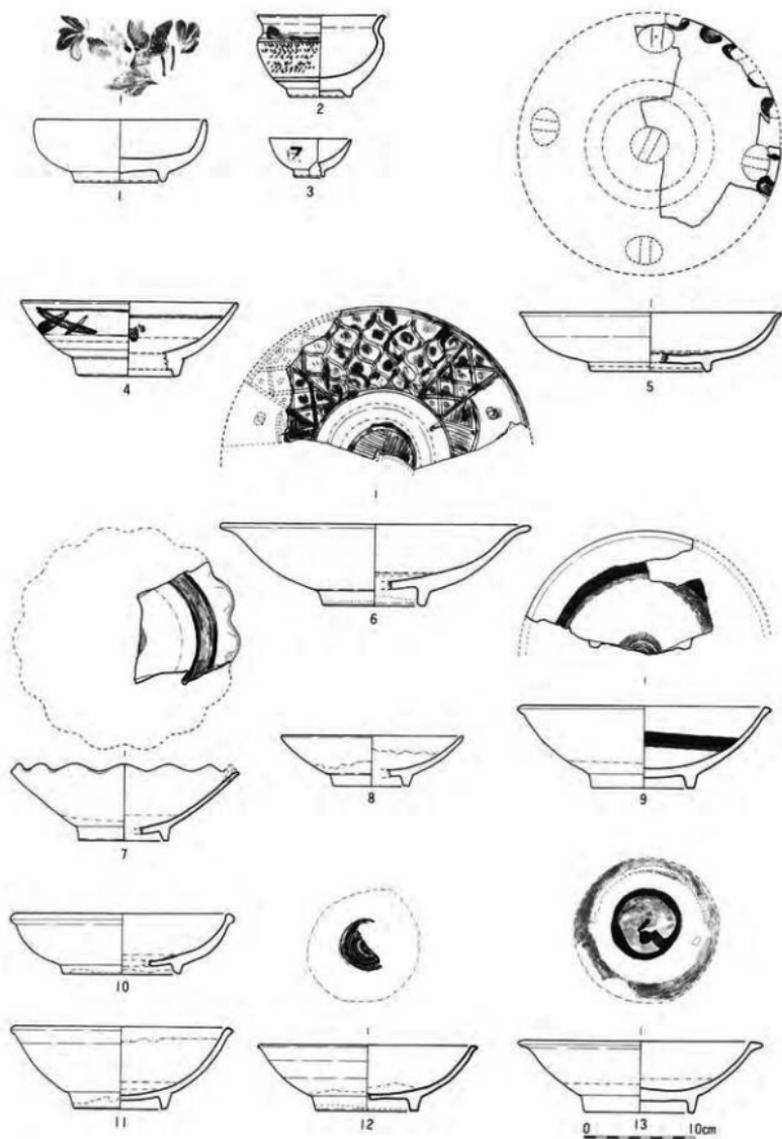
第71图 冲縄産施釉陶器(上烧)碗



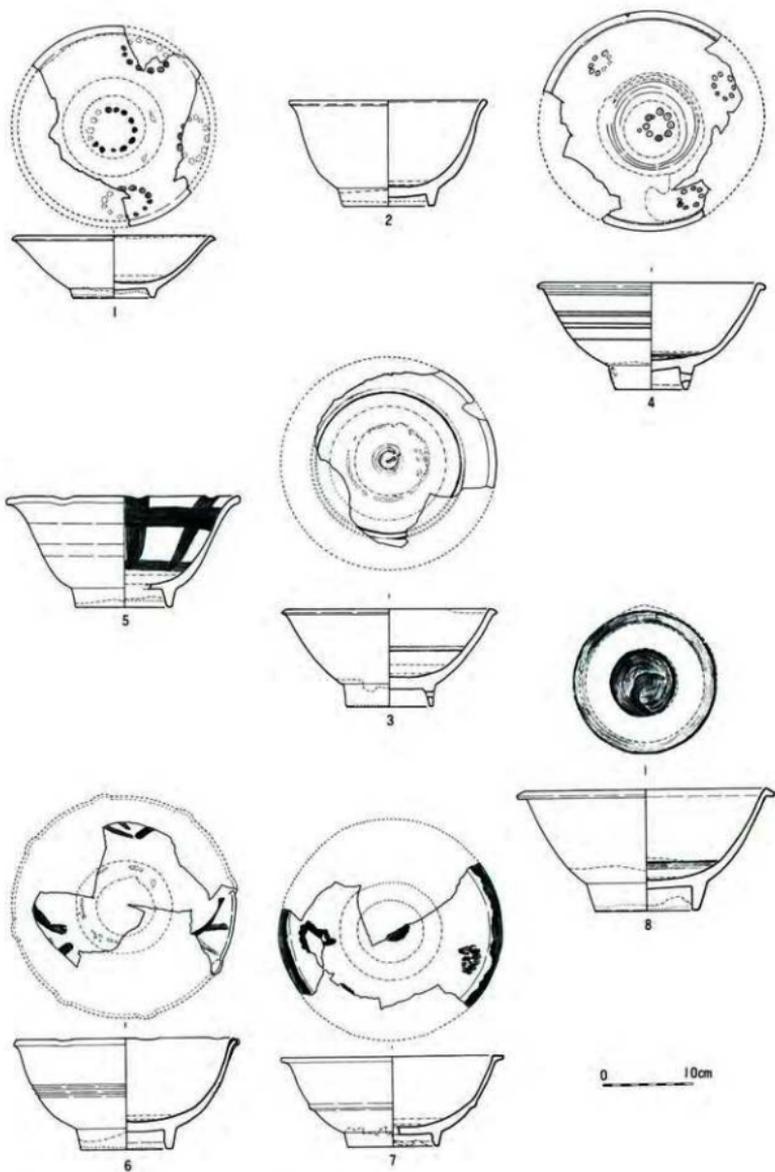
第72図 沖繩産施釉陶器 (上焼) 小碗



第73図 沖繩産施釉陶器（上焼）小皿

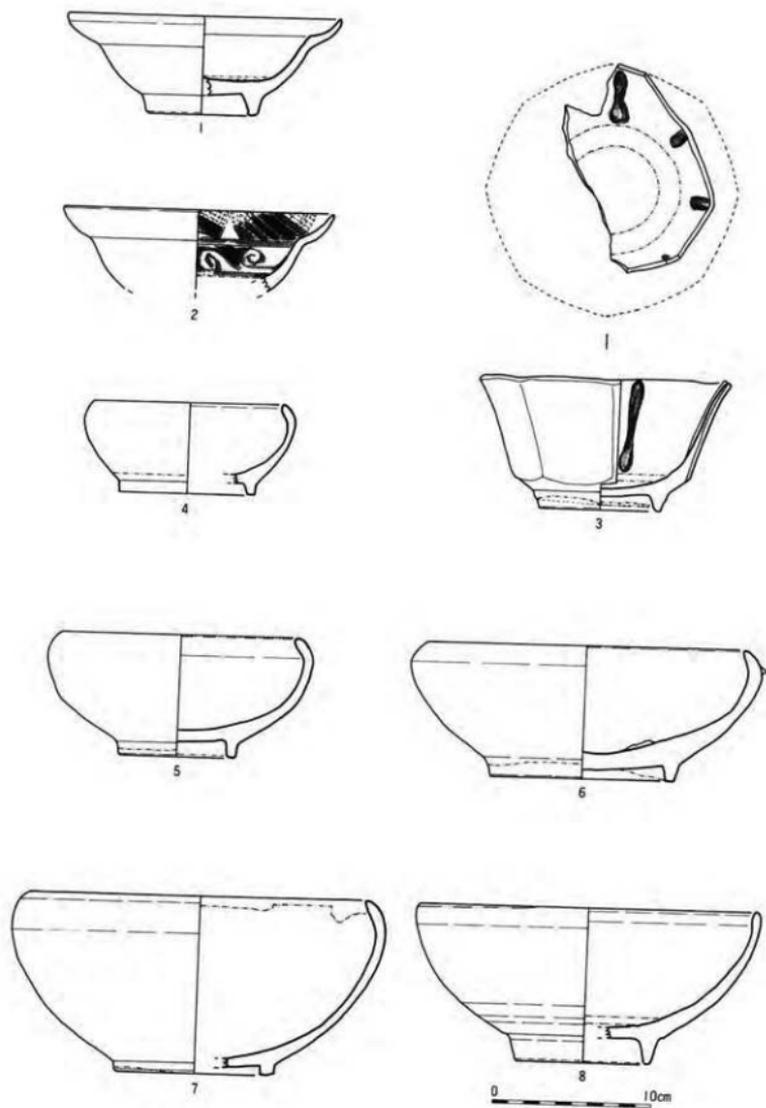


第74図 沖縄産施釉陶器（上焼）小皿・小碗・小鉢・大皿

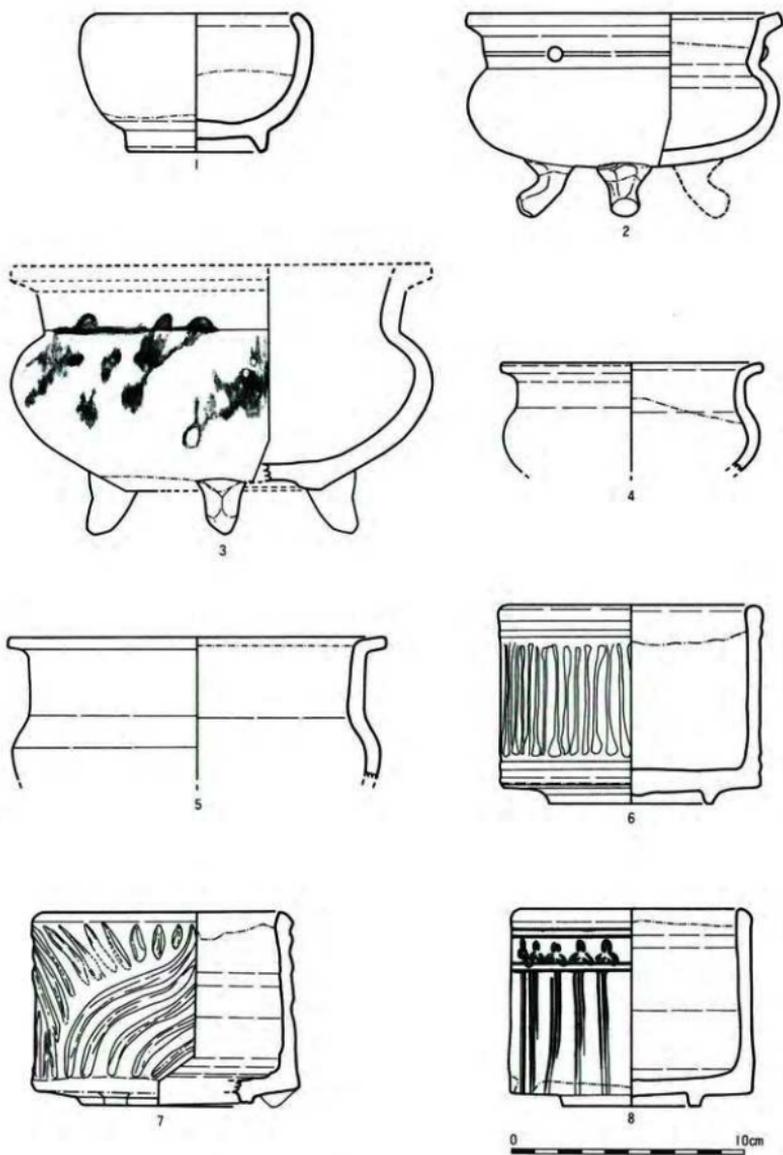


0 10cm

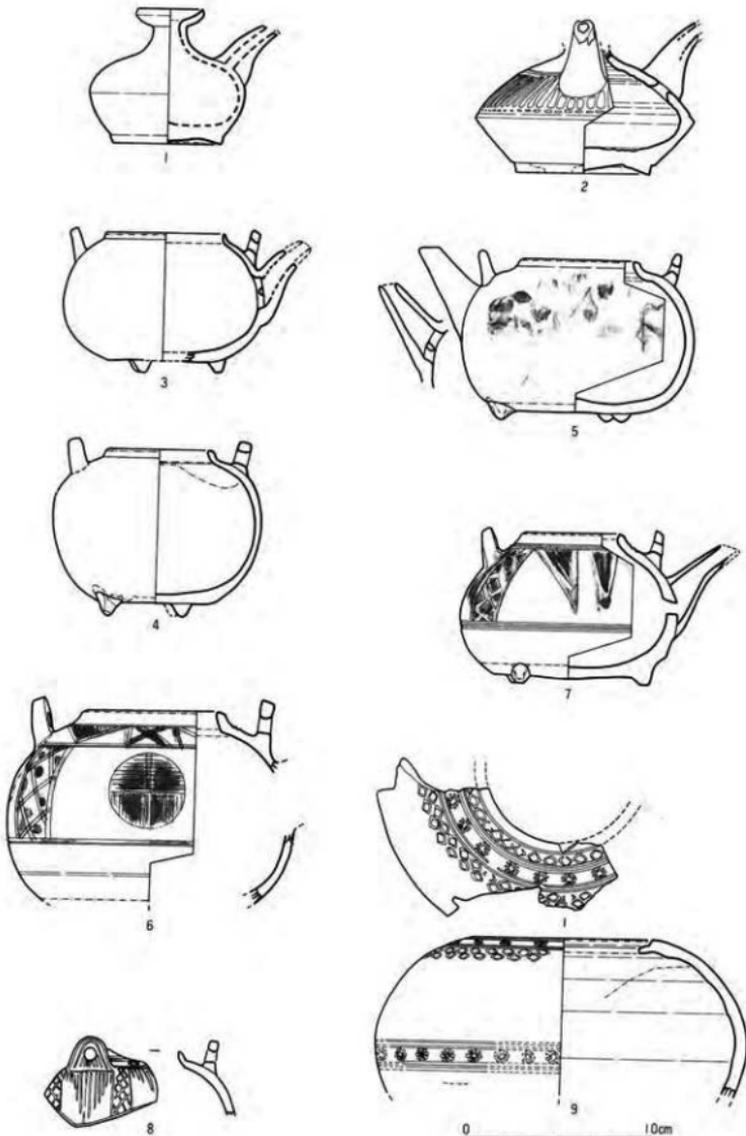
第75図 沖繩産施釉陶器(上焼)大皿・大鉢



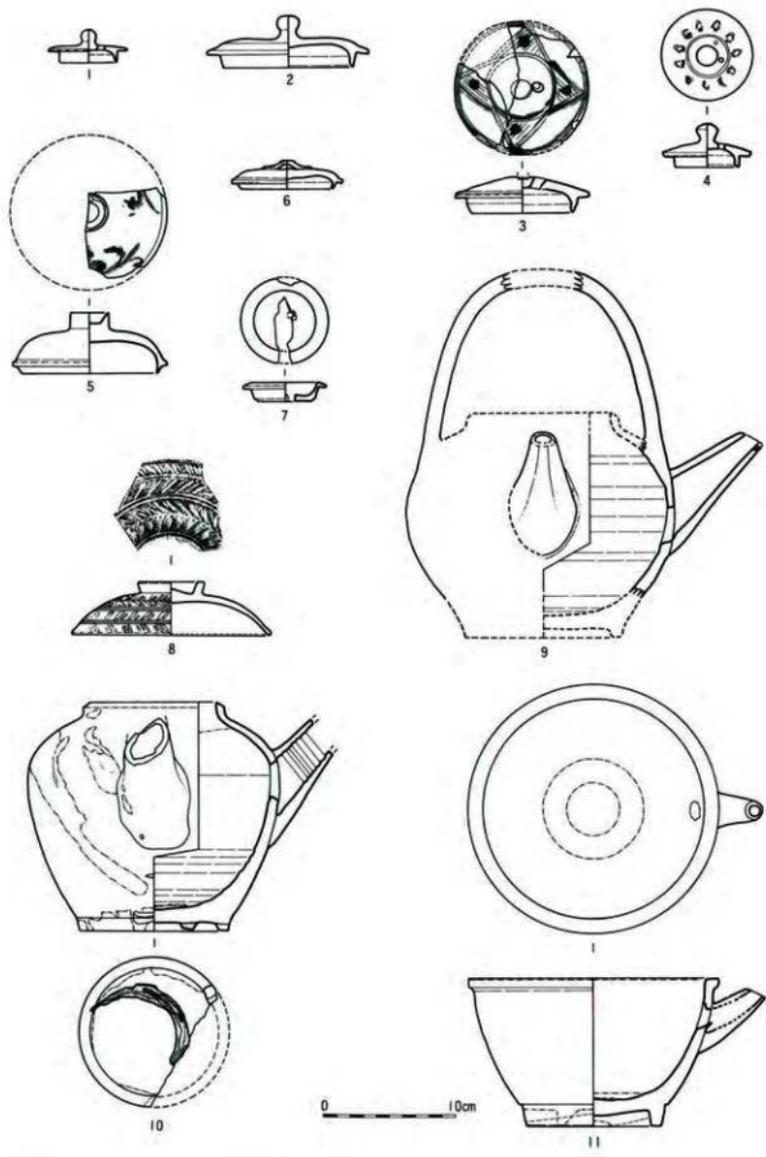
第76図 沖縄産施釉陶器（上焼）小鉢・大鉢



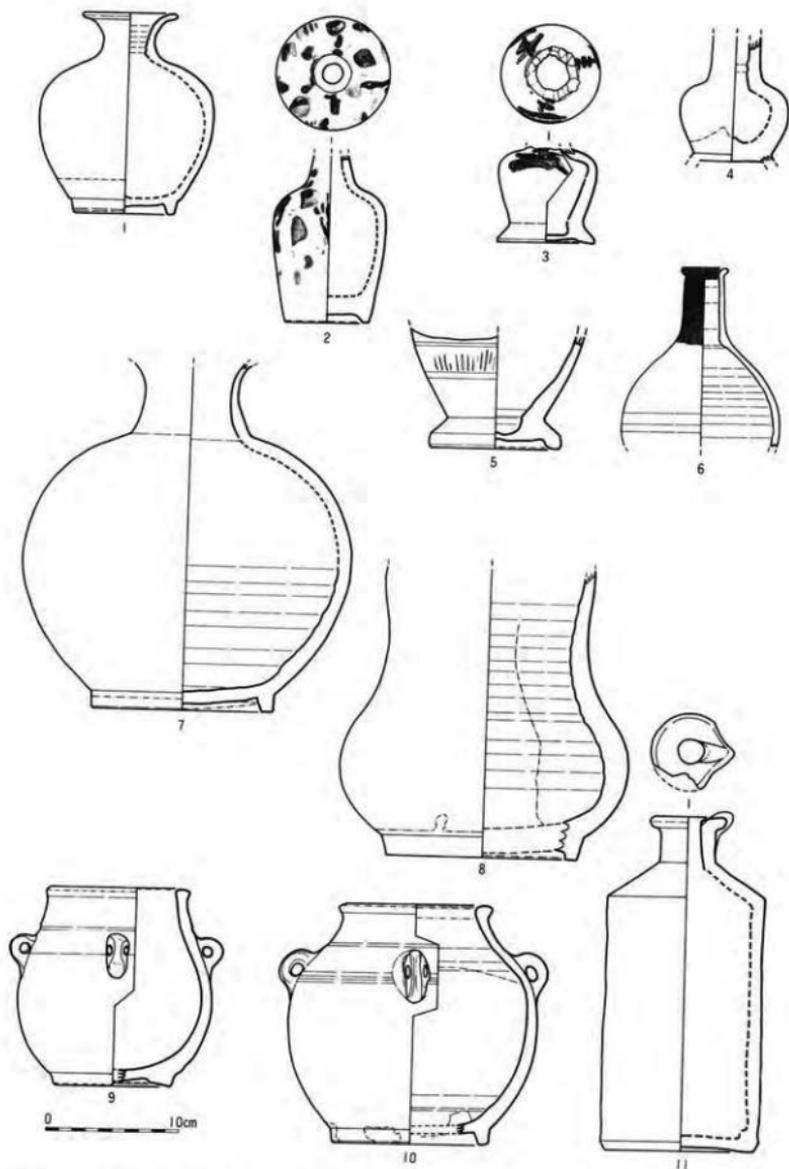
第77図 沖縄産施釉陶器（上焼）小鉢・香炉・火取



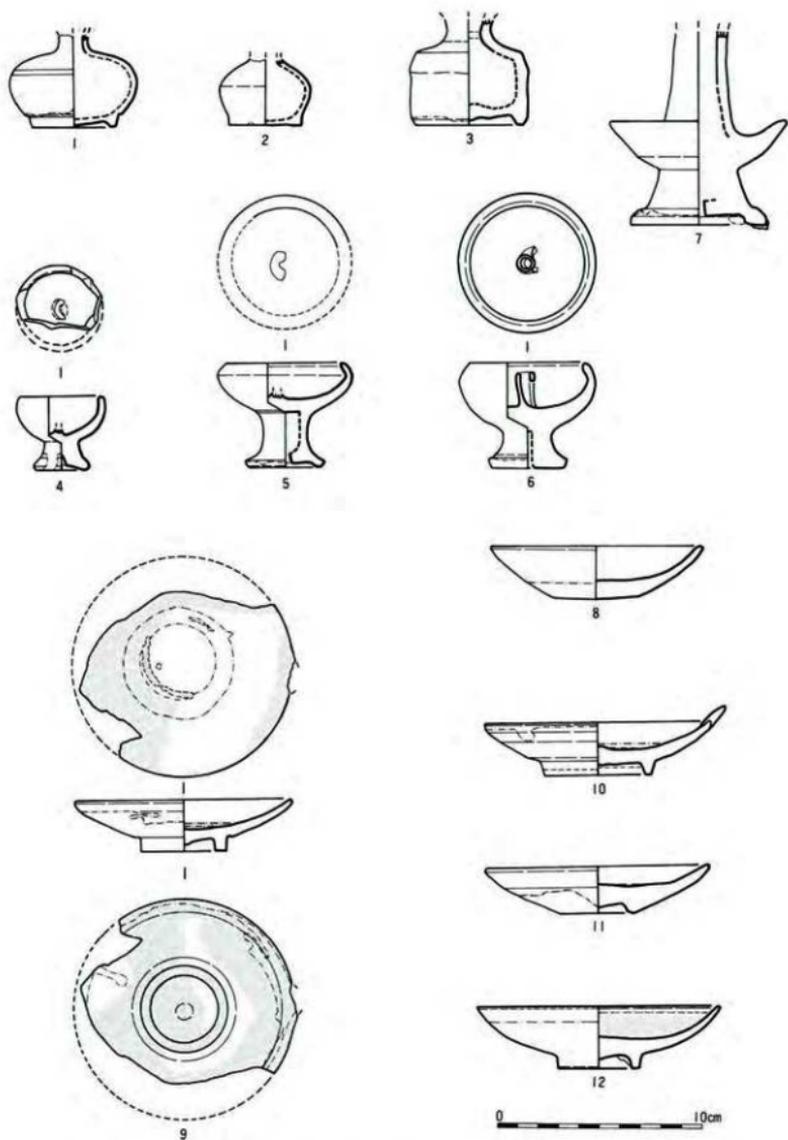
第78図 沖縄産施釉陶器（上焼）酒器・急須・壺？



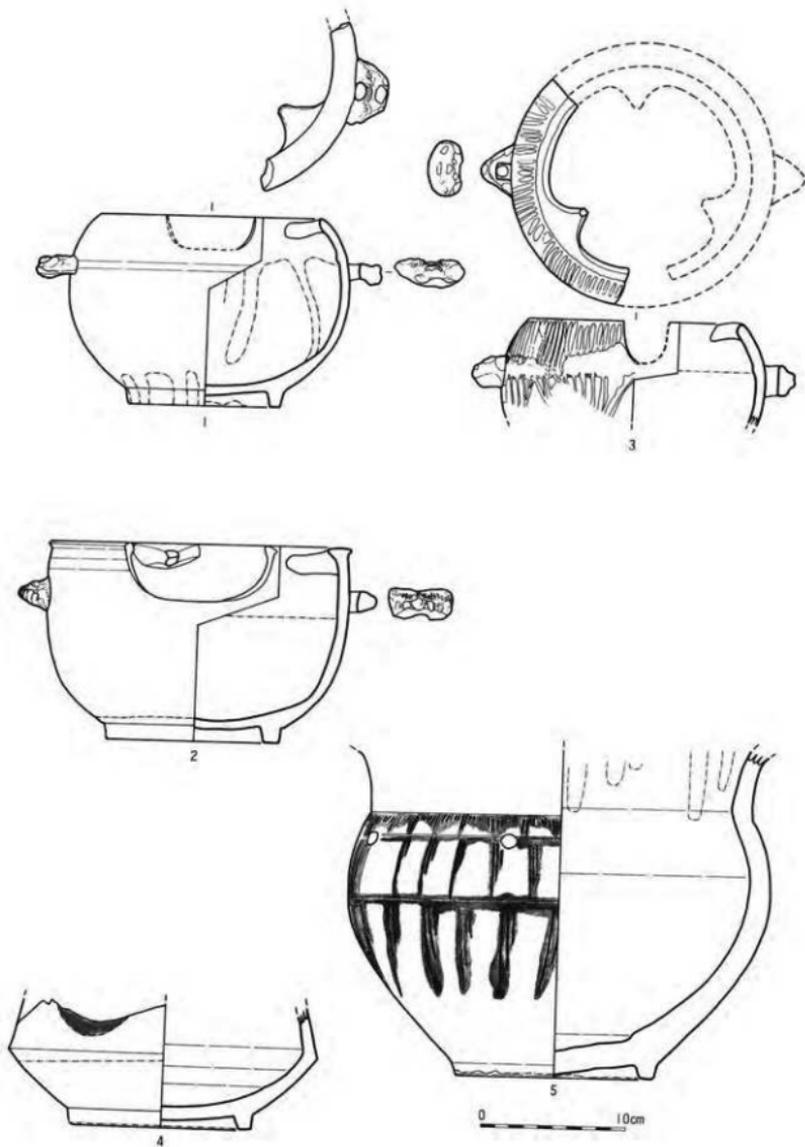
第79図 沖縄産施釉陶器(上焼) 蓋(急須・壺・鍋) 大型急須・片口鉢



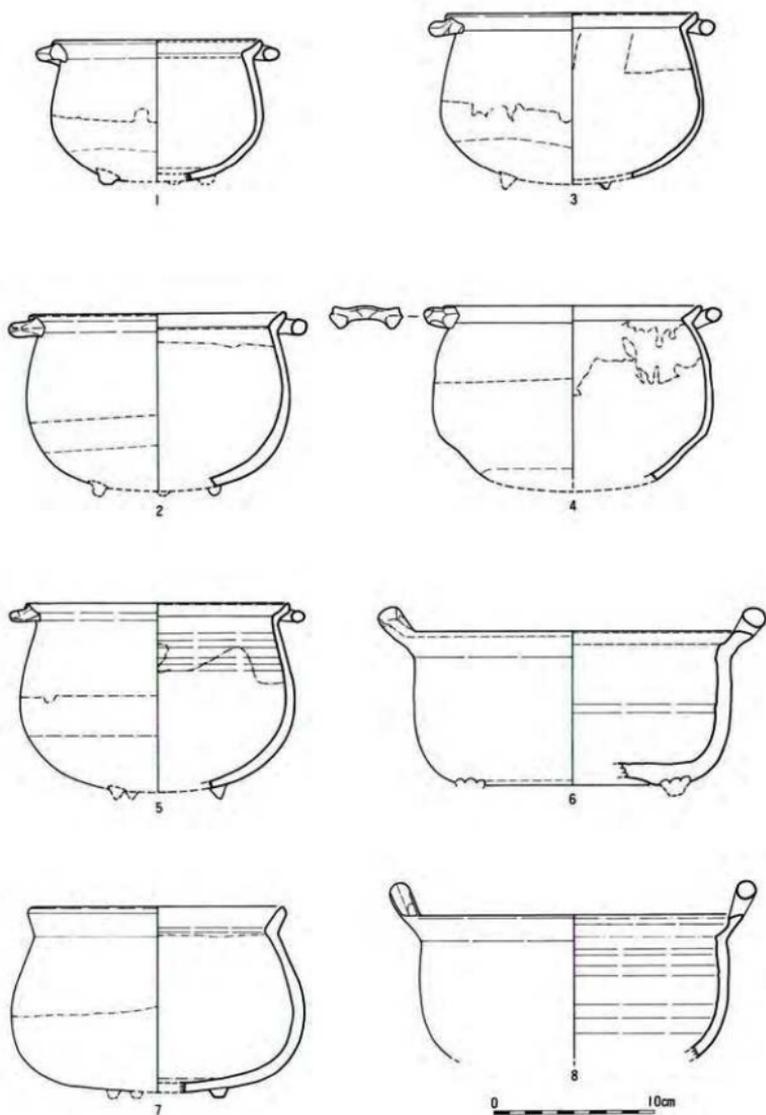
第80图 冲縄産施釉陶器 (上烧) 瓶・油壺・瓶子・对瓶・壺



第81图 冲縄産施釉陶器（上埴）油壺・乗燭、燭台・灯明皿



第82図 沖縄産施釉陶器（上焼）火炉・火鉢



第83図 沖縄産施釉陶器（上焼）鍋

## 第11節 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器の用途が特定された器種は、摺鉢・壺・徳利・瓶子・花瓶・水甕・鉢・花鉢・鍋・水注・碗・皿・火炉などであり、豊富であった。個々の特徴は観察表（第6表）に示した。ここでは分類概念のみを記述した後に若干のまとめを行なうことにした。以下、摺鉢・壺などの順に記述する。

### 1. 摺鉢

摺鉢は口縁形態などからⅠ～Ⅲ類に大分類を行ない必要に応じて細分類を実施した。以下、特徴のみを記す。

#### Ⅰ類

Ⅰ類は口縁の造りや文様などからa～dの4種類に分けた。

a種…口縁を一端内彎させた後に口縁端部を摘み出して口縁を外反させているもの。（第92図1）

b種…口縁をハブラシ状に肥厚させた後に肥厚帯に圏線を施す。また、肥厚帯直下に筥で調整し肥厚を強調するもの。（同図2）

c種…口縁を「く」の字状に屈曲させる。肩部を意識した回転による指圧を深く入れて強調するもの。（同図3・7）

d種…Ⅰc種と同様に口縁を屈曲させるが、Ⅰc種と比較して屈曲は微弱なものである。（同図4～6）

#### Ⅱ類

Ⅱ類は口縁を逆「L」字状に屈曲させる為、口縁が突出し、口厚も幅広となるものである。口唇に圏線を施すものである。（同図8）

#### Ⅲ類

脚台付きの摺鉢であるが、口造りはⅡ類と共通するものである。（同図9）

### 2. 壺

壺は口縁形態などからⅠ類からⅢ類に分類し、必要に応じて便宜的な細分を実施した。

#### Ⅰ類

Ⅰ類は基本的にナデ肩の壺であるが、外反の度合いでa・bの2種類に分けた。

a種…外反のきつい玉縁口縁の壺で、肥厚帯下端を筥で削り取っているもの。（第93図1）

b種…a種と同様に外反のきつい玉縁口縁であるが、a種より肥厚が大きく肥大化するものである。（同図4）

#### Ⅱ類

本タイプはタマゴ形の器形を呈する壺であり、口造りが玉縁状に肥厚させる点でⅠ類と類似するが全体の器形が異なっている。（同図2）

#### Ⅲ類

本タイプは方形の肥厚をもつものである。器形の微弱な変化からa・bの2種類に分けた。

a種…口縁部を逆「L」字状に屈曲させ、肥厚帯下端を僅かに突出させているものである。（第93図3）

b種…口縁部の屈曲はⅢa種よりもゆるくなり、ルーズな肥厚を造る。（第94図1）

### 3. 徳利

厚手の徳利が得られていて、口縁が欠く。残存部の状況から外反する器形が推定される。（同図2）

### 4. 瓶子

小振りの瓶子が1点出土している。これも口縁部が欠いている。底造りは糸切りによる切り離しが行なわれている。（同図4）

### 5. 花瓶

把手が貼り付けられた花瓶の口縁が1点得られていて、口縁がきつく外反する。(同図5)

#### 6. 広口壺

口の広い小壺が出土して、頸部が7mmと短い。(同図6)

#### 7. 水甕

水甕も口縁部の形状などからI類～III類に分類し、状況によって細分類を実施した。

##### I類

I類は頸・胴部で軽く内側に締り、口縁で屈曲させている。口縁は突出させた後に口縁下端を軽く摘み出している。(第95図1)

##### II類

本タイプも口造りなどからa・bの2種類に分けた。

a種…口縁を逆「L」字状に屈曲させる。全体的な器形としては垂直もしくは若干、外傾気味に直線的に口縁に移行するものが推定される。(同図2・3)

b種…口縁を屈曲させた後に口縁下端を釣状に仕上げ肥厚をつくる。口屋外端に縄目文を貼り付けている。(同図5)

##### III類

肥厚の形状などからa・bの2種類に分けられた。肥厚の肥大化の傾向が認められるものである。

a種…肥大化した方形の口縁で、頸部で軽く締っているもの。(同図6)

b種…肥大化した玉縁状の口縁。ナデ肩気味の甕が考えられるもの。(同図9)

#### 8. 厨子甕

厨子甕もしくはその可能性のあるものが2点得られている。文様は圏線や菊花文などを施している。(同図4・7)

#### 9. 鉢

胴下部から口縁にかけて軽く、開き気味に移行する鉢である。文様は圏線と円盤状の貼り付けを行なっている(同図8)

#### 10. 水鉢

口縁の形状以外に用途もある程度、把握されたので、これも参考にしながらa・bの2種類に分けた。

a種…手水鉢で沖繩で「ミジクブサー」と称されているものの一種である。口造りは一端、内彎させた後に口縁を外側へ摘み出して肥厚を造る。(第96図2)

b種…洗濯用の鉢で、専ら女性の下着洗いに使用された為、「メーチャーアラヤー」と俗称されるものである。器形は摺鉢と類似するが摺り目が無い点で区別出来る。(同図3)

#### 11. 花鉢

歪な花鉢が得られている。素地に多量の軽石細片を混入させて焼成した為、器形が崩れている。(同図4)

#### 12. 鍋

口縁部に紐状の把手を貼り付けた鍋が出土している。口縁内面には蓋受けの段が造られているものである(同97図2)。その他に薄手の鍋とみられるものも得られている。(同図3)

#### 13. 水注

把手を欠く水注が1点出土している。注ぎ口も立端を欠いているものである。器形は扁楕円形状を呈し、頸部が非常に短い。(同図4)

#### 14. 片口鉢

注ぎ口が欠落する鉢で、口縁をきつく外傾させて仕上げている。(同図5)

## 15. 蓋

鍋の蓋とみられるもので、蓋甲頂部に高台状の把手を造る。甲には柳描きの波状文を描いている。(同図6)

## 16. 碗

手捏の碗と轆轤引きの碗の2種類があり、前者は瓦質土器であった。後者は瓦質土器と陶器の中間的要素を保持した碗である。口縁形態などからⅠ類～Ⅲ類に分類した。

### Ⅰ類

瓦質土器の手捏の碗で、どちらかといえば杯に近いものかもしれない。Ⅱ類及びⅢ類と比較する為に図化した(第97図7)。同時に瓦質土器の小鉢も参考資料として図化した(第97図1)。これは沖繩製陶器の発生を考える上で重要な資料として判断できたからである。

### Ⅱ類

この碗は腰が沈み腰折状態となっていて、全体的に逆「ハ」の字状の器形となっている。(同図8)

### Ⅲ類

天目茶碗を意識的に模倣した碗で、口縁部へのひねり返しを行ない、べつ甲口口縁として仕上げている。(同図9)

## 17. 乗燭

底の浅い平皿の中央に灯芯もしくはロウソクを入れた中空の外反する筒を造る。内面口縁は煤けている。(同図11)

## 18. 灯明皿

内彎するベタ底皿が得られている。内面が若干、煤けている。(同図12)

## 19. 火炉

円筒状の把手の付く火炉である。内面には三角錐状の突起を貼り付けている(同図13)。その他に火炉の底部と考えられるものが1点得られている。底面に足を貼り付けている。(同図14)

## 20. 用途不明

薄手の杯?とみられるものが1点出土している。底面に同心円状の溝が認められ、脚と離れてしまった可能性も考えられた(同図15)。

## 小 結

沖繩製無釉陶器の摺鉢でⅠa類からⅠd類を時期的に考えた場合、17世紀中頃から17世紀後半に位置付けられることが予想できた。摺鉢Ⅱ・Ⅲ類について19世紀初～19世紀後半が共伴する陶磁器などから推定された。摺鉢Ⅰ類と摺鉢Ⅱ・Ⅲ類の中間の時期が欠落するのは、摺鉢Ⅰ類中から17世紀後半から18世紀に抜き出されて来るものが存在する可能性が考えられるからである。摺鉢Ⅰ類中から安里進ほかの摺鉢の編年(註1)をを参考に抽出すると摺鉢Ⅰd類が安里進ほかの摺鉢編年Ⅱ式(17世紀後半～18世紀後半に比定されている)に該当することが確認される。しかしながら摺鉢Ⅰd類と摺鉢Ⅱ・Ⅲ類の間には半世紀近くの空白部分が存在する。今回の発掘調査の成果からはこの空白の時期を埋める資料が確認されていないので、今後の湧田古窯跡の報告に期待したいところである。

壺分類のⅠa類は中国製褐釉陶器の壺の影響もしくは模倣して発生したのと考えられる。同様に花瓶も青磁や白磁の瓶からの影響や模倣を試みたものとして理解された。

素地に軽石の細片を多量に含ませて焼成した花鉢と火炉の底部が認められた。いずれも焼成途中に形が崩れている。軽石の細片を多量に含ませて焼成した例は陶器に於いては未確認であった。

末尾ながら瓦質土器と陶器の中間的要素を持つ陶器が碗Ⅱ・碗Ⅲなどで確認されていて、沖繩産無釉陶器の発生時期がある程度、絞り込むことが可能となった。まず、瓦質土器の中に萬曆33年(1605年)

の銘入浅鉢が出土していることから沖縄産無釉陶器の発生は1605年以降になるものと予想できる。瓦質土器から沖縄産無釉陶器の中間タイプのは1605年以降に登場して来る可能性が考えられる。碗Ⅱ・碗Ⅲの中間タイプは本土産あるいは中国産の陶磁器の影響もしくは模倣によるものとみられ、1605年以降の陶工として考えられるのは薩摩から朝鮮人陶工の張一六・安一官・安三官や沖縄の無名の陶工達であろうか。『球陽』（註2）に拠れば朝鮮人陶工は1617年に招聘された記録があることなどから瓦質土器と沖縄産無釉陶器の中間タイプは1617年以降に登場してきたものとして理解される。従って沖縄産無釉陶器は瓦質土器と沖縄産無釉陶器の中間タイプに後続することになるものと考えられた。

これについては今後の湧田古窯跡の報告書によって具体的に解明されることであろう。

#### 註

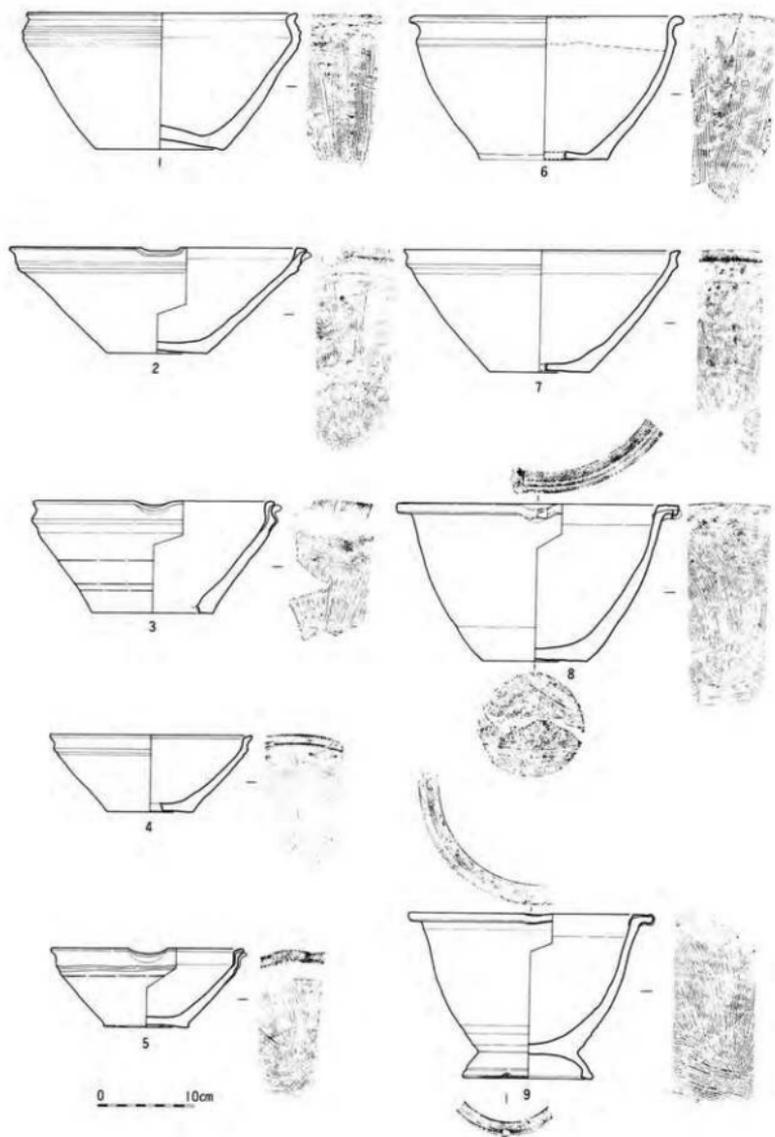
- 註1. 安里・上原政昌・家田淳一 「摺鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『名護博物館紀要3号』名護博物館 1987年
- 註2. 球陽研究会編『球陽』 角川書店 1984年再版

第6表1 沖繩産陶器(荒焼)観察一覧

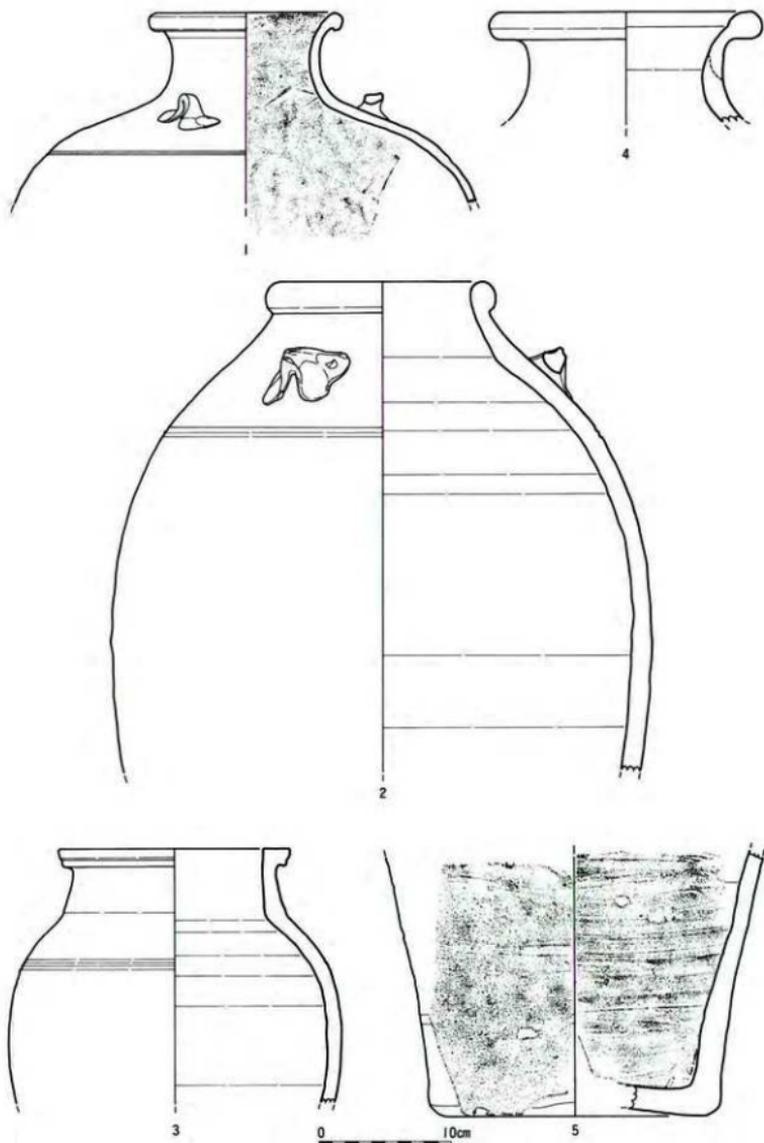
土器	器種	口径(底径)	高さ	重さ	着色	表装	胎体観察	文様など	出土地点
第85回 PL. 93	1 楕鉢 I a	27.6	13.0	14.0	淡褐色	淡灰色の細粒子。粗い石瓦質濃灰入。	外面回転磨痕とナデ。内面回転磨痕。	丸彫りで磨痕を3条。磨きまで8条一組みの隈り目を施す。	II区た—51 8層
	2 楕鉢 I b	30.4	10.2	10.9	淡褐色	淡褐色の細粒子。細かい石瓦を少量含む。	外面回転磨痕とナデ消しや磨削り。内面回転磨痕とナデ。	丸彫りで磨痕を1条。磨きまで13条一組の隈り目を施す。	II区ち—59 4層
	3 楕鉢 I c	24.5	12.4	11.5	淡褐色	茶紫色の細粒子。粗い石瓦を少量含む。	外面回転磨痕と磨削り。(回転磨削り)。内面回転磨痕。	窪部に磨削する為には頸部と肩下部に回転を利用して強く指圧を加える。磨きまで12条一組みの隈り目を施す。	II区た—53 8層
	4 楕鉢 I d	20.8	9	7.9	濃紫色	淡灰色の細粒子。粗い石瓦少量含む。	外面回転磨痕とナデ。内面回転磨痕。	肩下部に丸彫り一組の磨痕を1条。磨きまで10条一組みの隈り目を施す。	II区ち—51 8層
	5 楕鉢 I d	19.8	8.6	8.1	茶褐色	茶紫色の細粒子。粗い石瓦を微量含む。	外面回転磨痕とナデ。内面回転磨痕。	。磨きまで9条一組みの隈り目を施す。	II区ち—51 8層
	6 楕鉢 I d	28	13	14.8	淡褐色	茶褐色の細粒子。。	外面はナデと磨削り。内面不規則なナデと叩き。底面雑な磨削りを消す。	。磨きまで9条一組の隈り目を施した後に弧状の叩きを入れている。内面口縁に淡褐色の釉を施す。	II区つ—58 8層
	7 楕鉢 I c	25.2	10.3	12.5	茶褐色	淡灰色の細粒子。の釉。	外面輪軸痕を磨削りとなで消す。内面回転磨痕。底面雑な磨削りをナデ消す。	肩部を強調する為には頸部と肩下部に回転を利用して指圧を加える。磨きまで9条一組みの隈り目を施す。	II区ち—59 1層
	8 楕鉢 II	28.8	10.8	16.1	淡茶色	明茶色の細粒子。粗い石瓦質砂粒や小型巻貝が少量含む。	外面回転磨痕。不規則な磨削りやナデを加える。内面回転磨痕。底面雑なナデと磨削りを雑に消している。	口唇に丸彫りの磨痕を2条。磨きまで17条一組みの隈り目を消す。	II区た—57 172層
	9 楕鉢 III	26	13.4	17.0	明褐色 (無 釉)	。。	外面回転磨痕。回転磨削り・ナデ。内面回転磨痕。底面。	口唇に片切彫りの磨痕を1条。磨きまで8条一組の隈り目を施す。頸部の外面に丸彫りの磨痕を1条と頸高外縁部に別目施す。	II区た—57 172層
第85回 PL. 94	1 壺 a	13.1			茶褐色	茶紫色の微粒子。粗い石瓦が少量含まれる。	外面回転磨痕をナデ消す。内面回転磨痕と指圧による当て。	胴上部に丸彫りによる浅い磨痕を2条。二耳裏。	II区ち—59 8層
	2 壺 b	17.0			淡褐色	明茶色の細粒子。多孔質の劈開面。石灰質の微砂粒が少量含まれる。	外面回転磨痕。内面。	胴上部に片切彫りで磨痕を2条。三耳裏。	II区た—59 172層
	3 壺 a	19.2			淡茶色	黄褐色の細粒子。石灰質の微砂粒を少量含む。光沢がある。	外面回転磨痕とナデ。内面回転磨痕。	胴上部に丸彫りで磨痕を2条施すがズレが生じ4条とみられる。	II区の—59 87
	4 壺 b	20			茶褐色	淡紫色の細粒子。粗い石瓦を少量含む。	外面回転磨痕。内面回転磨痕とナデ。	口縁内面に肥厚の接合面が認められる。	II区つ—58 172層
	5 壺 底部	19.3			明茶色	明茶色の細粒子。粗い石灰質の砂粒と小型の巻貝が僅かに含まれる。	外面回転磨痕と磨削り。内面回転磨痕。底面丁寧な磨削り。	底面からの立ち上がり部分に磨削りを加えて角を消している。	II区表土 I
第86回 PL. 95	1 壺 a	11.4	11	24.5	茶褐色	明茶色の細粒子。粗い石瓦が微量に含まれる。	外面回転磨痕。内面。。	口唇・頸下部・底面に粘土目目の目痕が認められる。	
	2 壺 底部	9			茶紫色	。小型の巻貝が僅かに混入。	両面とも回転磨痕。底面まで釉が施されていて調整は判らない。	歪な歪で器形が傾いている。	II区に—57 87
	3 楕鉢 I	4.4	5.8	11.8	淡茶色	の釉で光沢がある。	外面輪軸痕と回転磨痕。。	肩下部に磨痕(爪など)を1条施す。外底面に陶土が付着。(重ね焼きの目痕)。塗料とみられる。	II区な—57 172層
	4 楕鉢 I	6.7			茶褐色	灰白色の微粒子。の釉。	外面回転磨痕と指圧。内面回転磨痕。底面米切り底(右側に小さい弧となる)。	底部からの立ち上がり部分に指圧を施す。底面米切り底(右側に小さい弧となる)。諸特徴から本土産陶器とみられる。	II区な—57 172層
	5 花瓶	3.2			赤褐色	淡灰色の微粒子。の釉。	両面とも輪軸痕が顕著。	肩下部に縦方向に伸びる肥厚を起り付けの痕が残る。青銅などの陶磁の痕を僅かにたもみられる。	II区キ—41 3層
	6 小壺 (広口)	3.8			灰緑色	淡灰色の微粒子。細かい石瓦が少量含まれる。	外面回転磨痕?内面回転磨痕。	口唇が若干摩滅し。釉が光沢味味である。裏面に広口壺とみられる。	II区ち—59 1層
	7 壺 底部	7.8			明茶色	茶褐色の微粒子。細かい石瓦が僅かに含まれる。	外面輪軸痕とナデ。内面回転磨痕。底面釉が施され不明。	長頸型の壺と考えられる。	II区南北溝 87
	8 壺 (小型)	3.6			明茶色	明茶色の細粒子。石灰質微砂粒とサンゴ片が僅かに含まれる。	外面回転磨痕・磨削り・ナデ。内面輪軸痕が顕著。底面雑なナデ。	胴下部に茶紫色の釉が塗れている。	II区な—57 172層
第87回 PL. 96	1 水甕 I	39			明褐色	明褐色の細粒子。粗い石瓦が微量混入。	両面とも回転磨痕。	口縁外面に丸彫りの磨痕2条。口縁内面に磨痕を1条施す。頸下部に磨削痕と磨痕を施す。磨削痕に磨きかけの波状文と円盤貼り付けを6ヶ所に施している。	II区に—57 172層
	2 水甕 II a	43.8			。	。石灰質粗砂粒とサンゴ片が微量混入。	。	口唇の外縁近くに片切彫りの磨痕を2条。肩下部に丸彫りの磨痕2条と磨痕8の波状文。	II区
	3 水甕 II a	42.4			黄褐色	。石灰質粗砂粒が微量に混入。	。	肩下部に丸彫りによる磨痕3条と磨痕5の波状文を施す。	II区な—57 172層

第6表2 沖縄産陶器(荒焼)観察一覧

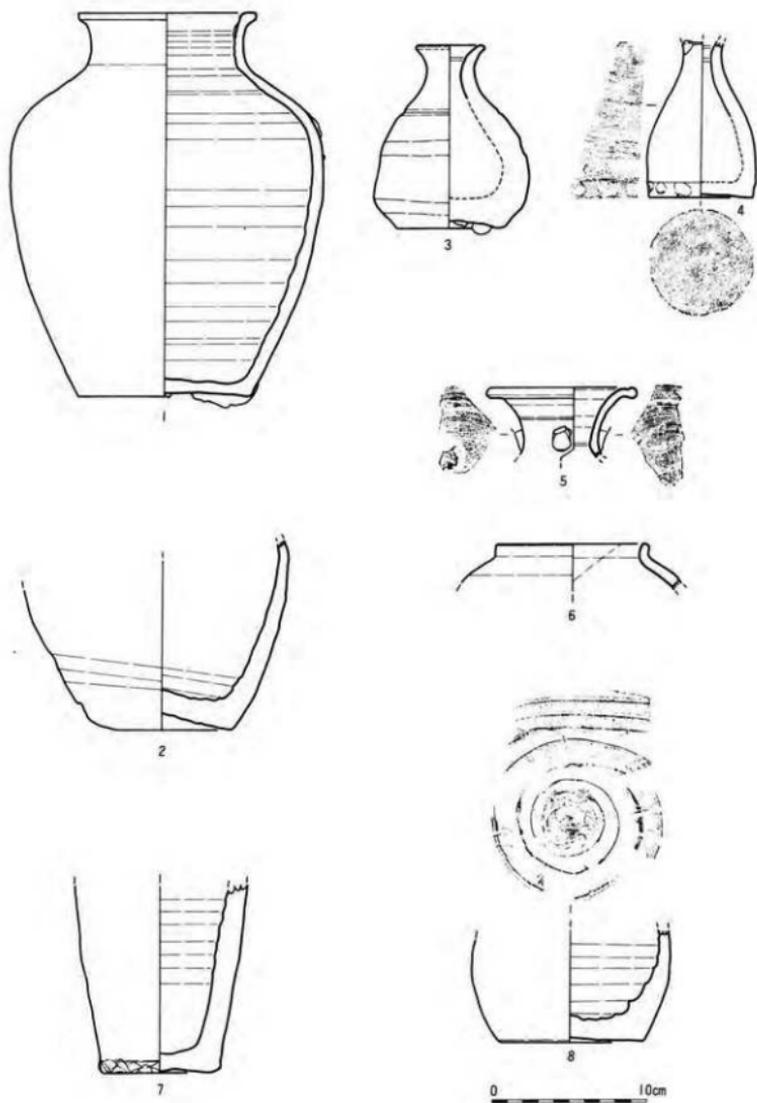
器名	器形	口径	底径	高さ	彩色	素地	表面施装	文様など	出土地点	
第87回 PL. 95	4 罎子 蓋	20.4			茶褐色	茶褐色の微粒子。細かい石英と石灰質砂粒が少量を含む。	外面ナデ。内面回転磨痕。	口縁下部に丸彫り文を2条施す。頸部に貼り付けの菊文。(文様構成や口造りなどから罎子蓋の可能性あり)	Ⅱ区A-18 3F	
	5 水甕 II	53.4			〃 (-)	明褐色の微粒子。素雅な石英と砂粒が僅かに含まれる。	〃	口唇の両端に圓縁を2条。口縁上端に縄目文の貼り付け。胴部に草花文を貼り付ける。	Ⅱ区F-57 1層	
	6 水甕 III	43			〃 (-)	茶褐色の微粒子。〃	両面とも回転磨痕。	肥厚帯下部と胴上部に丸彫りの圓縁。胴部に施さる波状文と円縁貼り付け。頸部に蓋印か工人のへり記号を入れてある。記号は「へ」の字の上の点である。	Ⅱ区C-17 3F層	
	7 罎子 蓋	24.4			黒褐色の釉。	〃	〃	口縁に陰線飾。頸部に陽線飾と片切り彫りの草花文。(罎子蓋の可能性あり)	Ⅱ区E 3F層	
	8 鉢	37.8			淡褐色の釉。	茶褐色の細粒子。細かい石英が僅かに混入する。	〃	口縁に陰線飾と円縁貼り付け。胴上部陽線飾。	Ⅱ区A-57 3F層	
	9 水甕 III	30.3			明褐色	明褐色の細粒子。細かい石英と粗い砂粒が混入。	〃	ナデ質の水甕で、肥厚も大きい。	Ⅱ区E 3F	
	10 水甕 III	18.8			黄褐色 (無釉)	淡茶色の細粒子。石灰質微砂粒が僅かに含まれる。	外面回転磨痕・ナデ・磨削り。内面回転磨痕。底面薄な磨削り。	底面からの立ち上りの部分に磨削りを入れて切り欠きを施す。内面に厚さ2mm程度の凹面状の把手を施す。	Ⅱ区A-57 3F層赤褐色	
	第88回 PL. 97	1 蓋の 蓋	長径 31	18.2		黄褐色 (-)〃	淡褐色の細粒子。微細な石英が少量混入。	外面回転磨痕と磨削り。内面〃	蓋甲頂部に円蓋状の把手を貼り付ける。罎子蓋や水鉢の蓋とみられる。	不明
		2 水鉢 I	26	14.2	17.9	淡褐色の釉。	明茶色の細粒子。微細な石英と砂粒が僅かに含まれる。	〃	口縁部を折り曲げて肥厚をつくる為、頸部に接合面が認められる。頸下部に磨削きの波状文を施す。底飾「メジラネ」	Ⅱ区E 3F
		3 水鉢 II	35	14.2	17.9	明褐色 (無釉)	明褐色	〃	口唇外縁近く片切り彫りの圓縁を1条施す。	Ⅱ区A-57 2層
4 花鉢					灰褐色 (-)〃	淡灰色の粗粒子。粗目の軽石片を多量に含む。	外面回転磨痕と磨ナデ。〃	口唇・口縁・胴中央に縄目文を貼り付ける。胴上部に施される草花文。	Ⅱ区C-58 3層	
第89回 PL. 98	1 小鉢	12.1	8.8	5.9	〃 (-)〃	〃	外面回転磨痕とナデ。〃。底面磨削り後にナデを施す。	施成が悪く、不完全である。口唇の中央から斜位に凹面を行った後に裏面でナデする。瓦質土器の可能性が高い。	Ⅱ区E-44 3層	
	2 罎	23.6			暗褐色 (-)〃	茶褐色の粗粒子。1~3mm程度の大型の石英を多量に含む。	外面回転磨痕・ナデ・磨削り。内面回転磨痕。	口縁内部に着せられた段を造る。口頸部に施される波状文を施す。全体の輪郭が鋭い。	Ⅱ区A、に 一44	
	3 罎? I	14.4			灰褐色 (-)〃	茶褐色の微粒子。石灰質微砂粒が少量に混入。	両面とも回転磨痕。	口縁近く「く」の字状に折れる薄手の縄。口縁内部で僅かに残る。	Ⅱ区A-57 3F	
	4 水注	9.4	8.4		明茶色の釉。	茶褐色の細粒子。〃	〃	口縁が僅かに肥厚し、頸部が短い。注ぎ口が短い割に内径は1.2cmと大きい。蓋形が表に重なり。	Ⅱ区E表3F	
	5 片口 鉢	18			茶紫色の釉。	茶紫色の細粒子。〃	〃	口縁は三角状に肥厚させている。胴上部に注ぎ口を造る。	Ⅱ区D-56 黄褐色	
	6 蓋 (有文)				淡褐色 (無釉)	淡褐色の細粒子。微細な石英と石灰質砂粒を少量に含む。	〃	蓋甲頂部に重合状の把手を造る。甲に磨削きの波状文を施す。	Ⅱ区A-57 3F層	
	7 罎 I	5.4	4.2	4.4	灰色 (無釉)	淡灰色の細粒子。細かい黒色鉱物が僅かに含まれる。	外面磨削りとナデ。内面ナデと指の大小。素地などから瓦質土器の輪郭に入る。	直口口縁の縁で内底面が僅かに盛り上げられている。器色や素地などから瓦質土器と陶器の中間的要素を保持する。	Ⅱ区F-44 4層土器	
	8 罎 II	12.8	5.2	5.3	淡灰色 (-)〃	淡灰色の細粒子。細かい石灰質の砂粒を僅かに含む。	両面とも回転磨痕。高台は外面と裏面が磨削りで内面は回転磨痕。	直口口縁の縁で内底面が僅かに盛り上げられている。器色や素地などから瓦質土器と陶器の中間的要素を保持する。	Ⅱ区C-41	
	9 罎 III	8.8	4.2	5.7	黄褐色 (無釉)	黄褐色の細粒子。〃。希に3mm前後の石灰質片が含まれる。	外面回転磨痕と磨削り。内面回転磨痕。高台は両面及び裏面が磨削り。外底面は回転磨削りとみられる。	口唇を裏で削った後に軽くナデを加えて平坦に仕上げる。瓦質土器と陶器の中間的要素を持つ。	Ⅱ区A-42 1層	
	10 蓋 蓋	8.3	4	2.1	灰褐色 (無釉)	〃。細かい石灰質の砂粒。	〃	平底に中空の筒状の突起を造る。内面口縁は削られている。	Ⅱ区A-81 3F	
11 燈明 蓋	10.3	4	2.8	茶紫色 (無釉)	〃	〃	内磨するベク底面。内面が若干、煤けて暗褐色となる。	Ⅱ区A-57 3F層		
12 火鉢	26.4			〃	〃	〃	円筒形の器形。内面に三角錐状の突起を貼り付ける。外面は方形の有孔把手を貼り付ける。孔は上方から穿たれ、孔の直径は3mmを越える。	Ⅱ区A-57 3F		
13 火鉢 の 底 蓋?	12.4			〃	淡灰色の粗粒子。3mm前後の軽石片を多量に含む。	外面回転磨痕と回転磨削り。内面回転磨痕。底面磨削りとナデ。	円筒形の器で、外底面に円柱状の突起を貼り付けるとする。磨削面は空気の循環などによる変質の状態となる。	Ⅱ区F-57 3層		
14 蓋 不明	8.2			赤紫色 (無釉)	赤紫色の微粒子。	両面とも回転磨痕。底面に同心円状の溝。	口唇で「し」字状に肥厚する。内底面に窪みを入れておくことなどから脚台などが貼り付けられていた可能性もある。	Ⅱ区C-57 3F層		



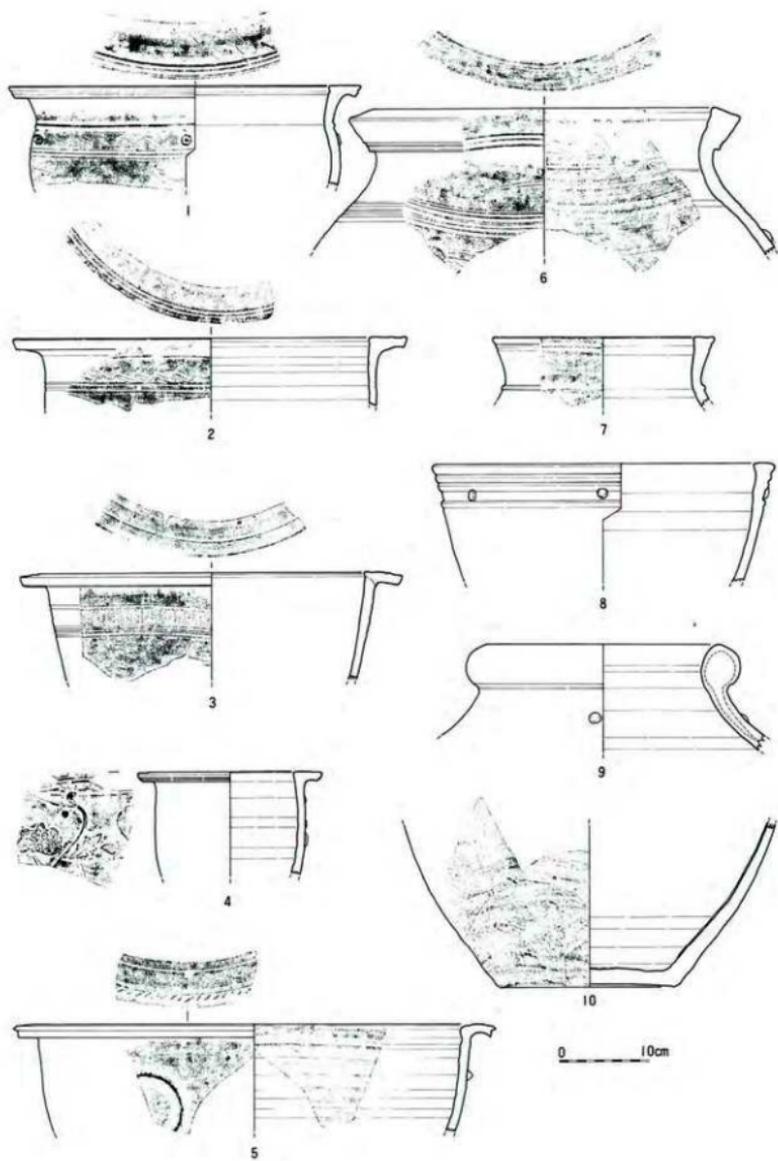
第84図 沖縄産無釉陶器（荒焼）摺鉢



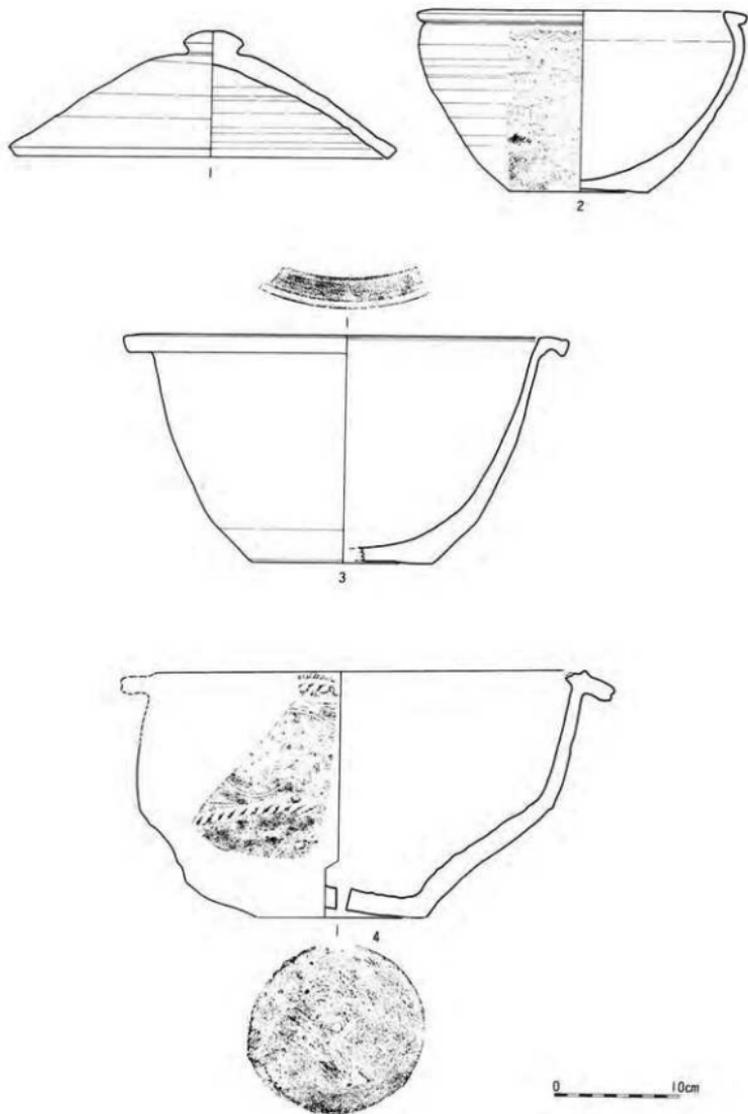
第85図 沖繩産無釉陶器（荒焼）壺



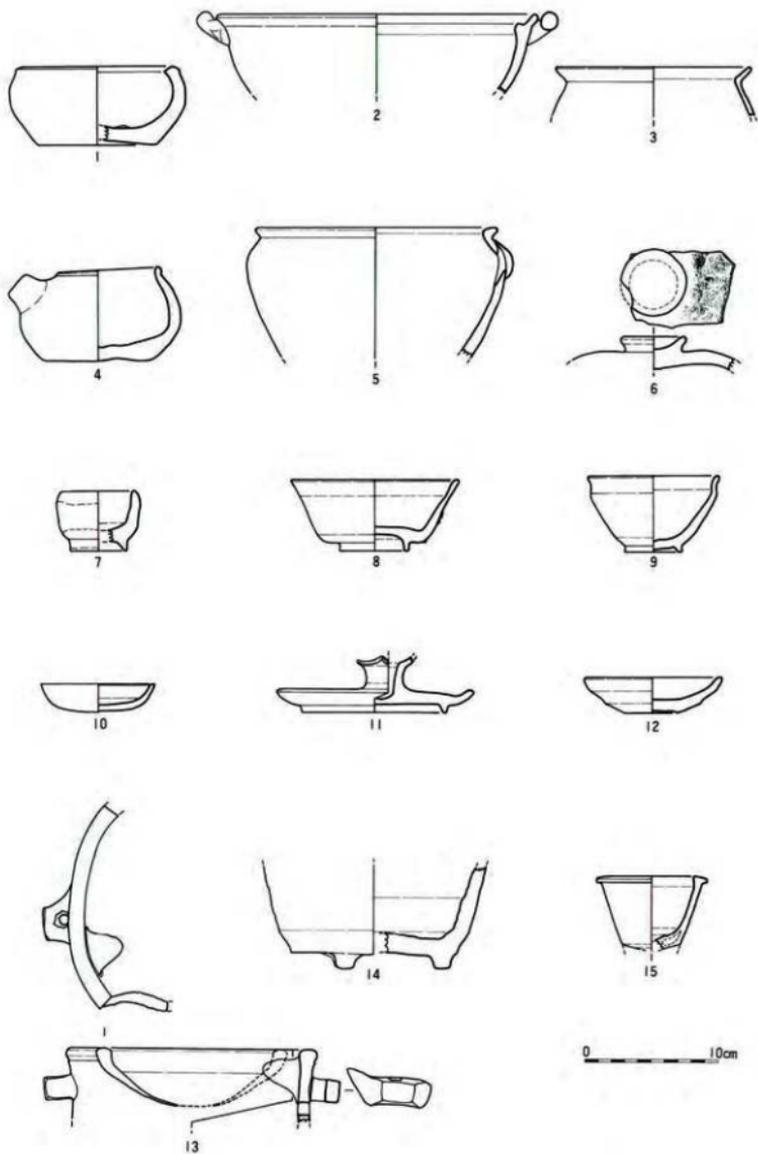
第86図 沖縄産無釉陶器（荒焼）壺・小壺・他



第87図 沖縄産無釉陶器（荒焼）水甕



第88図 沖縄産無袖陶器（荒焼）蓋・水鉢・花鉢



第89図 沖縄産無釉陶器（荒焼）小鉢・鍋・水注・片口鉢・蓋・碗・皿・乗燭・灯明皿・火炉

## 第12節 土器

土器は総て細片化したものであった。量的にも1コンテナにも満たない。土器はグスク時代(註1)相当期に所属するものとタイの半練(ハンネラ)が出土している。タイの半練(ハンネラ)と半練の模倣土器以外は、グスク時代相当期の土器に所属するようである。グスク時代相当期の土器の中でも胎土に貝殻片を混和材として用いているものが注目されたが、他の資料と同様に図示できる程度のもはなかった。しかし、グスク時代相当期の土器で胎土に貝殻片を混和材として使用する例が沖縄本島内で確認されたのは、今のところ阿波根古島遺跡(註2)でしか報告されていない。貝殻片を混和材として使用する地域は、八重山の外耳土器(註3)に多く認められ、一般的である。このような状況からも貝殻片を混和材として使用する例は、沖縄本島内では1遺跡と極めて少ない状況にあるが、今後の調査によっては増加していく可能性の高い資料として考えられる。これは阿波根古島遺跡の報告で、次のように記述した「これを素地の面から考えると貝殻は、どこでも拾え、胎土に混和させることができる点で可能である。」からである。この背景には、八重山の外耳土器そのものが、沖縄本島のグスク及びグスク相当期の遺跡から未だ検出・確認されていない状況からであった。しかし、今回の資料で考えられたのは、時期を下って首里王府時代に陶工若しくは役人等が、八重山地域から資料として持ち込んだかあるいは、阿波根古島遺跡で報告した通りの考え方であろうか。今後、この種の土器については、沖縄本島内での類例資料の発見や確認が増えれば、解明されるものであろう。タイの半練(ハンネラ)(註4)が1片出土していたので、これを図化した(第90図1)。資料は落とす蓋の撮みの破片である。撮みの部分を他の遺跡と比較してみると撮みの部分が異常に大きい点が注目される。同程度のサイズのもは今帰仁城跡でも出土しているようである。撮みの最大直径は4cm、在存高(蓋側面を含む)5.4cmを測る。器色は淡藍色を帯び、胎土に白色や茶色の鉱物片を多量に含んでいる。出土地点はII地区な・に-10攪乱層より得られている。このタイの半練はグスク及びグスク相当期の遺跡から120余片が出土していることからタイとの交易を裏打ちする資料である。又、タイの半練を模倣したものが(第90図2)III地区は-48淡褐色土層から出土している。サイズは直径9.4cm、高さ2.7cmを測る。

### 註

註1. 現在のところ12世紀~15・16世紀考えられている。

註2. 金城亀信ほか「阿波根古島遺跡」 沖縄県教育委員会 1990年。

註3. 鳥居龍蔵「沖縄諸島に移住せし先住民に就いて」 人類学雑誌 第20巻 第227号日本人類学会 1905年。

註4. 金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No11 日本貿易陶磁研究会 1991年。

## 第13節 陶質土器

陶質土器の器種と鍋・炉・手焙（火舎）・鉢・急須・皿・小壺の他に鍋や急須の蓋が確認されている。特に鍋は「サークナービ」として通称されているものが、最も多く出土している。他の器種は希少であった。これらの陶質土器は壺屋においては「アカムネー」（註1）と総称されている土器群であったようである。陶質土器の特徴として胎土は精選され、その成形が轆轤引きで、薄く仕上げる。器色は燈褐色もしくは黄褐色を帯びている。焼成は悪く脆いものが多い。

### 1. 鍋

鍋については復元できた資料は得られてはいないが、全体的な傾向からすると口縁に粘土紐状の把手を貼り付けている。底部については伊良波西遺跡（註2）の例から丸味を持つことが確認されている。最近の例では、この種の鍋の原型もしくは陶質土器を模倣した陶器が安仁屋トゥンヤマ遺跡（註3）から報告されている。安仁屋トゥンヤマ遺跡の沖繩製陶器には黄緑色の釉を胴部中央まで施している。また、底部には三角錘状の突起を三個貼り付けて足としている。

第90図3は口径22.6cmを測る資料で、胎土に雲母・赤色物質を混入させている。色調は明黄色を帯びている。II地区に-57攪乱層II層から出土している。

### 2. 炉

炉は鍋に次いで多い器種である。器形は概して内湾するものが多く、口縁内部に3個程度の突起を貼り付けている。また、胴上部には有孔の把手を2個貼り付けている。高台を造るのも特徴である。中には白化粘土による横線が轆轤痕と平行するかのように残っている。

炉の資元資料の3個体での平均サイズは口径15cm、底部8cm、高さ10cmであった。その他に最も大きなものは口径25cm、高台径17.5cm、高さ17cmのものがあった。最小は13.6cmを測るものがあった。

第90図4は外面に白化粘土による模様が轆轤痕と平行した状態で6条残されている。胎土に雲母・石灰質微砂粒が混入する。器色は燈褐色を帯びている。口径は13.6cm、高さ10.3cm、高台径8.6cmを測る。II地区に-57の攪乱層から出土している。

### 3. 手焙（火舎）

手焙（火舎）の資料は総て破片資料であった。特徴として口縁近くで「く」の字状に折れ、有孔の把手を2個貼り付けているものが多いようであった。

### 4. 鉢

鉢の中には水鉢・浅鉢・花鉢が含まれている。各種とも1点ずつ図化した。以下、記述する。

第90図5は内湾口径の水鉢で、口縁に櫛描きの波状文と横沈線文を施している。推算口径は21.2cmを測った。胎土に雲母・赤色物質が含まれている。器色は淡燈色を帯びている。II地区に-59の攪乱層から出土。

第90図6浅鉢の資料で、全体的に大きく開き気味の器形である。口縁部で「く」の字状に折れる。胎土に雲母・石灰質微砂粒の他に小型の巻き貝を混入させていたようである。巻き貝が落ちてしまっている。器色は淡燈色を帯びている。推算口径は、28.8cm、II地区に-50第3層から出土。

第90図7は小振りの花鉢である。口縁部を外反させて口唇を幅広く仕上げている。全体的な形は、円筒型に近い。底面には外側から直径1.7cmの孔を穿っている。穿孔部分は、指などで調整している。外底には糸切り痕が認められる。外面にはベンガラと思われる赤色顔料が施されていたようであるが大半は剥落している。胎土に雲母・赤色物質を混入させている。口径10.8cm、底部5.8cm、高さ7.5cmを測っている。II地区に-57攪乱層の出土。

### 5. 急須

急須の資料として1点のみ図化した。第90図8は注ぎ口と把手の吊り下げの部分が残っている。特に口縁部の厚さは2mmと非常に薄く仕上げている。胎土に雲母、赤色物質が混入している。

色調は全体的に淡橙色を帯びているが、部分的に煤けている。推算口径7.6cmを測った。II地区た-59攪乱層より出土。

#### 6. 皿

皿は第90図9に図示した資料が1点のみ得られた。底はいわゆるベタ底と称されるタイプのもので、底部から直線的に外側へ逆「ハ」の字状に開いている。胎土に雲母、赤色物質、石灰質砂粒が混入する。口径11.1cm、高さ3cm、底径4cmを測る。II地区な-57攪乱第3層の出土。

#### 7. 小壺

第90図10に示す1点が出土している。口縁部は微弱に肥厚し、僅かに外反する。頸部で「く」の字状に折れ、胴上部で大きく外側に張り出す。全体的に丸味のある器形となっている。器色は淡橙色を帯びている。胎土に雲母、石灰質砂粒が混入している。口径4.9cm、高さ4.5cm、高台径3.5cmを測る。II地区63-攪乱第2層出土。

#### 8. 鍋の蓋

復元可能な資料を1点のみ図化した。第90図11はつまみの部分を高台様に仕上げている。つまみ径は5.9cmを測る。最大直径5.8cm、高さ4.5cmを測る。胎土に雲母、赤色物質、石灰質微砂粒が混入する。II地区に-57出土。

#### 9. 急須の蓋

蓋の中でも蓋甲上部に孔を三孔穿つたものが1点出土していたので、これを図化した。蓋の形態としては他の資料と同一形態である。第90図12は分銅状の紐みを貼り付け、周辺に直径6mmの孔を三個穿っている。器色は淡黄色を帯びる。胎土に雲母、赤色物質、石灰質砂粒が混入する。蓋甲には赤色顔料(ベンガラ)が僅かに残っている。II地区に-56攪乱第1層出土。

#### 10. 土鈴

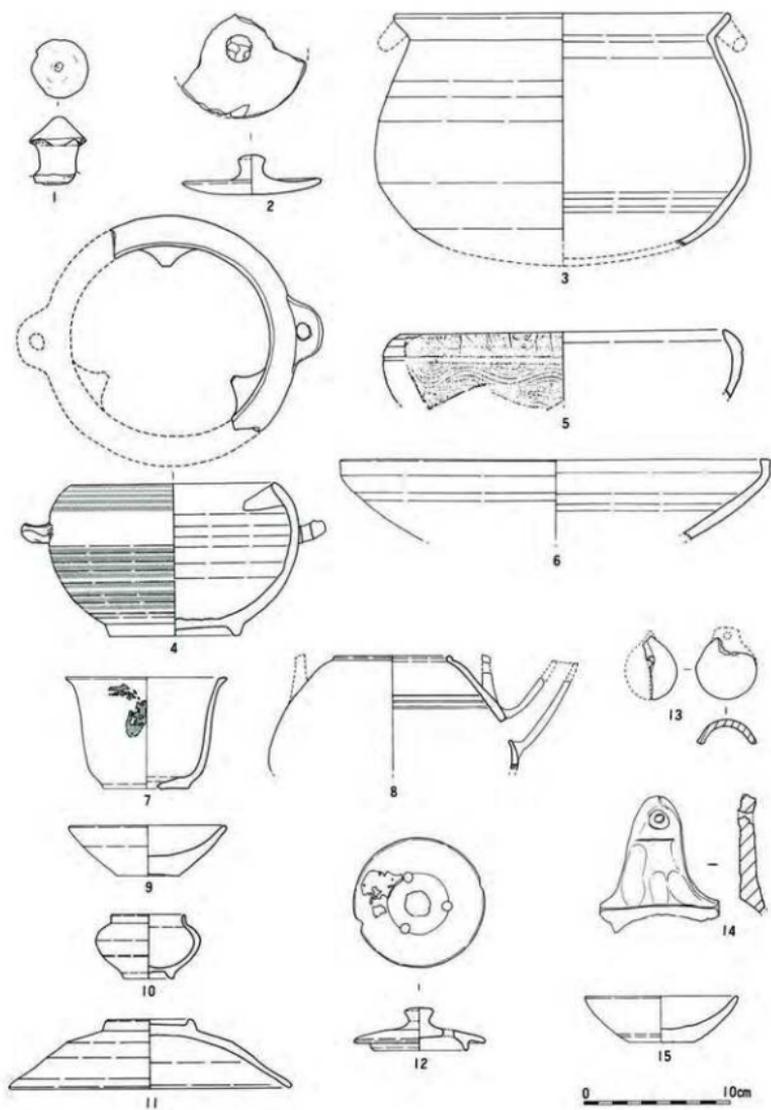
第90図13に示す資料である。把手の部分と身の半分近くが欠けている。身の中央には孔の痕跡が2カ所認められ、孔の直下から身の下半分は篋などによる切り込みによって生じた面が観察される。胎土に雲母、石灰質砂粒が混入している。器色は淡黄色。II地区表土攪乱層出土。

#### 11. 用途不明

用途不明としたものは柄状の把手である。2点得られているが、良好なものを1点図化した。第90図14は把手の先端部分に5mm程度の孔を裏面から穿っている。外面の孔の周辺には孔の周辺に陶土を貼り付けている。胎土に雲母、赤色物質、石灰質微砂粒が混入している。色調は淡黄色。II地区な-57攪乱第2層出土。

#### 小 結

湧田古窯跡出土の陶質土器の中で、皿の資料(第90図9)が無軸焼き締め陶器皿と同一器形で、サイズも近似する事が確認された。この陶器皿とは、第90図15に図示したものである。他に1点得られている。この陶器皿と陶質土器の皿は、出土地点や層も一致している。陶質土器の皿が、陶器皿を模倣して登場したものであるのか、あるいはその逆であるかは、陶質土器の鍋と同様に判然としないが、基本的には陶器からの模倣かと考えられるところである。小壺の類例として御細工所跡(註4)から出土しているようである。



第90图 陶质土器

## 註

- 註1. 宮城篤正 『陶器』第三章 生業 那覇市史資料編 那覇の風俗 第2巻中の7 1979年。  
 註2. 大田宏好 『伊良波西遺跡』豊見城村教育委員会 1986年。  
 註3. 島袋洋ほか 『安仁屋トゥンヤマ遺跡』沖縄県教育委員会 1992年。  
 註4. 島 弘ほか 『御細工所跡』那覇市教育委員会 1991年。

## 第14節 瓦質土器

瓦質土器は、陶質土器に次いで多く出土している。器種は甕、鉢（植木鉢、こね鉢、水鉢、浅鉢、摺鉢）・壺（長頸壺、短頸壺）・炉（手焙、火舎を含む）・香炉・碗・杯・皿（灯明皿）・鍔釜・漏斗の12種類が確認されていて、他の土器に比べ変化に富んでいる。その他に置物（龍・獅子・蛙・亀と鶴）や人形なども出土している。これらは素材も同一であったので、本項で述べる。個々の遺物の特徴について、第7表に示した。また、植木鉢と摺鉢の口径については第8表と第9表に呈示した。

県内では瓦質土器の出現時期は、浦添城跡（註1）、勝連城跡（註2）などの例から14世紀中頃から始まるものと推定されるが、終末時期については今日まで、よく判らなかつたが、本遺跡から萬曆33年（1605年）の銘入りの浅鉢が出土していることから17世紀初頭までは確実に存在することになるが、その後も製作していることが予想されるので、17・18世紀として幅をもたせて位置づけたいところである。ところで、グスク出土の瓦質土器には口縁部や胴部に「菊花文」・「格子目文」などでスタンプや篋描きを施した例が多いようである。「菊花文」は、本土の中世遺跡の瓦器の手焙によく認められることから本土の中世瓦器が持ち込まれたか、あるいはそれを模倣して発生したものと考えられるが、本土の中世瓦器と県内の瓦質土器を明確に区別出来るかどうかは現段階では困難である。これは本土の中世瓦器そのものを早急に確定していく作業が未着手である為である。

しかしながら湧田の瓦質土器も本土の中世瓦器や陶器の影響を受けて発展してきたものと推察される。例として摺鉢、鍔釜などがある。摺鉢は今帰仁城跡（註3）などから出土している備前焼摺鉢を模倣あるいは影響を受けて登場してきたものとして考えられる。（伊東見・上西節雄の備前焼摺鉢編年のIV～V期に相当する摺鉢）。鍔釜についても千葉地遺跡（註4）・草戸千軒（註5）などからも出土していて、本土の中世遺跡ではある程度定着したものとみられ、これの模倣や影響を受けてきたか今のところ考えられる。但し、湧田と同一の鍔釜は未だ、グスク及びグスク相当期の遺跡から発見されていない為、将来に期待したい資料である。その他にモミガラを多量に混入させて、焼き上げた資料が2・3点出土している様である。モミガラを意識的に混入させていることが注目される。この種の例は我謝遺跡（註6）の瓦質土器に認められるようである。湧田の摺鉢については摺り目の磨耗しているものは1点も確

第8表 摺鉢口径一覧

cm	20～	23～	24～	25～	26～	27～	27～	28～	30～	32～	38～	合計
	20.9	23.9	24.9	25.9	26.9	26.9	27.9	28.9	30.9	32.9	38.9	
個数	1	1	1	3	1	2	1	2	1	1	1	15

第9表 摺鉢口径一覧

cm	20～	35～	36～	38～	39～	50～	53～	55～	91～	合計
	20.9	35.9	36.9	38.9	39.9	50.9	53.9	55.9	91.9	
個数	2	2	1	1	1	1	1	1	1	11

認されていないことが注目された。これについては今のところ根栽植物（イモなど）を直接摺り潰せば  
磨耗が認められなくなることが考えられるようである（註7）。

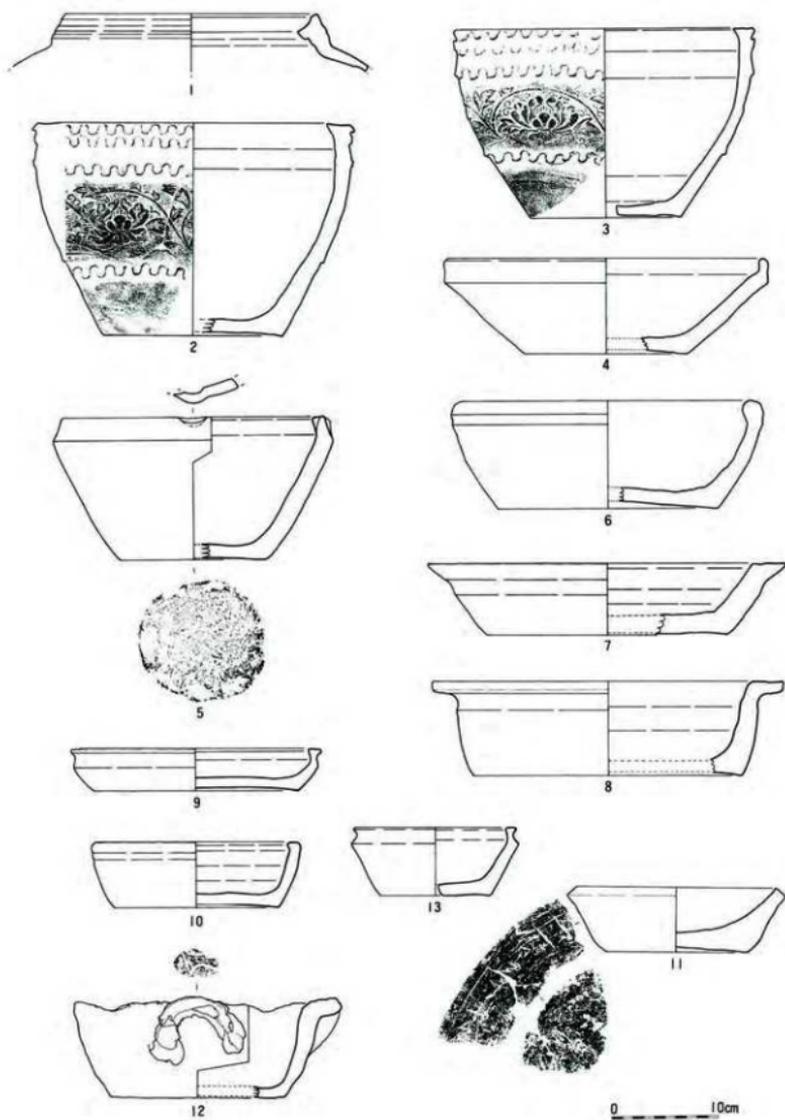
#### 註

- 註1. 下地安宏ほか「浦添城跡発掘調査報告書」浦添市教育委員会 1985年。
- 註2. 安里嗣淳ほか「勝連城跡」勝連町教育委員会 1984年。
- 註3. 金武正紀他「今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ」今帰仁村教育委員会 1983年。
- 註4. 千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』1982年。
- 註5. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒調査研究ニュース』No25 1975年。
- 註6. 大城慧ほか『我謝遺跡』西原町教育委員会 1982年。
- 註7. 宮城篤正（浦添市立美術館館長）より教示を戴いた。記して謝意を表わしたい。

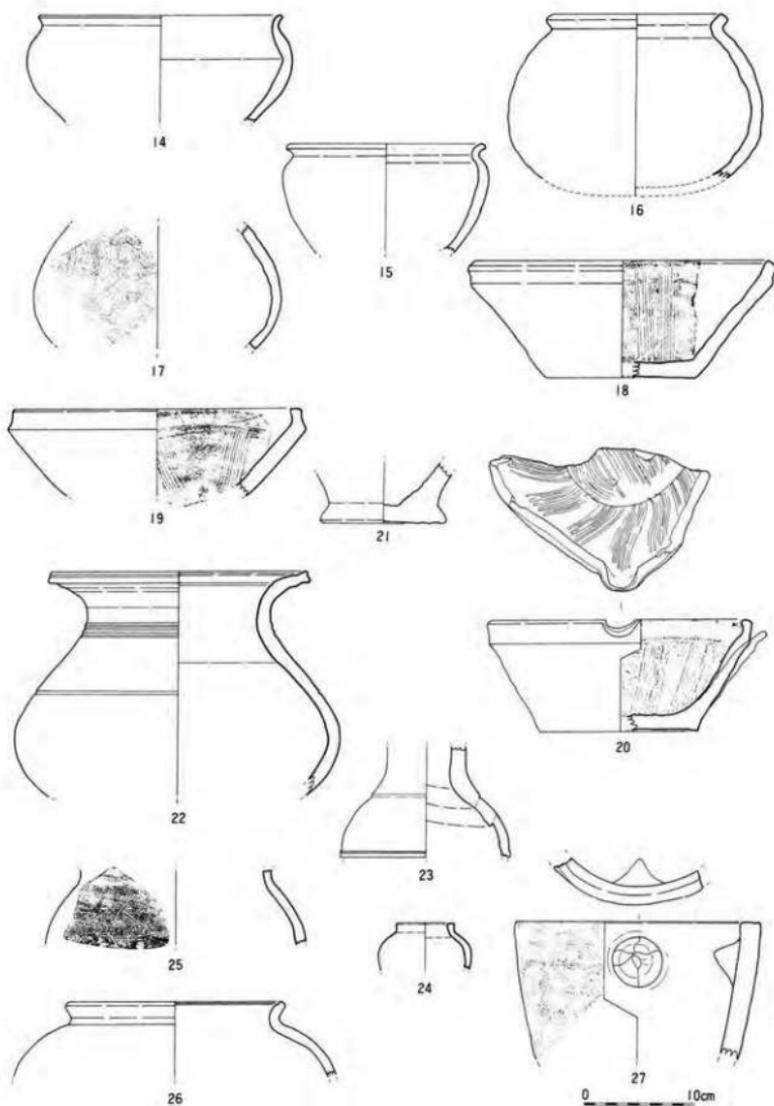
第7表 瓦質土器観察一覽

分類	種別	分組	出土層(年代)	形状	表面装飾(有)	断面形状(内)	底形状	文様等	備考	出土地点
第100号 Pl. 100	1	土器	23.3	淡青色	不明(輪郭?)	不明	A, B, C		器面が全面に穿成。	1区24瓦質硬直土層
	2	土器	29.9, 16.8, 13.8	淡灰色	回転彫痕・横線	横線・彫痕	A, C, B	底状凸帯・溝・遺文	底面が穿成彫りあり。	1区24第1瓦層
	3	土器	27.4, 13.9, 11.4	淡灰色	回転彫痕・横線	横線・彫痕	A, C, B	底状凸帯・溝・遺文	底面から底径1.8cmの孔を穿つ。	1区24第10層土層
	4	土器	25.8, 13.8, 8.4	淡褐色	回転彫痕?	横線・彫痕?	A, C, B		底面に穿成彫りあり。	1区24第4層
	5	土器	25.9, 13.9, 12.1	淡灰色	不明	不明	A, C		底面に「L」字状の凹記号。	1区24第3号井戸内
	6	土器	21.8, 10.4, 10.2	淡灰色	回転彫痕?	横線	A, C, B	沈線文	底面に丁字状彫りあり。	1区24第3層
	7	土器	22.1, 12.2, 11.8	淡灰色	回転彫痕?	横線	A, C, B, D		器面が全面に穿成。	1区中央石段遺構3瓦層
	8	土器	22.1, 13.0, 9.3	淡褐色	回転彫痕?	横線	A, C, B		底面に穿成彫りあり。	出土不明
	9	土器	18.9, 11.2, 4.2	明褐色	回転彫痕・彫刺	横線・彫痕	A, C	沈線文	底面に穿成彫りあり。	1区24第2層
	10	土器	22.0, 13.0, 4.1	灰褐色	彫痕	回転彫痕	A, C, B		底面に穿成彫りあり。	1区24第2層
	11	土器	23.0, 14.0, 8.0	明褐色	彫刺・彫り・付	彫刺・彫り・付	A, C, B	逆「L」字状把手	把手上面に「」の凹記号。	1区24第3層
	12	土器	19.2, 10.2, 8.4	明褐色	付・彫刺	横線・付	A, C, B		底面に3.7cmの孔を穿つ。	1区24第1層
	13	土器	21.0	明褐色	回転彫痕・彫刺	横線・彫痕	A, C		外面の彫刺には線である。	1区24第1瓦層
	14	土器	17.2	明褐色	回転彫痕・彫刺	横線・彫痕	A, C, B			1区24第4層
	15	土器	14.9	明褐色	彫痕・彫刺	付・彫痕	A, C, E, B		底面に穿(1.1?)の圧痕あり	1区24第3号井戸内
	16	土器	27.4, 13.2, 10.5	明褐色	彫刺・彫り・付	彫刺	A, C, B	横線文	器口は穿(1.1?)	1区24第5層
	17	土器	27.4, 13.2, 10.5	明褐色	彫刺・彫り・付	彫刺	A, C	3葉一組	器口の穿は残らない。	1区24第5号砂層
	18	土器	27.2	淡灰色	回転彫痕・彫刺	横線	A, C	2葉一組	器口の圧痕あり。	1区24第4層
	19	土器	23.6, 14.7, 10.9	明褐色	回転彫痕	回転彫痕	A, C	9葉一組	器口の穿は残らない。	1区24第3瓦層
	20	土器	11.5	明褐色	彫痕	不明	A, E, C, B		底面に穿(1.1?)の圧痕集中	1区24第4層中部
	第102号 Pl. 102	21	土器	32.8	明褐色	回転彫痕	回転彫痕	A, C, B	凸帯文・凹文	最大径23.0cm。
22		土器	32.8	明褐色	彫刺・彫り・付	彫刺・彫り・付	A, B, C	凸帯文・凹文	最大径23.2cm。	1区24第10層土層
23		土器	32.8	明褐色	彫刺・彫り・付	彫刺・彫り・付	A, B, C	凸帯文・凹文	丁字に仕上げ。	1区24第2層土層
24		土器	32.8	明褐色	彫刺・彫り・付	彫刺・彫り・付	A, C, B	凸帯文・凹文	最大径23.1cm。	1区24第3層土層中部
25		土器	32.8	明褐色	彫刺・彫り・付	彫刺・彫り・付	A, C, B	凸帯文・凹文	最大径23.1cm。	1区24第3層土層
26		土器	32.8	明褐色	彫刺・彫り・付	彫刺・彫り・付	A, C, B	凸帯文・凹文	底面に穿(1.1?)の圧痕あり。	1区24第3層
27		土器	13.9, 13.2, 8.0	淡灰色	回転彫痕・彫刺	回転彫痕	A, C, B		器口内面に横溝付。	1区24第5層
28		土器	10.8, 9.8, 8.9	淡褐色	回転彫痕	回転彫痕	A, C, B		口唇部に横溝付。	1区24第5層
29		土器	8.4, 7.4, 8.9	淡灰色	回転彫痕・彫刺	回転彫痕・彫刺	A, C		3葉形。	1区24第5層
30		土器	8.2, 8.3, 5.8	淡灰色	回転彫痕・付	回転彫痕	A, C, B		同上。口唇上に横溝付。	1区24第2瓦質硬直土層
31		土器	12.3, 10.8, 6.7	淡褐色	回転彫痕・彫刺	回転彫痕・付	A, C, B		同上。外側に横溝付。	1区24第2瓦層
32		土器	11.4, 11.1, 10.5	明褐色	彫刺・付	彫刺・付	A, C, B		丸に凹文・草	彫刺あり?
33		土器	11.4, 11.1, 10.5	明褐色	彫刺・付	彫刺・付	A, C, B		丸に凹文・草	彫刺あり?
34		土器	8.0, 4.4, 5.5	淡褐色	回転彫痕・彫刺	回転彫痕・彫刺	A, C		口唇部に横溝付。	1区24第3層
35		土器	52.8, 11.2, 5.0	明褐色	回転彫痕・彫刺	回転彫痕	A, C		口唇部が壊れる。	1区24第3層
36		土器	11.8, 10.2, 5.5	淡褐色	回転彫痕・彫刺	回転彫痕・彫刺	A, C, B		内面に孔を穿つ途中で止まる。	1区24第2層
37		土器	8.4, 4.5, 5.4	明褐色	回転彫痕・彫刺	付・彫刺	A, C			1区24第4層
38		土器	11.8	灰褐色	彫刺・付	彫刺・付	A, C		丁字に横溝を付し、仕上げ。	1区24第1瓦層
39		土器	8.4, 4.0, 3.0	淡灰色	彫刺・付	付	A, C		内面に横溝付。	1区
40		土器	8.4, 4.0, 3.0	淡灰色	彫刺・付	付	A, C		内面に横溝付。	1区24第2層瓦層中部
41		土器	9.1	淡褐色	回転彫痕・彫刺	回転彫痕	A, C		最大径23.1cm。横溝付。	1区24第2層
42	土器	13.9	明褐色	回転彫痕	回転彫痕	A, C, D		底面に浅い凹帯	最大径23.7cm。	
43	土器	13.9	明褐色	回転彫痕・彫刺	彫刺	A, C, B		同心円状の文様	最大径23.1cm。	
44	土器	13.9	明褐色	付	彫刺・付	A, C		最大径23.0cm。有孔。	1区24第2層	
45	土器	13.9	明褐色	彫刺・付	彫刺・付	A, C, B		最大径23.0cm。中央。	1区24第3層	
46	土器	10.8, 2.8, 2.8	淡褐色	彫刺・付	彫刺・付	A, C, B		最大径13.1cm。	1区24第3層	
47	土器	8.0	淡灰色	彫刺・付	回転彫痕	A, C		「」の凹記号あり。	1区	
48	土器	13.9	明褐色	彫刺・付	彫刺・彫り	A, C, B		逆「L」字状把手	1区24第1瓦層	
第103号 Pl. 103	49	土器	12.3, 12.2	淡褐色	付	付	B, F		淡褐色の自然焼付。陶器。	1区24第1瓦層
	50	土器	厚さ 輪1. 高さ 11.3, 4.3	淡灰色	彫刺・付	彫刺・付	A, C		彫刺にて表出。	1区24第1層
	51	土器	厚さ 輪1. 高さ 11.3, 4.3	淡灰色	彫刺・付	彫刺・付	A, C		同上。	1区24第1層
	52	土器	厚さ 輪1. 高さ 11.3, 4.3	淡灰色	彫刺・付	彫刺・付	A, C		亀と蛙の絵(有孔)。	1区24第2瓦層下部
	53	土器	厚さ 輪1. 高さ 5.8, 3.8	淡褐色	彫刺・付	付	A, C, B		蛙?	2層下部
	54	土器	厚さ 輪1. 高さ 5.8, 3.8	淡褐色	彫刺・付	底面・彫刺	A, C		亀と蛙。	1区24第3層
	55	土器	厚さ 輪1. 高さ 5.8, 3.8	淡褐色	彫刺・付	彫刺・付	A, C, B		人面?	1区24第2瓦層
	56	土器	厚さ 輪1. 高さ 5.8, 3.8	明褐色	彫刺・付	彫刺・付	A, C, B		亀?	1区土層
	57	土器	厚さ 輪1. 高さ 5.8, 3.8	淡灰色	彫刺	彫刺	A, C, B		亀?	1区24

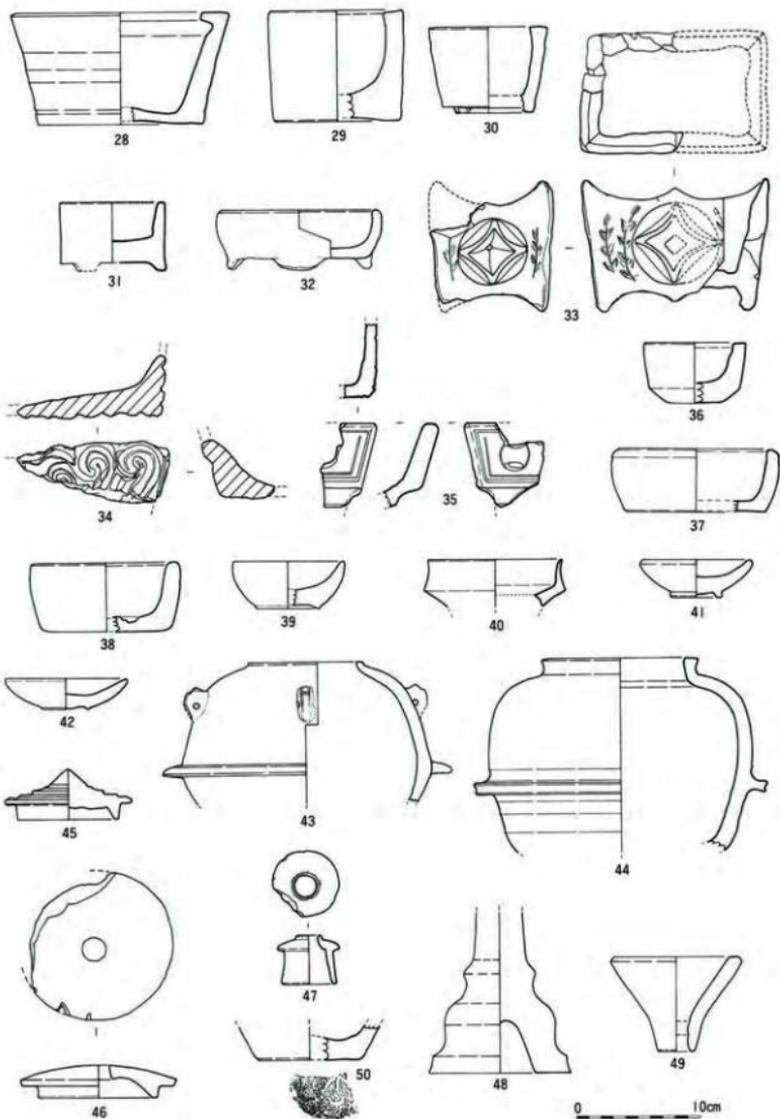
注: 土器の多くは多層に記した。土器のAは霞母(緑片化)、Bは石英、Cは赤色・灰褐色の物質、Dは石炭質砂、Eは1.5、Fは紫褐色物質



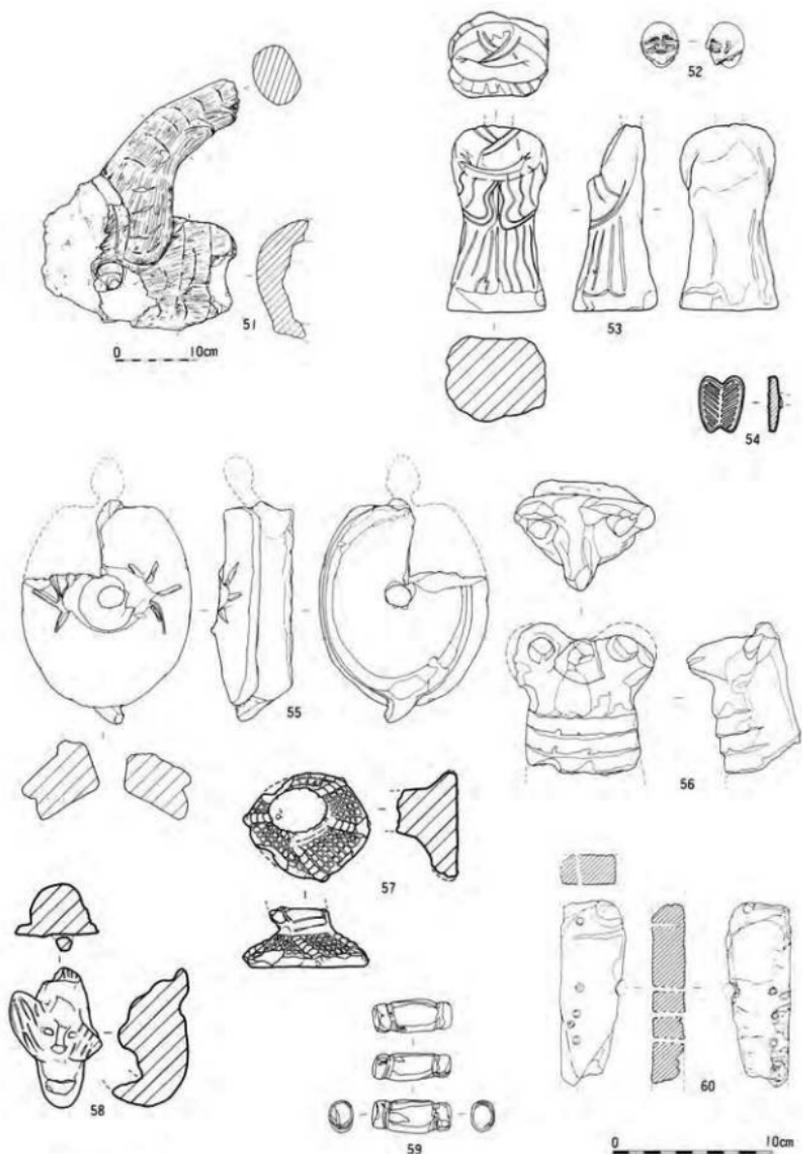
第91図 瓦質土器



第92図 瓦質土器



第93图 瓦质土器



第94図 瓦質土器

## 第15節 瓦類

今回の調査で膨大な量の瓦類が得られている。ほとんどのものが小破片であるが、完形のものも多く見受けられる。軒瓦の型、窯入れしていないものやかなり変形したもの、数枚～10枚前後のものが焙着したものなどもみられ、生産地としての状況を如実に物語るようであった。種類的には軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、塙瓦などの屋根瓦類と塙、レンガなどがみられる。これらの製品のほとんどが灰色のもので、本遺跡は灰色瓦を主に焼いた窯場であることが確認された。また、瓦はほとんどが明式瓦と呼ばれるもののように、丸瓦は2つ切り、平瓦は4つ切りである。また、これらの製品の中には○に大の字など数種の文字が記されるマークのようなものがみられるものも認められる。以下、今回得られた瓦類について種別に概略を述べる。

### 1. 軒丸瓦

ほとんど瓦当部のもので、代表的なものを第96図に示した。ほとんどが直径約17cmのものであるが、1は約19cmを測る。外区の幅は1cm前後で、無文。内区に連珠と花文を配しており、文様は数種見受けられる。1～4および6～11はそれぞれひとつの流れの中で捉えられようか。前者のものは後者のものに比べ、連珠が密に配されるようである。また、瓦当部の取り付け状況も若干異なるようである。第97図17は玉縁部までであるが、瓦当部の直径が約15cmとやや小さ目で、無文である。全体的な状況が赤瓦に近く、縁の部分に漆喰の付着もみられる。

### 2. 丸瓦

第97図に示した。今回得られたものからすると、筒は直径が約10cmのようである。左右の縁は割ったままの状態で、玉縁部の裏側だけ削って調整している。全体の長さは約33cmで、玉縁部は5cm前後。厚さは2cm弱のものが普通のものである。16は玉縁部が小さ目で、縁部を丁寧に調整しており、色合も赤瓦に近い。12は○に大の字のスタンプが押されている。

### 3. 軒平瓦

瓦当部のもものがほとんどで第98図に示した。髷瓦ともよばれる。施される花文に数種みられるようである。垂れ部の長さが約13cmのもの（8～10など）と約12cmのもの（1・3～7）がみられる。谷部の凹みもやや深いもの（1・3～10）や浅いもの（2～7・13・14）などが見受けられ、谷部の凹みが浅いものは、垂れ部が短めのものに多い傾向がみられるようである。2は他の資料に比べ、やや小振りのものである。

### 4. 平瓦

第99図に5点だけ示した。5は数枚のものが溶着した例である。長さ約25cm、頭幅が約25cm、尻幅が約21cmで、谷部は約3.6cm、厚さ2cm弱のものが普通のものである。凹面には桶を繋ぐ紐の痕も残り、板の幅は約4cmである。桶は頭部の直径が約35cm、尻部の直径が約27cmかと想定される。

### 5. 塙瓦

第100図に3点を示した。1は山形になるもので、一辺の幅が約12cm、左側の面に○に大の字のスタンプがみられる。長さは約22cmで、上端では表面に、下端では裏面に1.5cmほどの切り込み部が設けられている。2・3は大体25×30cmの大きさで、裏面の左側は斜めに削られ、鍵状の把手が左寄りに付される。厚さは約3cmで、2と3は上・下端の切り込み部の面が逆になっている。

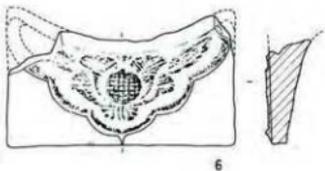
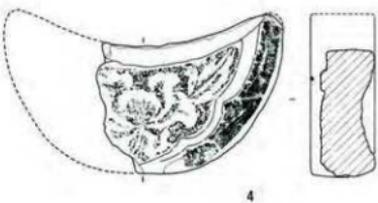
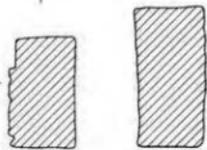
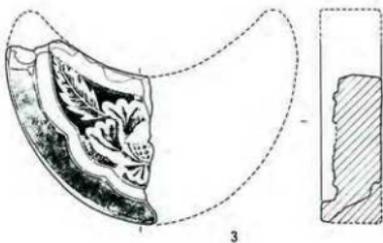
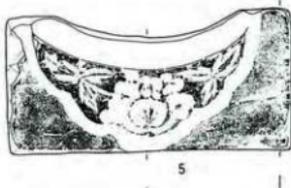
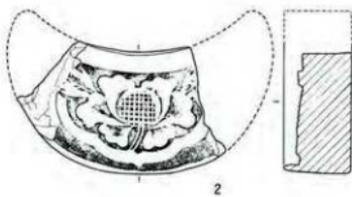
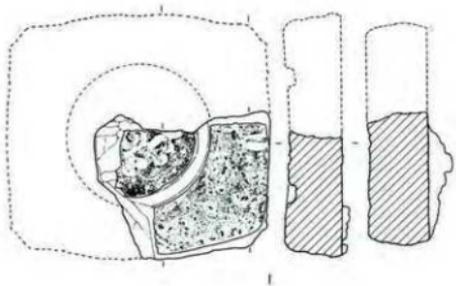
### 6. 塙

第100図4～6、第102図に示したものである。3cmぐらいの厚みで、大体26cmの方形状を呈し、平坦に仕上げられている。表面はより丁寧な仕上げで、側縁部は裏面の方へ若干斜めに整形されている。第100図4～6のように表面に草花文を配したものも見受けられる。4は上下2段に同じような文様がみら

れ、5・6は一団の文様を半分にしたような三角形形状のものである。第101図6の無文の三角形を呈すものは、○に大の字のスタンプがみられる。

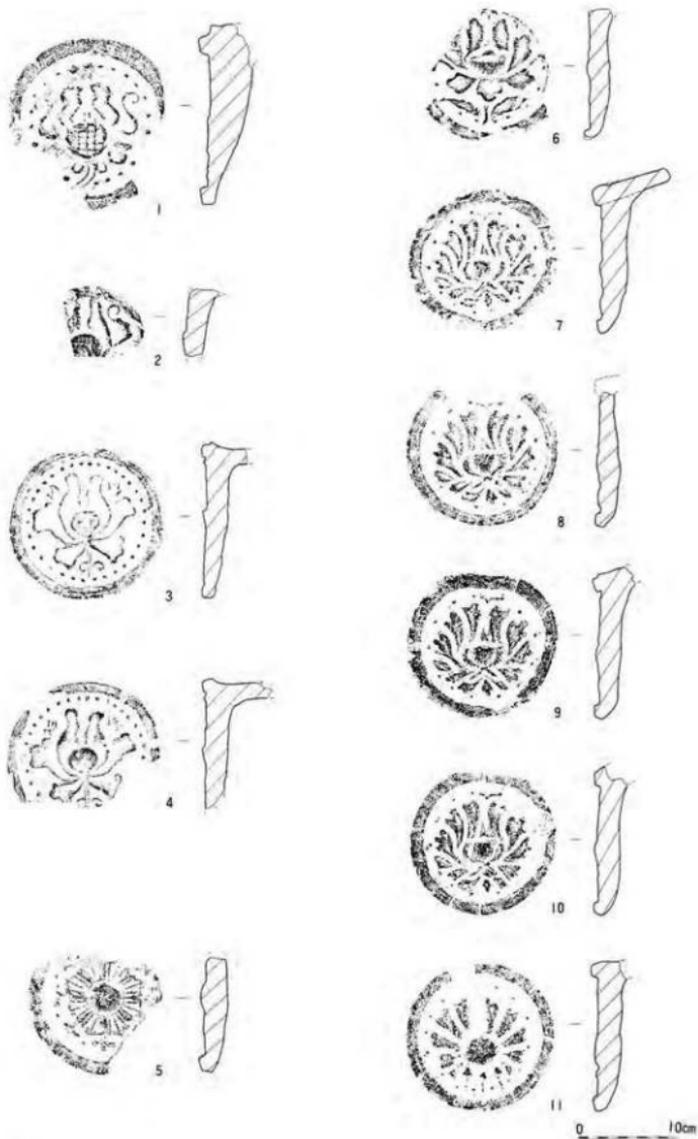
#### 7. レンガ

8 cm前後の厚みを有すもので、第102図に示した。直方体のものであるが、凹面となる面を有するものが多く、細かくみると若干のバリエーションがみられる。かなりひび割れの入るものが多く、部分的に色の異なるものが目につく。

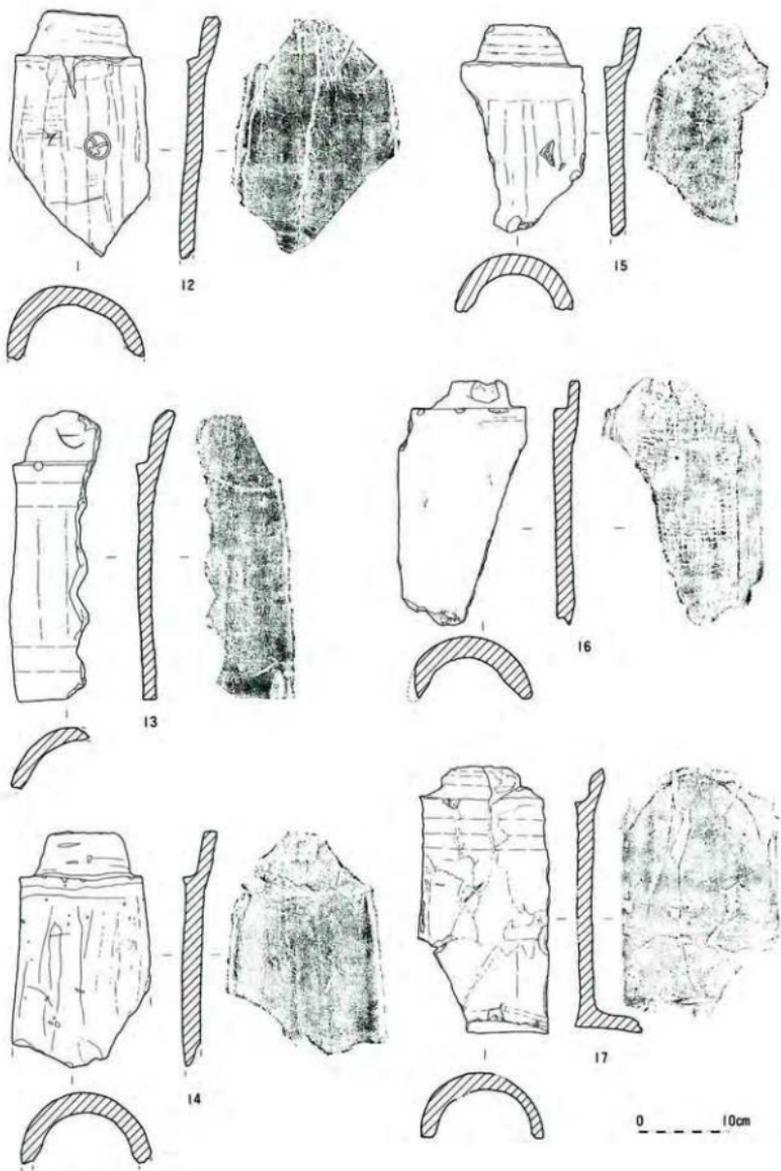


0 ——— 10cm

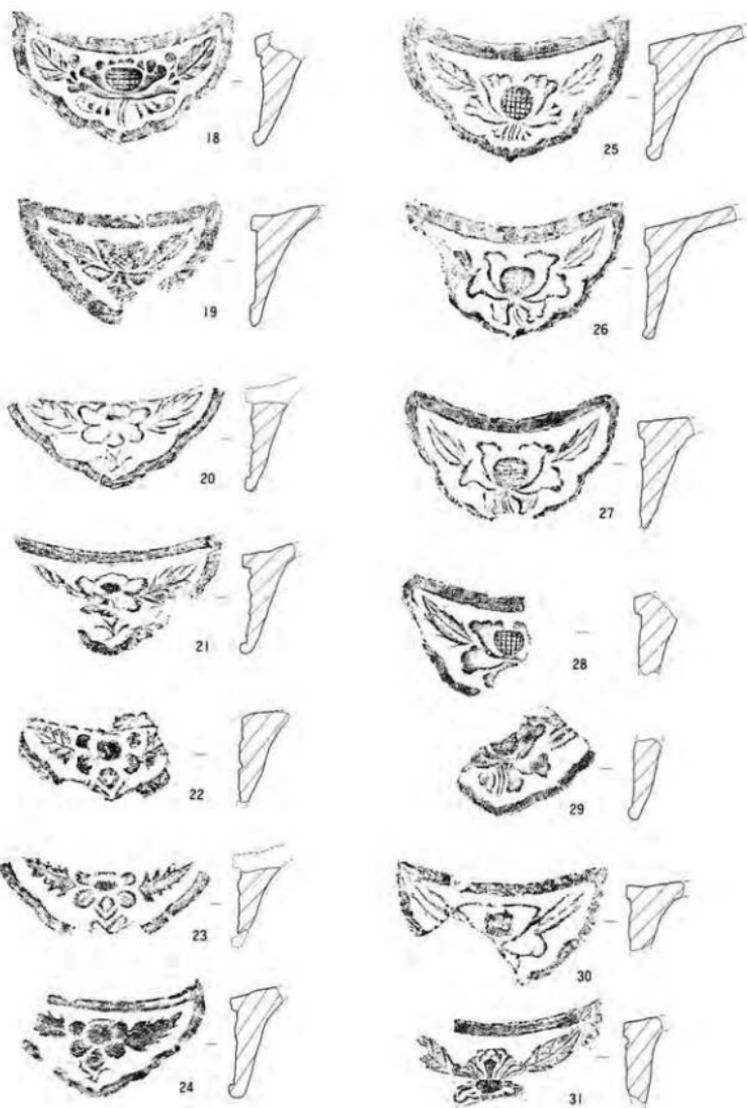
第95图 瓦型



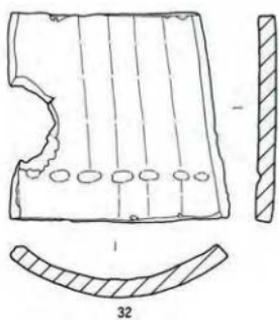
第96图 軒九瓦



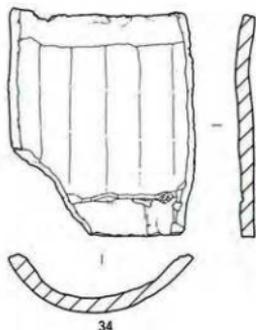
第97图 丸瓦



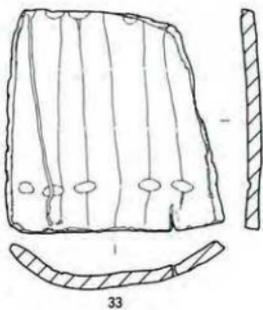
第98图 軒平瓦



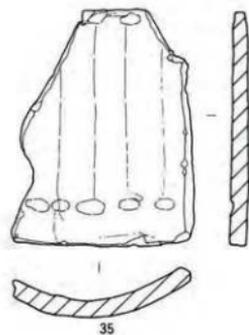
32



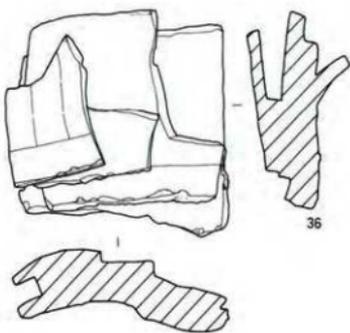
34



33



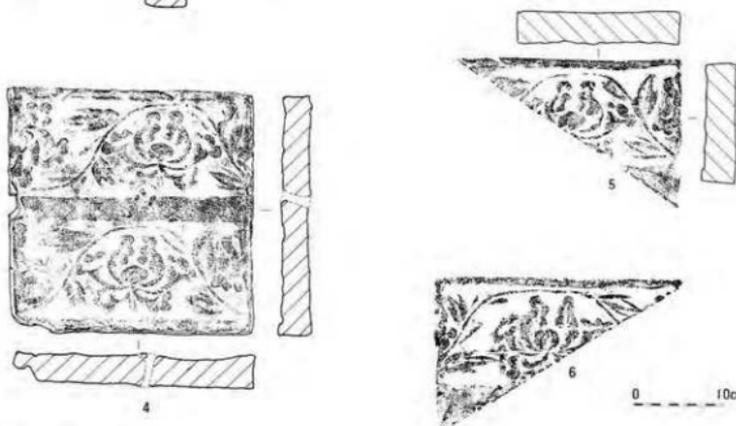
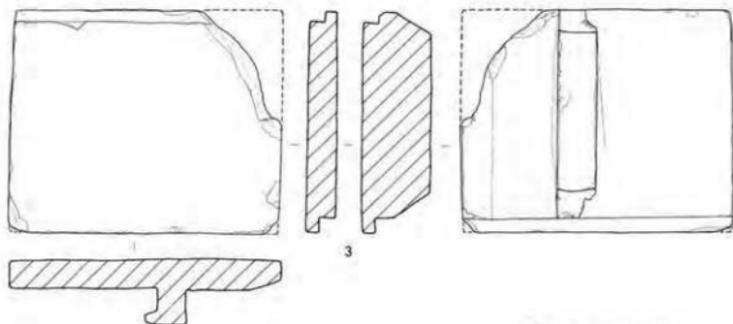
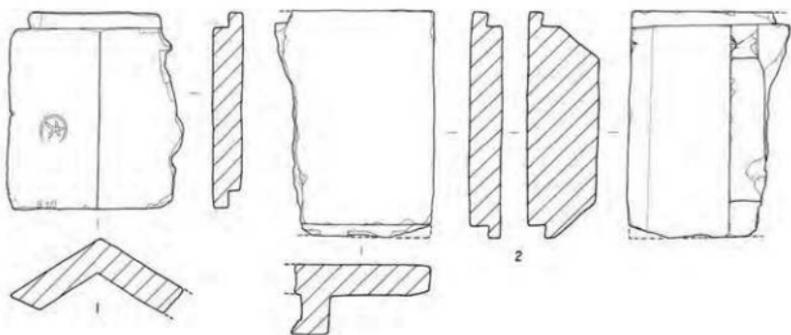
35



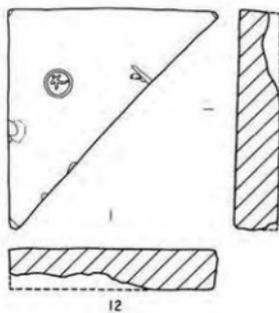
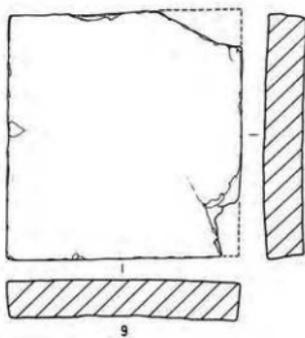
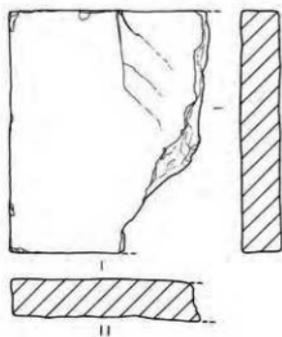
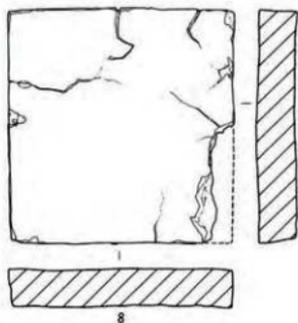
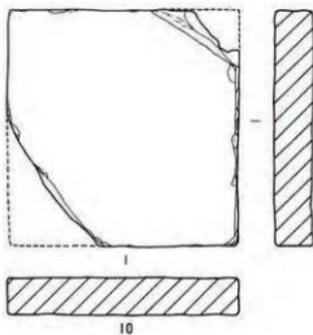
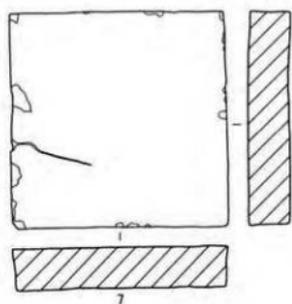
36

0 10cm

第99图 平瓦

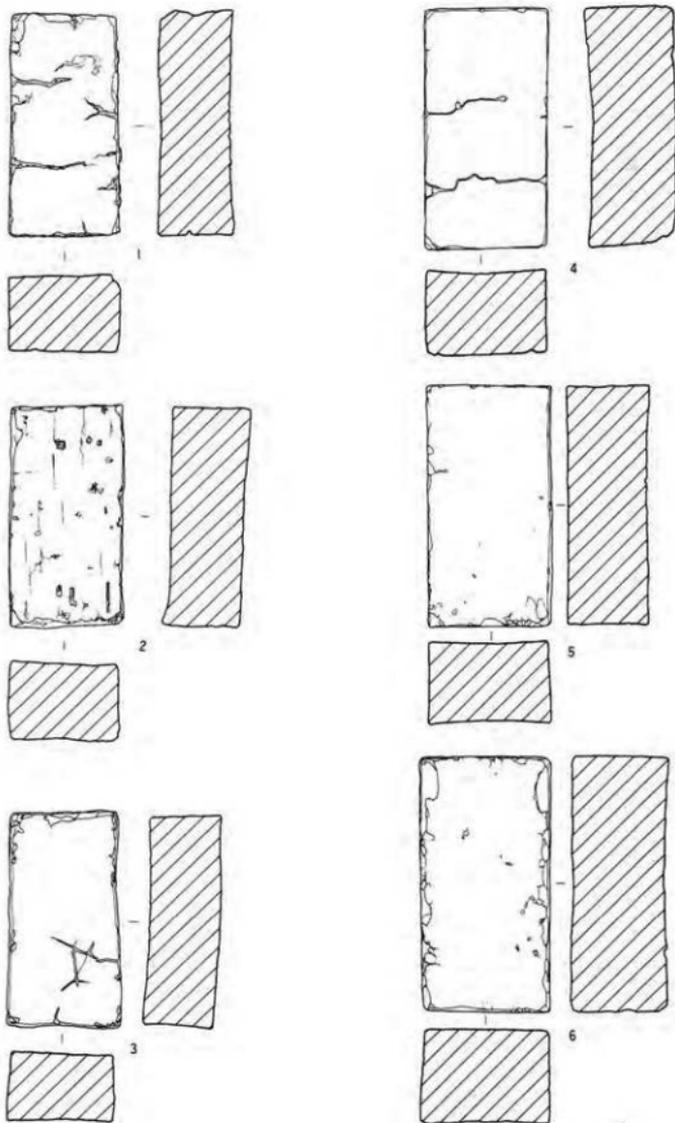


第100回 塙瓦



0 10cm

第101圖 磚



第102図 レンガ

## 第16節 金属製品

金属製品については、I地区、II地区、III地区ともに出土品は少なかった。攪乱を受けた状態の中からの出土や包含層中からは断片的な出土となっている。明確な湧田の時期に供伴して出土した資料は少ない。鉄製品では断面方形の釘、刀子状製品、棒状品、他形状不明品となっている。

青銅製品ではカンザシ（第115図版）、指輪、形状不明品であった。

## 第17節 銭貨

銭貨はI地区で最も多く出土している。種類については第10表のとおりである。

## 第18節 鉄滓、羽口

### 1. 鉄滓

鉄滓はI地区からわずかに2片のみである。外形からは木炭のかみ込みや炉壁の残片が付着している。小さな気泡が出来ており、ゆたれが見られる。鍛冶滓の様相を呈している。

### 2. 羽口

I地区からわずかに1点のみである。45長瓦列裏口から出土したものである。直径13cmの円形状で、中央部は十字形に成形された通風孔3.5cm×4.0cmの大きさを造ってある。両端が欠損しており、全長は計測できない。土製品。

## 第19節 埴埴

I地区からのものが大半であるがほとんど欠損している。口縁部が平縁に成形され底部は丸底になる。1は口径5cm、高さ6cm、器壁0.7cm、2は口径6.4cm、高さ6cm、器壁0.5cmの薄手の小壺である。内外面ともに高温を受けた状態でガラス状の黒色の光沢ができている。さらに外面に釉状の溶解した状態が見られる。内面にわずかに青銅サビが付着している。

## 第20節 硯、石製品（砥石、くぼみ石、他）

### 1. 硯

いずれも破損しており、全形がわからない。I地区、II地区から出土している。破損している箇所はいずれも墨汁を受ける部分からである。器厚が薄いことから、最も破損しやすい状態となっている。裏面が平面のままになっているものと、ゆるやかに凹面をつくるものがある。

### 2. 凹石

砂岩製でやや方形の製品である。5面に浅い凹みが残っている。2面の上下の端部に小さな敲打痕がみられる。長さ9.1cm、幅5.5cm、重量350グラム。II地区出土。

第10表 古銭觀察一覽

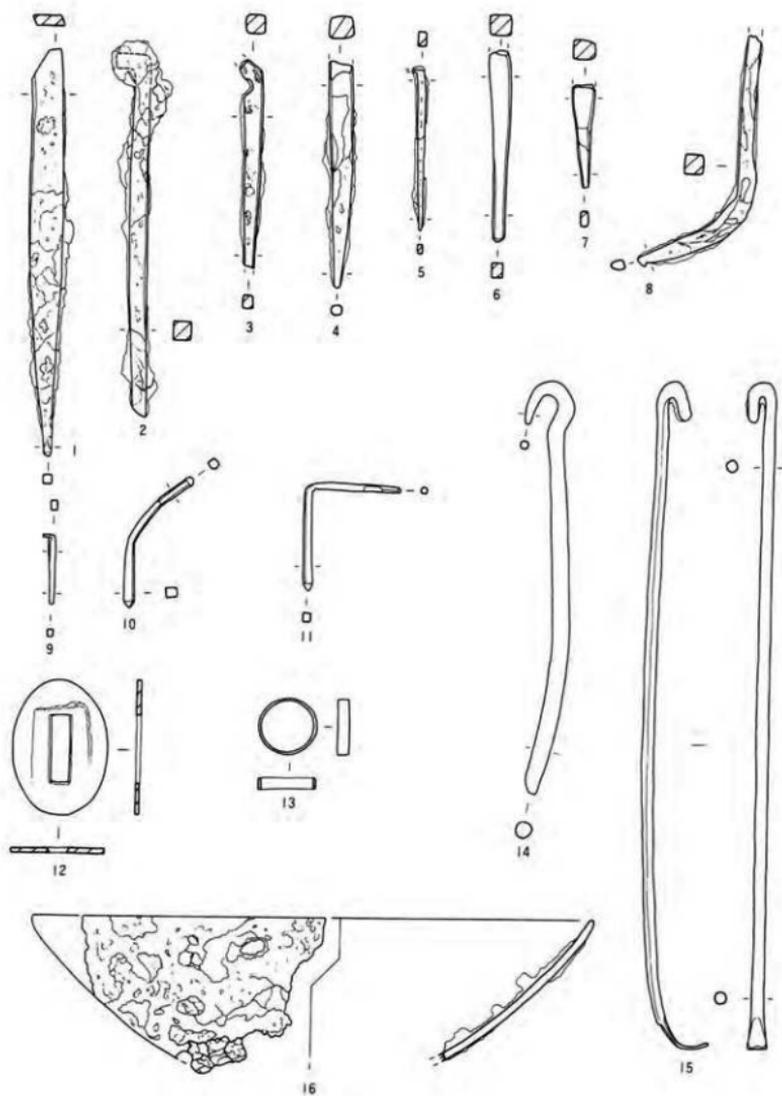
種	古銭名	裏面	元/價	時代	初鑄	径/cm	書体
1	開〇〇〇	なし	破			2.25	
2	天禧通寶	なし	完	北宋	1018年	2.45	楷書
3	天禧通寶	なし	破	北宋	1018年	2.45	楷書
4	皇祐通寶	なし	破	北宋	1039年	2.45	楷書
5	熙寧元寶	なし	完	北宋	1068年	2.15	楷書
6	元豐通寶	なし	破	北宋	1078年	2.45	隸書
7	元祐通寶	なし	破	北宋	1093年	2.5	隸書
8	聖宗元寶	なし	破	北宋	1101年	2.45	隸書
9	宗寧□□	なし	破	北宋	1102年	3.5	楷書
10	大觀通寶	なし	完	北宋	1107年	2.4	楷書
11	大〇〇〇	なし	完			2.35	楷書
12	洪武通寶	なし	完	明	1368年	2.35	楷書
13	洪武通寶	なし	破	明	1368年	2.35	楷書
14	洪武通寶	一銭?	完	明	1368年	2.3	楷書
15	永樂通寶	なし	完	明	1368年		楷書
16	永樂通寶	なし	完	明	1368年	2.45	楷書
17	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.4	楷書
18	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.2	楷書
19	鳩目銭	なし	完			1.35	無文
20	鳩目銭	なし	破			1.5	無文
21	鳩目銭	なし	破			1.65	無文
22	鳩目銭	なし	完			2	無文
23	鳩目銭	なし	完			1.9	無文
24	鳩目銭	なし	完			1.85	無文
25	鳩目銭	なし	完			1.9	無文
26	無文銭	なし	完			2.15	無文
27	無文銭	なし	完			2.2	無文
28	〇〇〇〇	なし	完			2.5	
29	〇〇〇〇	なし	完			2.35	
30	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.3	楷書
31	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.4	楷書
32	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.3	楷書
33	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.2	楷書
34	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.3	楷書
35	〇永〇寶	なし	完	日本	1624年	2.25	楷書
36	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.25	楷書
37	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.25	楷書
38	寛永通寶	なし	完	日本	1624年	2.25	楷書
39	□永通寶	なし	破	日本	1624年	2.4	楷書
40	□〇〇〇	なし	破	日本	1624年	1.95	
41	寛〇通□	なし	破	日本	1624年	2.8	楷書

### 3. 砥石

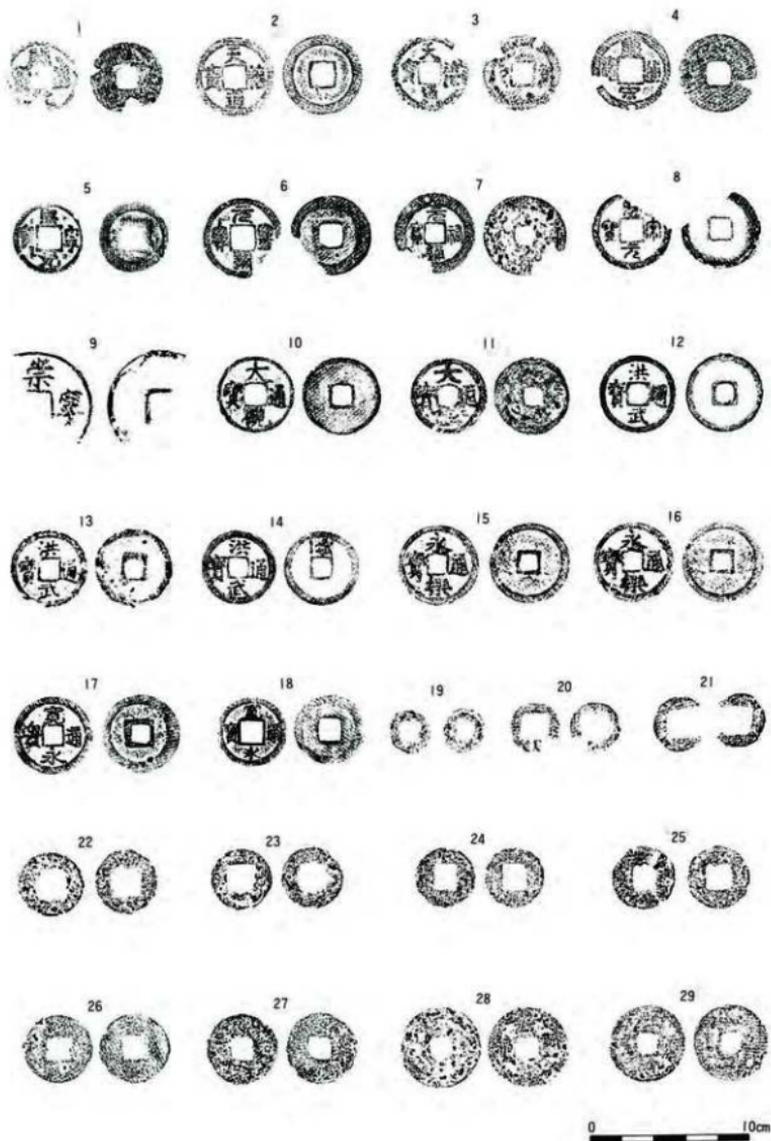
ややバチ形の方形状をなす。四面に砥ぎ面が残る。砥ぎ面には細い線条痕がみられる。I地区出土。重量380グラム。

## 第21節 キセルの雁首

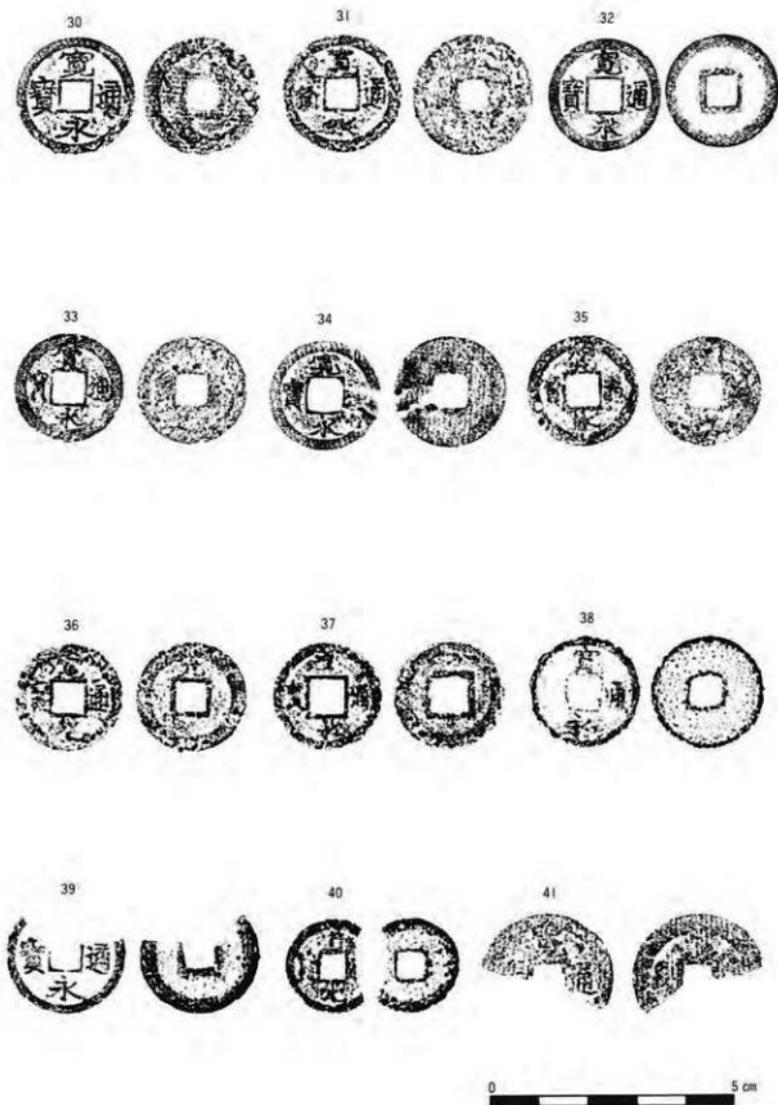
キセルは火皿部分と吸口部のみが残った資料である。各地区において出土している。無釉の陶製品は火皿部と煙管部に接続する部分はいずれも六角形～八角形に成形している。火皿部は径1.7cm前後が大半である。上葉がかかったものもあり、火皿部は円形で1.5cm。



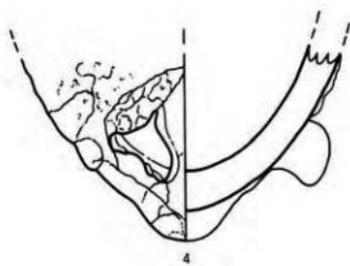
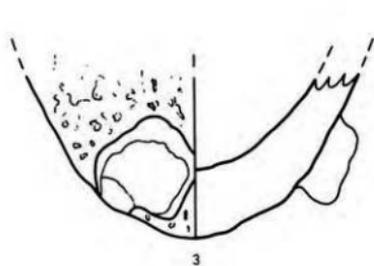
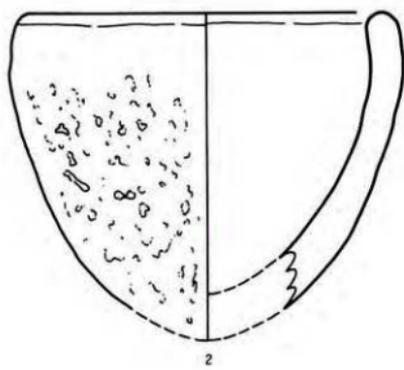
第103図 金属製品



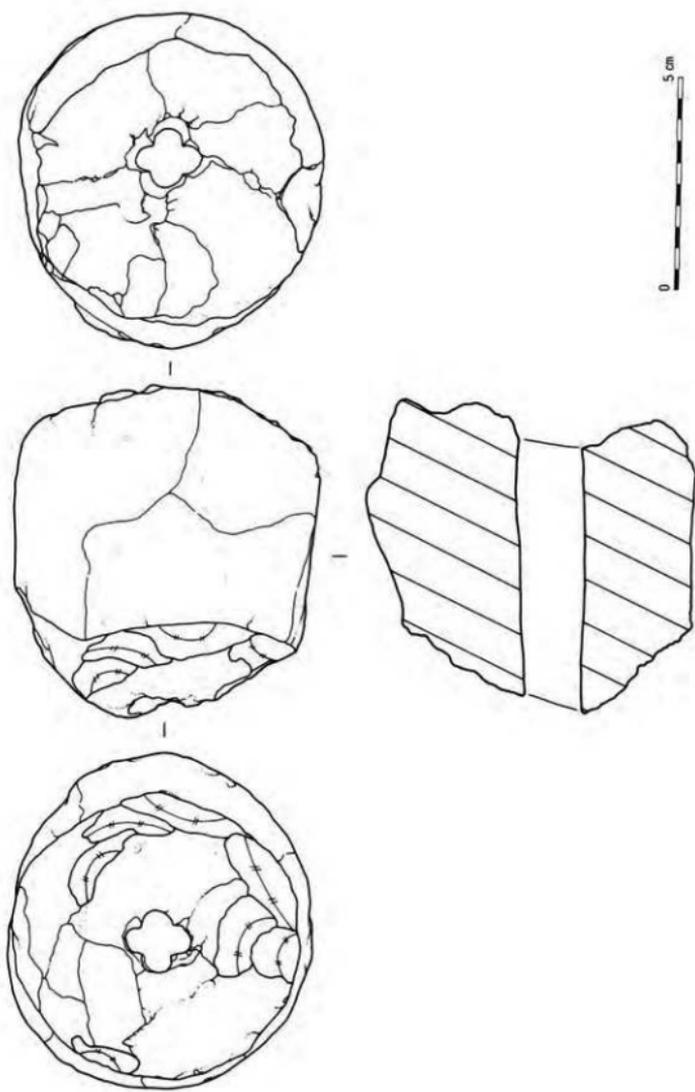
第104圖 錢貨拓影



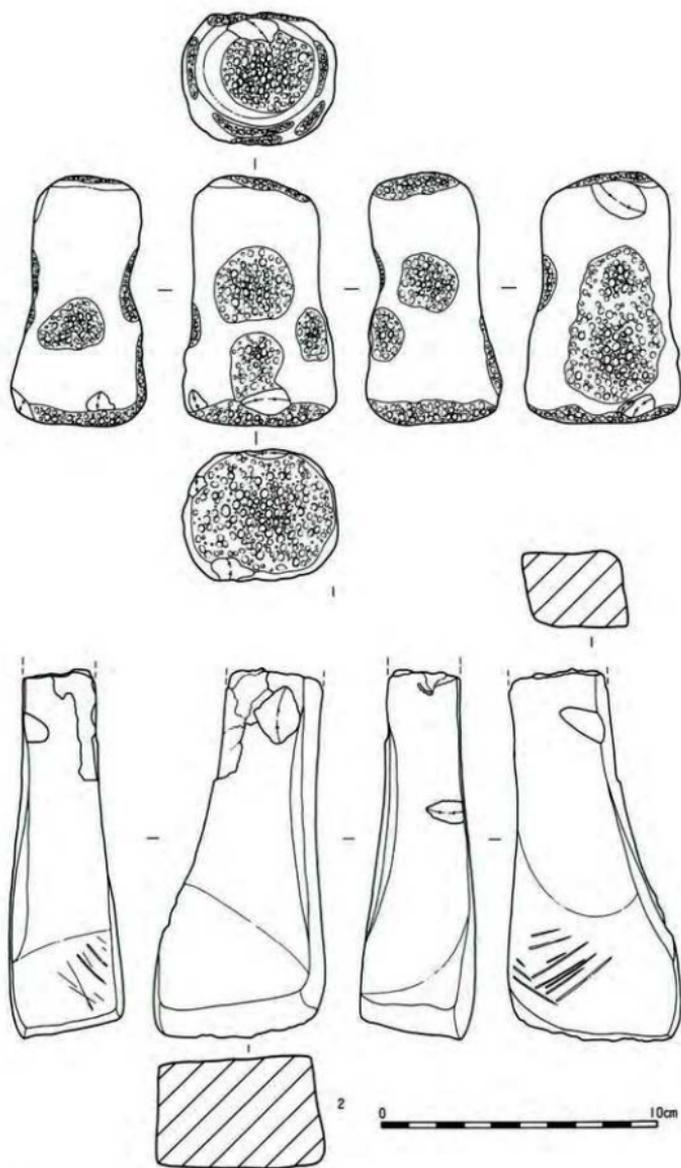
第105圖 錢貨拓影



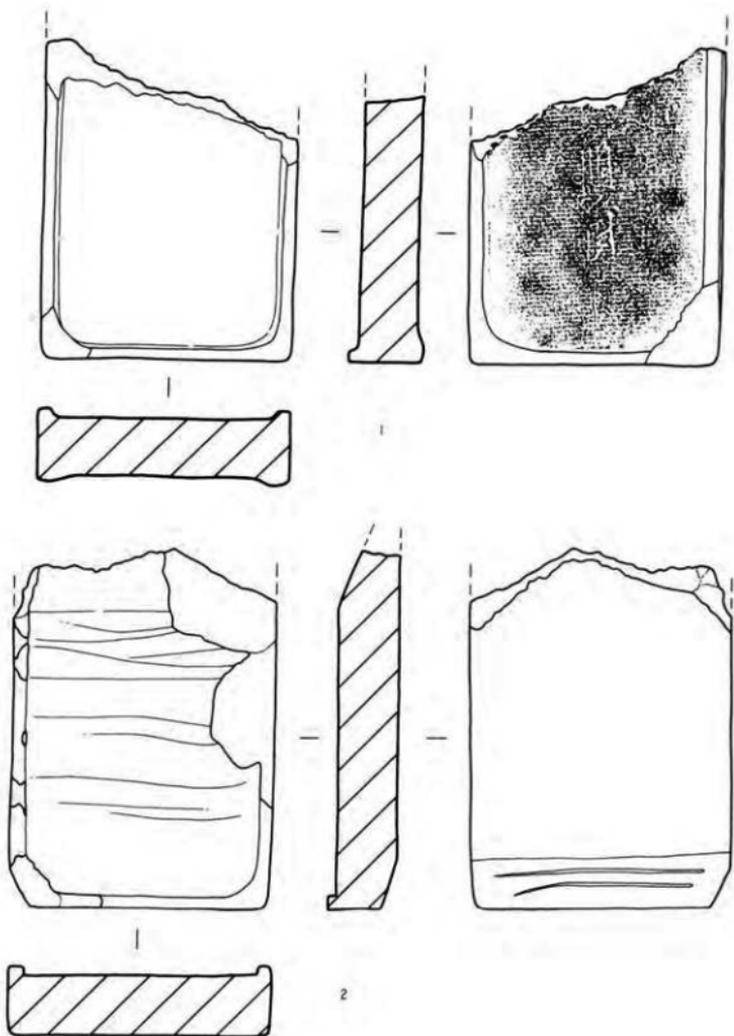
第106図 埴塀



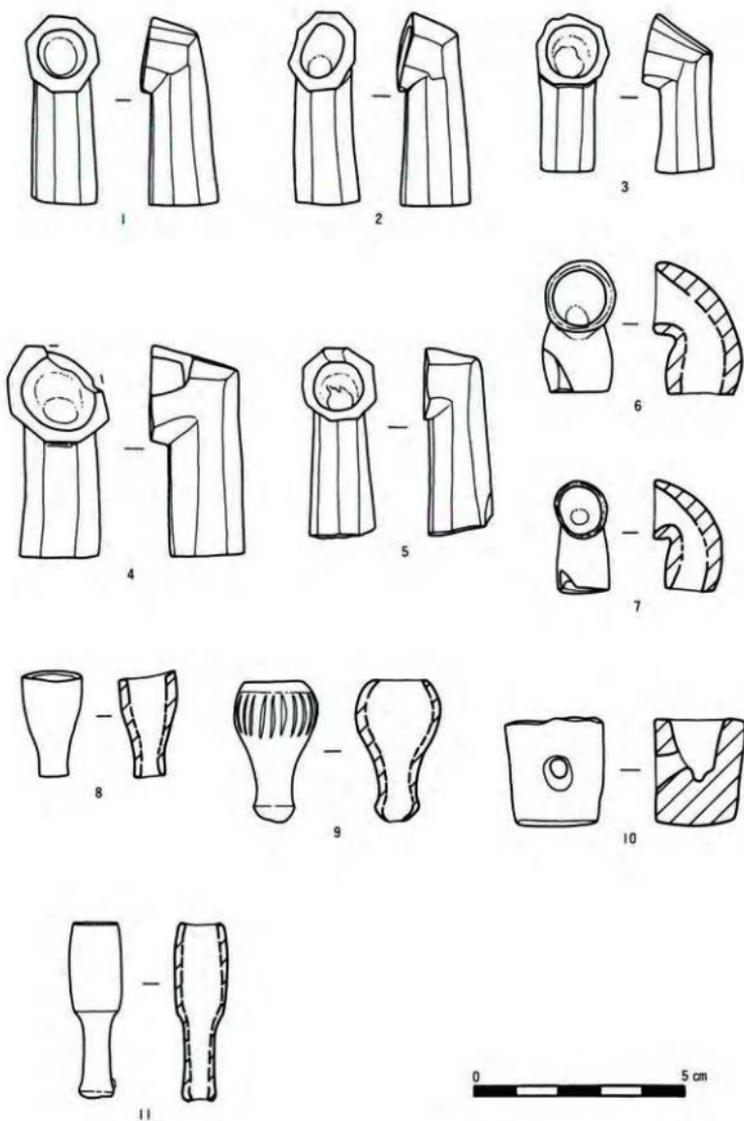
第107图 羽口



第108図 石器（1：たつき石、2：砥石）



第109図 硯



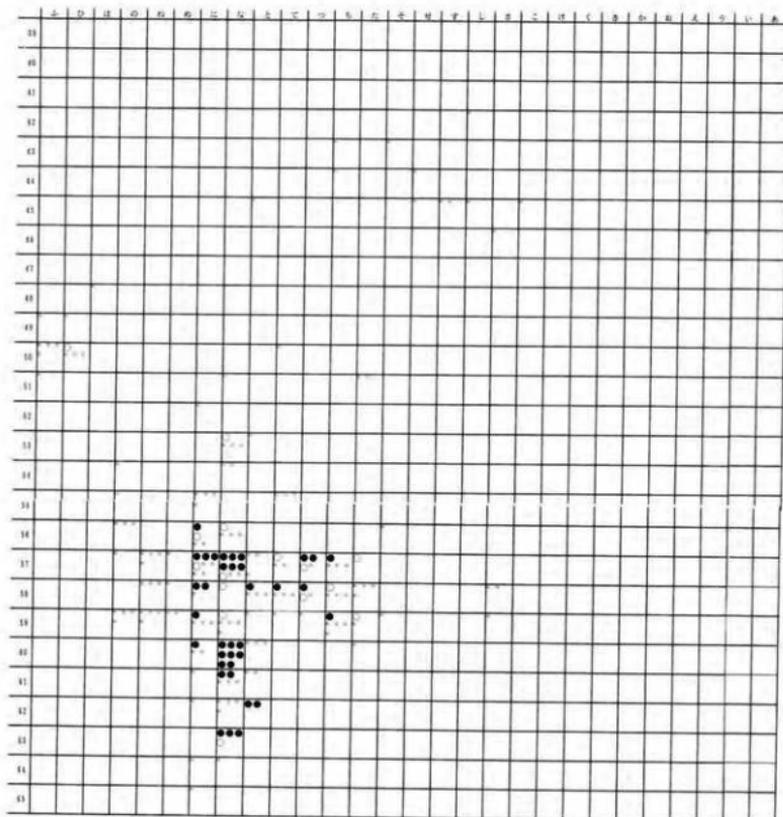
第110図 キセルの履首と吸い口

## 第22節 円盤状製品

円盤状製品は総数777点出土している。まず各区の出土状況についてみると、II区での出土が卓越しており、次いでIII地区、I地区の順となっている。2区では第111図に示したように、集中的に出土する箇所がみられる。

次に材質についてみると、使用された材質には瓦・無釉陶器・施釉陶器・瓦質土器・陶質土器・磁器等があるが、完形品648点を対象にした場合、瓦が349点と全体の53.8%を占め、次いで無釉陶器が254点で39.3%と瓦と無釉陶器で出土数の93%に達する。

次に製品のサイズ別の集計では、完形品を対象にした場合、4.0~4.9cmが235点で全体の36.3%、5.0~5.9



(注) ●—10個 ○—5個 —1個 を示す

第111図 円盤状製品の平面分布状況

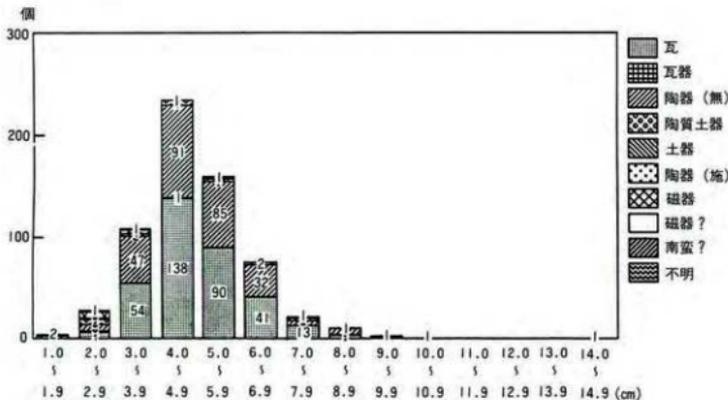
cmは160点で24.7%、3.0～3.9cmが108点で16.7%、6.0～6.9cmが75点で11.6%、2.0～2.9cmが27点で4.2%、7.0～7.9cmが22点で3.4%となっており、4.0～4.9cmで最大値を示す。

第112図はサイズに占める各材質の数量をグラフ化したものである。これを見ると、各サイズとも材質の比率は瓦が50%台、無釉陶器が40%台、他は10%以下で各サイズに対する材質の選択の傾向は見出せない。但し、1.0～2.9cmでは陶質土器・磁器の比率が高いが、個体数が少ないため判断はできない。

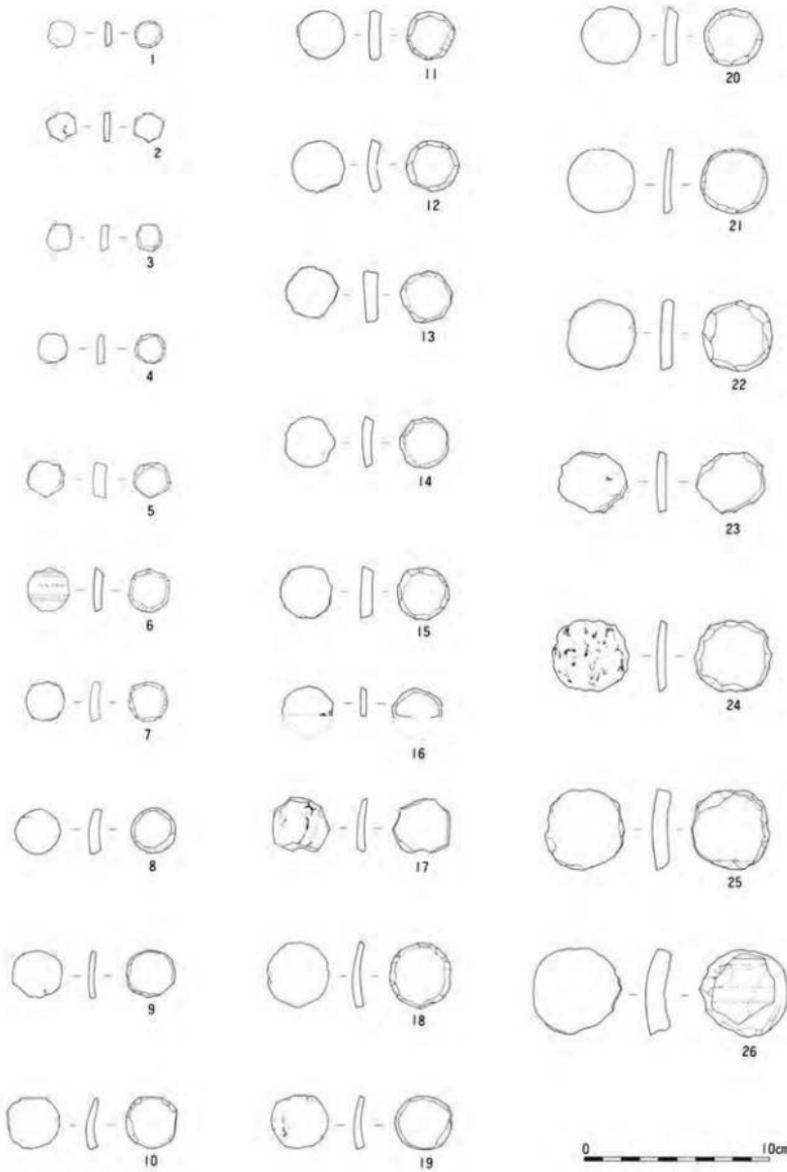
材質の使用部位は胴部及び底部でその大半を占める。また、成形の際の剥離方向には外→内、両面の2種がほとんどであり、部位の選択と成形技法においては傾向が見出せるようである。

第113図～第114図は磁器及び施釉陶器のうち主要なものを示した。磁器は中国産が大半を占め、これに肥前系の製品を少量含む。施釉陶器は沖縄産のもので、灰釉碗・及び高台皿付に耐火土を塗る小碗がみられる。材質の年代は中国産磁器についてみると、染付が概ね17世紀後半～18世紀代、白磁は16世紀～17世紀である。

以上のことから本遺跡出土の円盤状製品について簡潔にまとめると次の通りである。まず、材質は瓦と無釉陶器が主体である点は、遺跡の性格を反映したものであると思われる。製品のサイズ、成形については、まずサイズは4.0～4.9cmを中心に3.0～5.9cmの範囲が主体をなし、成形については部位の選択は胴部・底部が主であり、剥離方向については外→内・両面の2種である等の傾向は見出せるようである。用途については特に傾向等について見出すことはできなかった。但し、出土状況からみてかなりまとまって出土する箇所もあることから、遺構との関連等を含めて今後検討していきたい。

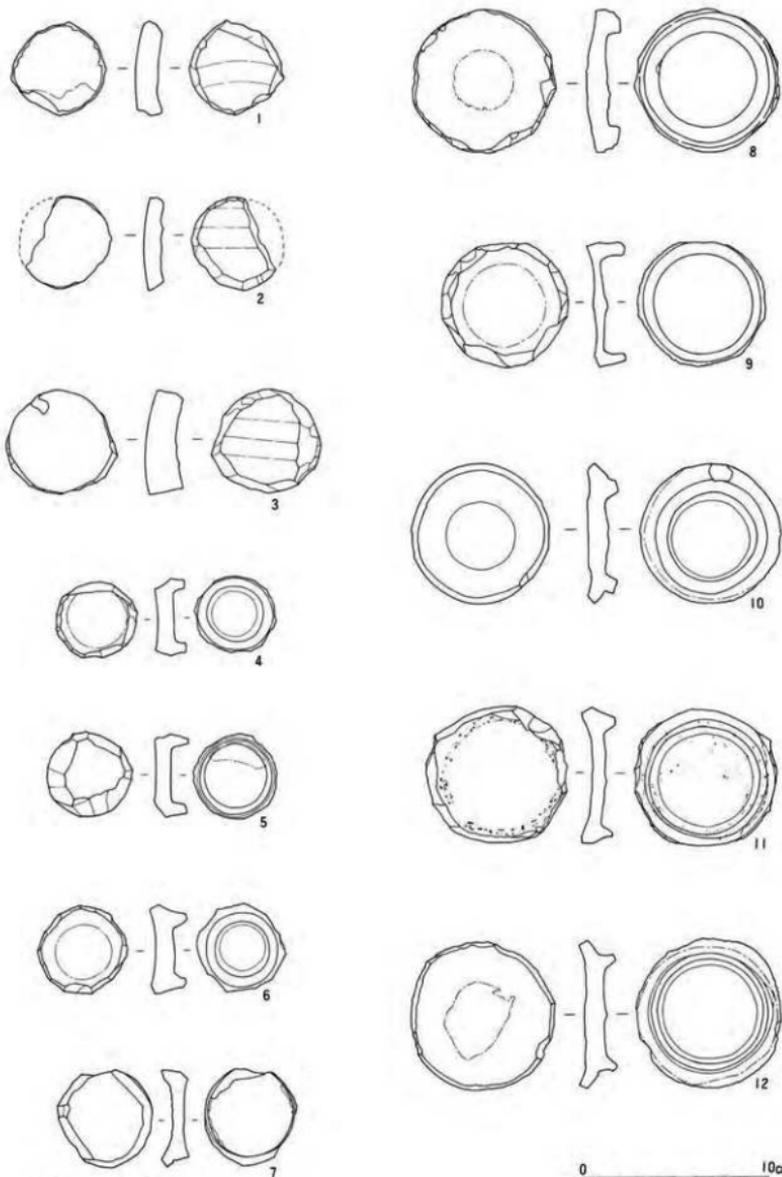


第112図 サイズ別出土状況



第113図 円盤状製品

0 10cm



第114図 円盤状製品

## 第23節 窯道具

第115図～第118図に示した。本遺跡出土の窯道具については大橋康二、松島朝義、池田栄史各氏の御教示をえた。本遺跡出土の窯道具の器種はトチンとハマがあるが、その大半がトチン（第115図～第117図12）であり、ハマは全体的にその数量は少ない（第117図13、第118図1）。トチンは焼成の際、製品を支持するために使用するもので上面円盤部にハマをのせる場合と直接製品をのせる場合があるようである。第115図は下半部を欠くため全形は不明である。第115図3～8は上面に製品を載せた痕跡がみられる。このうち、3・5～8は上面円盤部に砂の付着がみられる。第116図1～3は全形が窺えるものである。いずれも製品をのせたとみられ、砂の付着がみられる。同図1は上面円盤部中央に穿孔を施しており、穿孔後火熱を受けている。同図4・5は器高が低いものである。両者とも上面円盤部に砂の付着がみられる。5は、畳付に砂とともに灰軸の付着がみられる。同図5～10は円盤部の側面3箇所を抉りとり、小山富士夫・田沢金吾氏の分類では洲濱形（註1）と呼ばれるものである。同図6～8は円盤部上面及び畳付に砂の付着がみられる。これらは火熱をかなり受けている。同図9は砂の付着は見られない。同図10は円盤部上面に砂の付着が見られる。第117図1～5は小型の製品を焼成する際に使用されたとみられる。同図3を除き円盤部上面に砂の付着が見られる。同図6～10は耐火土（メーガネク）を塗るものである。6は円盤部上面および畳付に耐火土が塗られている。7は円盤部上面及び畳付から内面にかけて、8は円盤部上面のみ耐火土が塗られている。6は灰軸の付着も見られる。9は外側面に耐火土の付着が見られる。10は外側面下半に耐火土が塗られている。円盤部上面には直径2cm程度の製品を3個置いて焼成した痕跡がある。恐らく小坏のような製品であろう。

同図12は素地が他の窯道具のそれとは異なるものである。第115図～第118図1～12の素地は焼成する製品と同じ素地を使用しているが、12は粗い砂（石灰岩質ではない）を多量に含むものである。同図11は瓦質で手捏ねである。窯道具として使用したのか疑問が残る。

同図13及び第118図1はハマである。上面にレコード盤状の溝が巡る。第118図1は上面に直径7cm程度の製品をのせた痕跡が残存部で2箇所みられる。また下面にはトチンとみられる製品の痕跡がみられる。痕跡の直径から想定されるトチンは、第115図7・8のような形状のものとみられる。

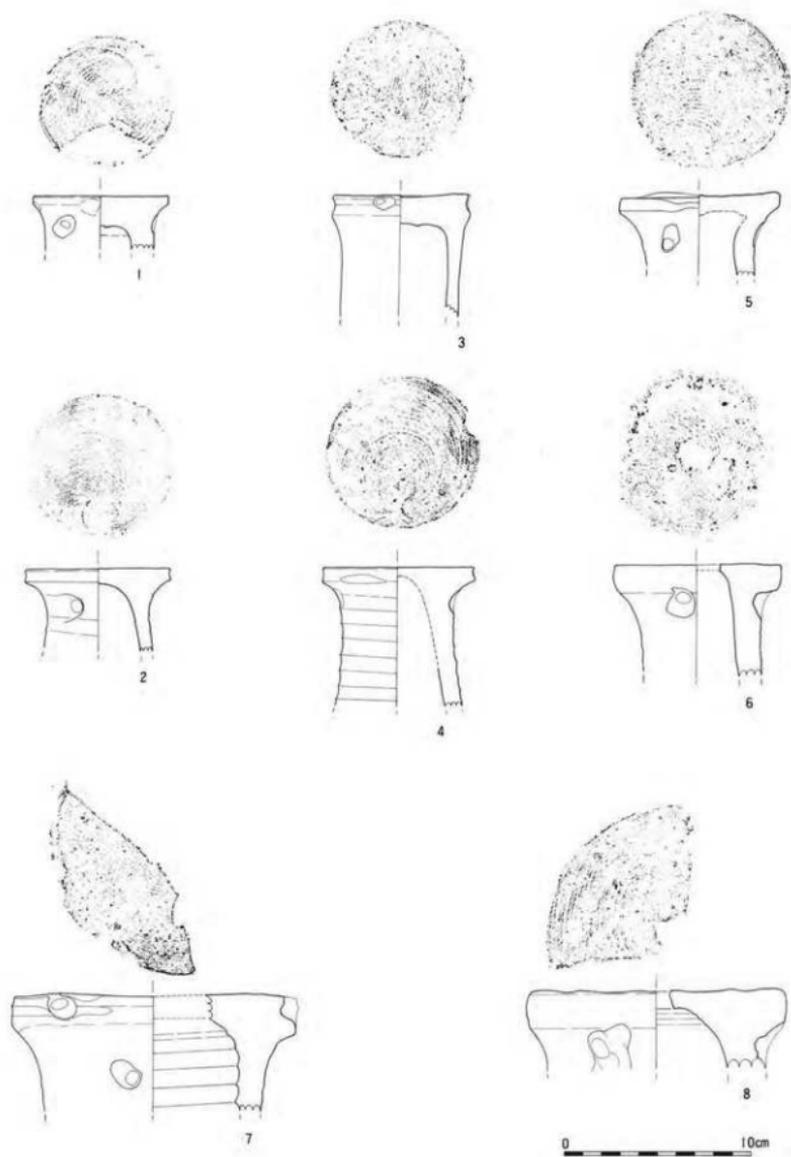
第118図2・3は瓦質のものである。口径により2種のタイプがあるようである。同図3は鼓状の形状をなすもので、輪積み成形で、口縁部は指オサエによって凹ませ、熔着を防ぐ工夫をしている。胴部中央は穿孔されている。これらは、素地・成形・形状・焼成ともに前述した他の窯道具のそれとは全く異質のもので、別系統に属するものではないかとおもわれる。素地・成形・焼成等の点から考えると瓦質土器の生産に使用されたのではないだろうか。

### 註

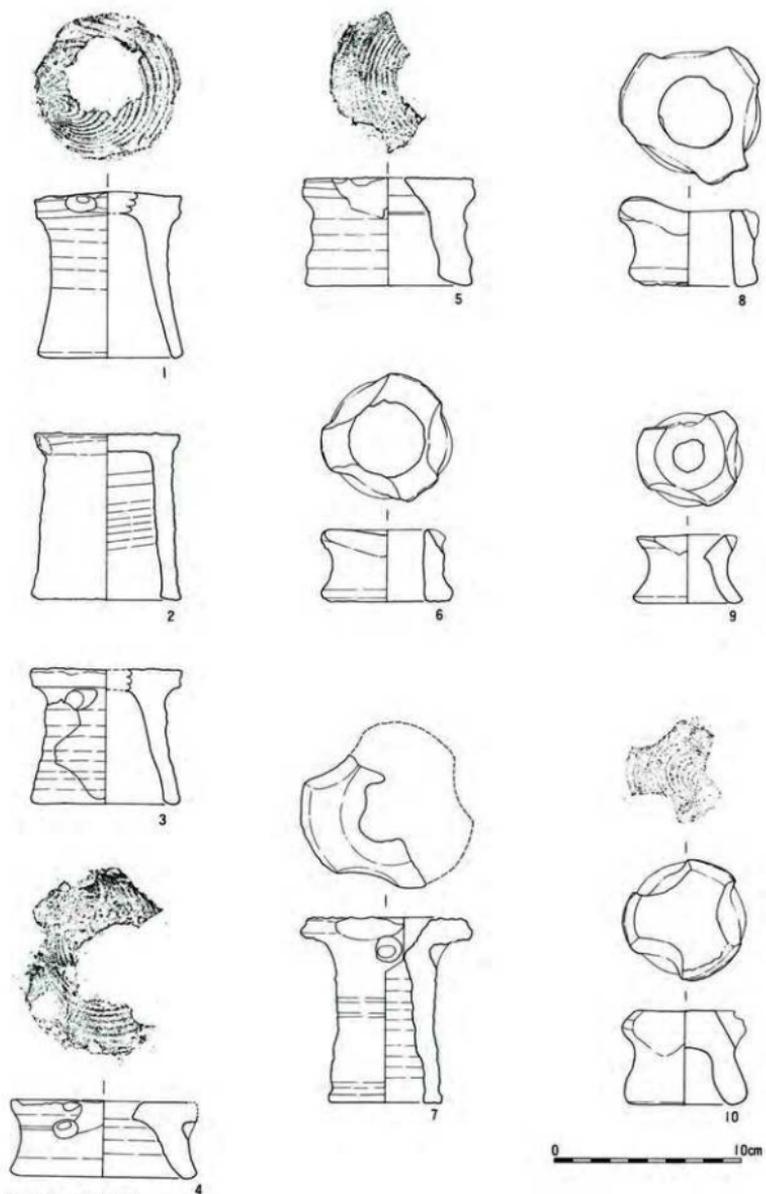
註1. 小山富士夫・田沢金吾共著『薩摩焼の研究』 国書刊行会 1988年。

第11表 窯道具観察一覧

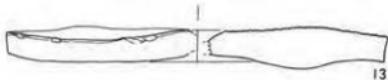
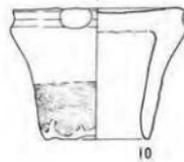
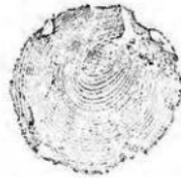
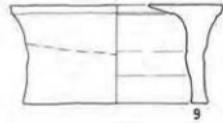
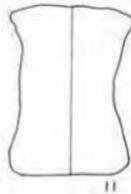
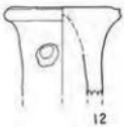
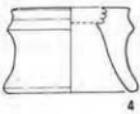
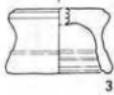
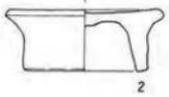
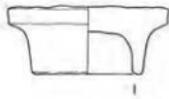
原. PL	料	号	部位	形状	部位	口取	蓋	底注	特徴	備考	
第115図 PL. 123	1	2	第2層積乱	円形	7.2	円盤部上面に砂付着あらず。				円盤部上面糸切り。	
	2	537	西側表土層乱	円形	7.8	円盤部上面に灰皿が僅かに付着。				円盤部上面糸切り。	
	3	3	表土層積乱	円形	7.8	円盤部上面に灰皿が僅かに付着。				円盤部上面糸切り。	
	4	2	537	第1層積乱	円形	7.3	円盤部上面に灰皿が僅かに付着。				円盤部上面糸切り。
	5	2	537	第1層積乱	円形	8.1	円盤部上面に灰皿が僅かに付着。				円盤部上面糸切り。
	6	2	FVb4	第1層積乱	円形	8.5	円盤部上面に灰皿が僅かに付着。(僅かに前縁)				円盤部上面糸切り。
	7	2	537	積乱	円形	9	円盤部上面に砂付着。				円盤部上面糸切り。
	8	2	537	積乱	円形	15.2	円盤部上面に砂付着。				円盤部上面糸切り。
	9	2	536	不明	円形	13.8	円盤部上面に灰皿が僅かに付着。				円盤部上面糸切り。
	10	2	536	不明	円形	7.8	7.7	円盤部上面に砂付着。穿孔後灰皿をうけています。			円盤部上面糸切り。
第116図 PL. 124	2	2	537	第2層積乱	円形	7.7	8.9	8	円盤部上面に砂付着。		円盤部上面糸切り。
	3	1	47	第2層積乱	円形	8	7.2	8	円盤部上面に砂付着。		円盤部上面糸切り。
	4	2	537	第2層積乱	円形	9.9	4.1	10	円盤部上面に砂付着。		円盤部上面糸切り。
	5	2	59	積乱	円形	9.1	5.8	9	円盤部上面に砂付着。裏面に砂・灰輪付着。		円盤部上面糸切り。
	6	2	59	積乱	円形	6.7	8.9	7.1	上面州漢形。上面裏面に砂付着。		円盤部上面糸切り。円盤部側面3ヶ所を削り取っている。州漢形7ヶ所を削り取っている。
	7	2	561	積乱	円形	8.6	10	6	上面州漢形。上面裏面に砂付着。		円盤部上面糸切り。円盤部側面2ヶ所を削り取っている。
	8	2	FVb4. に57	第2層積乱	円形	7.3	4	5.5	上面州漢形。上面裏面に砂付着。		全体的に灰皿をうけています。
	9	2	58	黄緑色土層・積乱	円形	5.4	3.7	5.8	上面州漢形。丁寧な作りである。砂の付着は見られない。		全体的に灰皿をうけています。
	10	2	537	第2層積乱	円形	5.4	5.4	6.5	上面州漢形。上面に砂が僅かに付着。		上面糸切り。
	第117図 PL. 125	1	2	積乱	円形	8.6	3.6	5.8	丁寧な作りである。円盤部上面に僅かに砂が付着。		上面糸切り。
2		2	59	積乱	円形	8.5				上面糸切り。	
3		2	558	砂利層	円形	4.4	3.5	5.4	丁寧な作りである。砂の付着は見られない。		円盤部上面糸切り。
4		2	57	第2層積乱	円形	6.3	4.6	7.2	丁寧な作りである。上面・裏面に砂付着。		円盤部上面糸切り。
5		2	559	積乱	円形	5.8	2.9	6.5	丁寧な作りである。全面に僅かに砂付着。		円盤部上面糸切り。
6		2	581	第3層	円形	4.1	3.1	3.6	丁寧な作りである。円盤部上面・裏面に耐火土を塗る。		側面に灰輪付着。
7		2	560	第3層	円形	4.2	1.7	4.2	丁寧な作りである。円盤部上面・裏面に耐火土を塗る。		円盤部上面糸切り。
8		2	557	第5層	円形	4.6	2.6	4	丁寧な作りである。円盤部上面・側面に耐火土を塗る。		円盤部上面糸切り。
9		2	57	赤褐色土層	円形	11.4	5.3	5.3	丁寧な作りである。円盤部上面に灰皿の砂。側面に耐火土を塗る。		円盤部上面糸切り。
10		1			円形	8.2	7.1	5.5	円盤部上面に径1cm程度の製品を3個のせた積乱。側面に耐火土が不着。		円盤部上面糸切り。
第118図 PL. 126	11	1	545	円形上五層中上字上	円形	6.5	9.1	6.2	瓦質で手づくねである。		側成時のひずみ、割れが著しい。
	12	2	558	表土層	円形	6.2					側成時のひずみ、割れが著しい。
	13	2	557	積乱	円形	20.4	1.6	20.1	素地に多量の砂を含む。円盤部上面に砂付着。		
	1	2	60	第3層H1口層	円形	19	1.4	18.4	上面に輪目状の溝が通る。上面に2層、下面に1層製品をのせた積乱あり。		
	2	1		5号窯中心輪(西)最上層	円形	19.5			瓦質。素地に白磁を多量に含む。灰い作りである。側面穿孔。		
	3	1	546	第3五層	円形	24.5	23.7	22	瓦質。素地に白磁を多量に含む。灰い作りである。側面穿孔。		



第115図 甕道具①

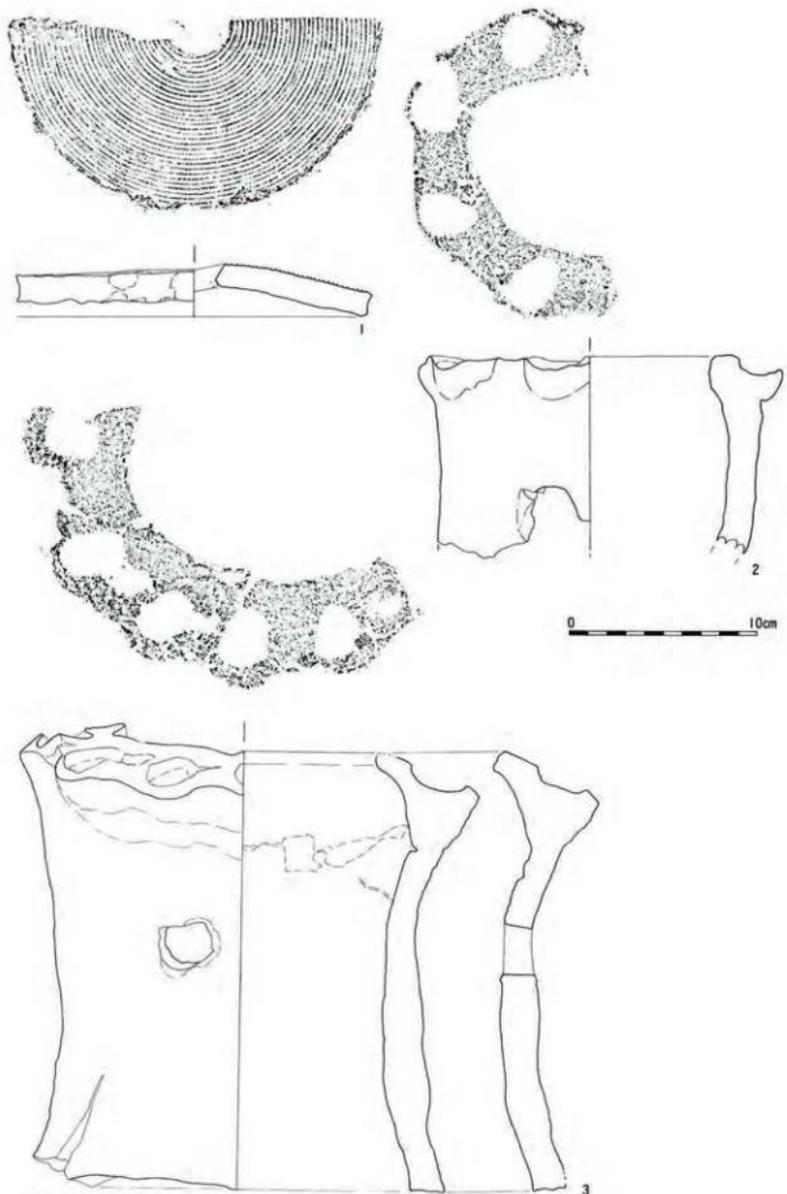


第116図 甕道具②



0 10cm

第117图 窯道具③



第118図 竈道具④

## 第24節 湧田古窯跡出土の脊椎動物遺体

金子浩昌

### 1. はじめに

17世紀頃の遺跡と考えられている湧田古窯跡からは脊椎動物遺体が多数出土している。それらの多くは窯跡の周辺に於いて出土したもので、窯の使用と何らかに関係ある人々によって食用に当てられたものの残滓と思われるが、それとはまた別に窯の直上に、一括投棄のかたちで数頭のブタの全身骨が出土したのは興味あることであった。窯の使用をめぐる何らかの祭祀的な行為と関係があったものと思われるのである。

報告に当たって、種々お世話になった沖縄県文化課の島袋洋氏並びに資料整理に協力頂いた大城勝江、城間千鶴子、比嘉優子、上原園子、照屋利子の諸氏及び実測図・表の作成などにご協力いただいた高良三代、手嶋永子、金武雅子の諸氏に御礼申し上げる次第である。

### 出土した脊椎動物遺体の種名表 (第12表)

脊椎動物門	Phylum VERTEBRATA
I. 軟骨魚綱	I. Class Chondrichthyes
1. サメ目	1. Order Lamniformes
シロザメ科	Family Carcharhinidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
II. 硬骨魚綱	II. Class Osteichthyes
1. スズキ目	1. Order Perciformes
スズキ科	Family Serranidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
フエダイ科	Family Lutjanidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
タイ科	Family Sparidae
ミナミクロダイ	<i>Acanthopagrus sivicolus</i>
フエフキダイ科	Family Lethrinidae
ハマフエフキダイ	<i>Lethrinus mebulosus</i>
マカジキ科	Family Istiophoridae
メカジキ	<i>Xiphias gladius</i>
ベラ科	Family Labidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
ブダイ科	Family Scaridae
ナガブダイ	<i>Scarops rubronoiaceus</i>
属・種不明	Gen. et sp. indet.
III. 鳥綱	III. Class Aves
1. キジ目	1. Order Galliformes
キジ科	Family Phasianidae



の出土はごく稀で、外洋の魚を捕る機会のなかったことによるものと思われる。こうした状況はその後も続いていたようである。その他の魚類ではフエキダイ科、ブダイ科の遺骸が多く、いずれも手近な場所ですでに沖縄でもっとも普通の魚である。

## 鳥類

ニワトリが確認されたのみである。標本は特に多いものではなかったが、四肢骨を主として出土し、大腿骨が多かったのは、肉の供給の主たる部分であったからであろう。ニワトリはすでにグスク期の遺構から出土が知られており、本標本もほぼそれと変わらない大きさのものであった。

第14表 ニワトリ骨出土状況

出土地 層位	部位		馬口骨		肩甲骨		上腕骨		腕骨		中足骨		尺骨		大腿骨		脛骨		合計		個体数				
	近位部		近位部		近位部		骨体		遠位部		遠位部		遠位部		近位部		骨体		遠位部			近位部		骨体	
	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L		R	L	R	L
I 地区	攪乱	1					1														2	0	2		
	a 集中													1								1	0	1	
	第1層													1	2					1	1	3	1	3	
	第2層									1											1	1	1	1	
	第2a層																1						0	1	1
	第3層										1			1	1					1			1	4	4
第3a層																			2			0	2	2	
合計	1						1	1	1	1	1	1	2	3	0	1	1	1	8	6	12	3	1	3	
II 地区	攪乱										1	1											1	1	1
	2号窯			1	1																		1	1	1
	不明					1																	0	1	1
合計			1	1	1						1	1										1	2	2	

凡例：a：瓦層，b：砂利層

## 哺乳類

### ヒト

上腕骨が一点のみ出土している。その他の部位は全く発見されていない。

第15表 ジュゴン出土状況

出土地	部位	個数
I地区III層	破片	1

第16表 ヒト出土状況

出土地	部位	個数
I地区瓦列 東側7段	L上腕骨	1

### ネズミ類

下顎骨が一点のみあり、新しい時期の遺跡からの出土としては少ない。もっともネズミ類の遺骸の所属時期については多くの場合問題が残る。

第17表 ネズミ出土状況

出土地	部位	個数
I地区45 黄褐色	L下顎骨	1

### イヌ

埋葬などの状況、施設などについて確かめることはできなかったが、一括と考えられる一個体とその他に数個体があったようである。しかし、全般に保存は良くなく、形態を窺える標本は少ない。一括と考えられる個体のイヌは成獣ではあるがごく小型のもので、骨体も華奢である。グスク期以前に沖縄で飼育されていた品種とは別ではないかと思われる。その他の標本はこれとは別系の在来のイヌではないかと思われるが、断片的で小型犬である以上のことは不明である。

### ネコ

各層で遊離四肢骨がかなり出土しているが、攪乱層からの出土も多く、当時どの程度に飼われていた





## ウシ

先にものべたように多くの骨が出土しているが、指趾骨を除いて原形の残る骨はほとんどなかった。頭蓋の破片は多少みられたが、角の部分（角突起）は一点が確認できたのみであった。角は切断して利用されたのであろう。歯をみると上顎歯が少ないので、頭蓋は別に処分された可能性がある。推定される個体数は下顎歯でみると16個体分位はありそうである。

四肢骨の出土は、どの骨をみても歯牙で推測された個体数を推定できる程に多くはない。解体され料理に使われるときかなり壊されることが多かったためであろう。骨は骨体のほぼ中央で打ち割られ、骨髓が利用された。

## ヤギ

別に記した家畜に比べると出土量ははるかに少ない。数個体かそれより僅かに多い程度であろうか。

### 3. まとめ

以上、湧田窟跡とその周辺において出土した動物遺体について概要をのべたが、ここでは少なからぬ量のウシ、ウマ、ブタが食用に当てられていたことがわかった。出土の状況についての詳細は不明であるが、多くの瓦のたまり部分にこれらの骨が埋存していたのを筆者もみている。別に一括出土のブタの遺骸は、かつ

て筆者が報告した古墓出土の資料とよく似ているものであった。その古墓は石川市古我知原古墓一伊波仲門門中墓一の調査の際に発見されたもので、古墓の墓室内とその入口前面に穴を掘って埋められていたが、墓室内のものはシャコ貝で覆われていた。この伊波仲門門中墓にあった25基の石厨子のうち3基に銘書があり、乾隆12、13年（1747、1748年）の年号がみえ、石厨子が移転されたものでないとするれば、墓の建造年代の上

限となると考えられている。ブタの頭骨は古墓の石積の下からの発見であり、入口を意識して埋葬したものであろうと報告されている。このブタは一つは乳歯とM1までの萌出、いま一つはM2までの萌出で、湧田のブタと比べて若いのが、形質の上ではよく似ているものである。この頃のブタの形質を知る良好な資料といえよう。これらのブタは本道跡で別にのべているブタと大きさ、形質ともかなり異なるので別系統の品種なのであろう。もちろんその他の多数出土したブタも大陸産の家畜種が基幹になっているのではないかと考えているが、これについてはさらに文献資料、考古学的な研究、あるいは家畜育種学的な研究が今後の課題である。（註1）

第20表 ヤギ骨出土状況

出土地 種別	肩胛骨		上腕骨		前骨		大腸骨		寛骨	中足骨	合計		個体数
	R	L	R	L	R	L	R	L			R	L	
第2層											1	1	1
I 第2a層			1	1							1	0	0
地 第3層							1				0	1	1
第5a層			2								0	2	2
区 第1号遺状石列			1							1	0	1	1
合 計			4	1			1			2	1	5	5
II 覆瓦II				1				2			1	2	2
地 赤瓦覆瓦II				1		1				1	2	0	2
区 110層							1				1	0	1
合 計				2		1		2		1	4	2	5

凡例：○：瓦層

第21表 各種動物最少個体数出土状況

	返堀	I地区			II地区			III地区			不明	合計
		1	2	3	1	2	3	1	2	3		
軟骨魚綱		0	0									0
硬骨魚綱		14	1									15
鳥綱		14	5									19
哺乳類		1										1
ウシ		18	11									29
ウマ		4	20									24
ブタ		1	0									1
ウマ科		57	0									57
イノシシ科		1	0									1
ブタ		1	196	82	2	2						283
ウレ科			68	6								74
ウサギ			5	5								10
合計		1	378	130	2	2						515

に形質のブタが窠のところにあった。このブタについての来歴、時期などについての今後の調査資料の増加に注目していきたい。(註2)

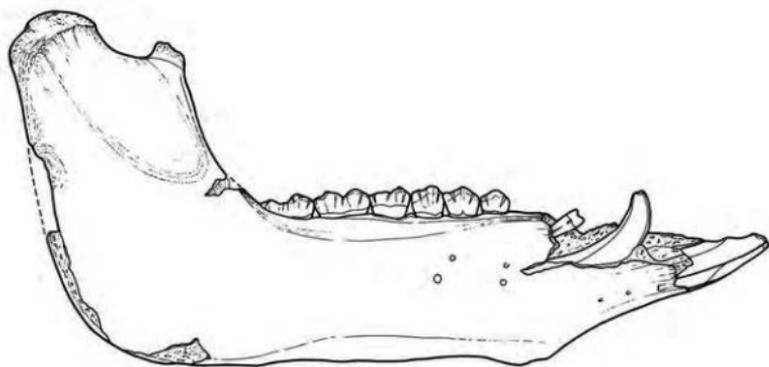
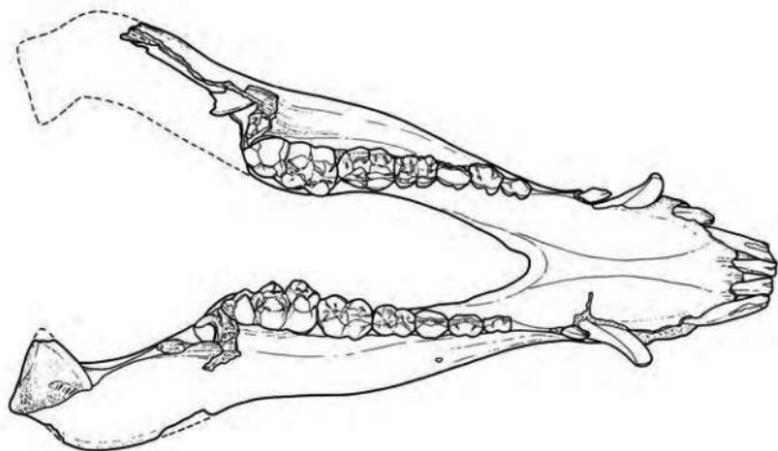
本遺跡で魚類遺体が少なかったことは先にも触れたのであるが、沖縄の漁業史のなかでこれをどのように位置付けていくか今後の課題であろう。グスク期に入ってから漁業はそれ以前の沖縄石器時代後期に比べると種類や量の増加していることが知られている。これも地域による違いがあり一概にはいえないと思うが、その間にあって技術的な進歩、需要の増大は当然考えられ、それが考古学的な資料にもよくうかがうことができるのである。しかし、それ以後どの様な変遷をとるかはよくわかっていない。つまり本遺跡のような近世の遺跡から出土する動物遺体を調査する機会(ごく少数の資料をみることはあったが)がまだないからであって、これも将来の研究にまたねばならないであろう。筆者はそうした機会のくることを期待したい。いずれにしても沖縄における食生活文化史の研究も他の地域と同様に考古学資料の重要さはますます高まるであろう。

#### 註

註1. 金子浩昌、伊波仲門門中墓出土のブタ遺存体、石川市古我知地古墓—沖縄県自動車道(石川那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)—、沖縄県文化財査報告書85集、p.177、沖縄県教育委員会、1987年12月。

註2. 伊波盛、琉球動物史、1979年、ひるぎ書房

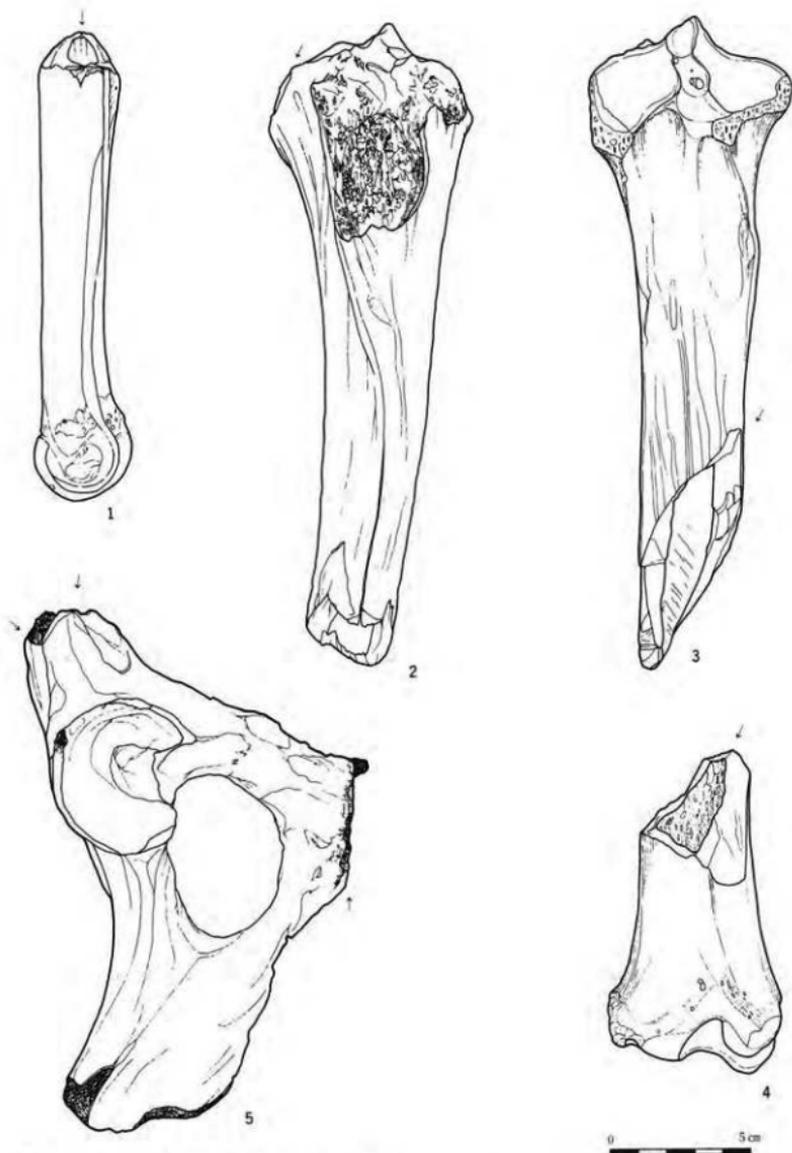
島袋正敏、沖縄の豚と山羊—生活の中から—、おきなわ文庫43、p.164、1989年1月。



第119図 プタ下顎骨

一括出土のもの一つで、小さい方の標本である。





第120図 切断加工痕をもつ四肢骨 (→は傷痕)

1. ウマ左中手骨 2. ウシ右脛骨 3. ウマ左脛骨 4. ウマ右脛骨 5. ウマ右寛骨

第22表1 骨の計測 (ブタ)

〔獣骨の計測凡例〕 A・U・d : Driesh (1976) による。

上顎骨

no	場所
7	Mocion-prosthion
25	C-M3歯槽間長
24	I1-P1歯槽間長
27	F1-M3歯槽間長
28	M1-M3歯槽間長
29	F1-P4歯槽間長
30	M3長
31	M3幅
34	後頭縮幅
35	後頭骨外側縮幅
36	大孔幅
38	項棘最大幅
39	項棘最小幅
40	側頭縮幅
41	前頭骨隆起突起縮幅
42	高冠上孔縮幅
45	Basion-Akrokranium高 (後頭部高)

下顎骨

no	場所
1	Basion-lufradentale間長
2	Id-間筋突起間長
3	Go-M3歯槽間長
4	I4-M3歯槽間長
5	Go-P2歯槽間長
6c	歯槽後縁-M3歯槽間長
7	F1-M3歯槽間長
7a	P3-M3歯槽間長
8	M1-M3歯槽間長
8a	P1-M3歯槽間長
9	P1-P2歯槽間長
11	I3-P2歯槽間長
12	Id-おとがい突起 (下顎連合部)
13	下顎枝高 (Gov-間筋突起)
14	下顎枝高 (Gov-下顎切歯底部)
15	下顎枝高 (Gov-r筋突起)
15a	下顎体高 (M3歯槽後縁)
15b	下顎体高 (M1歯槽前縁)
15c	下顎体高 (P2歯槽前縁)

四肢骨

no	場所
GLP	腕節高最大長
BG	腕節高最大幅
SLC	肩甲頭最少数幅
Bp	遠位端最大幅
Bd	遠位端最大幅
SD	骨幹部最少数幅
BT	肘骨最大幅
SDO	肘骨最少深
DPA	肘突起横断深
DR	最大高
BP/D	遠位関節節間幅

A. v. d. Driesh (1976) による。

(1) ブター一括出土標本

上顎骨 (GO)	備考
計測位置	
7	171
25	113.4
28	113.8
26	40.7
29	27.7
30	(25.6)
31	15.8
27	95
27a	86.3

側面片

no	GLP
24	50.78
25	69.42
25	(111.1)
26	19.43
28	72.31
29	60.22
30	33.42
41	104.37
42	31.58
45	107.24

下顎骨 (GO)

計測位置	平均	備考	平均
1	217		
2	240		
3	(46.2)		
4	162		
5	150.0±		128
6	119.5		
7	104.8		
7a	88.8		101.2
8	58.7		
9	84.4		
9a	29.2		
11	43.5±		31.4
12	58.5		
13	115.7		
14	98.5		
15	(106.2)		
15a	55.3		48.3
15b	45.1		44.9
15c	45.2		45.8
M1&2	27.7	歯槽のうろたぬ的なおぼみ受けられない	29.8

上顎骨

R/L	no	GLP	SD	BPA	備考
R	7	171			
R	25	113.4			
R	28	113.8			
R	26	40.7			
R	29	27.7			
R	30	(25.6)			不完全萌出
R	31	15.8			
R	27	95			
R	27	86.3			

(2) ブタ

下顎骨

R/L	no	GLP	BG	備考
R	1	217		
R	2	240		
R	3	(46.2)		
R	4	162		
R	5	150±		
R	6	119.5	128	♀/♀大型
R	7	104.8		♀/♀大型
R	8	58.7	101.2	♀/♀大型
R	9	29.2		
R	9	84.4		
R	11	43.5±	31.4	♀/♀大型
R	12	58.5		
R	13	115.7		
R	14	98.5		
R	15	(106.2)		
R	15a	55.3	48.3	♀/♀大型
R	15b	45.1	44.9	♀/♀大型
R	15c	45.2	45.8	♀/♀大型
R	M1中央	27.7	29.8	♀/♀大型

肩甲骨

R/L	no	GLP	BG	SLC
R	1	37.8	23.68	26.12

上腕骨

R/L	no	SD	Bd	BT	BP	GL
L	1	20.46	45.26	37.07	44.21	157.41

脛骨

R/L	no	SD	Bd	BP
L	1	22.89 × 13.87	22.79	
R	1	21.39 × 13.0		30.26

尺骨

R/L	no	GLP	SD	BPA
R	1	(28.57)	40.56	

中手・中足骨Ⅰ

R/L	no	BP	GL
R	1	19.32	60.24

中手・中足骨Ⅳ

R/L	no	BP	GL
R	1	16.1	58.25

四肢骨

部位	R/L	計測値
肩甲骨	R	GLP:37.8, BG:23.68, SLC:26.12
上腕骨	L	BD:45.26, PT:37.07, SD:20.46, GL:157.41, BP:44.21
尺骨	L	BP:30.26(R), BD:32.79(L), SD:22.89-13.97(L), 21.39-13.0(R)
中手・中足骨Ⅰ	R	SD:(28.57), BPA:40.56
中手・中足骨Ⅳ	BP	16.10, GL:58.25
中手・中足骨Ⅲ	BP	19.32, GL:60.24

第22表2 骨の計測 (ウシ、ウマ、イヌ)

(3) ウシ

種別	SLC	BP	BO	SLC	備考
L 1	45.27	53.22	61.13		
L 2	43.42		44.6		
L 3		45.25			
L 4		46.43	28.76		幼
L 5	56.92				
L 6		34.38			幼
L 7			42.82		
L 8			53.59		
R 1	58.89	52.28	53.59		
R 2		59.77	53.91		
R 3	35.98	49.74	44.37		
R 4	61.84	52.16			
R 5		46.05	52.7		
R 7	58.07	43.94			
R 8			34.46		

種別	SD	BO	BT
L 1	23.63		
L 2	39.5		
L 3		62.32	
L 4			
R 1	28.03		
R 2		65.92	79.62
R 3			77.2

種別	SD	BO	BP	GL
L 1	36.9	79.3	52.33	37.3
L 2		75.89		
R 1			61.39	

種別	SD	HPA
L 1	46.66	
R 1	46.79	57.11

種別	SD	BO	BP	備考
L 1		61.8		
L 2	33.84		59.57	
L 3	24.92		68.12	
L 4	23.51		51.7	幼
L 5	28.29		61.73	
L 6		55.12		
L 8		62.68		

種別	SD
L 1	34.19
R 1	33.59

種別	SD	BO	BP	GL
L 1		62.16		
L 2		62.47		
R 1	29.74			
R 2		66.71		
R 3		65.98		
R 4	24.1	60.02	66.1	73.1

種別	GL	GL
L 1	64.12	
L 2	64.38	
L 4		61.89
R 1	70.28	
R 2	64.68	
R 3	79.18	

種別	GL
L 1	130.1

種別	SL
L 1	54.87
L 2	56.2
L 3	61.43
L 4	59.2
R 1	69.04
R 2	51.22

種別	SD	BO	BP
L 1	34.61		44.52
L 2	27.88		
L 3	28.77	58.9	
R 1		22.82	28.14
R 2	27.03		42.15
R 3	37.18		46.7
R 4	23.88	48.28	

(4) ウマ

種別	GLP	BO	SLC	GL
L 1	85.22	44.42	54.48	54.68
L 2	79.47	39.27	55.83	49.66
R 1		43.1		62.71

種別	BO	BT	BP
L 1	71.74	68.33	
L 2	70.48	64.64	
L 3		67.61	
L 4			74.74
R 1	68.78	65.51	

種別	SD	BO	BP
L 1	37.22		15.49
L 2	37.08		
L 3		60.83	
L 4		63.91	
R 1		67.02	

種別	SD	BP
L 1	28.96	43.3
L 2	28.38	61.83
L 5		65.18
L 6		62.21
R 1	29.84	64.28
R 2	28.42	65.02
R 3		64.82
R 4		62.34

種別	LA	AR
L 1	56.72	53.86
L 2	62.42	37.07
R 1	66.08	51.19
R 2	61.61	53.75

種別	SD	BO	BP
L 1			97.68
L 2	39.07	71.28	
R 1	34.98	77.78	
R 2		83.61	

種別	SD	BO	BP
L 1	36.13		60
L 2	61.94		69.12
R 1			85.58
R 2			86.74
R 3	35.94		79.2
R 4		64.68	

種別	BP	GR	GR
R 1	42.65	51.78	54.82
R 2	38.75	51.38	
R 3	45.27	53.83	
R 4	43.64	52.78	54.23

種別	GL
L 1	95.27
L 2	100.1
L 3	87.67
R 1	102.41
R 2	93.38

種別	SD	BP
L 1		44.23
L 2	24.48	
R 1		44.89
R 2	28.24	47.15
R 3		28.99
R 4		43.04

種別	SD	BO	GL
1	28.17	41.92	72.84
2	26.96	38.89	78.23
3	28.19	41.96	74.4
4	34.14	44.95	75.57
5	28.07	40.73	78.04
6	27.58	41.6	75.87
7	30.85	42.52	79.89
8	31.72	43.48	81.23
9	28.87		74.04
10	28.89	40.46	
11	28.66	39.61	67.91
12	28.39	40.67	73.77

種別	SD	BO	BP	GL
1	39.09	42.25	47.12	40.54
2	40.14	47.56	46.46	80.98
3	41.3	44.86	47.79	82.74
4	38.82	42.49	47.72	82.18
5	37.53	41.82	45.44	81.06
6	37.7	40.71	43.35	81.98
7	40.64	43.2	45.03	82.57
8	40.89	47.78	45.73	80.6
9	43.02	46.42	48.09	39.24
10	34.99	40.53	45.37	82.92
11	37.64	42.92	45.55	80.56

種別	SLC	LB
L 1	46.49	24.67
L 2		40.19
R 1	48.27	41.77
R 2	48.33	40.49
R 3	53.6	43.94
R 4		93.31

(5) イヌ

種別	SD	BO	GL	備考
L 1	70.39			24.9 (Pro epif 47) 84 (新) 元
R 1	8.18	92.18	104.28	

種別	SD	BP	GL	備考
L 1	64	33.56		区5475-1
R 1	7.08	11.84	101.22	
R 2		13.48		

種別	SD	HPA
L 1	14.52	12.08

種別	SD
L 1	18.1

種別	SD	BO	GL	備考
L 1	4.29	31.94	112.1	
R 1		31.37		区5元

種別	SD	BP	備考
L 1	7.5		
R 1	172.48	39.27	43 (新) 元 7 (新)



第23表 ブタ歯牙出土状況

出土層	部位	東							西							計	備				
		11	12	13	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	11	12	13	P1			P2	P3	P4	M1
崩壊	崩壊	11	12	13	m1	m2	m3	11	12	13	m1	m2	m3	11	12	13	m1	m2	m3	崩壊	崩壊
第1層	崩壊中層																				
第2層	崩壊中層																				
第3層	崩壊中層																				
第3a層	崩壊中層																				
第3b層	崩壊中層																				
第3c層	崩壊中層																				
第3d層	崩壊中層																				
第3e層	崩壊中層																				
第3f層	崩壊中層																				
第3g層	崩壊中層																				
第3h層	崩壊中層																				
第3i層	崩壊中層																				
第3j層	崩壊中層																				
第3k層	崩壊中層																				
第3l層	崩壊中層																				
第3m層	崩壊中層																				
第3n層	崩壊中層																				
第3o層	崩壊中層																				
第3p層	崩壊中層																				
第3q層	崩壊中層																				
第3r層	崩壊中層																				
第3s層	崩壊中層																				
第3t層	崩壊中層																				
第3u層	崩壊中層																				
第3v層	崩壊中層																				
第3w層	崩壊中層																				
第3x層	崩壊中層																				
第3y層	崩壊中層																				
第3z層	崩壊中層																				
不明	崩壊中層																				
合計																					

凡例<>未検出、○ 跡、a-瓦類、b-砂利層

第24表 イノシシ歯牙出土状況II地区

出土層	部位	東							西							計	備				
		11	12	13	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	11	12	13	P1			P2	P3	P4	M1
崩壊	崩壊	11	12	13	m1	m2	m3	11	12	13	m1	m2	m3	11	12	13	m1	m2	m3	崩壊	崩壊
第1層	崩壊中層																				
第2層	崩壊中層																				
第3層	崩壊中層																				
第3a層	崩壊中層																				
第3b層	崩壊中層																				
第3c層	崩壊中層																				
第3d層	崩壊中層																				
第3e層	崩壊中層																				
第3f層	崩壊中層																				
第3g層	崩壊中層																				
第3h層	崩壊中層																				
第3i層	崩壊中層																				
第3j層	崩壊中層																				
第3k層	崩壊中層																				
第3l層	崩壊中層																				
第3m層	崩壊中層																				
第3n層	崩壊中層																				
第3o層	崩壊中層																				
第3p層	崩壊中層																				
第3q層	崩壊中層																				
第3r層	崩壊中層																				
第3s層	崩壊中層																				
第3t層	崩壊中層																				
第3u層	崩壊中層																				
第3v層	崩壊中層																				
第3w層	崩壊中層																				
第3x層	崩壊中層																				
第3y層	崩壊中層																				
第3z層	崩壊中層																				
不明	崩壊中層																				
合計																					

第25表 ブタ歯牙出土状況II地区(一括)

出土層	部位	東							西							計	備				
		11	12	13	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	11	12	13	P1			P2	P3	P4	M1
崩壊	崩壊	11	12	13	m1	m2	m3	11	12	13	m1	m2	m3	11	12	13	m1	m2	m3	崩壊	崩壊
第1層	崩壊中層																				
第2層	崩壊中層																				
第3層	崩壊中層																				
第3a層	崩壊中層																				
第3b層	崩壊中層																				
第3c層	崩壊中層																				
第3d層	崩壊中層																				
第3e層	崩壊中層																				
第3f層	崩壊中層																				
第3g層	崩壊中層																				
第3h層	崩壊中層																				
第3i層	崩壊中層																				
第3j層	崩壊中層																				
第3k層	崩壊中層																				
第3l層	崩壊中層																				
第3m層	崩壊中層																				
第3n層	崩壊中層																				
第3o層	崩壊中層																				
第3p層	崩壊中層																				
第3q層	崩壊中層																				
第3r層	崩壊中層																				
第3s層	崩壊中層																				
第3t層	崩壊中層																				
第3u層	崩壊中層																				
第3v層	崩壊中層																				
第3w層	崩壊中層																				
第3x層	崩壊中層																				
第3y層	崩壊中層																				
第3z層	崩壊中層																				
不明	崩壊中層																				
合計																					

凡例( ) 跡

第26表 イヌ歯牙出土状況

出土層	部位	右						左						個体数											
		I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1		I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	
第3層	上	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第3層	中																								1
第3層	下																								1
合計		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	
不明																								1	

凡例：a：丸層

第27表 ウマ歯牙出土状況

出土層	部位	右						左						個体数										
		I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1		I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
第1層	上	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第2層	上																							1
第2層	中																							1
第2層	下																							1
合計		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
不明																							1	

凡例：( ) 幼, a:丸層, b:砂粒層

第28表 ウシ歯牙出土状況

出土層	部位	右						左						個体数										
		I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1		I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
第1層	上	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第2層	上																							1
第2層	中																							1
第2層	下																							1
合計		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
不明																							1	

凡例：( ) 幼, a:丸層

第29表 ヤギ歯牙出土状況

出土層	部位	右						左						個体数										
		I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1		I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3
第2層	上	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
第3層	上																							1
第3層	中																							1
第3層	下																							1
合計		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
不明																							1	

凡例：a:丸層







## 第VI章 結 語

県庁舎行政棟建設工事に関わって発掘調査された湧田古窯跡は沖縄窯業史研究の上に多大な成果と研究課題を呈示した。沖縄の伝統的産業としての窯業の展開を知る貴重な遺跡であることがあらためて確認された。幾多の時代の変遷の流れの中において、この地に多くの建物が建設され、文字どおり那覇市の中核を形成してきた場所でもあったことから旧来からの地形が大きく変貌されてきたところでもある。それとともに、湧田古窯跡も完全に壊滅したと考えられていた。しかしながら発掘調査では、これまで予期してなかった重要な遺構が次々と検出されるとともに、膨大な量の遺物が出土した。

これまで沖縄の窯業史研究では、登り窯が伝統的な窯の形態であるとされてきたが、従来の見解を覆す平窯構造が確認されたことが特筆される。平窯そのものは、日本本土にも古くから見られるが、湧田窯の例のような形状をもつものはなく、その類例は中国、東南アジアに分布するといわれている。沖縄の窯業技術の源流の解明に、きわめて重要な手がかりをもたらすこととなった。

外来文化、技術形態の変容のあり方の一つとして、沖縄の歴史的、地理的位置とその展開の特質を象徴的に示している。琉球王府が編纂した文献に湧田窯創建の記録があり、その実際の存在が発掘により検証された。今回の発掘地域は瓦窯を中心として生産していたことが確認された。発掘面積約5000㎡の中で、作業場（工房跡）、粘土取り場、窯、不良品廃棄物、製品置き場等が確認され、「窯場」の様相を主体的に把握出来たことは意義深いものがあつたと言える。今調査では、瓦窯が数基検出されるとともに、これに関連する石列囲いの区画、排水溝、瓦列、埴列、井戸等が広範囲に及んで検出された。

特に今回検出された窯は平窯の形態で、南中国との関係が指摘されている。本遺跡が立地する一帯は瓦生産関係窯場で占められていたことはまちがいない。伝承で言われているとおり、湧田窯業遺跡は、県庁敷地のみならずハーバービューホテルが位置する楚辺やさらに南側の壺川に至る広範囲に及んでいたと推定される。その中でも瓦や埴を中心に焼いた瓦窯、甕、壺を焼いた荒焼窯、さらには湧田焼と呼ばれる上焼の窯とそれぞれが専門化されており、窯場が区分されていたと考えられる。

また、遺物については、瓦や窯道具、埴、湧田の上焼、中国磁器等が出土し、時期判定の目安になった。II地区を中心として出土した中国陶磁器について見てみると、15世紀～19世紀にかけての遺物の出土が目立ち、特に17世紀後半～19世紀にかけての資料がまとめて出土しており、近世期の沖縄の窯業の時期、湧田の性格を考える貴重な資料となっている。

各地に残る琉球王朝時代の建造物の屋根瓦が湧田窯で製造された可能性が高いことが確認され、琉球王朝関係建造物の屋根瓦の製造地の一つとして、他の古窯との今後の比較検討の一端をかみ見ることが出来た。また、これまで沖縄の各地の近世村落遺跡から、湧田焼ではないかと見られる陶器がかなり出土している。今回の発掘調査により、その照合が可能になった。

湧田窯の初現と終末はなお不明な部分を残しているが、次のようなことは明らかである。すなわち、薩摩から朝鮮の陶工を招聘して、技術指導を受けていた時よりかなり前から湧田窯は開始されていた。1616年にこの地に窯が開設されて、その後1682年には知花窯など、いくつかの古窯とともに壺屋に統合されたとする記録は、湧田窯のすべてではなかったのではないかと考える。少なくとも、本地区においての瓦窯については、統合後も続けられていた可能性が高い。

以上のように、沖縄の窯業研究は今だ不明な部分が多く、特に発掘調査において、窯の構造が検出されたことの意義は深く、今後は類例資料の蓄積が必要である。そのことによって沖縄における近世窯業の研究が進展していくものとする。

# 図 版



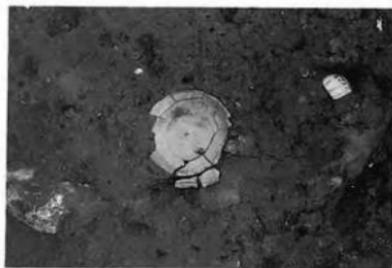
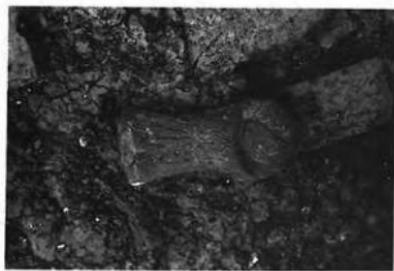
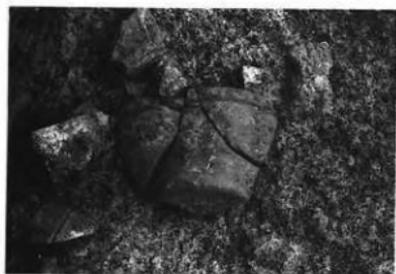
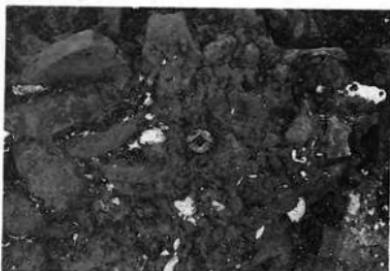
第1図版 表土剥ぎの状況と事前の打ち合せ



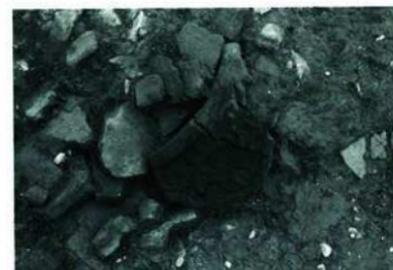
第2図版 1地区作業風景



第3図版 I地区堆積層の状況



第4图版 1地区遗物出土状况



第5图版 I地区遗物出土状况



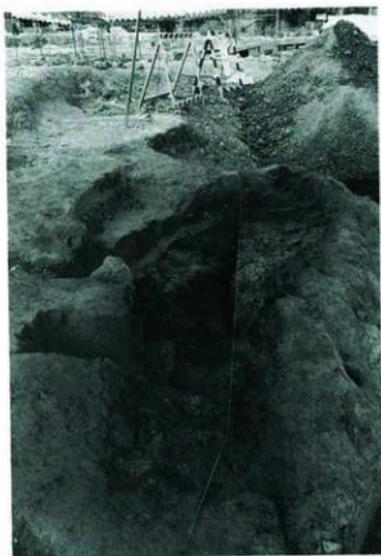
第6図版 1地区 (上: 3号窯と4号窯検出状況、中・下: 3号窯)



第7図版 1地区4号窟の状況



第8図版 I地区5号窯の状況



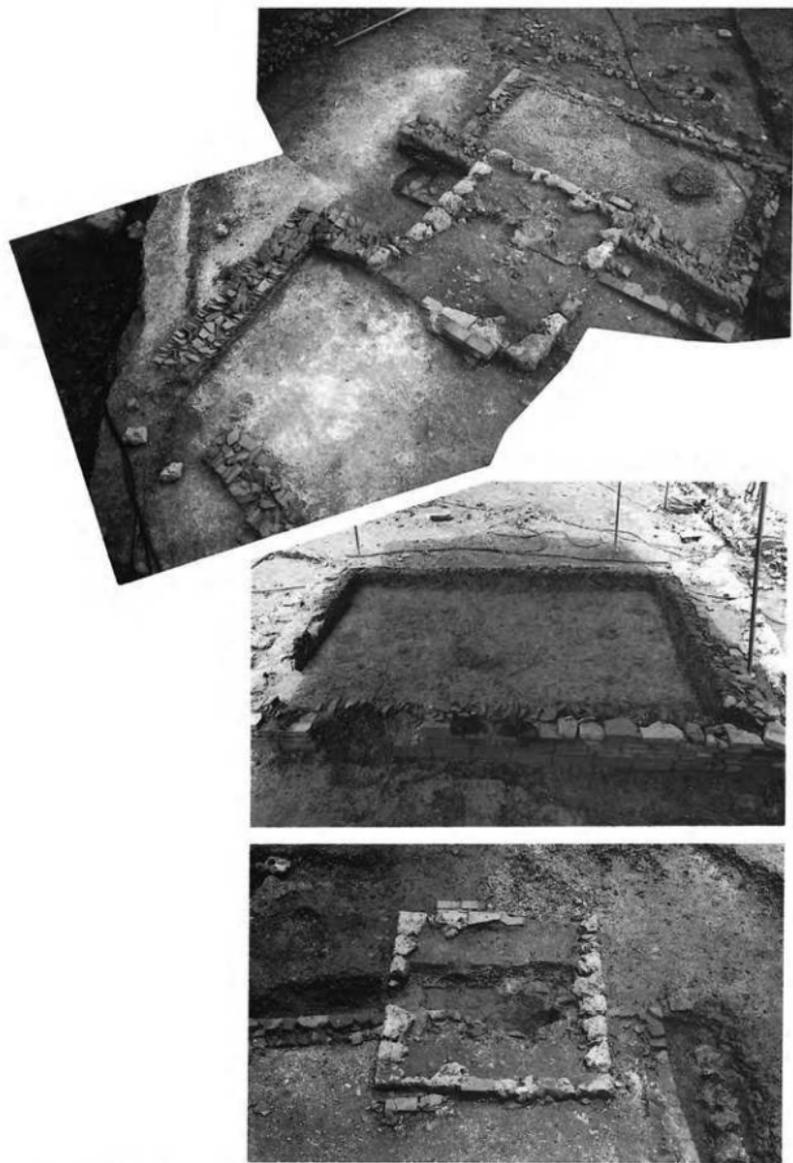
第9図版 1地区6号窯の状況



第10図版 I地区井戸検出状況



第11图版 I 地区遺構検出状況



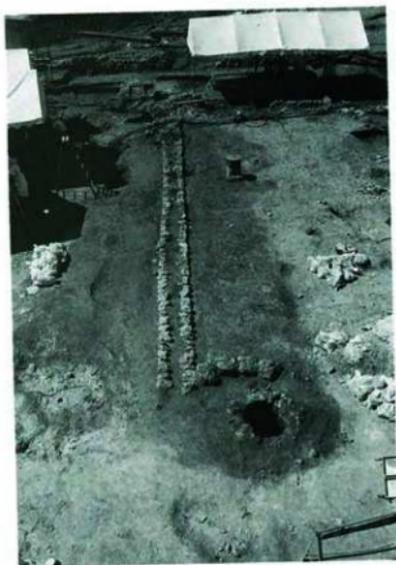
第12図版 I地区遺構検出状況



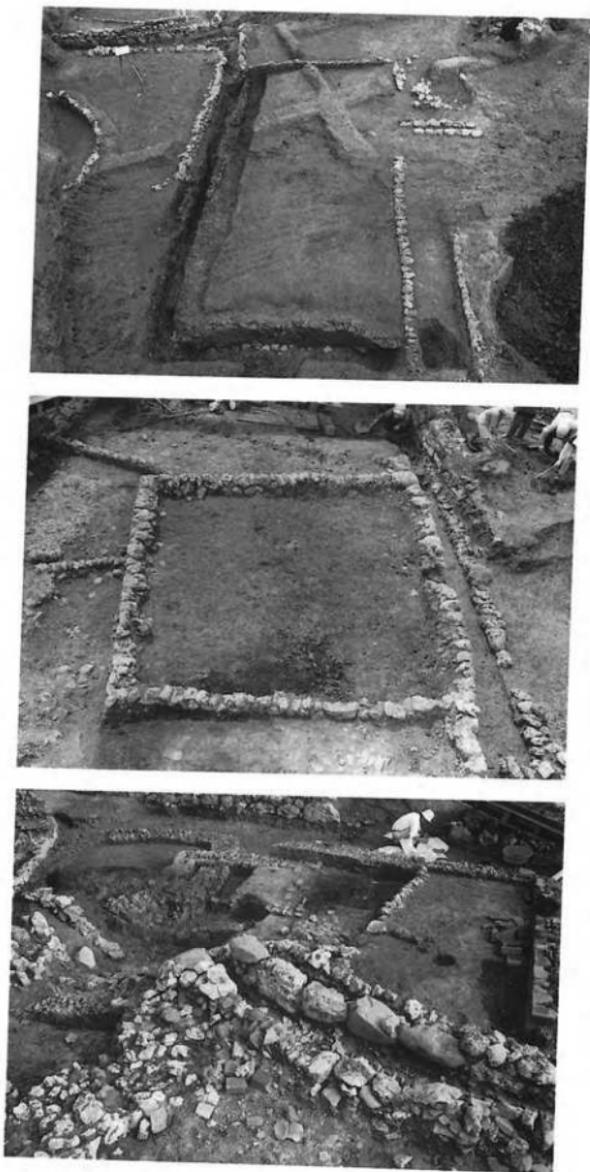
第13図版 I地区遺構検出状況



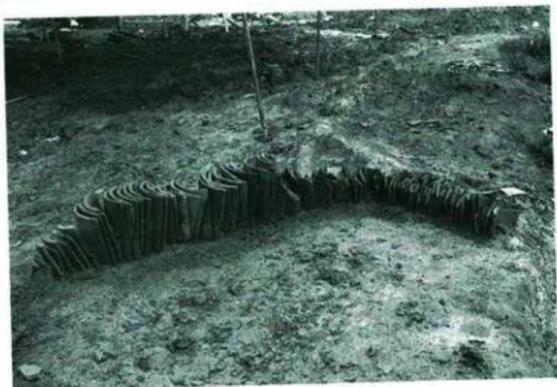
第14図版 I地区遺構検出状況



第15図版 I地区遺構検出状況



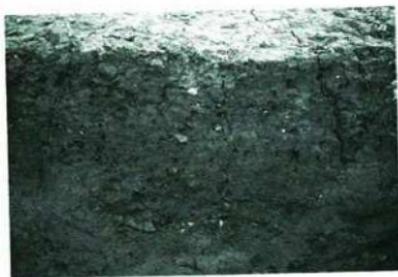
第16图版 I地区遺構検出状況



第17图版 I地区遺構検出状況



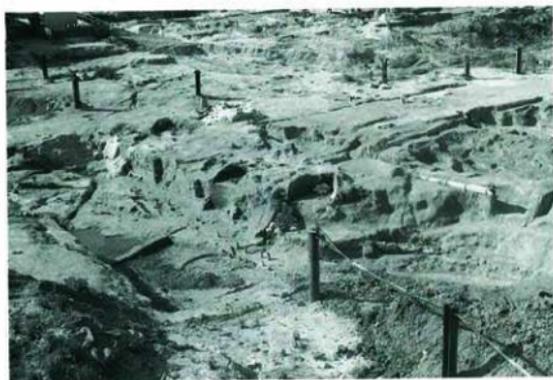
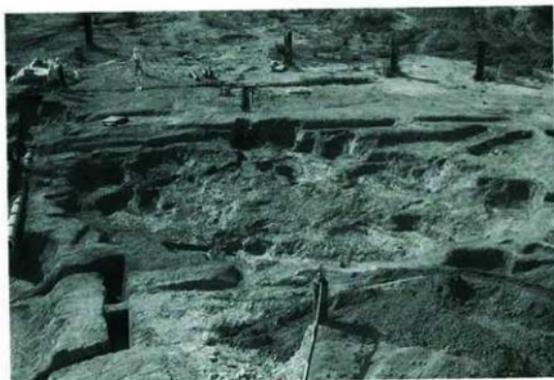
第18图版 II地区作業風景



第19図版 II地区堆積層の状況



第20図版 II地区の状況



第21図版 II地区の状況



第22图版 II地区遺物出土状況



第23图版 II地区獸骨出土狀況



第24図版 II地区竈前面の状況



第25図版 II地区1号窟・2号窟の発掘状況



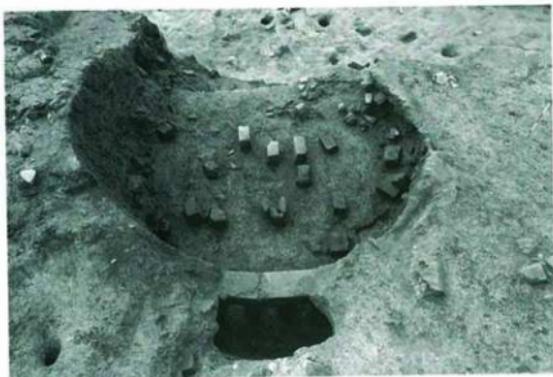
第26図版 II地区1号窟(上)と2号窟(下)



第27図版 II地区1号窟



第28図版 II地区1号案内側の調整痕



第29図版 II地区2号窯の状況と作業風景



第30图版 II地区2号窟



第31図版 II地区窯体熱残留磁気調査状況



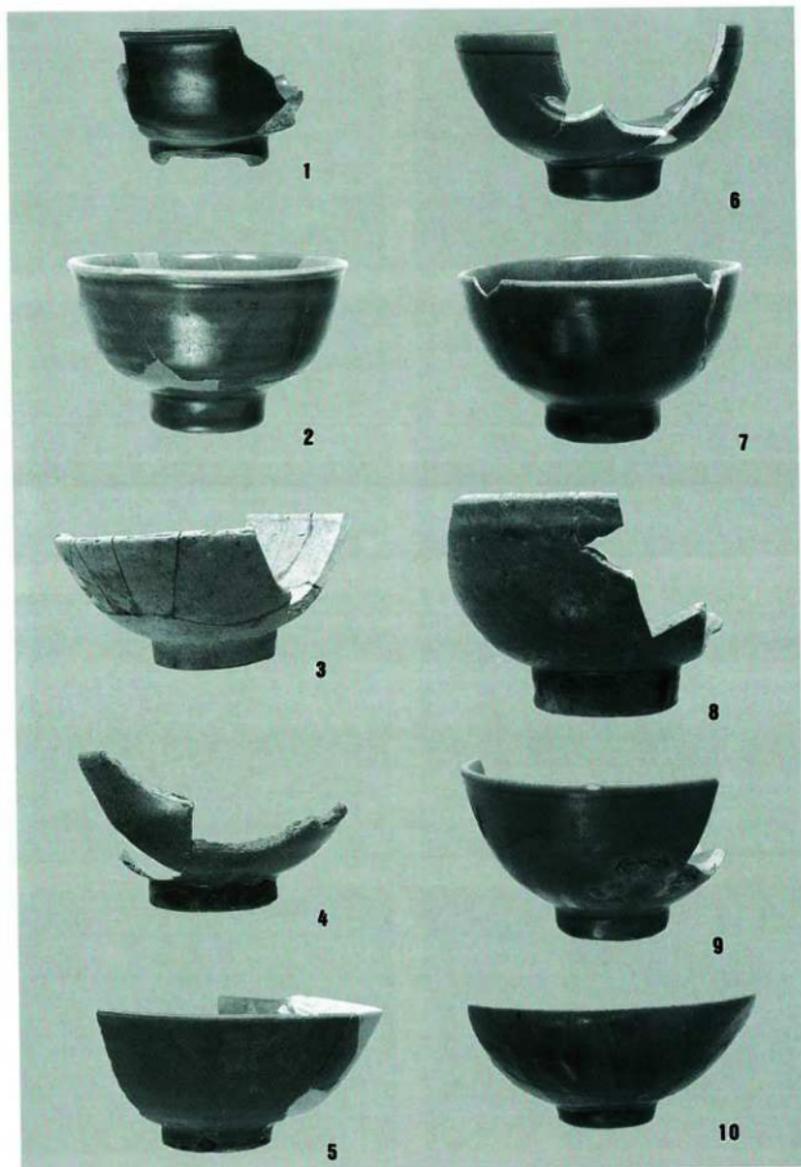
第32図版 II地区1号窯・2号窯切り取り作業



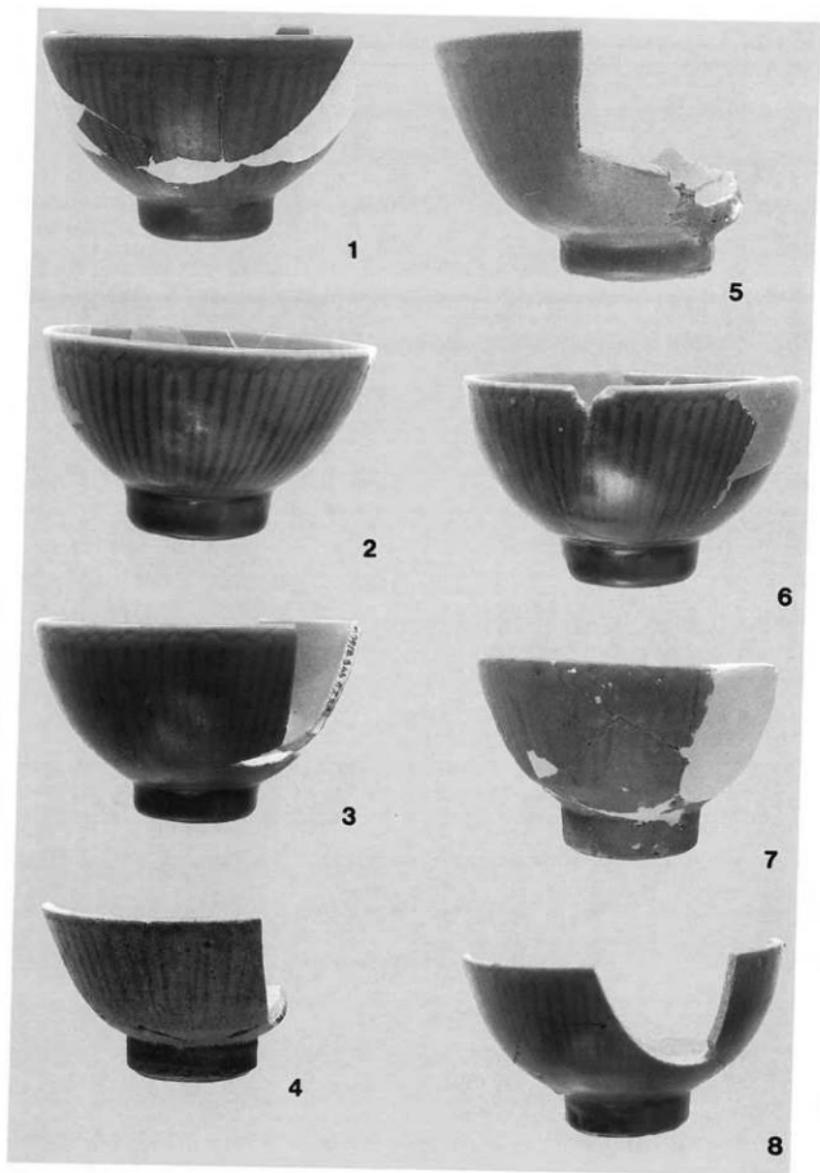
第33図版 III地区発掘風景



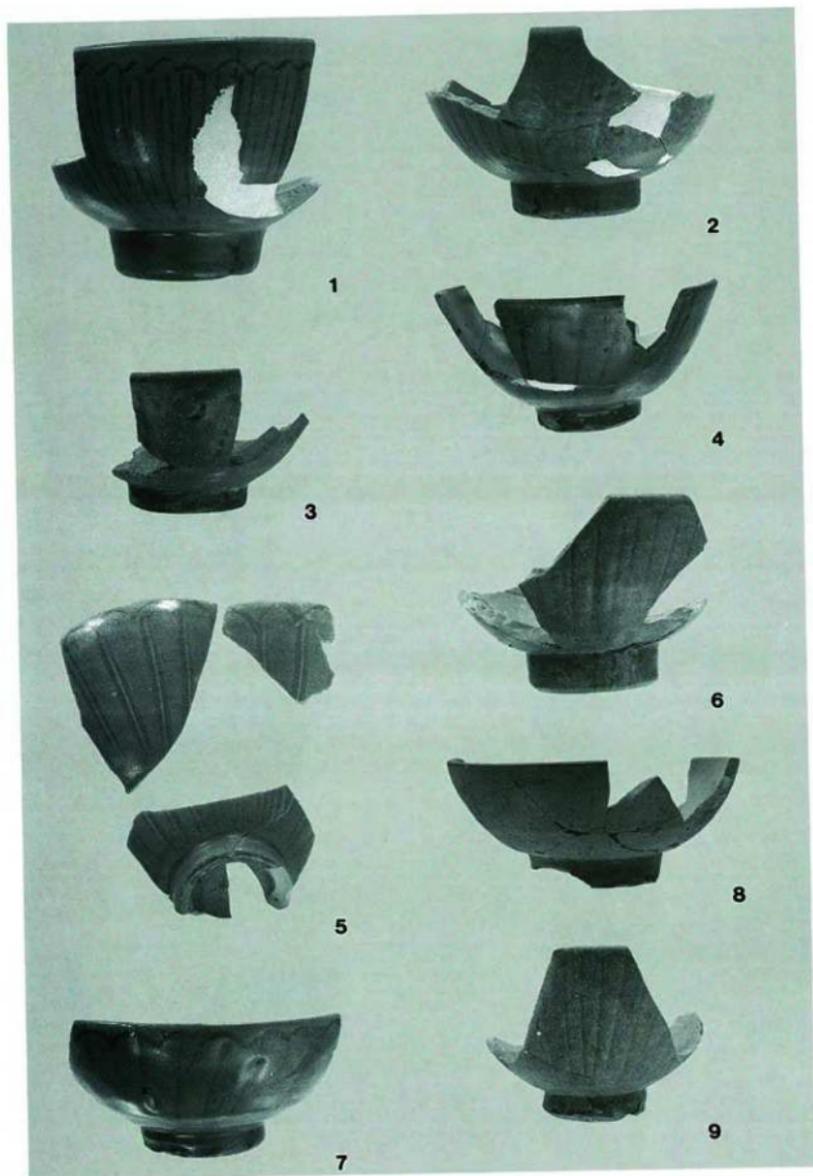
第34図版 III地区の状況と遺物の出土状況



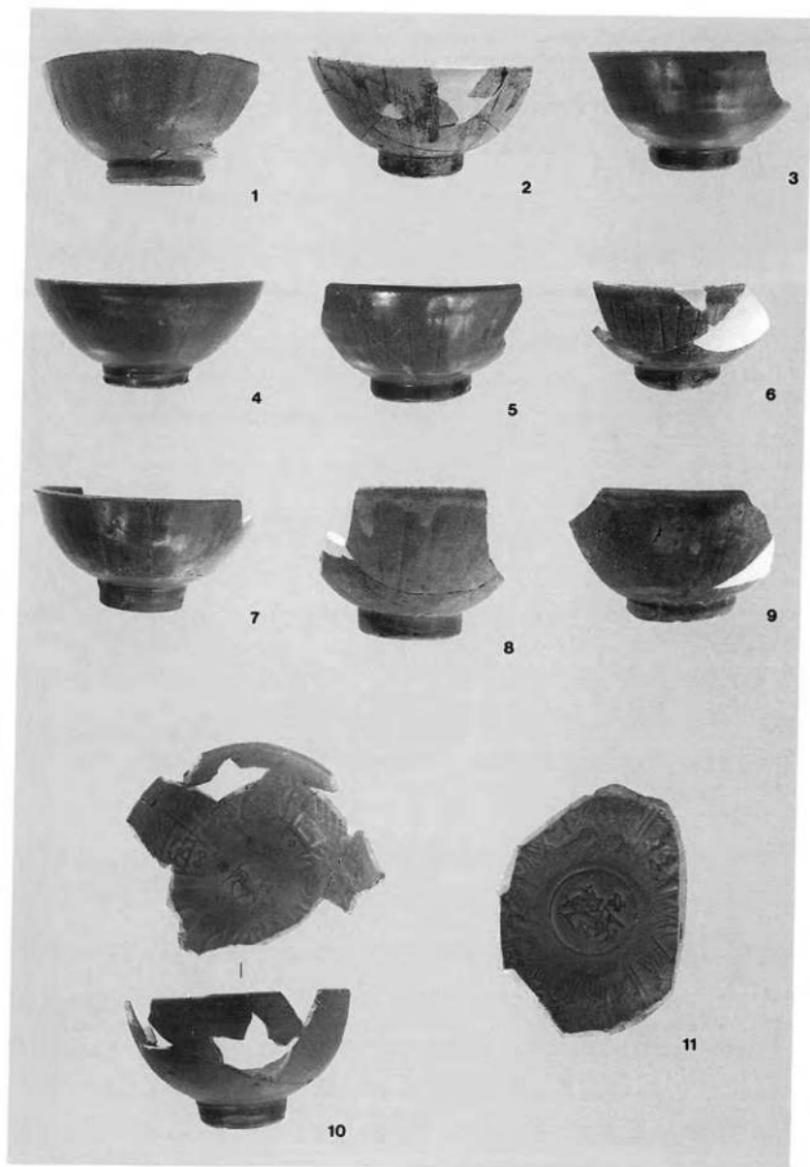
第35图版 青磁① (I地区)



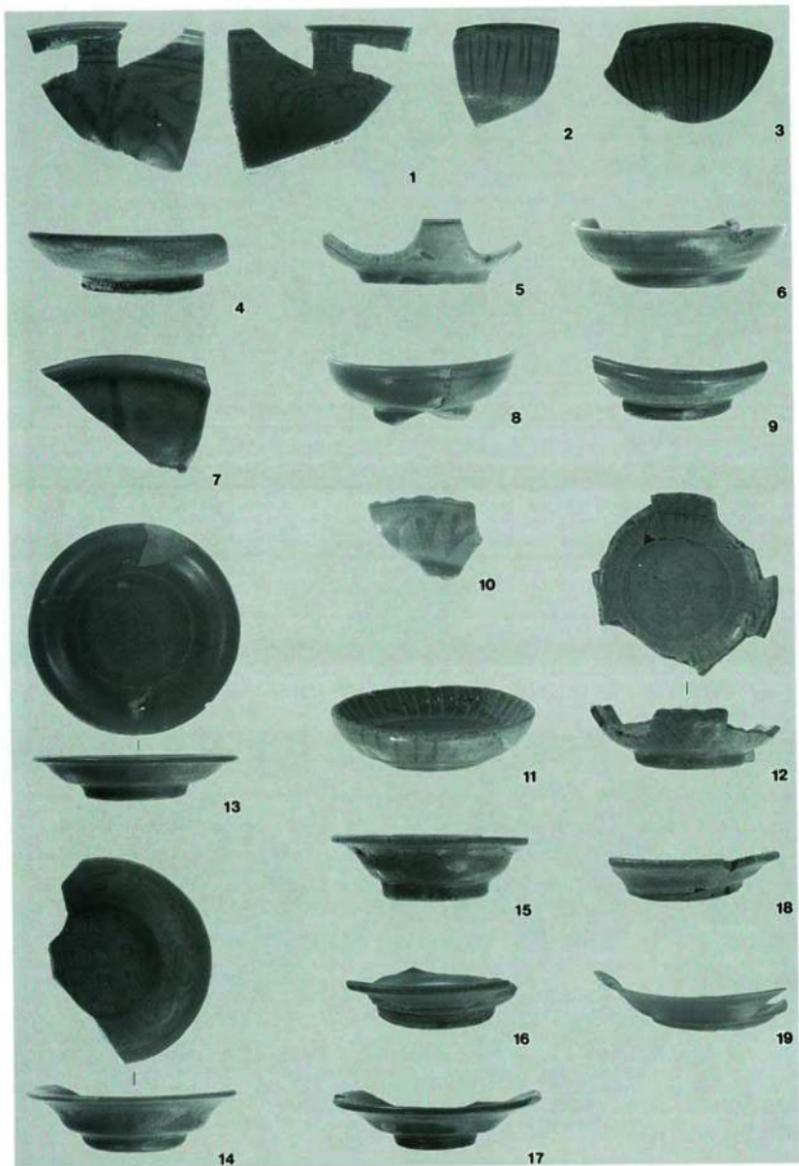
第36图版 青磁② (1地区)



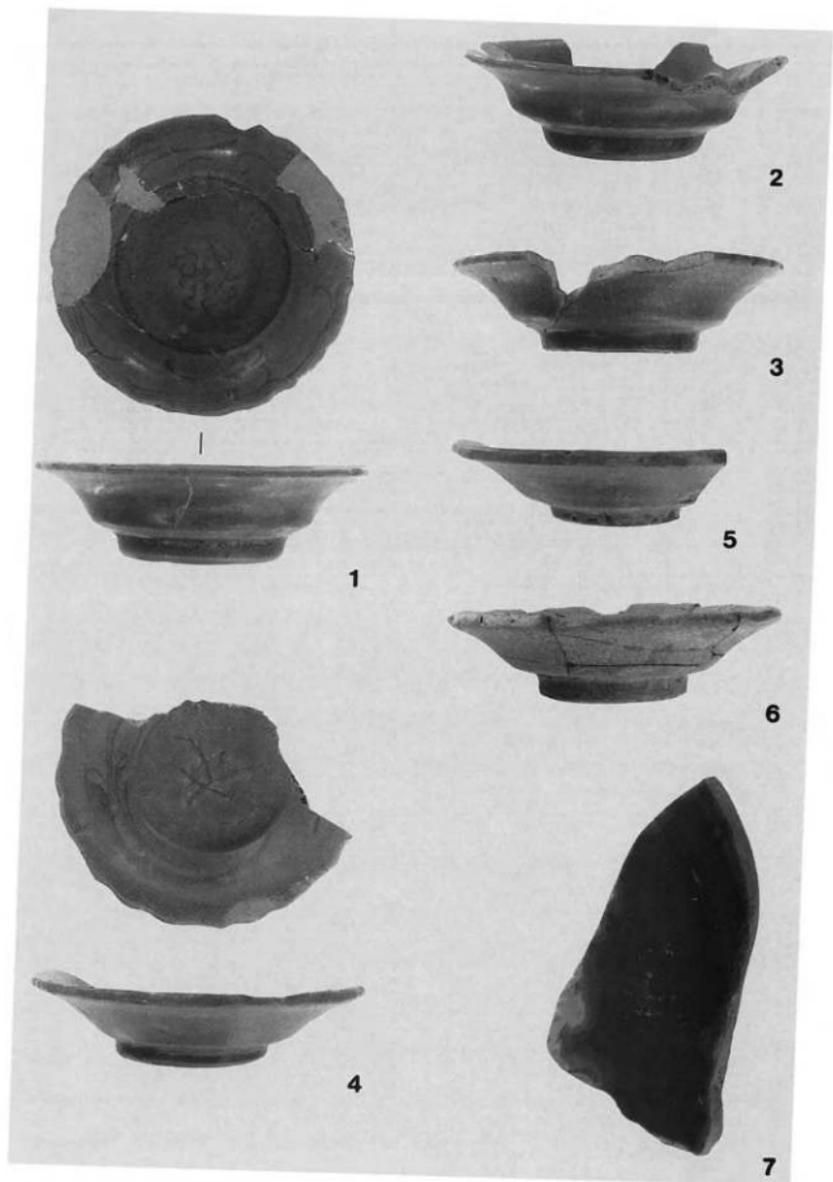
第37图版 青磁③ (I地区)



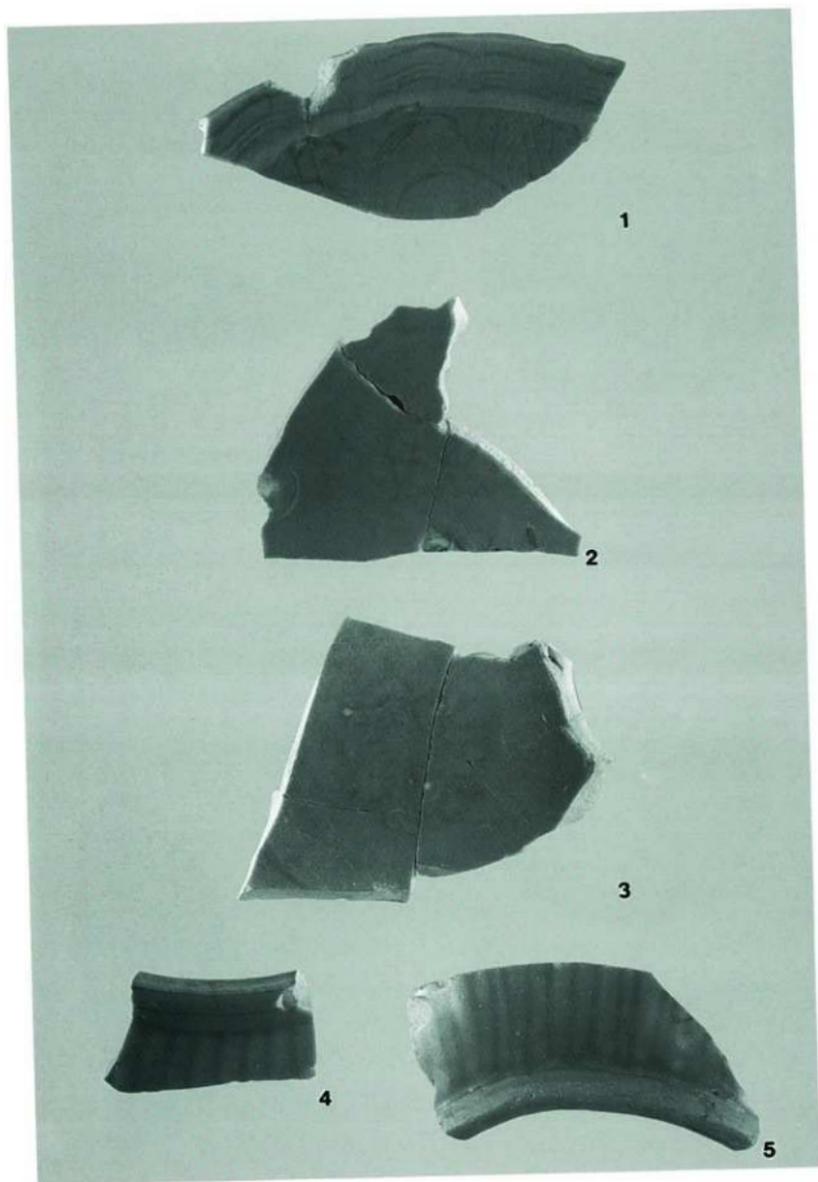
第38图版 青磁④ (I地区)



第39图版 青磁⑤ (I地区)



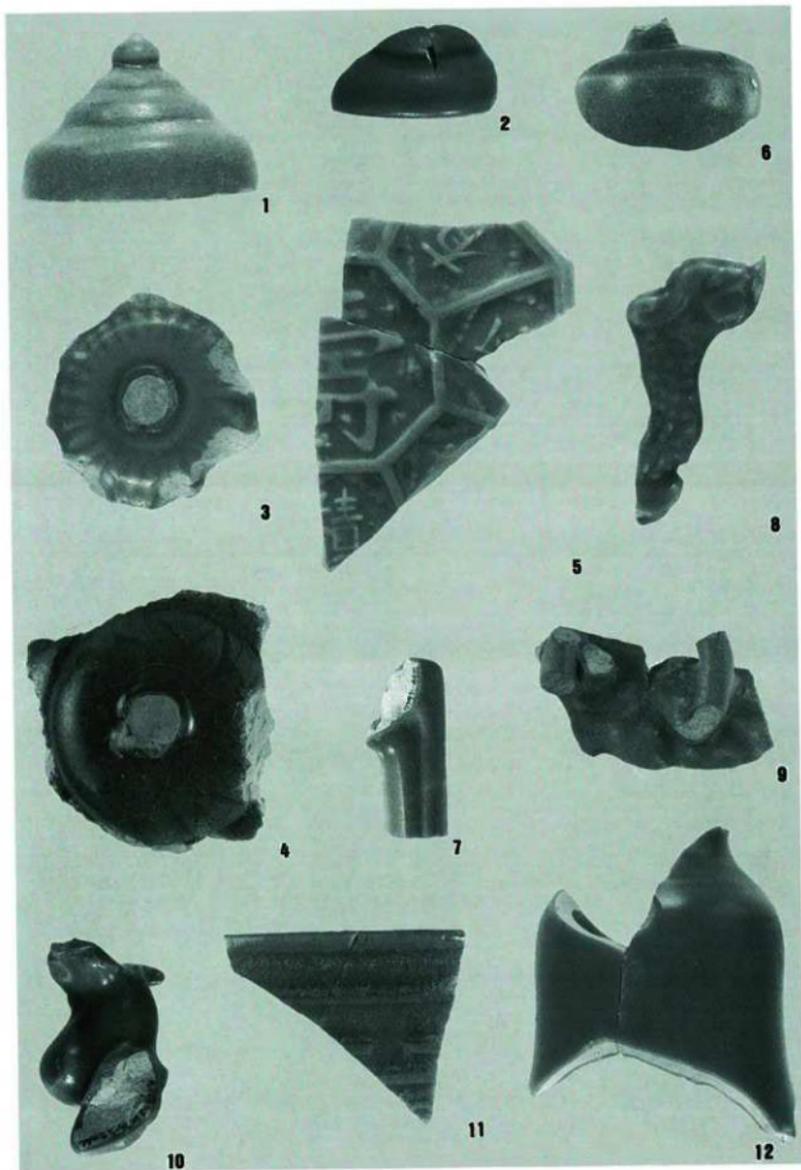
第40图版 青磁⑥ (I地区)



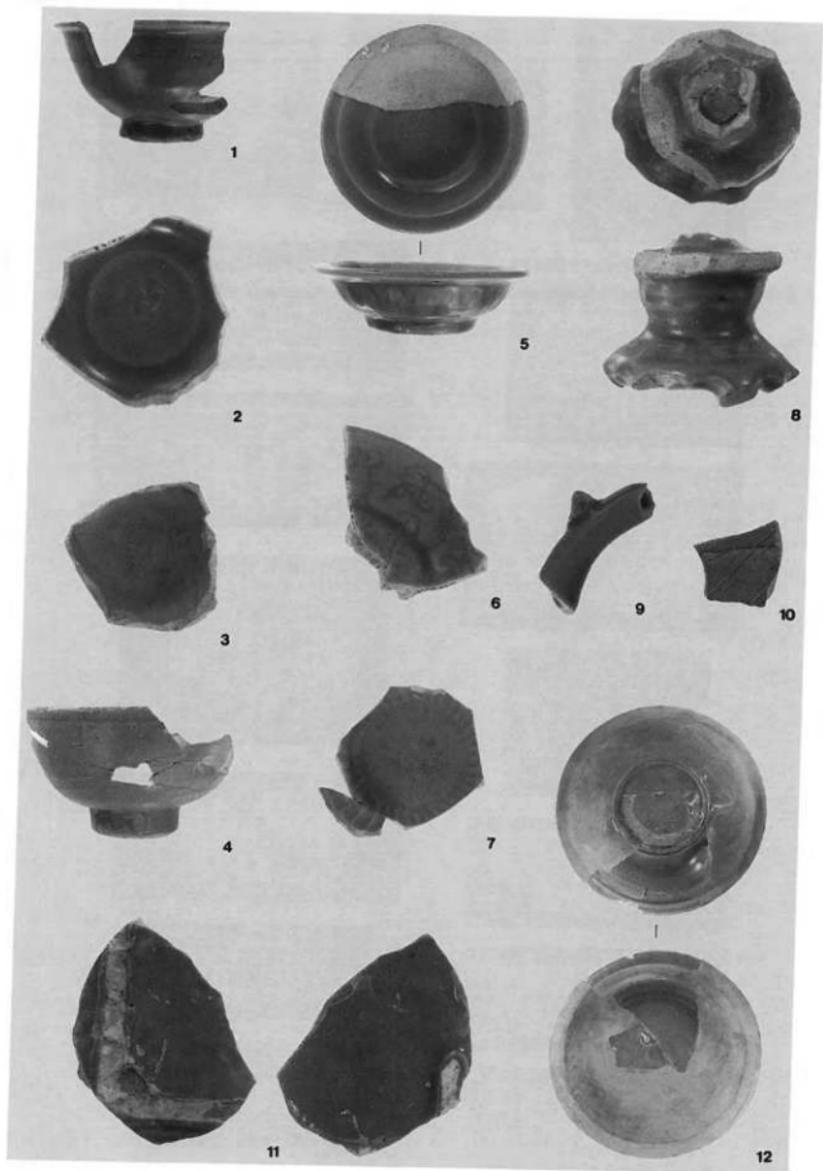
第41図版 青磁⑦ (I地区)



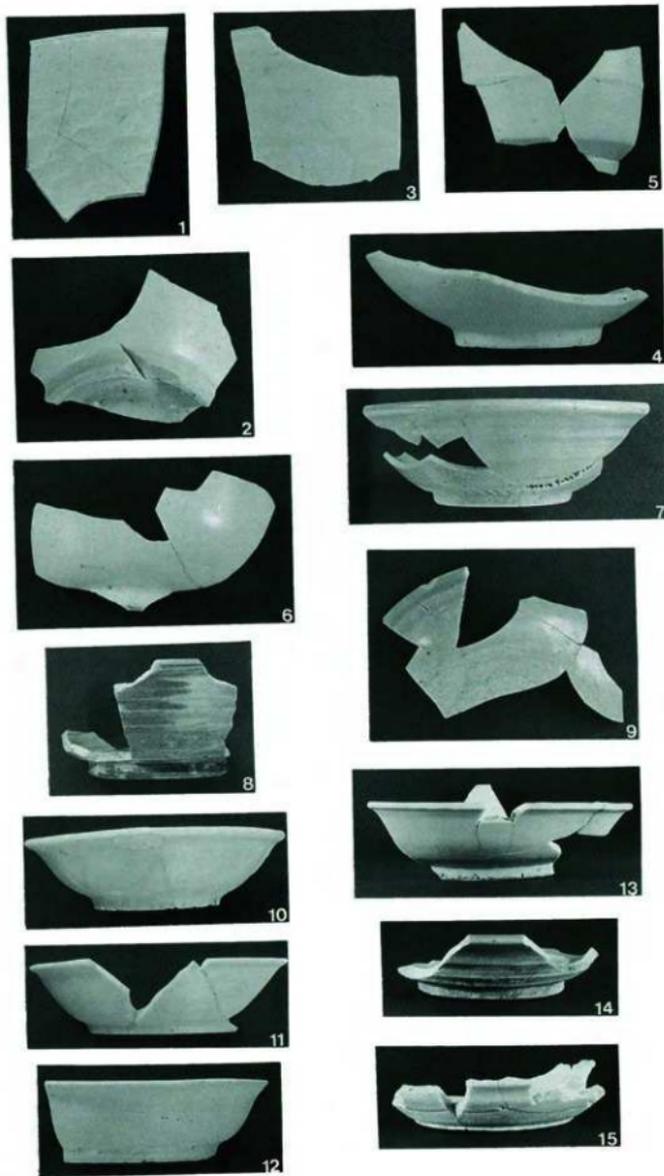
第42图版 青磁⑧ (1地区)



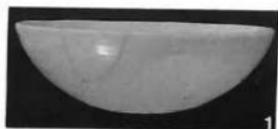
第43图版 青磁⑨ (1地区)



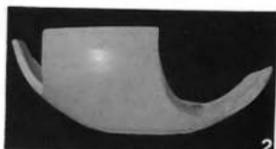
第44图版 青磁⑩ (I地区)



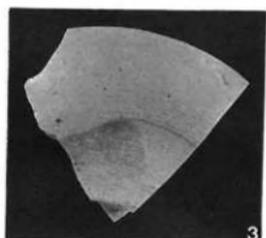
第45图版 白磁① (I地区)



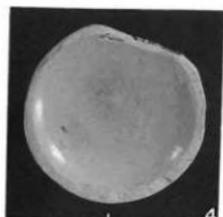
1



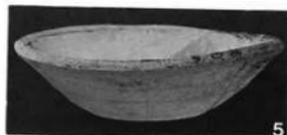
2



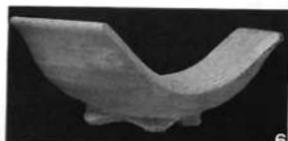
3



4



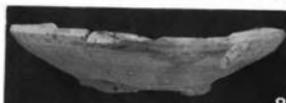
5



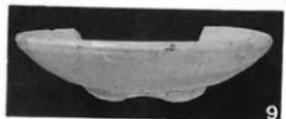
6



7



8



9



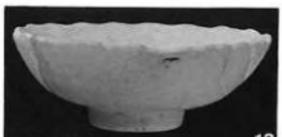
10



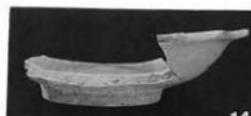
11



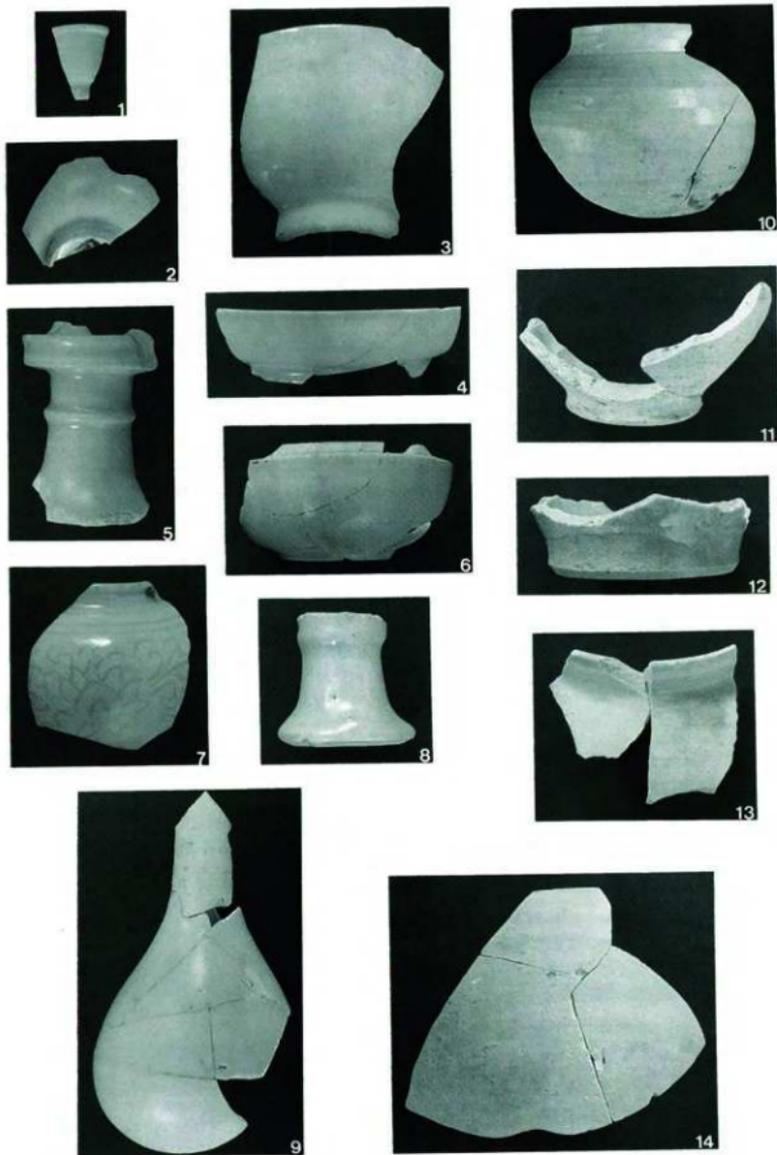
12



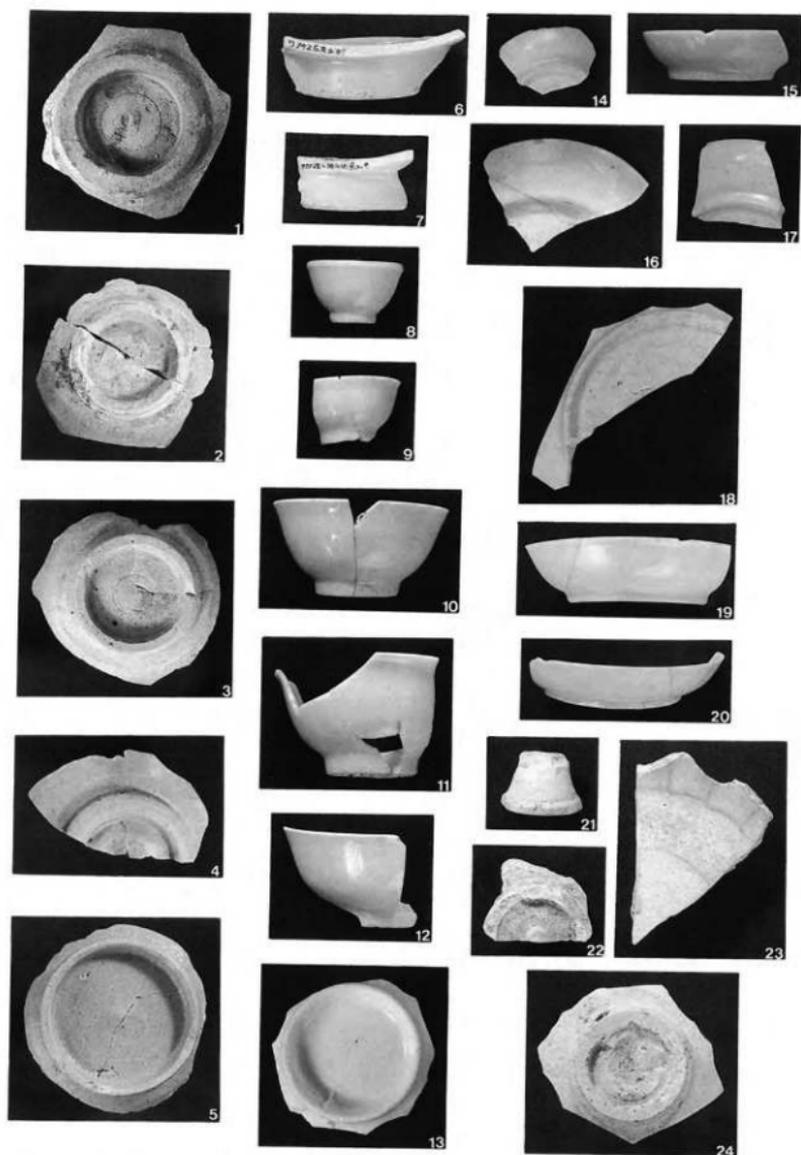
13



14



第47图版 白磁③ (I地区)



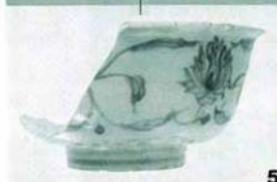
第48图版 白磁④ (II・III地区)



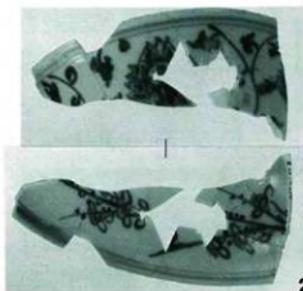
1



4



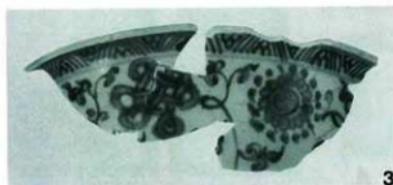
5



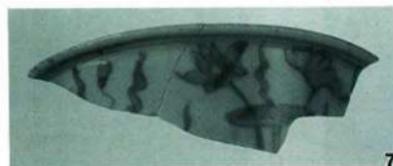
2



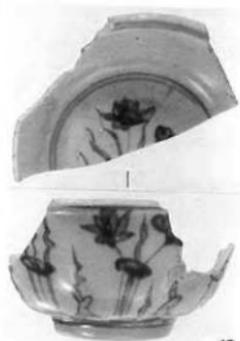
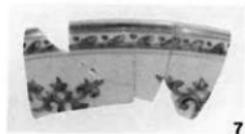
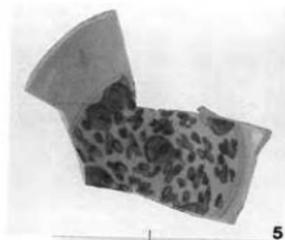
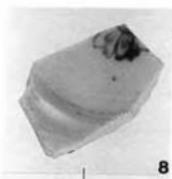
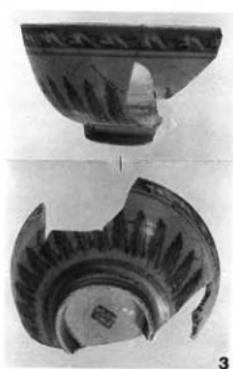
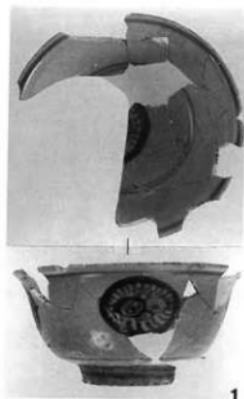
6

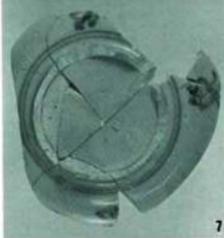
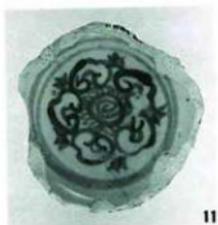
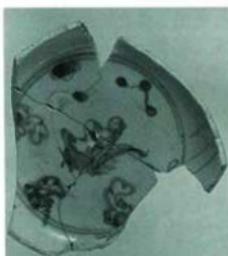
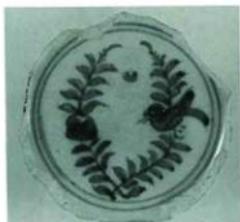
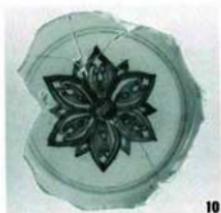
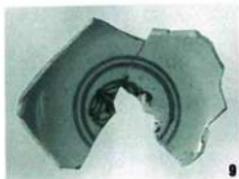
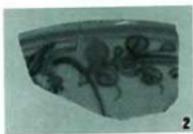
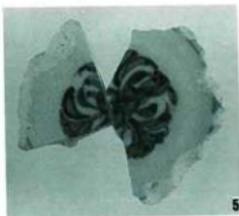


3

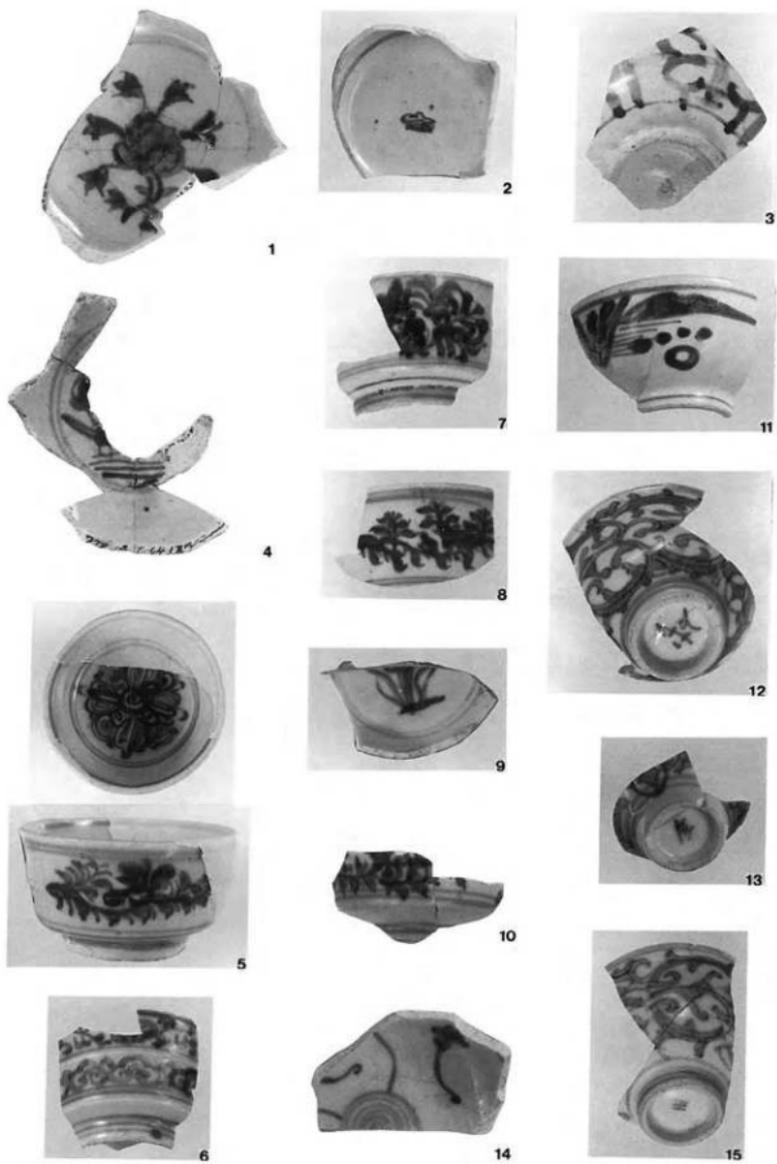


7

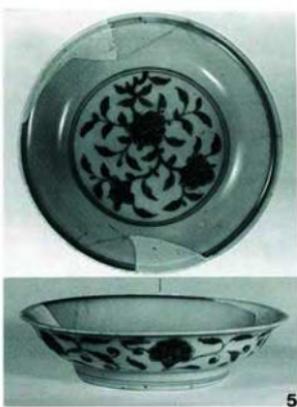
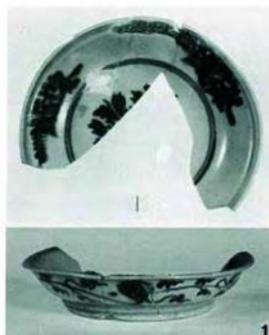




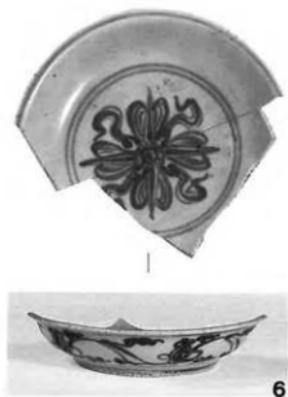
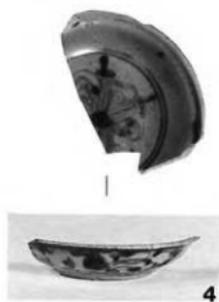
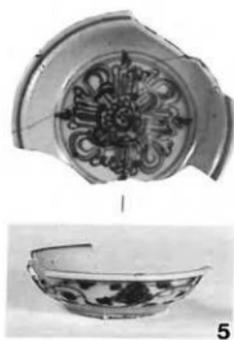
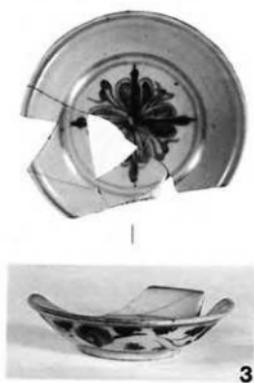
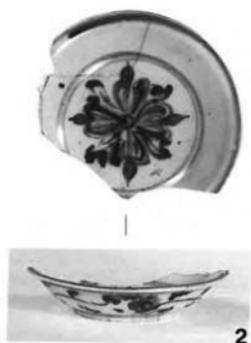
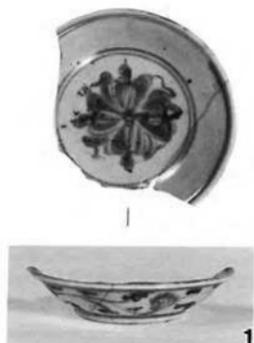
第51图版 染付③ (1地区)



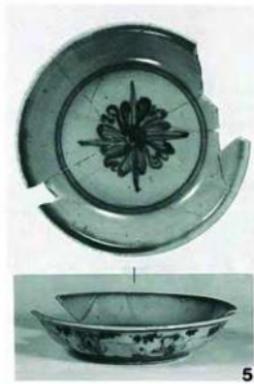
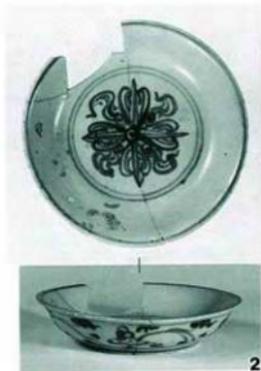
第52図版 染付④ (I地区)



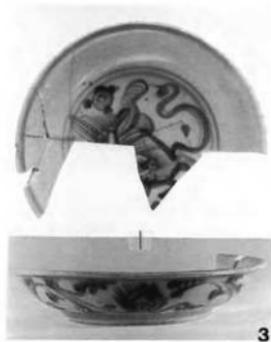
第53図版 染付⑤ (1地区)



第54図版 染付⑥ (I地区)



第55図版 染付⑦ (1地区)



第56図版 染付⑧ (1地区)



1



2



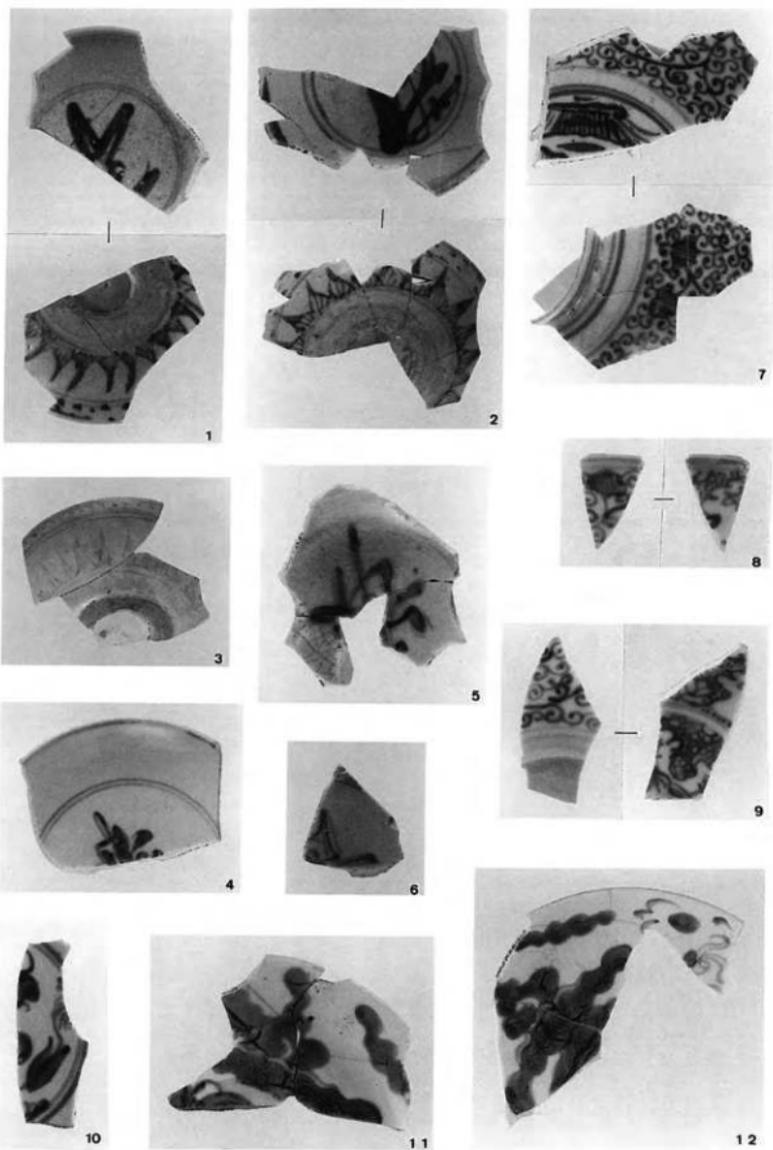
3

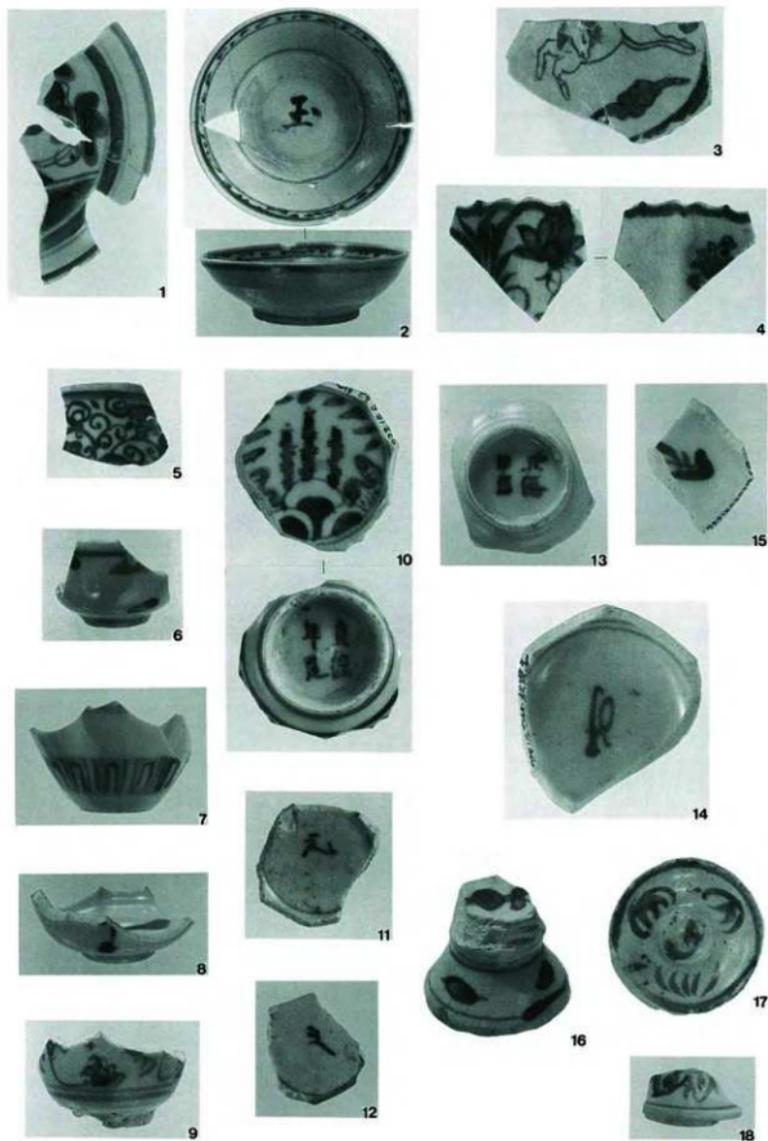


5

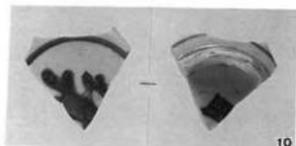
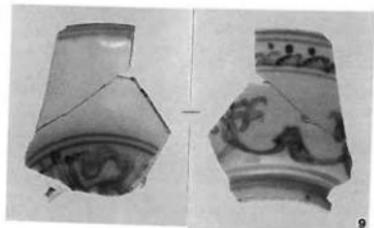
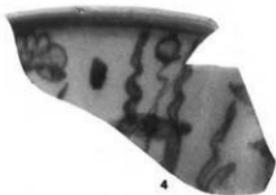
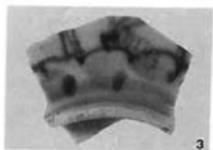
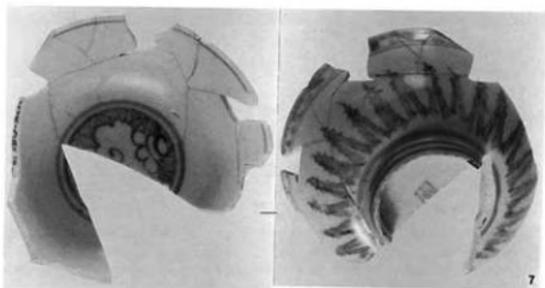
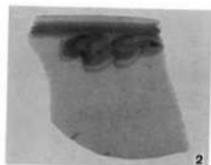
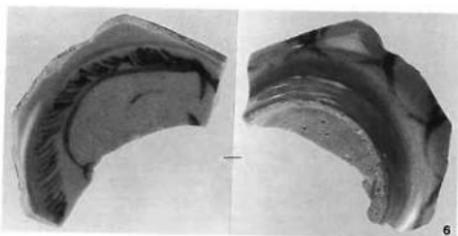


4

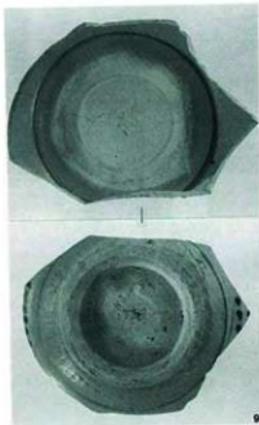
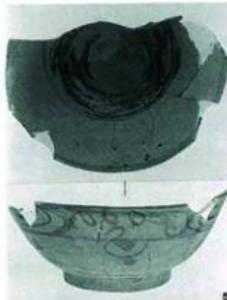
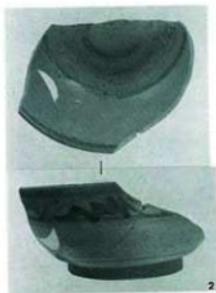
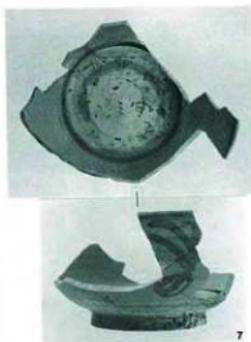
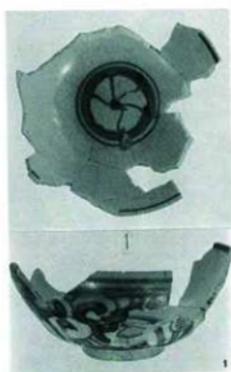




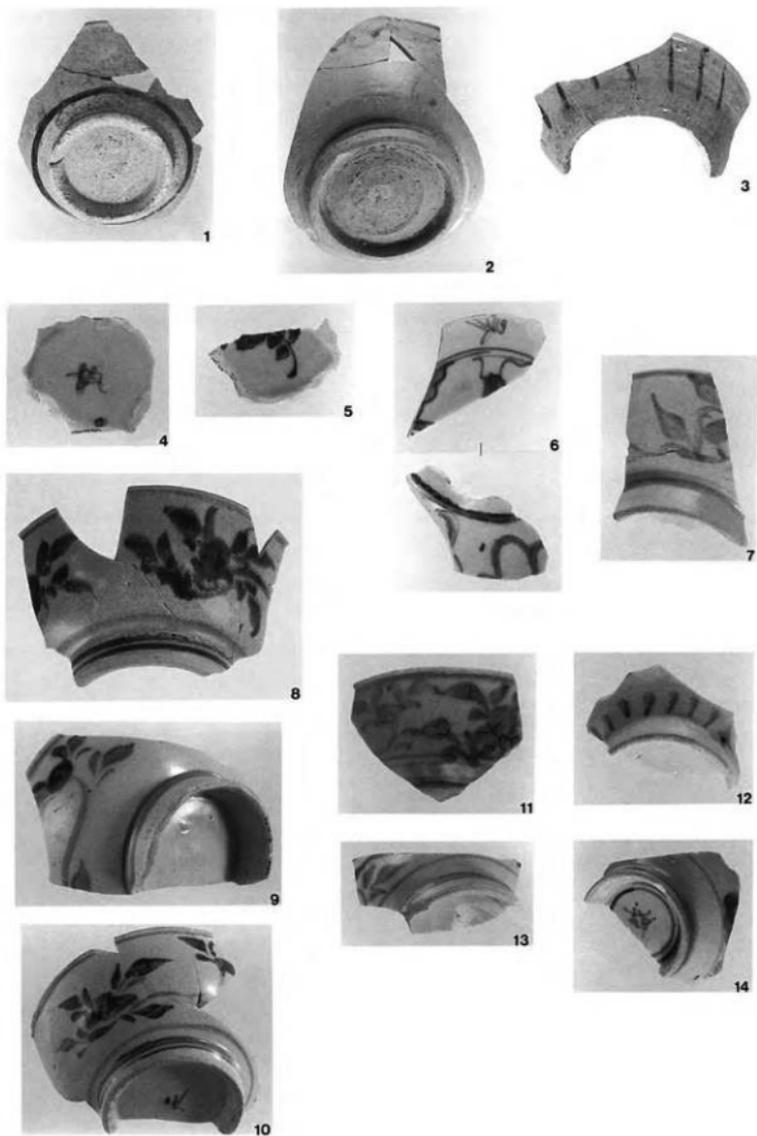
第59图版 染付① (I地区)



第60図版 染付⑫ (I地区)



第61图版 染付③ (II地区)



第62図版 染付⑭ (II地区)



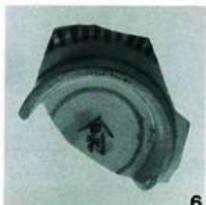
1



5



2



6



3



7



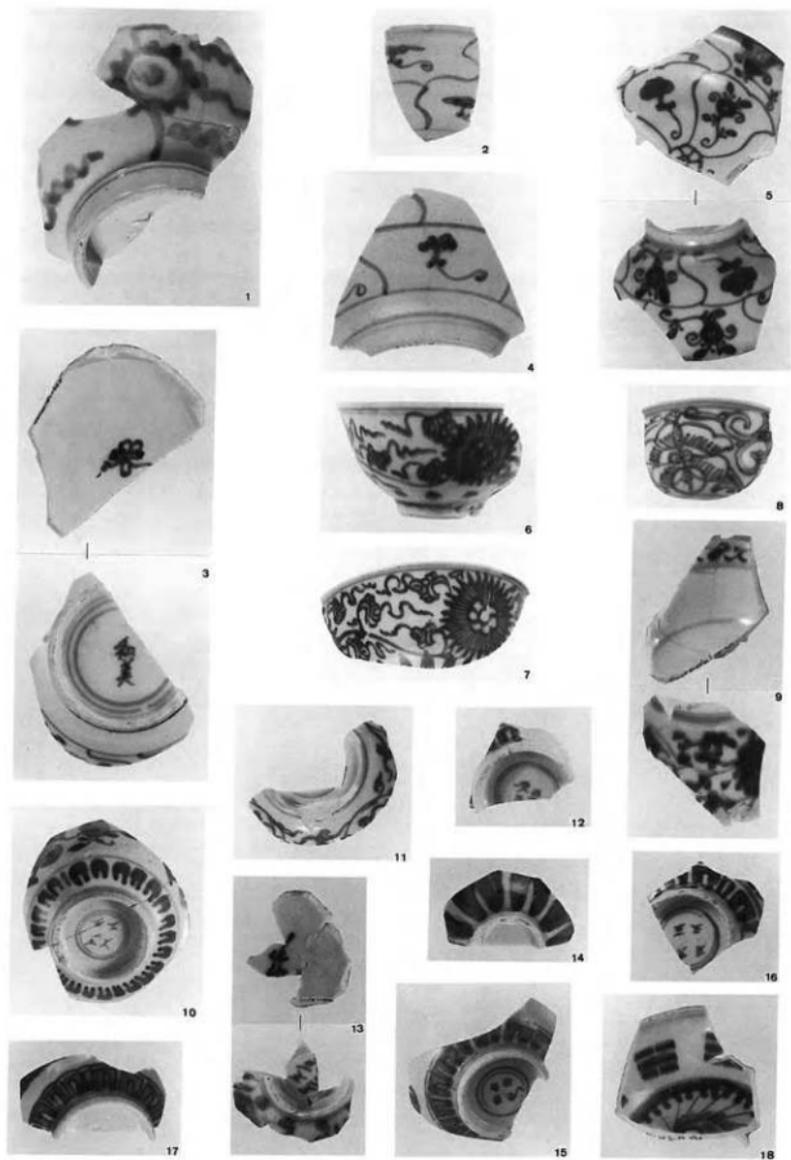
4



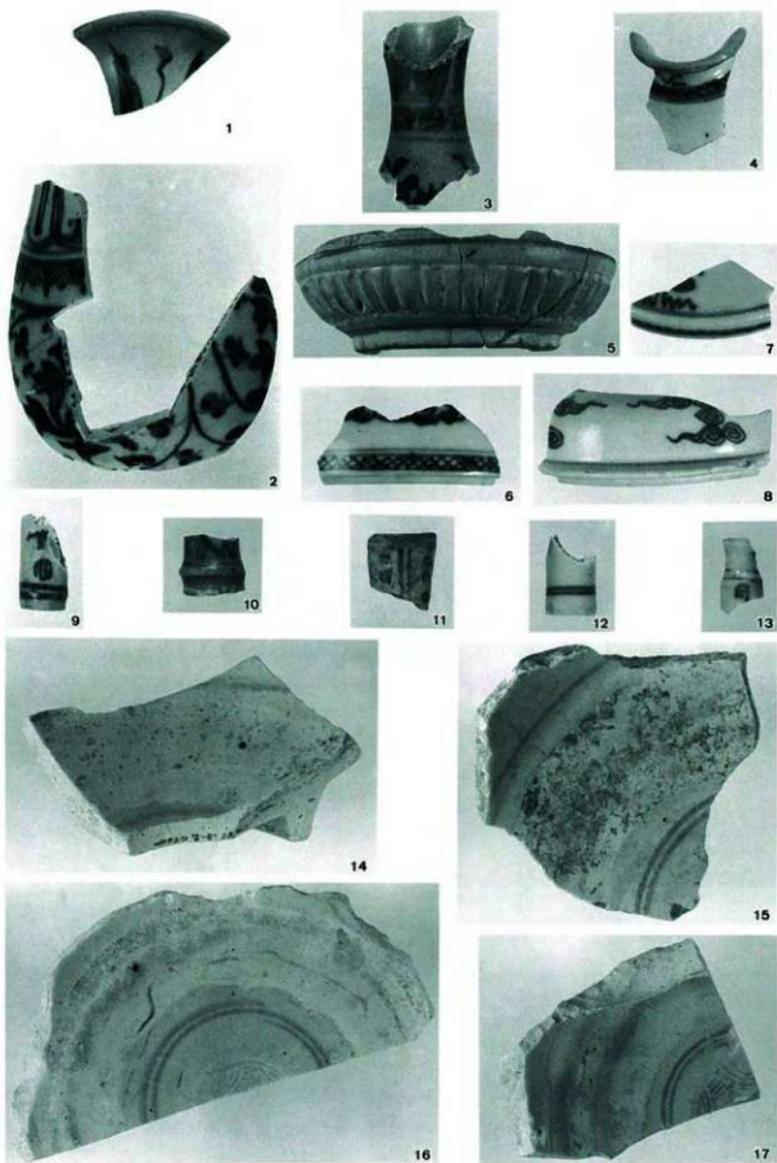
8



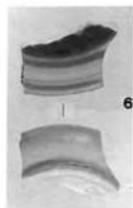
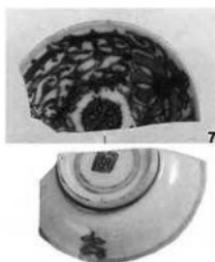
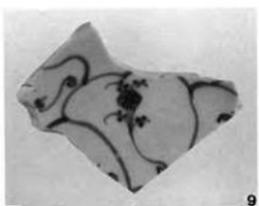
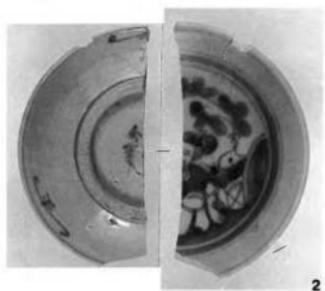
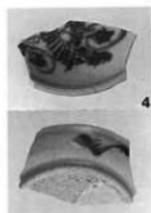
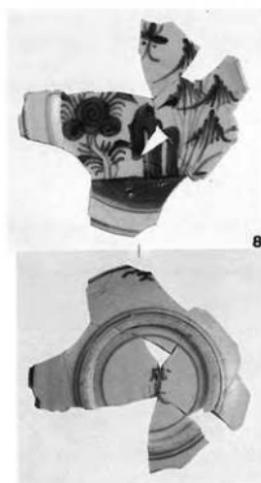
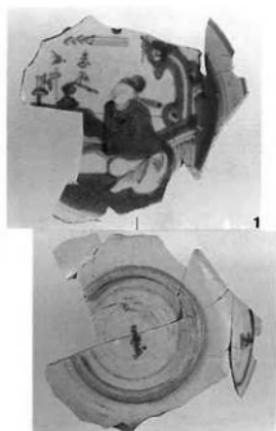
9

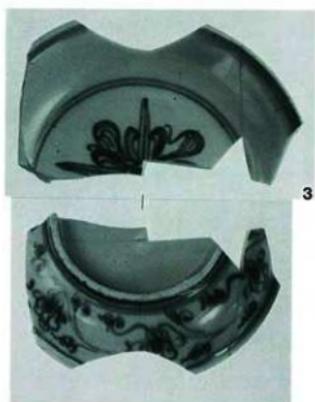
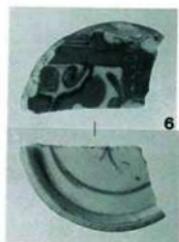
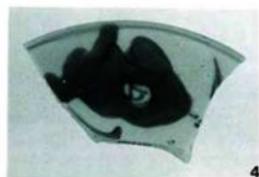
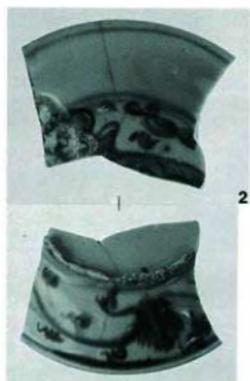
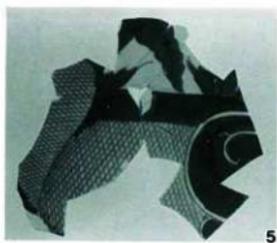
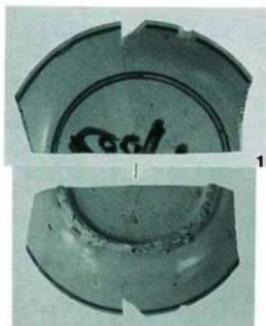


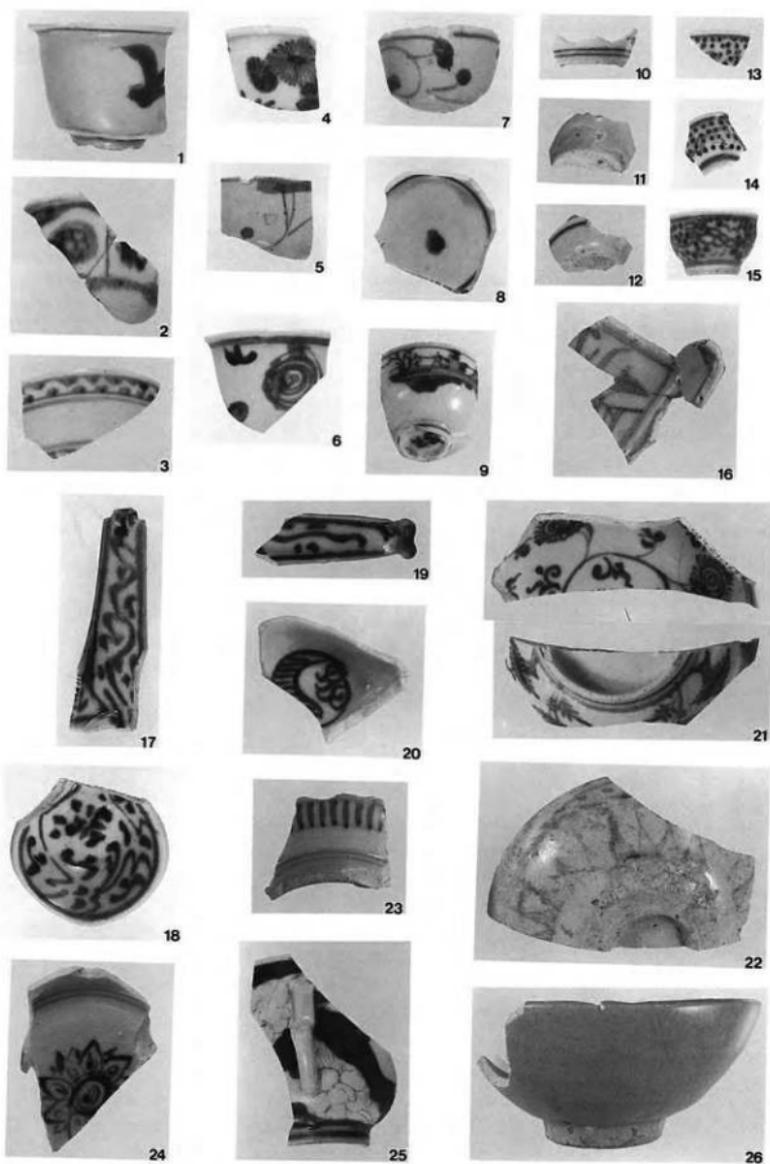
第64图版 染付⑩ (II地区)



第65图版 染付① (II地区)







第68図版 染付② (II地区)・磁器 (III地区)



1



2



3



4



5



1



2



3



4



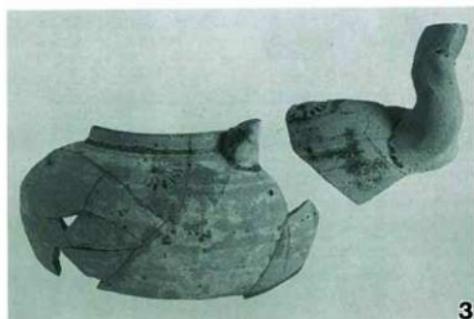
5



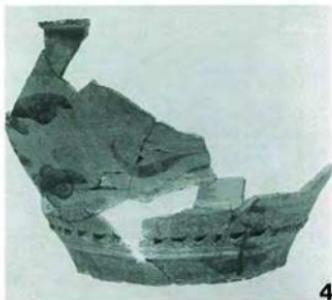
1



2



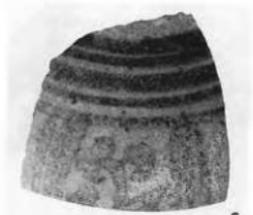
3



4



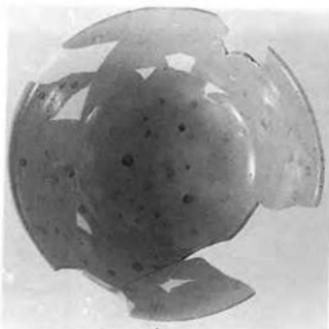
1



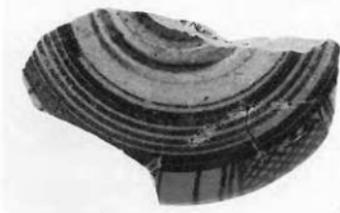
6



2



7



3



4

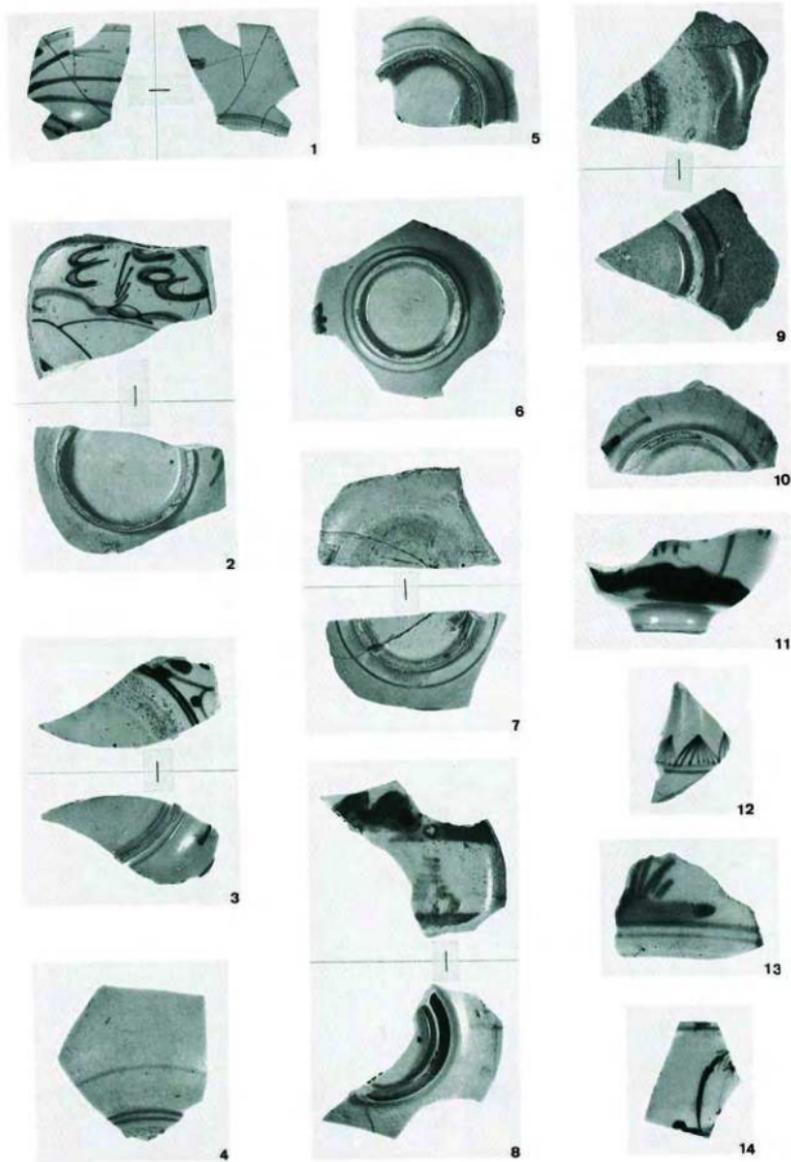


5

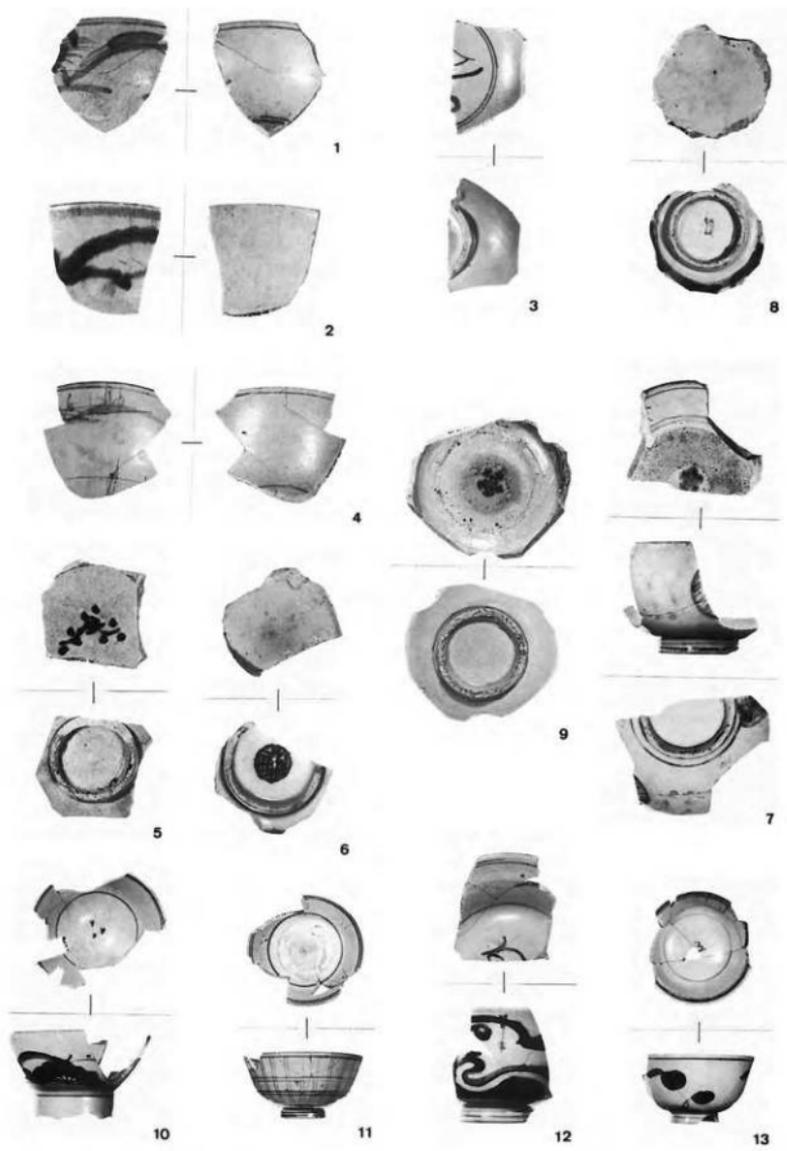


8

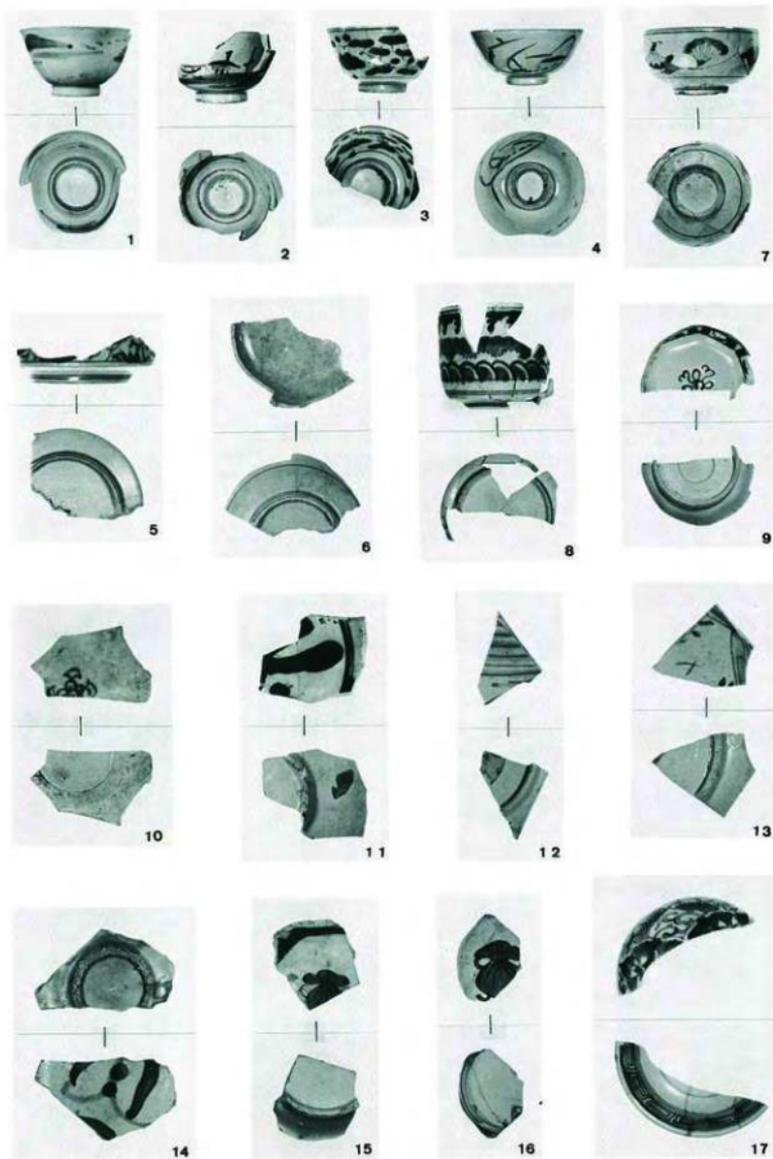
第72図版 タイ産陶器・ベトナム産色絵



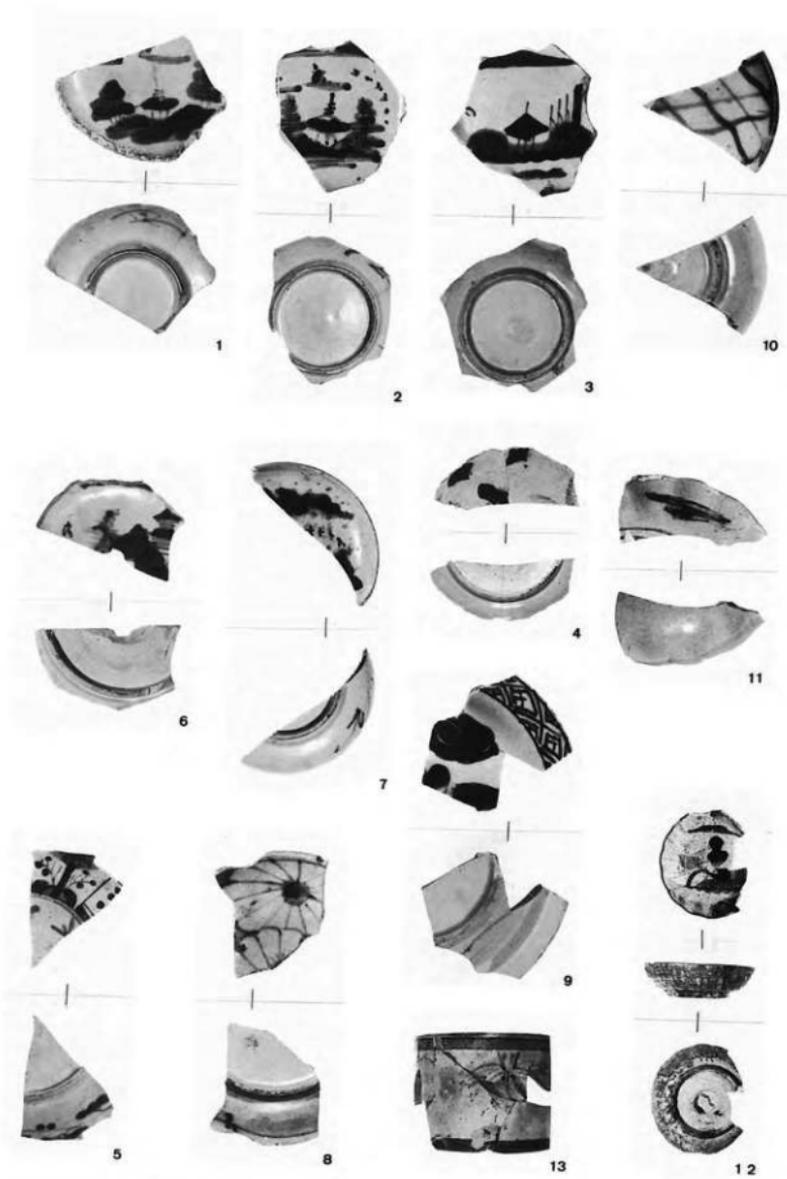
第73图版 本土產陶磁器 (I地区)



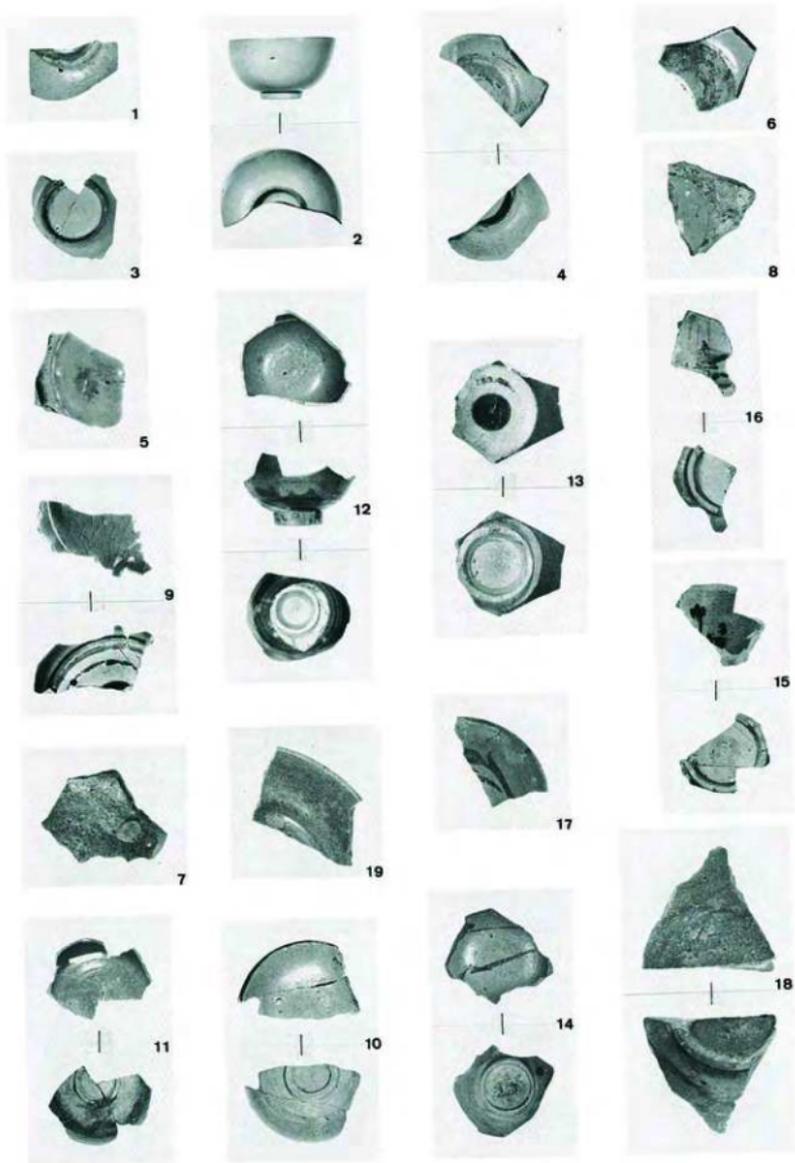
第74図版 本土産陶磁器 (II地区)



第75図版 本土産陶磁器 (II地区)



第76图版 本土產陶磁器 (II地区)



第77图版 本土產陶磁器 (I・II地区)



1



2



3



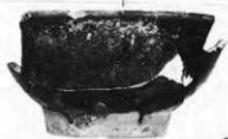
4



5



6



8

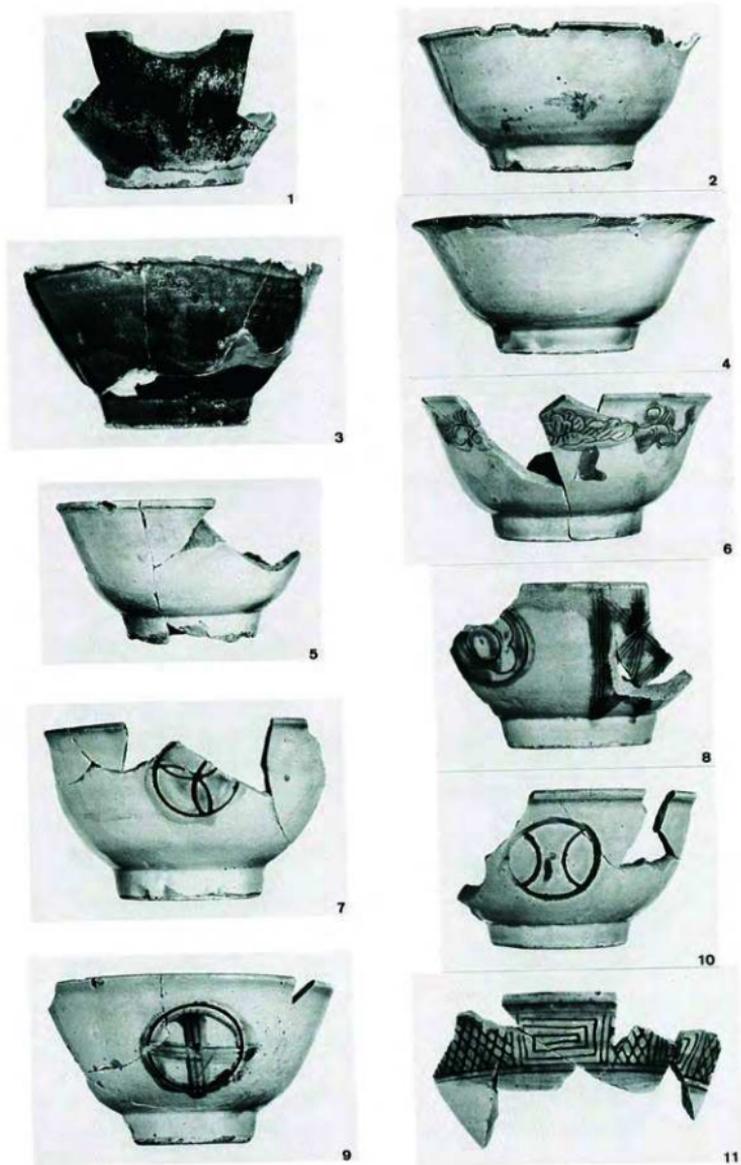


7



9

第78図版 沖縄産施釉陶器(上焼)碗



第79図版 沖縄産施釉陶器（上焼）碗



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



1



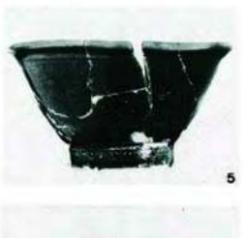
2



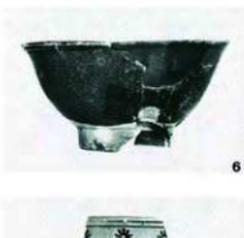
3



4



5



6



7



8



9



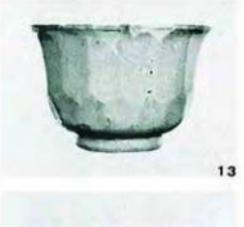
12



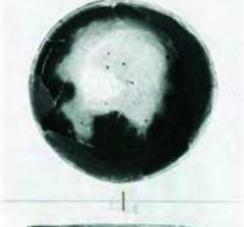
10



11



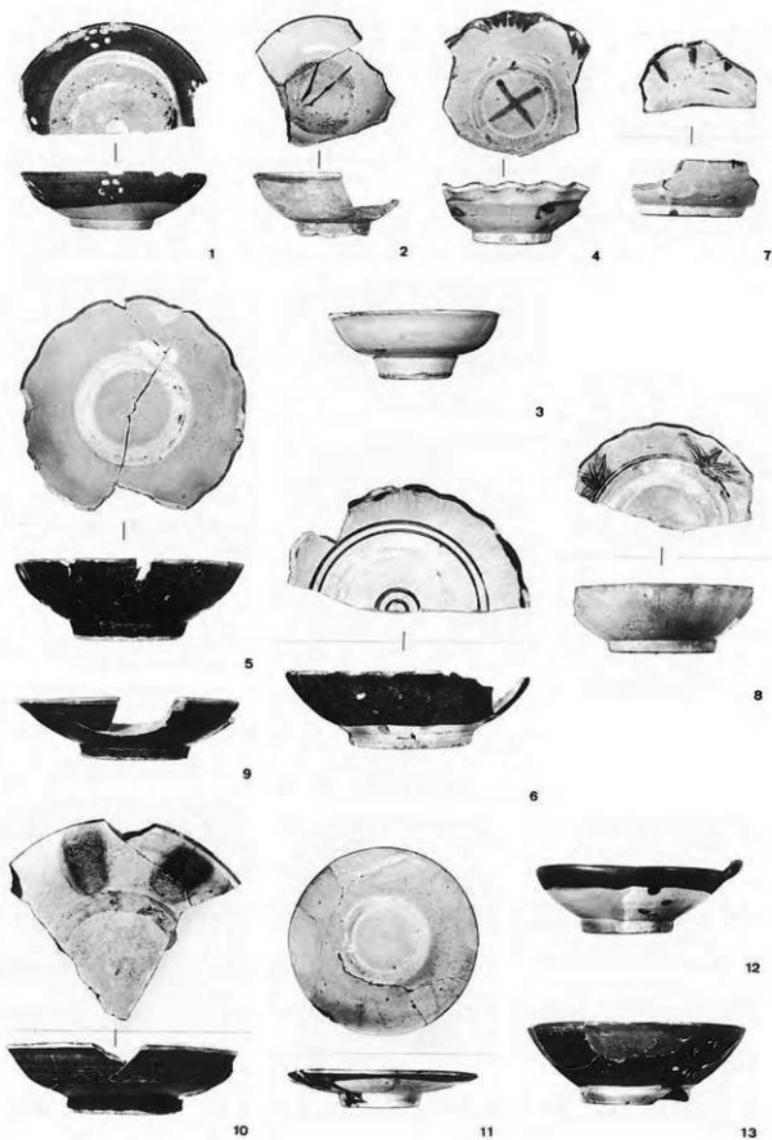
13



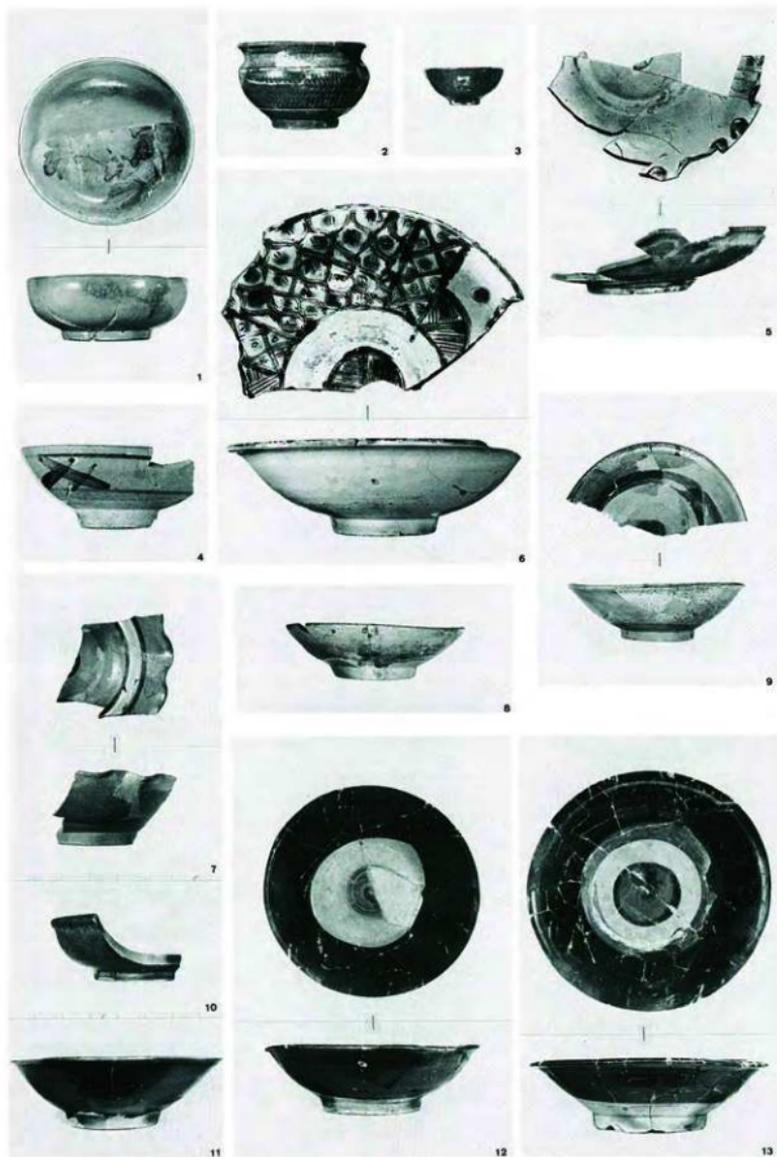
15



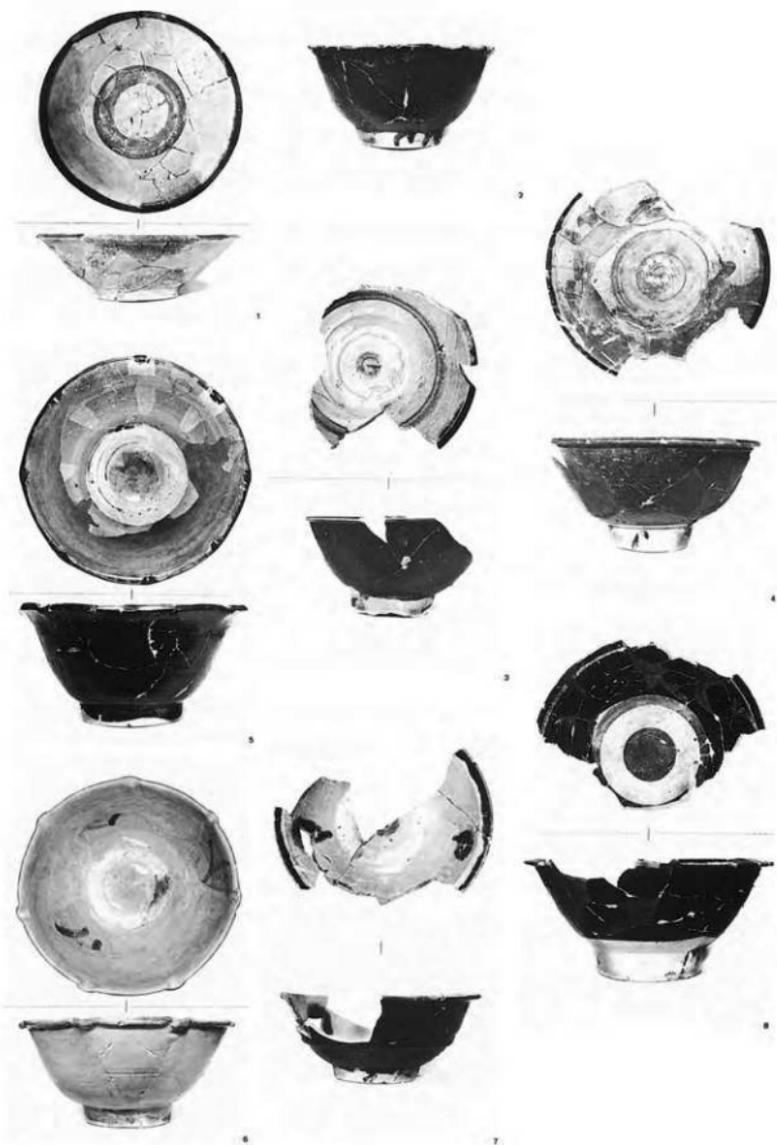
第81図版 沖縄産施釉陶器（上焼）小碗



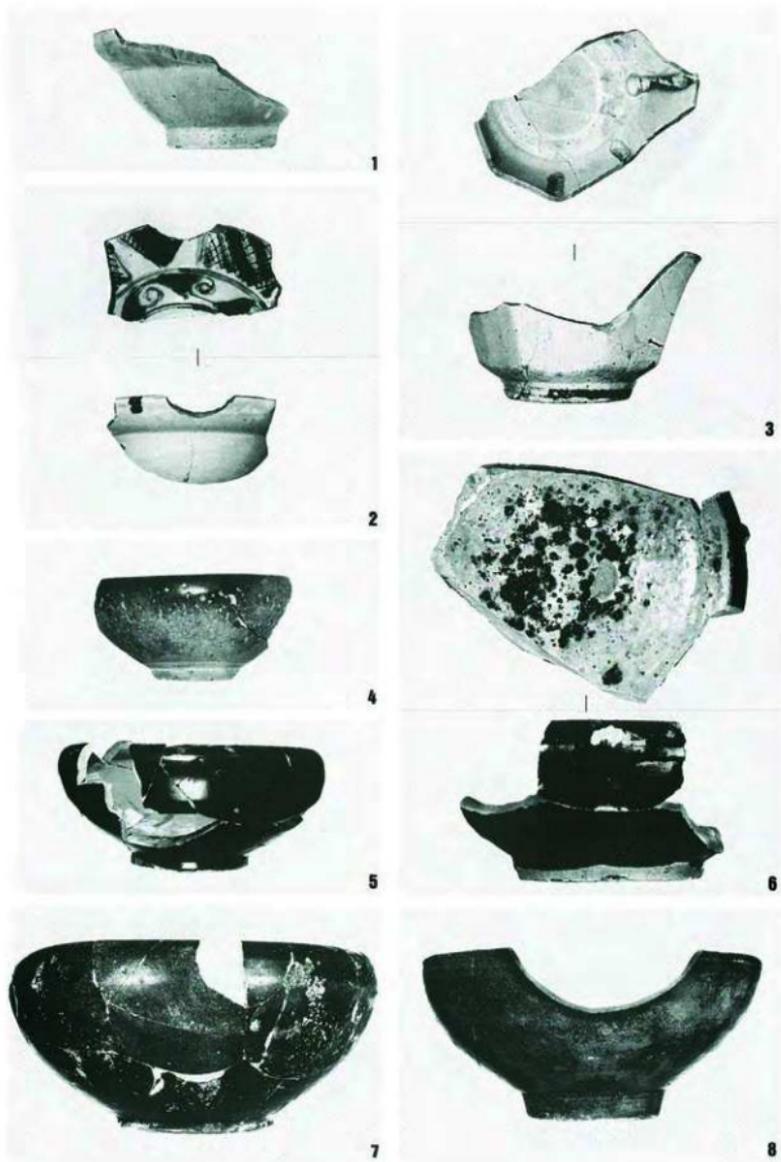
第82図版 沖縄産施釉陶器（上焼）小皿



第83図版 沖縄産施釉陶器（上焼）小皿・小碗・小杯・大皿



第84図版 沖繩産施釉陶器（上焼）大皿・大鉢



第85図版 沖縄産施釉陶器（上焼）小鉢・大鉢



1



2



3



4



5



6



7

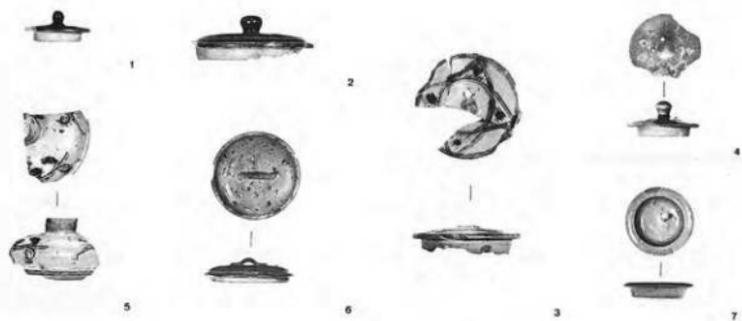


8

第86図版 沖縄産施釉陶器（上焼）小鉢・香炉・火取



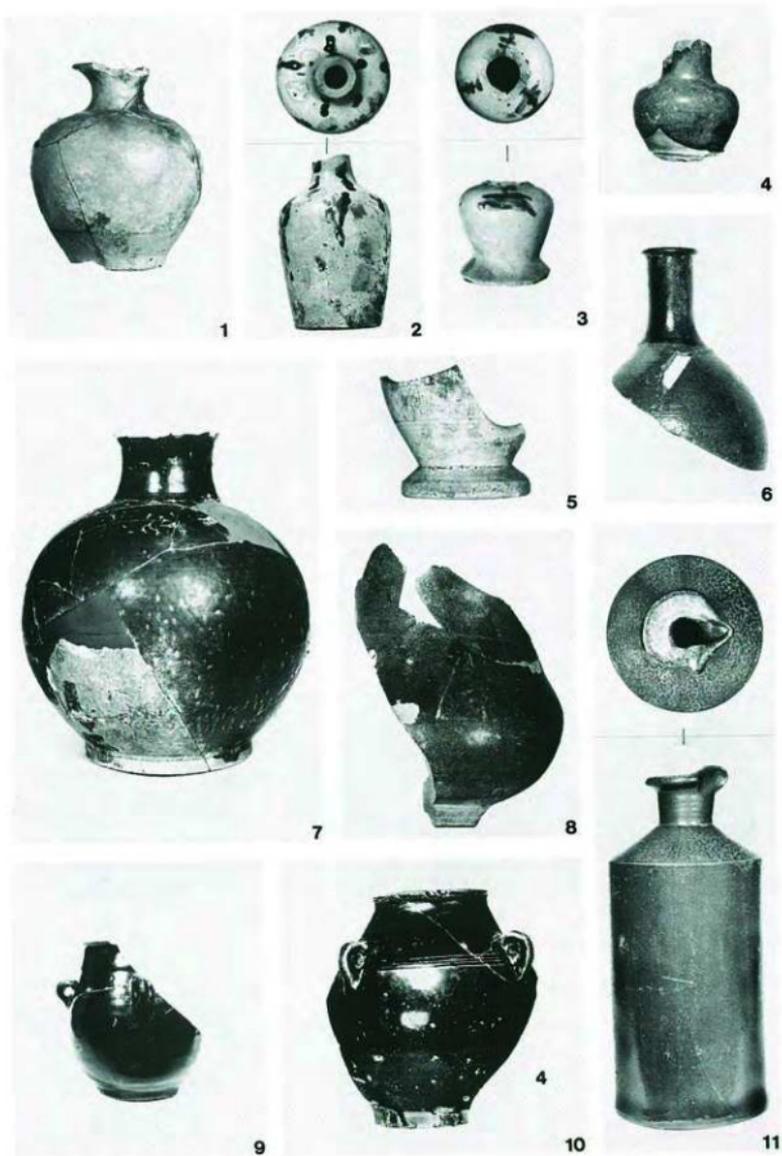
第87図版 沖縄産施釉陶器（上焼）酒器・急須・壺



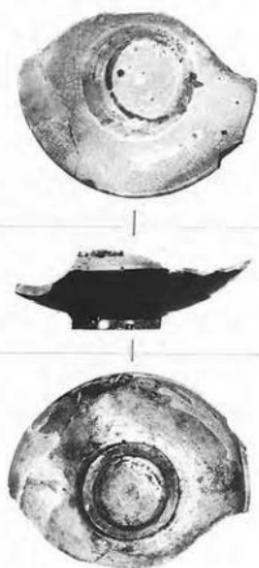
第88図版 沖繩産施釉陶器（上焼）蓋（急須・壺・鍋）大型急須・片口鉢

10

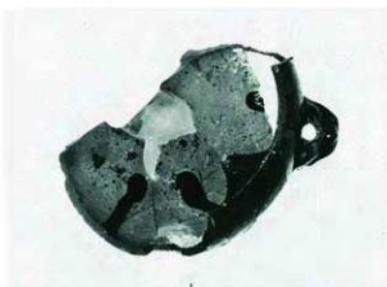
11



第89图版 冲縄産施釉陶器 (上焼) 油壺・瓶子・対瓶・壺



第90図版 沖繩産施釉陶器（上焼）油壺・乗燭・燭台・灯明皿



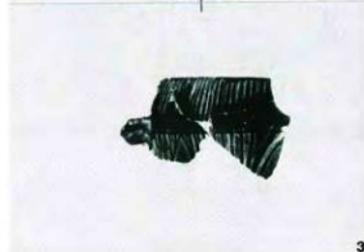
1



3



2



4



5

第91図版 沖縄産施釉陶器（上焼）火炉・火鉢



1



3



2



4



5



6



7



8



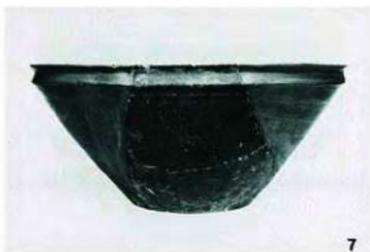
1



6



2



7



3



8



4



9



5

第93図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）摺鉢



1



4



2

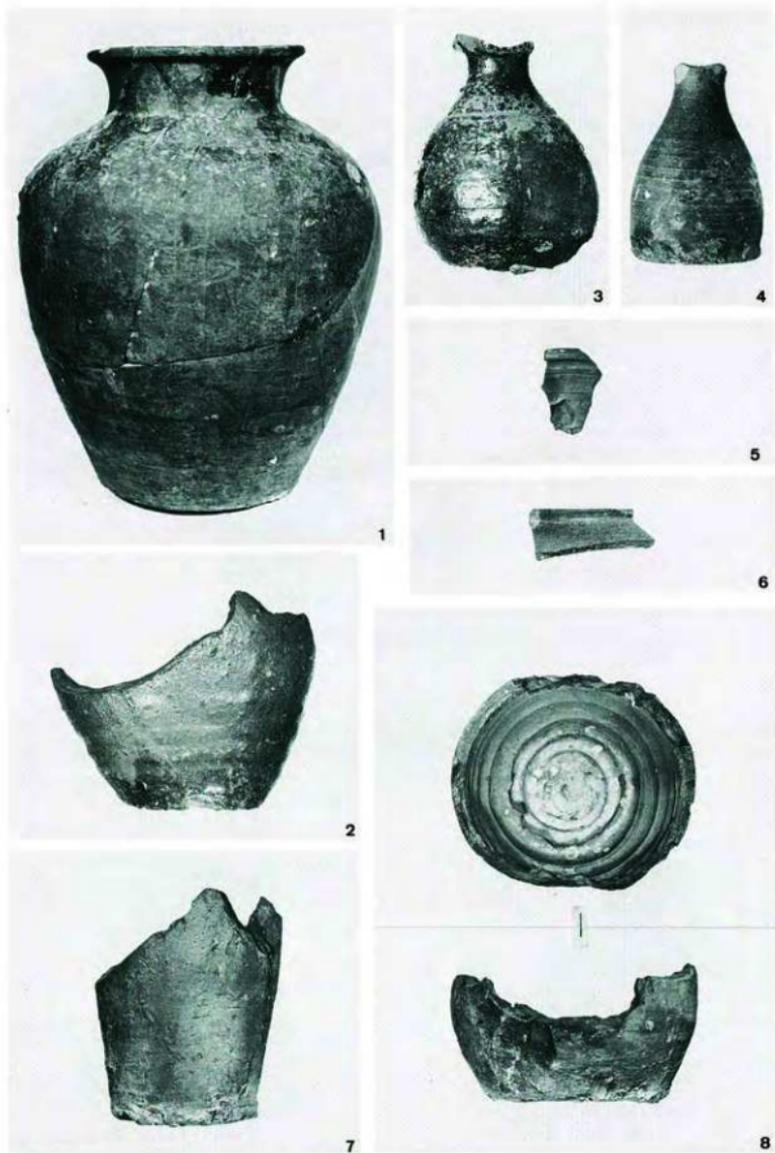


3



5

第94図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）壺



第95図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）壺・德利・瓶子・花瓶・小壺



1



6



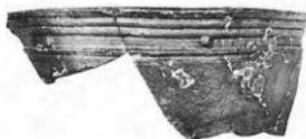
2



7



3



8



4



9



5



10



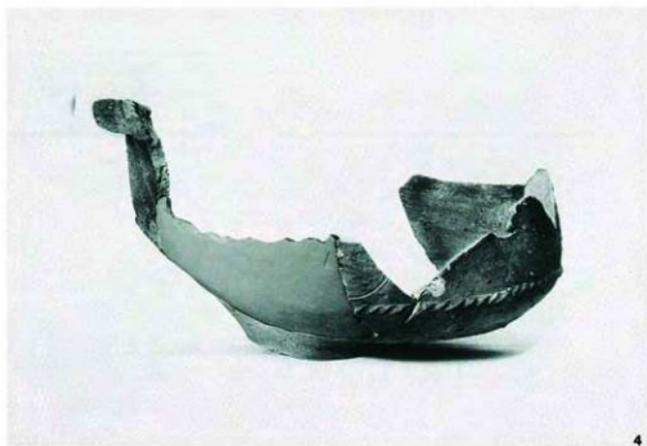
1



2



3

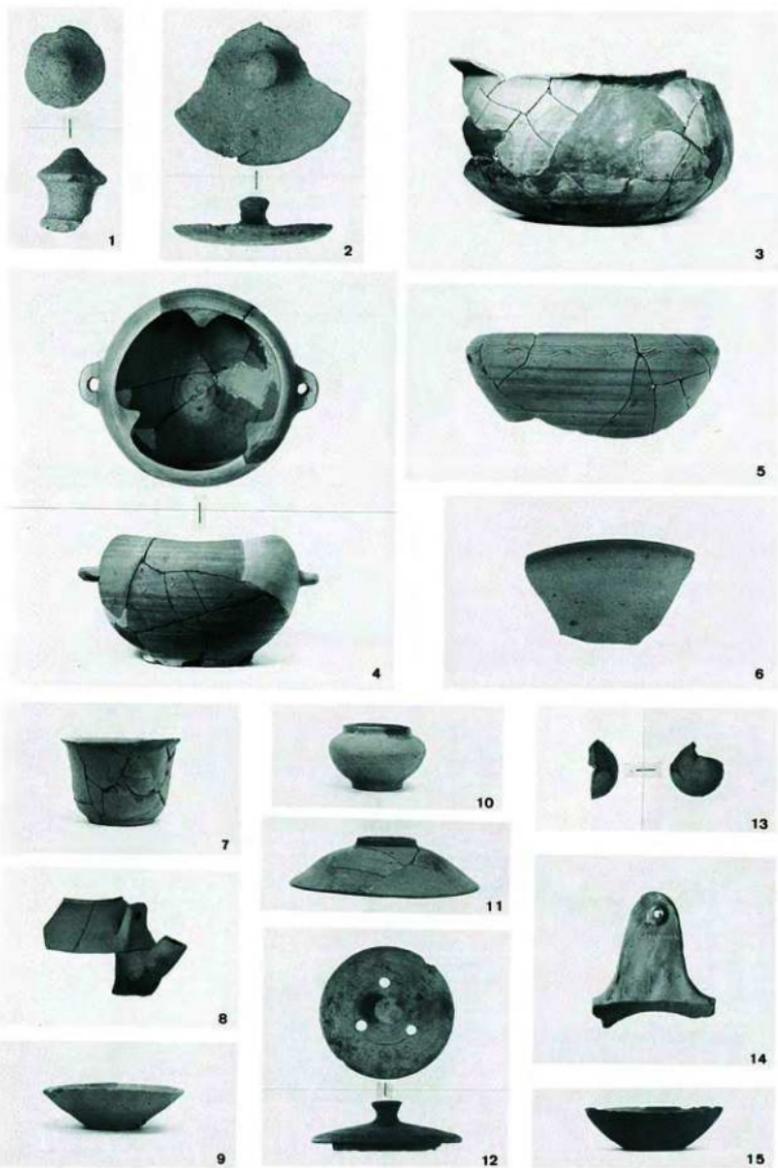


4

第97図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）蓋・水鉢・花鉢



第98図版 沖縄産無釉陶器（荒焼）小鉢・鍋・水注・片口鉢・蓋・碗・皿・乗燭・灯明皿・火炉



第99図版 陶質土器



1



3



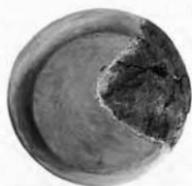
5



7



9



11



12



12



2



4



6



8



10



13



14



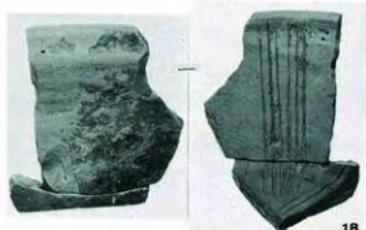
15



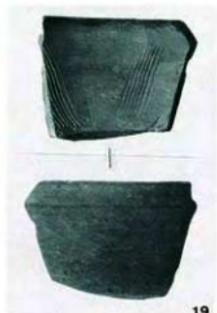
16



17



18



19



20



21



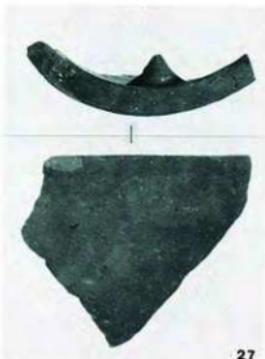
22



23



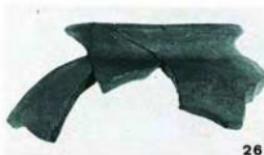
24



27



25



26



第102図版 瓦質土器



51



52



53



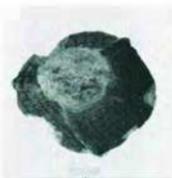
55



54



56



57



58



59



60



2



1



3



4



5



6



1



2



3



4



5



6



7



8



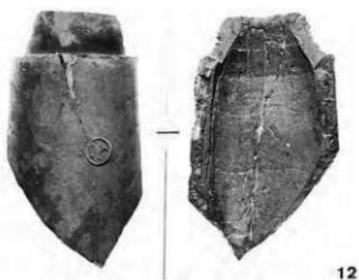
9



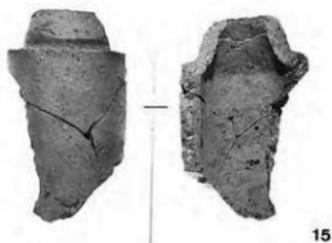
10



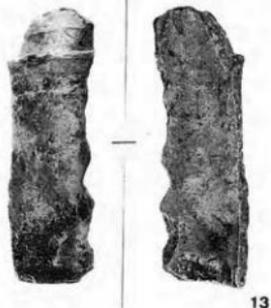
11



12



15



13



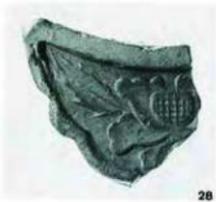
16

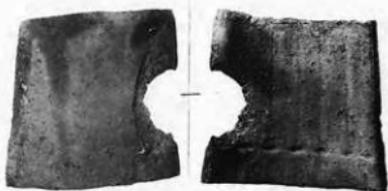


14

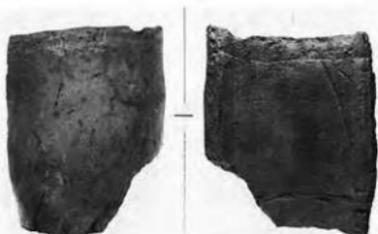


17





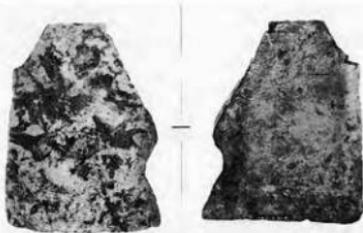
32



34



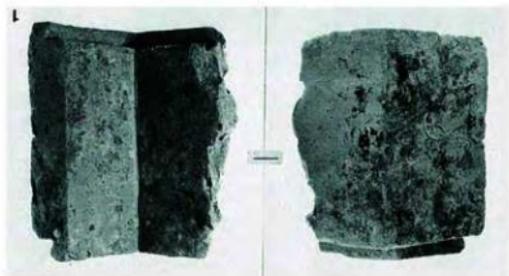
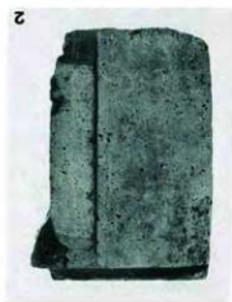
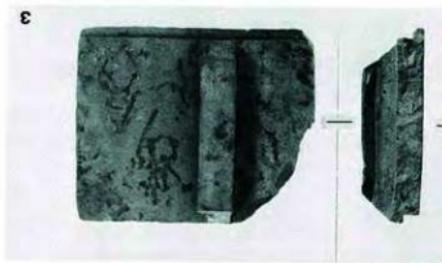
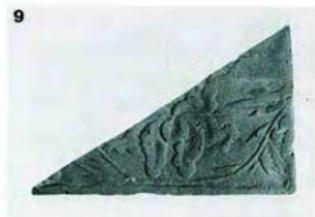
33



35



36





7



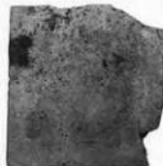
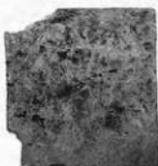
10



8



11



9



12



1



4



2



5

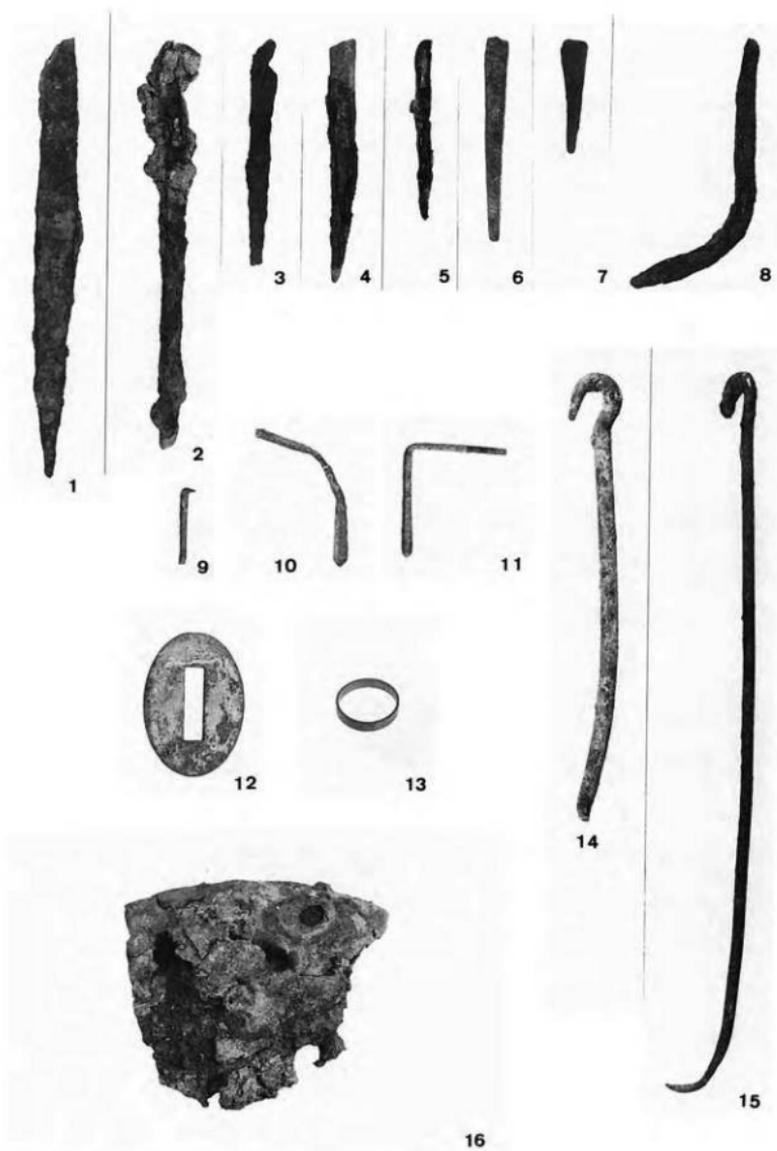


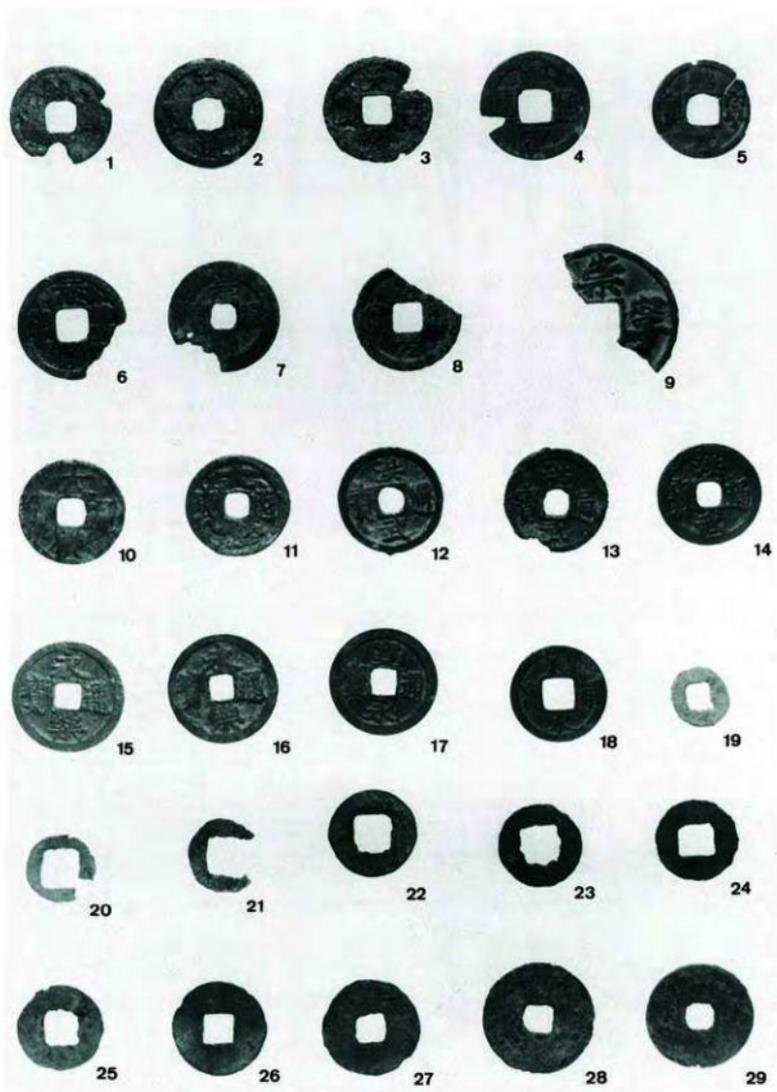
3



6

第111図版 レンガ







30



31



32



33



34



35



36



37



38



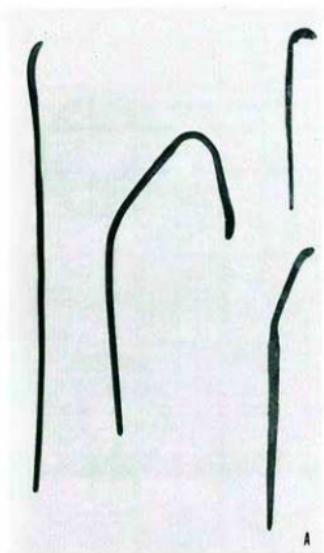
39



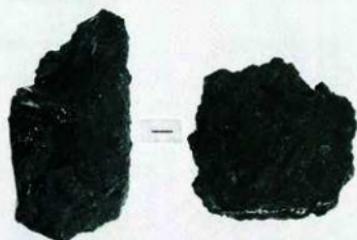
40



41



A



B



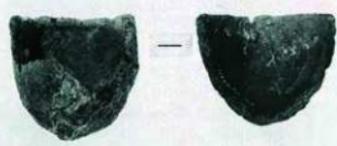
1



1



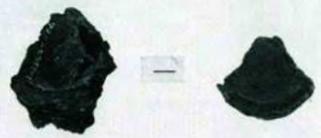
C



1



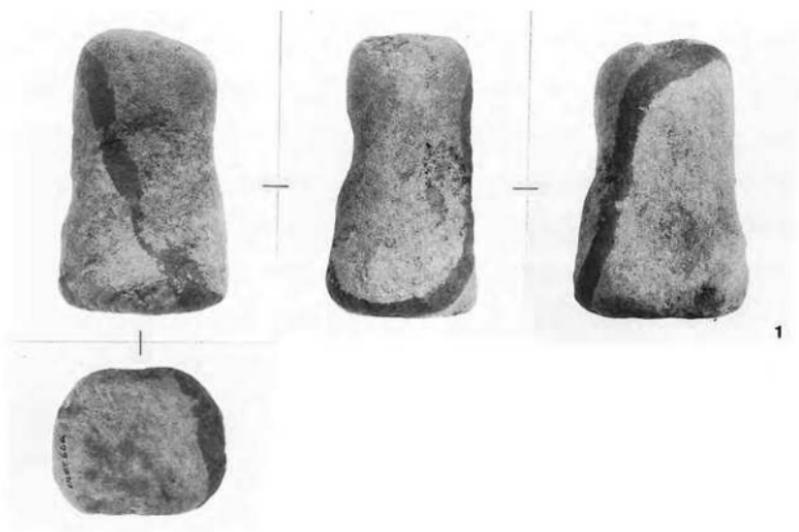
1



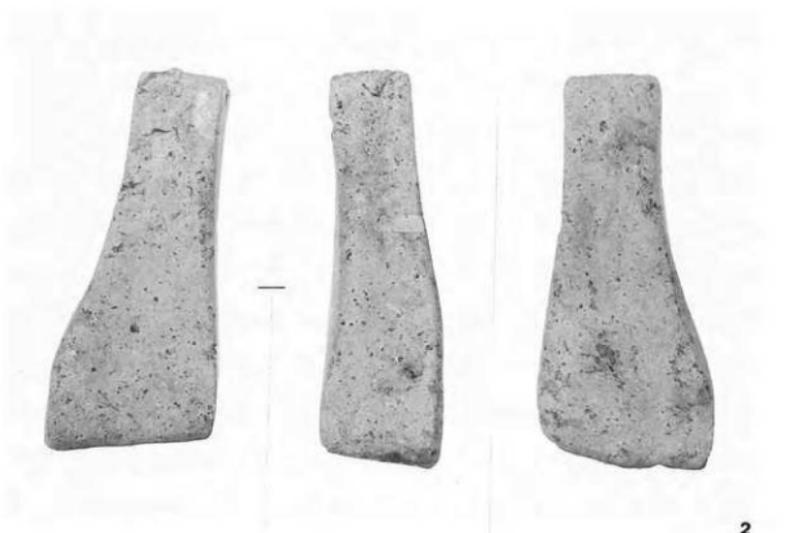
1

D

第115図版 カンザシ(A)、鉄滓(B)、埴埴(C)、羽口(D)

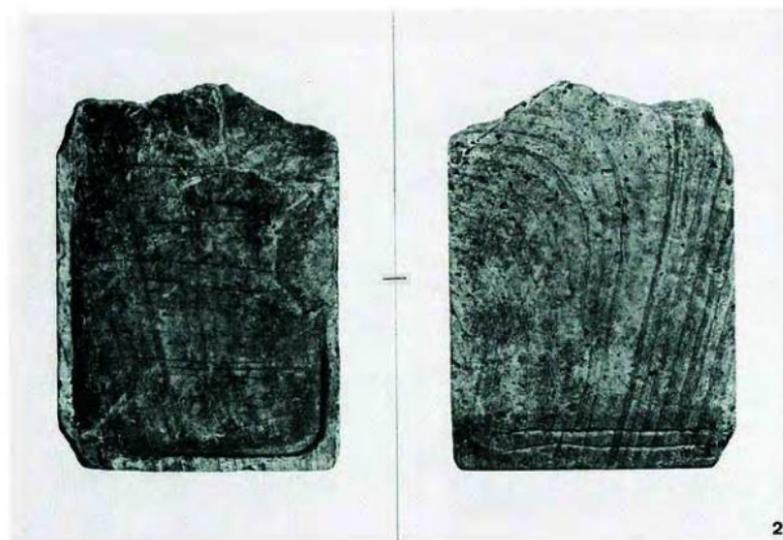


1

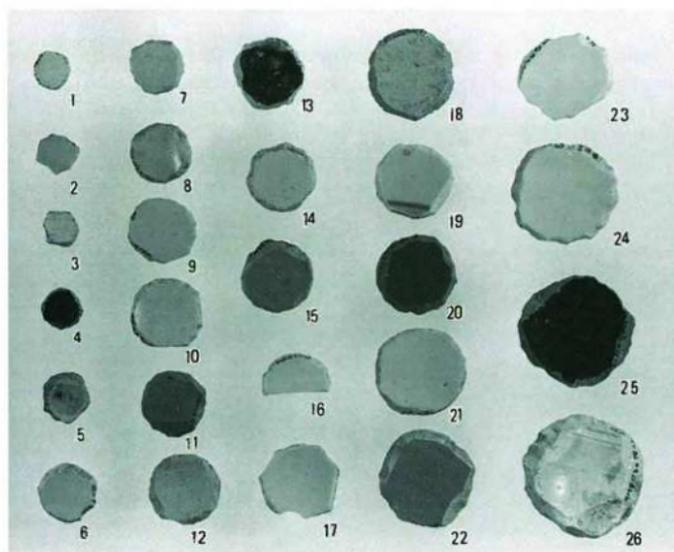
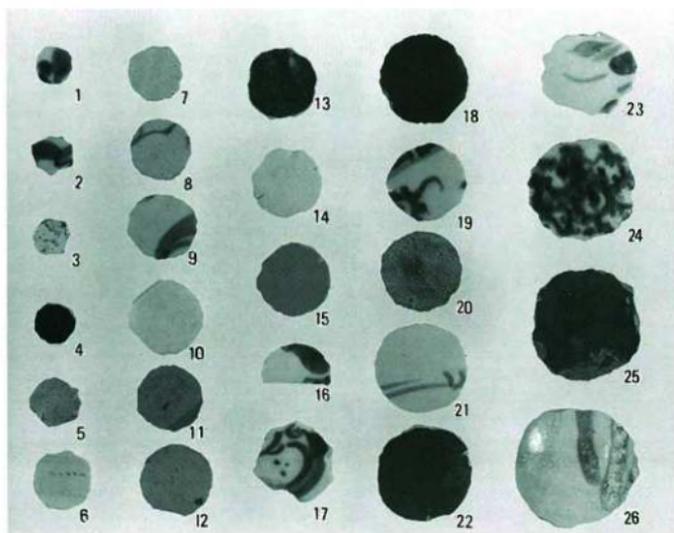


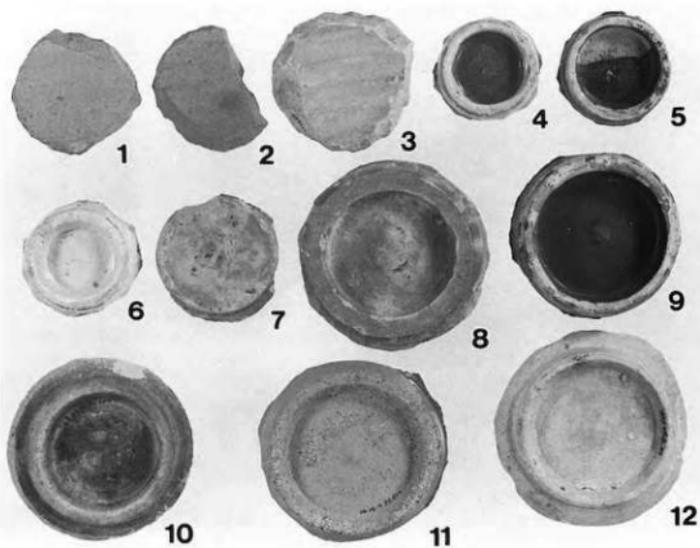
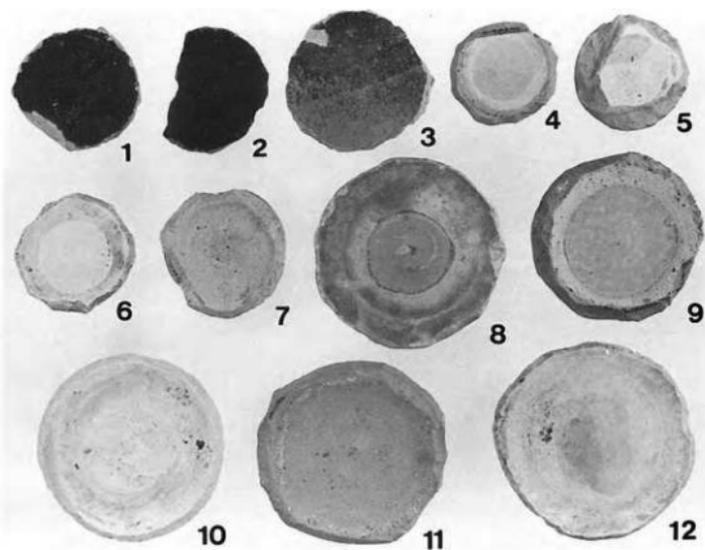
2

第116図版 石器 (1:たたき石、2:砥石)

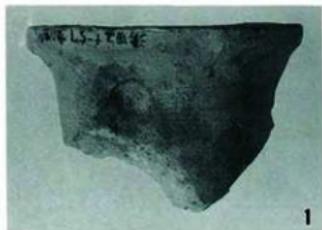




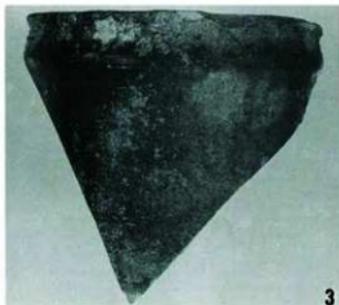




第120圖版 円盤状製品



1



3



2



4



5



7



6



8



1



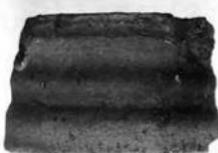
2



3



4



5



6



7



8



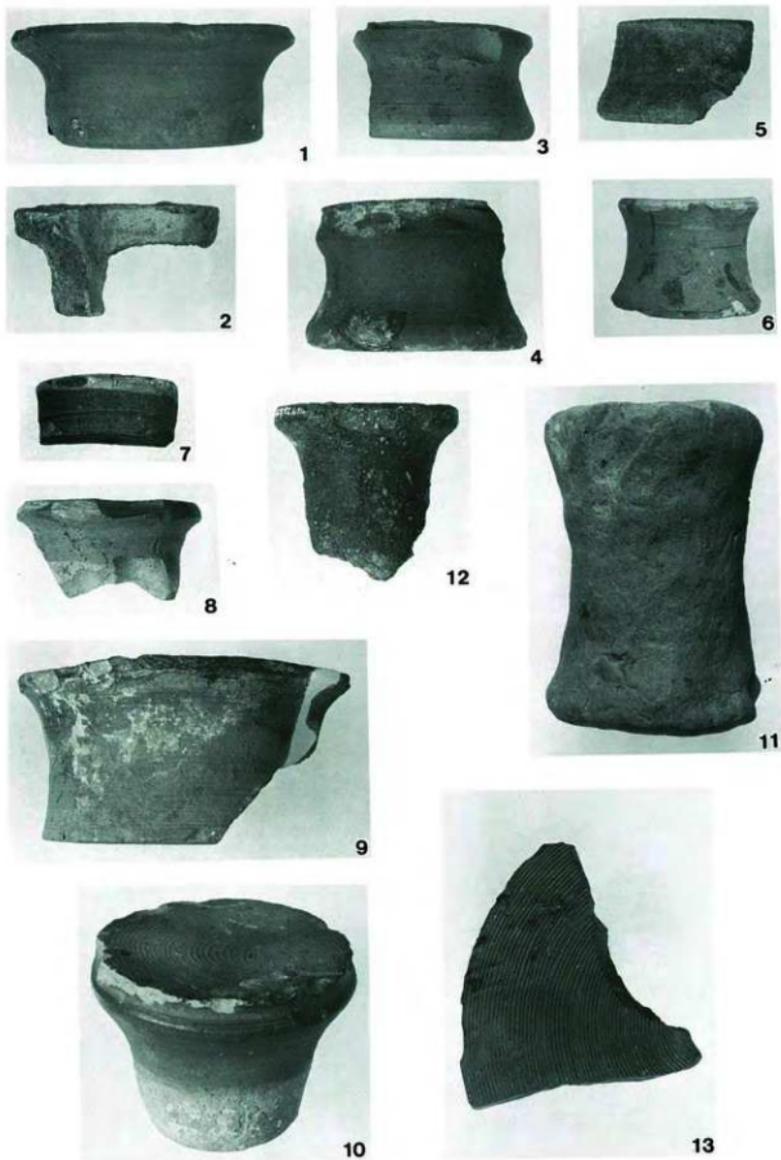
9



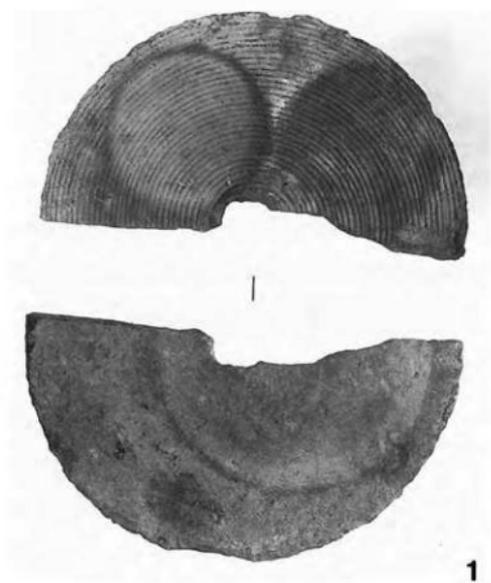
7



10



第123図版 竈道具③



1



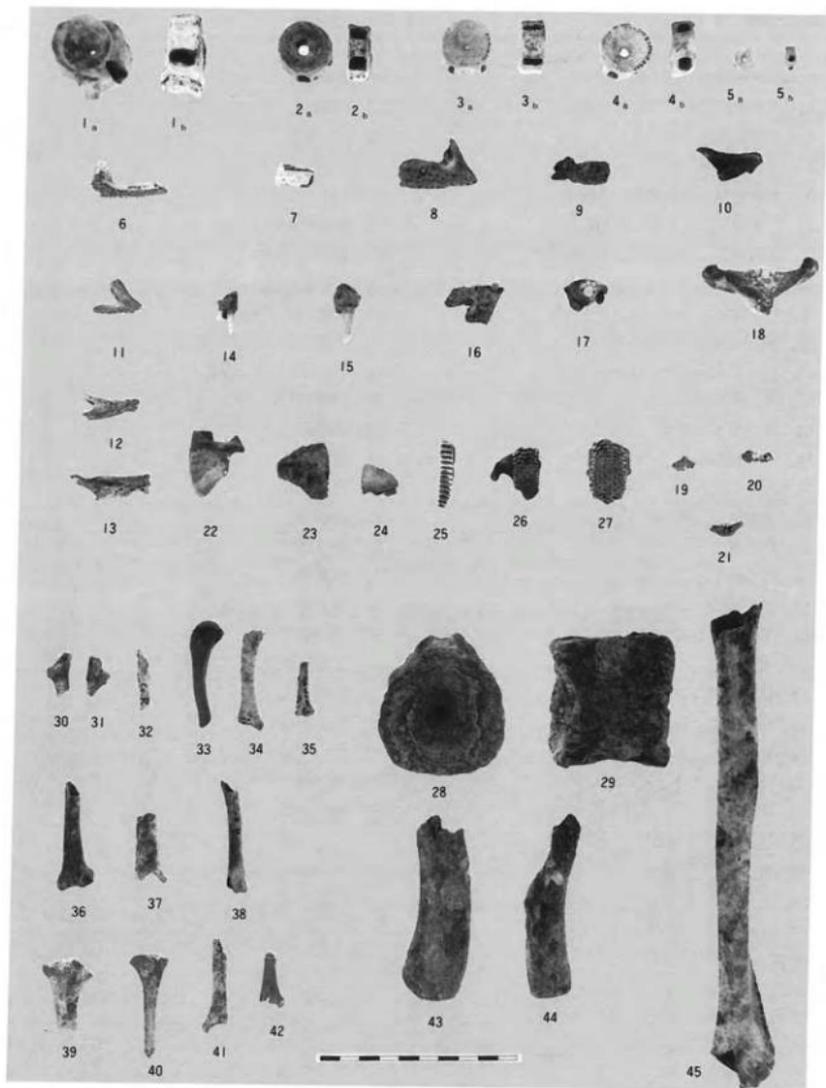
2



3

第125図版

1. サメ・椎骨 a上面 b側面
2. サメ・椎骨 a上面 b側面
3. サメ・椎骨 a上面 b側面
4. サメ・椎骨 a上面 b側面
5. サメ・椎骨 a上面 b側面
6. ハタ科マハタ属のR上顎骨
7. ハタ科マハタ属のR歯骨
8. タイ科ミナミクロダイのL前上顎骨
9. タイ科ミナミクロダイのL前上顎骨
10. フェフキダイ科R歯骨
11. フェフキダイ科R前上顎骨
12. フェフキダイ科R歯骨
13. フェフキダイ科フェフキダイ属のR歯骨
14. ベラ科R前上顎骨
15. ベラ科R前上顎骨
16. ベラ科R歯骨
17. ベラ科上咽頭骨
18. ベラ科下咽頭骨
19. ベラ科下咽頭骨
20. ベラ科下咽頭骨
21. ベラ科下咽頭骨
22. ブダイ科L前上顎骨
23. ブダイ科R歯骨
24. ブダイ科L歯骨
25. ナガブダイR上咽頭骨側面
26. ナガブダイ下咽頭骨
27. ナガブダイ下咽頭骨
28. カジキ類尾体上面
29. カジキ類尾体側面
30. ニワトリ肩甲骨L
31. ニワトリ肩甲骨R
32. ニワトリ烏口骨
33. ニワトリ上腕骨L
34. ニワトリ上腕骨L
35. ニワトリ尺骨L
36. ニワトリ大腿骨L
37. ニワトリ大腿骨L
38. ニワトリ大腿骨R
39. ニワトリ脛骨L
40. ニワトリ脛骨R
41. ニワトリ中足骨L
42. ニワトリ中足骨R
43. ジュゴン肋骨上面
44. ジュゴン肋骨側面
45. ヒト上腕骨L



第125図版 サメ、魚類、ニワトリ、ジュゴン、ヒト

第126図版 イヌ

1. 肩甲骨R
2. 肩甲骨L
3. 上顎骨RM<sup>1</sup>
4. 上顎骨LM<sup>1</sup>
5. 下顎骨R (C、P<sub>2,3,1</sub>、M<sub>1,2</sub>)
6. 下顎骨L (C、P<sub>2,4,1</sub>、M<sub>1,2</sub>)
7. 上腕骨L
8. 上腕骨R
9. 桡骨L
10. 桡骨R
11. 尺骨L
12. 尺骨R
13. 寛骨L
14. 寛骨R
15. 大腿骨R
16. 大腿骨L
17. 脛骨R
18. 脛骨L
19. 環椎
20. 下顎骨R
21. 下顎骨L
22. 桡骨R
23. 桡骨L
24. 上腕骨L
25. 大腿骨L R
26. 大腿骨R



27. 脛骨R
28. 椎体
29. 椎体
30. 上腕骨R
31. 上腕骨L
32. 桡骨R
33. 桡骨L
34. 尺骨R
35. 尺骨L
36. 尺骨L
37. 寛骨L

38. 大腿骨R
39. 大腿骨R
40. 大腿骨L
41. 大腿骨L
42. 脛骨R

ヤギ

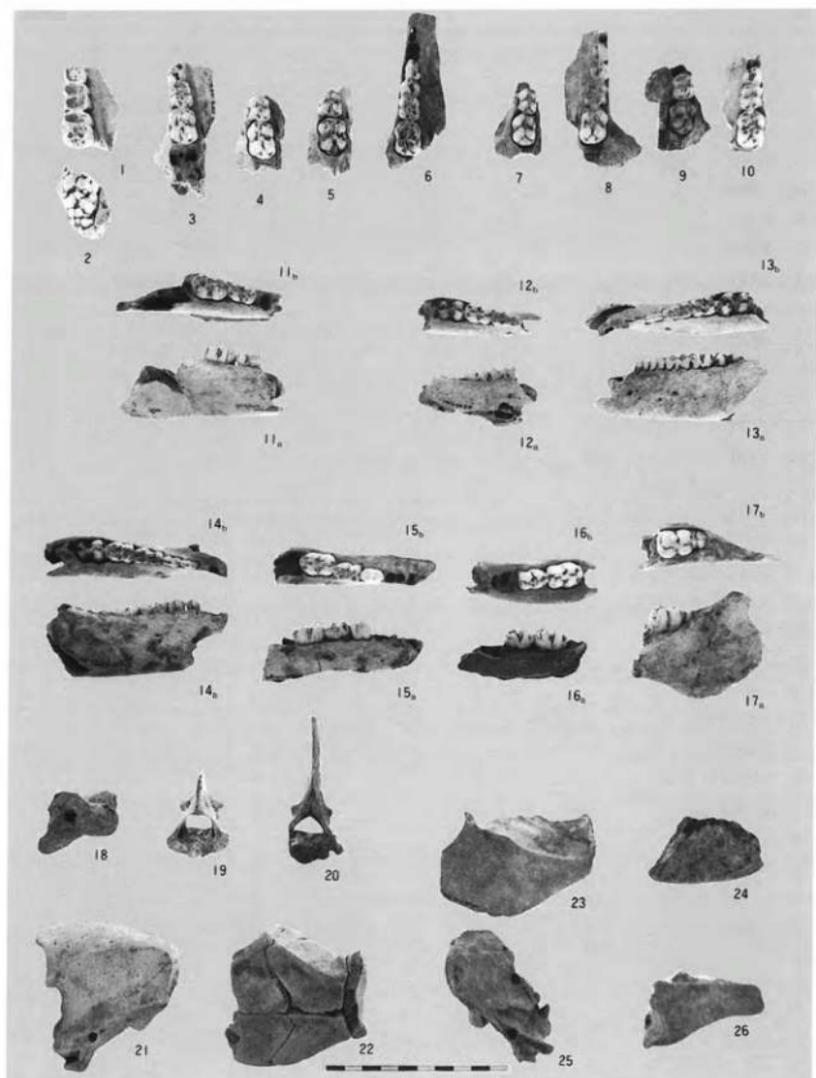
43. 上顎骨LM<sup>3</sup>
44. 上顎骨LM<sup>2</sup>
45. 上顎骨LM<sup>1</sup>
46. 下顎骨R (M<sub>3</sub>)
47. 下顎骨L (P<sub>3,4</sub>、M<sub>1,2</sub>)
48. 下顎骨L (P<sub>4</sub>、M<sub>1,2</sub>)
49. 下顎骨LM<sub>3</sub>
50. 下顎骨LM<sub>2</sub>
51. 肩甲骨L
52. 肩甲骨L
53. 肩甲骨L
54. 肩甲骨L
55. 中足骨
56. 中足骨
57. 寛骨L
58. 大腿骨R
59. 上腕骨R
60. 上腕骨R
61. ~~桡骨R~~ 上腕骨R
62. 桡骨R
63. 桡骨L



第126図版 イヌ、ネコ、ヤギ

第127図版 フタ

1. 上顎骨
2. 上顎骨
3. 上顎骨
4. 上顎骨
5. 上顎骨
6. 上顎骨
7. 上顎骨
8. 上顎骨
9. 上顎骨
10. 上顎骨
11. 下顎骨 (a、b) a 側面 b 上面
12. 下顎骨 (a、b)
13. 下顎骨 (a、b)
14. 下顎骨 (a、b)
15. 下顎骨 (a、b)
16. 下顎骨 (a、b)
17. 下顎骨 (a、b)
  
18. 環椎 L
19. 軸椎
20. 胸椎
21. 頭頂骨 L
22. 頭頂骨 R・L
23. 頭頂骨 R
24. 頭頂骨 L
25. 頭頂骨 R
26. 頭頂骨 L



第127図版 プタ

第128図版 プタ

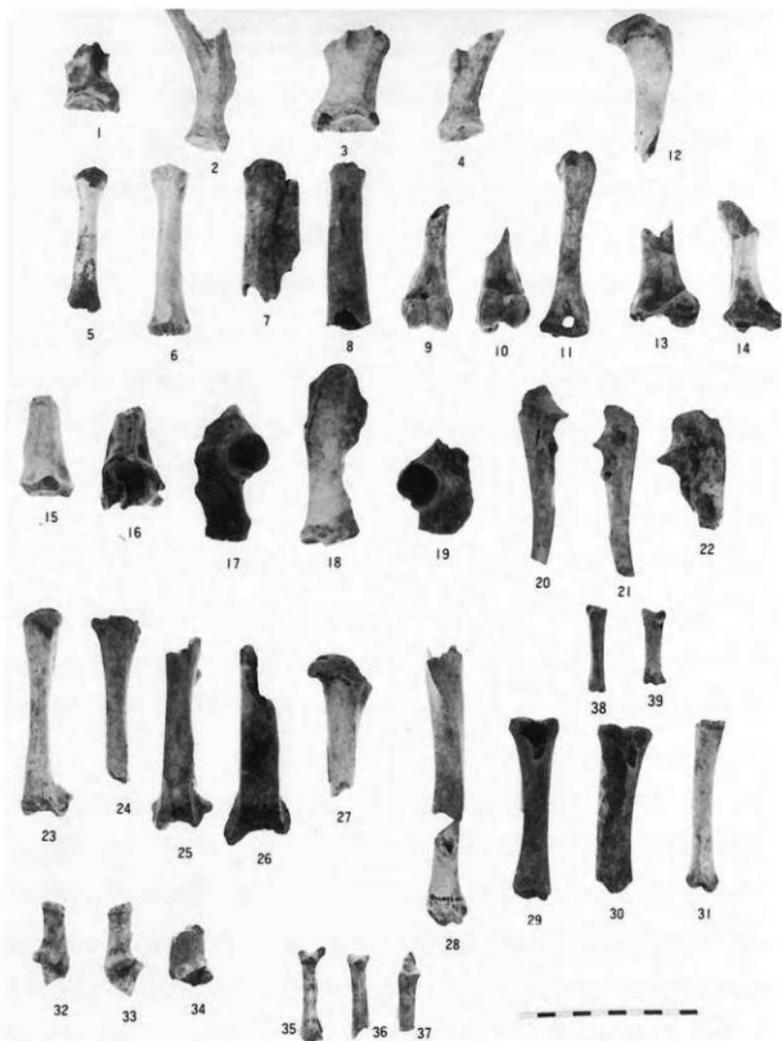
1. 肩甲骨 R (大型)
2. 肩甲骨 R (細型)
3. 肩甲骨 L (大型)
4. 肩甲骨 L (細型)
5. 上腕骨 R (太きやしや型)
6. 桡骨 L
7. 桡骨 R
8. 桡骨 L (太型)
9. 桡骨 L (太型)
10. 上腕骨 R (細型)
11. 上腕骨 L (細型)
12. 上腕骨 L (太きやしや型)
13. 上腕骨 R (太きやしや型)
14. 上腕骨 L (太きやしや型)
15. 寛骨 R 上部 (大型)
16. 寛骨 R 臼部 (大型)
17. 寛骨 R 上部 (大型)
18. 寛骨 L 上部 (大型)
19. 寛骨 L 臼部 (大型)
20. 尺骨 R
21. 尺骨 L
22. 尺骨 L
23. 大腿骨 R
24. 大腿骨 L
25. 大腿骨 L
26. 大腿骨 L
27. 大腿骨 L
28. 脛骨 R (大型)
29. 脛骨 R (大型)
30. 脛骨 L (大型)
31. 脛骨 L
32. 踵骨 R
33. 踵骨 L
34. 踵骨 L
35. 中足骨 R III
36. 中足骨 L III
37. 中足骨 L IV
38. 中足骨 L IV
39. 中手骨 L III

腕

腕

手

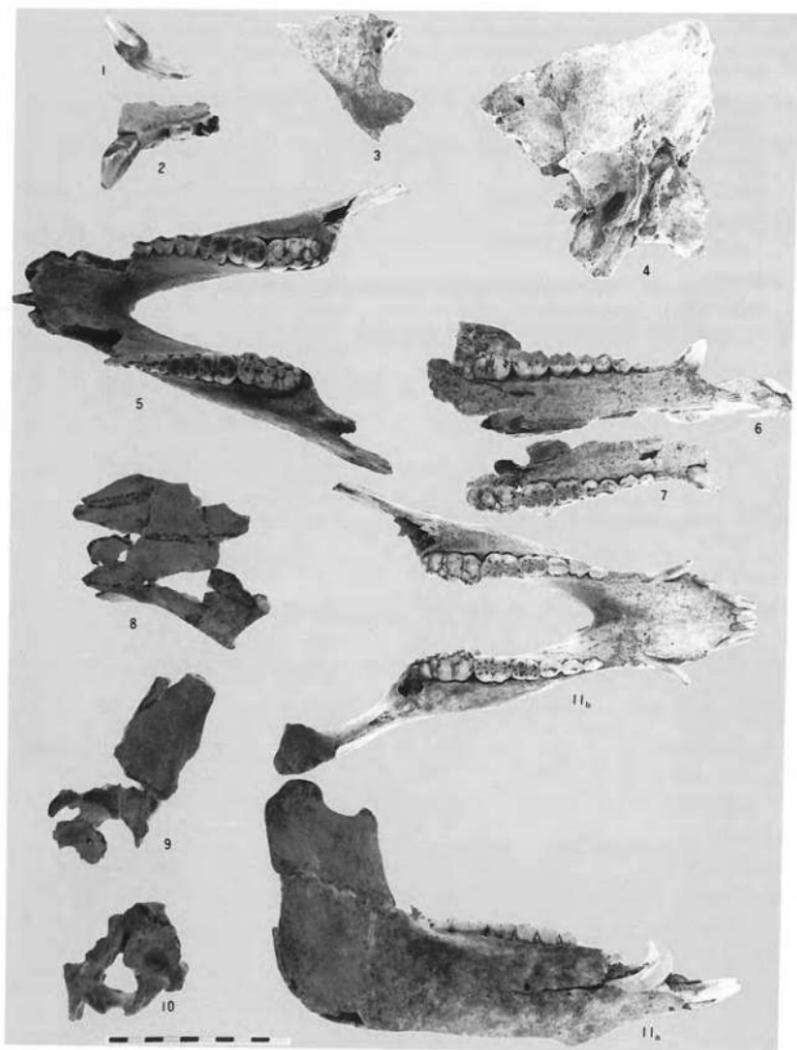
手



第128図版 プタ

第129図版 フタ

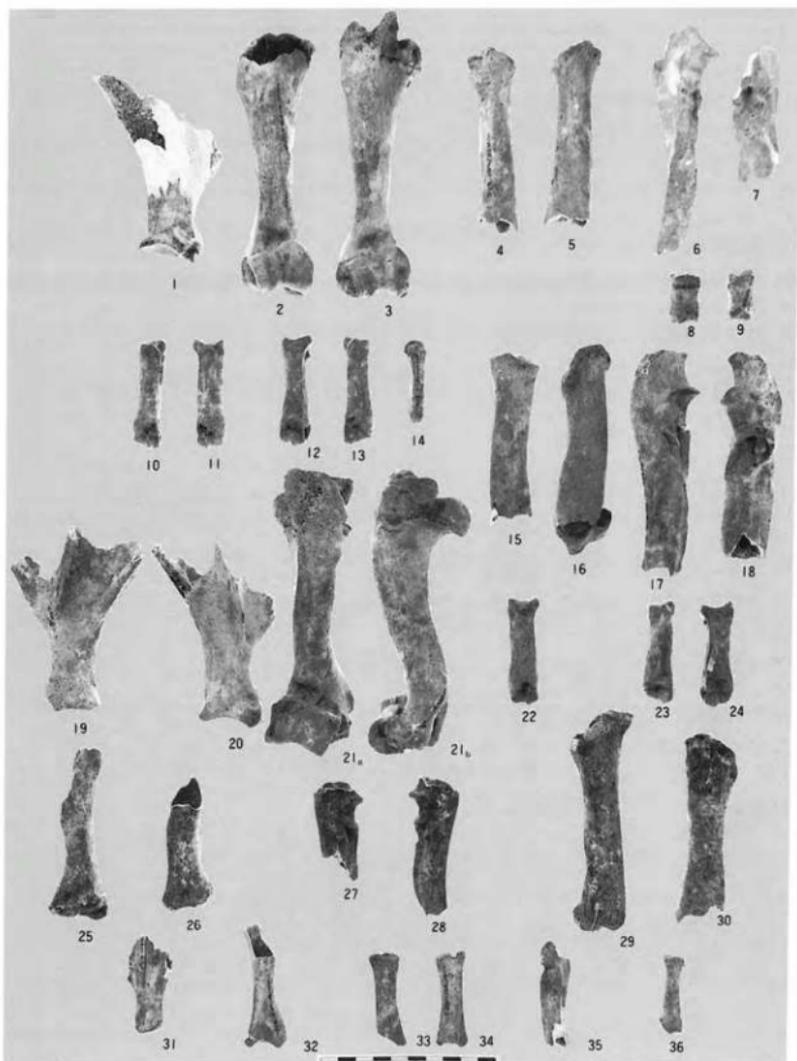
1. 上顎犬歯L (♀) a
2. 上顎犬歯R、 a
3. 涙骨L、 a
4. 後頭骨 a
5. 下顎骨 a
6. 上顎骨R (♀) b
7. 上顎骨L、 b
8. 頭頂骨 b
9. 側頭・後頭骨 b
10. 後頭骨 b
11. 下顎骨 (♀) b
- 11a. 下顎骨 b



第129図版 ブタ

第130図版 フタ

1. 肩甲骨 R b
2. 上腕骨 R b
3. 上腕骨 R c
4. 橈骨 R c
5. 橈骨 L b
6. 尺骨 R
7. 尺骨 R b
8. 基節骨 c
9. 基節骨 c
10. 中手骨 R IV b
11. 中手骨 R III b
12. 中手骨 L III c
13. 中手骨 L IV c
14. 中足骨 b
15. 橈骨 R a
16. 橈骨 L a
17. 尺骨 R a
18. 尺骨 L a
19. 肩甲骨 L a
20. 肩甲骨 R a
21. a. 上腕骨 L a
21. b. 上腕骨 L a
22. 中手骨 L III a
23. 中手骨 L IV a
24. 中手骨 R III a
25. 上腕骨 R d
26. 上腕骨 L d
27. 尺骨 R d
28. 尺骨 L d
29. 大腿骨 R d
30. 大腿骨 L d
31. 肩甲骨 L e
32. 上腕骨 L e
33. 橈骨 R e
34. 橈骨 L e
35. 尺骨 L e
36. 中手骨 IV R e



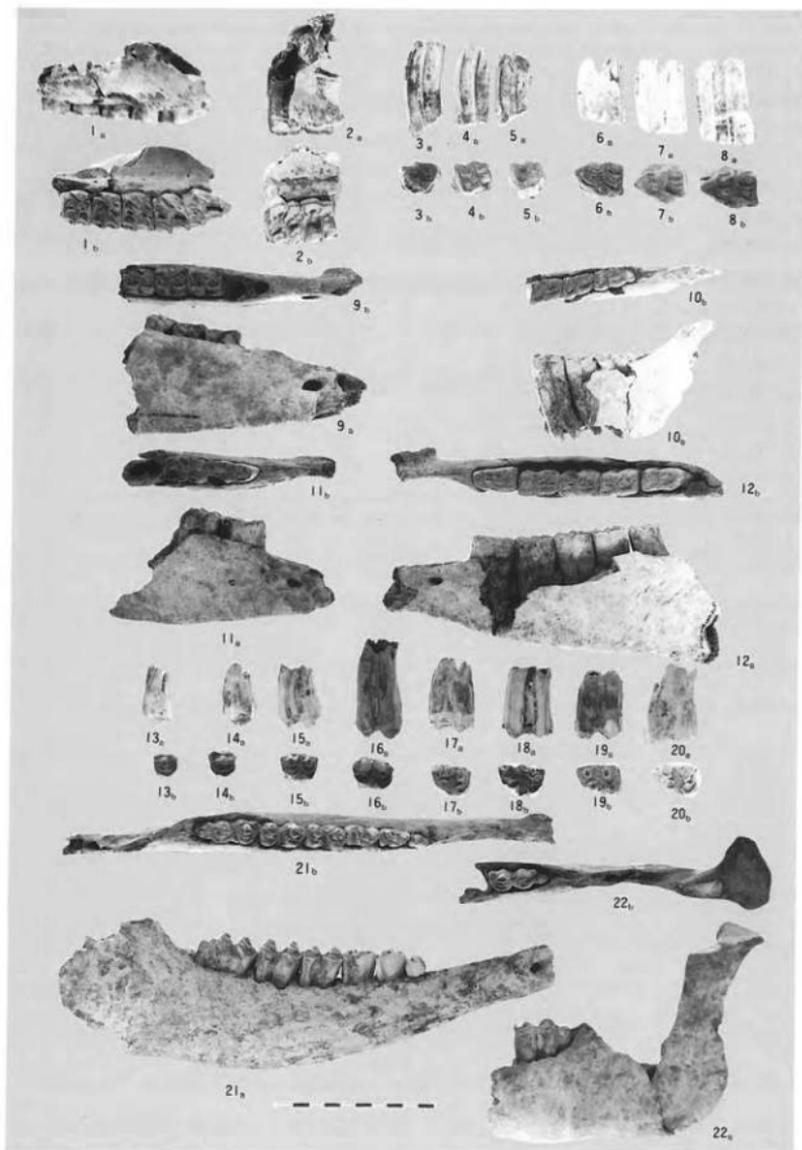
第130図版 プタ

第131図版 ウマ

1. 上顎骨 R ( $P^{2,3,4}$ ,  $M^{1,2}$ ) a、b
2. 上顎骨 R ( $P^4$ ,  $M^1$ ) a、b
3. 上顎骨 L、 $M^3$  (a、b) a 側面、b 上面
4. 上顎骨 L、 $M^2$  (a、b)
5. 上顎骨 L、 $M^2$  (a、b)
6. 上顎骨 L、 $P^2$  (a、b)
7. 上顎骨 L、 $P^2$  (a、b)
8. 上顎骨 L、 $P^2$  (a、b)
9. 下顎骨 R ( $P_{3,4}$ ,  $M_1$ ) (a、b)
10. 下顎骨 L ( $M_{1,2,3}$ ) (a、b)
11. 下顎骨 R ( $P_{2,3}$ ) (a、b)
12. 下顎骨 L ( $P_{2,3,4}$ ,  $M_{1,2}$ ) (a、b)

ウシ

13. 上顎骨 L、 $P^3$  (a、b) a 側面、b 上面
14. 上顎骨 R、 $P^4$  (a、b)
15. 上顎骨 R、 $M^1$  (a、b)
16. 上顎骨 R、 $M^2$  ( // )
17. 上顎骨 R、 $M^2$  ( // )
18. 上顎骨 R、 $M^3$  ( // )
19. 上顎骨 R、 $M^3$  ( // )
20. 上顎骨 R、 $M^3$  ( // )
21. 下顎骨 R ( $P_{2,3,4}$ ,  $M_{1,2,3}$ ) a、b
22. 下顎骨 L ( $M_3$ ) a、b



第131図版 ウマ、ウシ

第132図版 ウマ

1. 肩甲骨 L

2. 肩甲骨 L

3. 上腕骨 R

4. 上腕骨 L

5. 橈骨 L

6. 橈骨 L

7. 中手骨 R

8. 中手骨 L

9. 寛骨 R

10. 寛骨 R

11. 基節骨

12. 基節骨

13. 中節骨

14. 中節骨

15. 末節骨

16. 末節骨

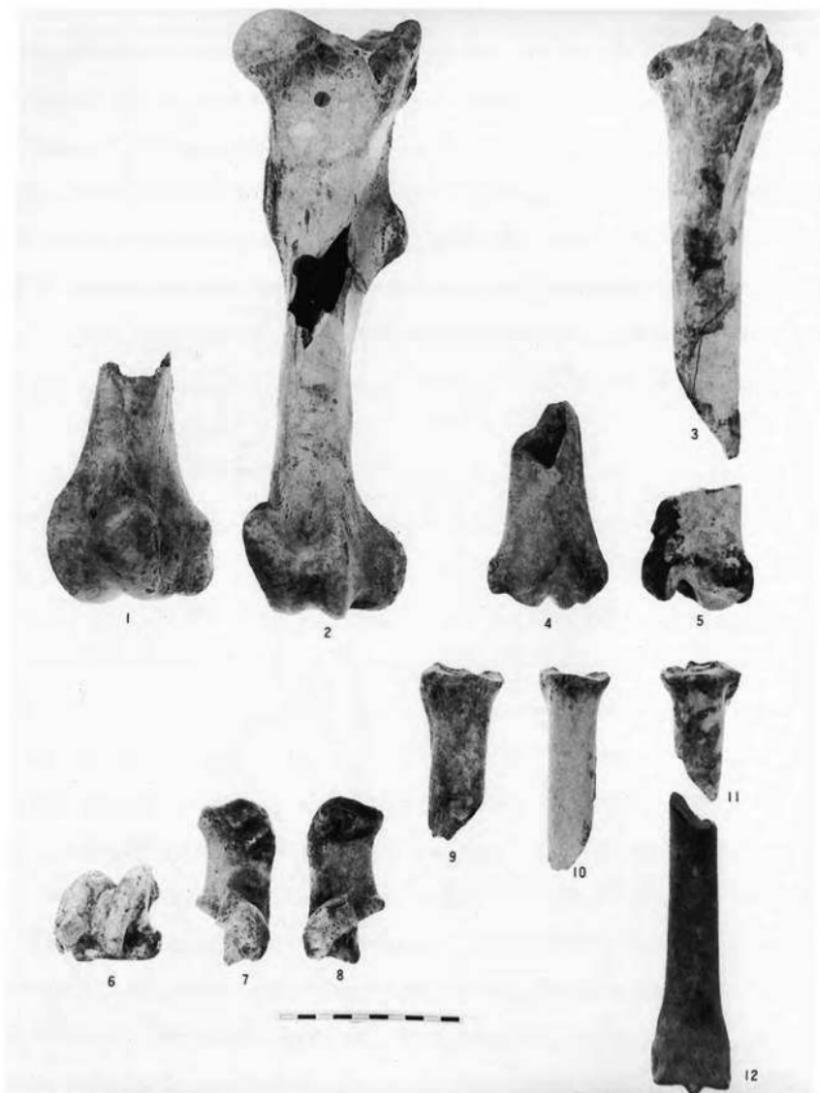
17. 肋骨



第132図版 ウマ

第133図版 ウマ

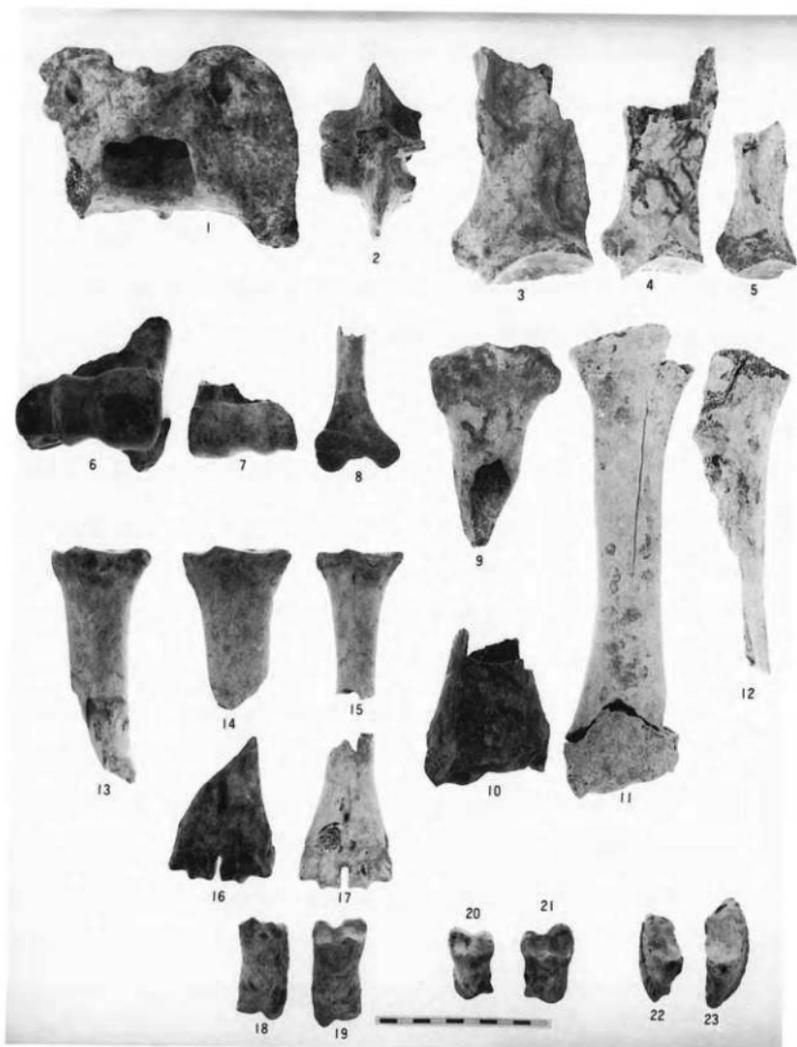
1. 大腿骨 R
2. 大腿骨 L
3. 脛骨 L
4. 脛骨 R
5. 脛骨 L
6. 距骨
7. 踵骨 R
8. 踵骨 L
9. 中足骨 (R)
10. 中足骨 (R)
11. 中足骨 L
12. 中足骨 L



第133図版 ウマ

第134図版 ウシ

1. 環椎
2. 軸椎
3. 肩甲骨L
4. 肩甲骨L
5. 肩甲骨L (幼)
6. 上腕骨R
7. 上腕骨L
8. 上腕骨L (幼)
9. 桡尺骨L
10. 桡骨L
11. 桡骨L
12. 尺骨L
13. 中手骨R
14. 中手骨R
15. 中手骨R (幼)
16. 中手骨L
17. 中手骨R
18. 基節骨
19. 基節骨
20. 中節骨
21. 中節骨
22. 末節骨
23. 末節骨



第134図版 ウシ

第135図版 ウシ

1. 寛骨R
2. 寛骨L
3. 大腿骨R
4. 大腿骨L
5. 脛骨R
6. 脛骨R
7. 脛骨L
8. 膝蓋骨R
9. 膝蓋骨L
10. 距骨R
11. 距骨L
12. 踵骨R
13. 踵骨L
14. 踵骨(幼) L
15. 踵骨(幼) R
16. 中心骨根骨R
17. 中足骨L
18. 中足骨L
19. 中足骨R



第135図版 ウシ

沖縄県文化財調査報告書第111集

## 湧田古窯跡（Ⅰ）

— 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査 —

印刷 平成5年3月21日

発行 平成5年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

〒900 那覇市泉崎1丁目2-2

TEL 098 (866) 2731~2733

印刷 文進印刷株式会社

湧田古窯跡正誤表

頁	行	誤	正
巻首図版1		東側	北東側
5	15	大城剛(現具志川市教育委員会)	金城透(現沖繩県立博物館)
9	4	碑	
21	第15図	377-7の番号が載っている	番号は載せない
26	19	碑	
26	7	割愛	割合
36	第1表1	第10図PL. 38	載せない
47	第35図青磁⑤	番号なし	12
52	第60図襷袖陶器	番号なし	5
55	11	第63図1	第63図7
55	13	第63図2	第63図8
93	2	「上焼」(註1)	(註1) 削除
93	14	「フィガキー」(註2)	「フィガキー」(註1)
94	36	これは外面鉄輪。内面	鉄輪。内面
95	33	灯火以下に	灯火以外に
98	13	三筆文	三筆文
98	40	a~b	a・b
99	27	円珠	丸珠
101	29	入れる前	入る前
101	32	陶器が出土	陶器は出土
101	35	灰緑色の特色	灰緑色等の特色
103	第71図4	腰部に僅かに	腰部は僅かに
104	第79図12-13		罫線もれ
105	第76図3	内面の角の部に	内面の角部分
105	第77図6	円筒形	円筒形
105	第78図3・4		罫線もれ
105	第78図5~7	(三採)	(三彩)
105	第79図3	(三採)	(三彩)
106	第82図3	下端に輪漕で	下端は輪漕で
122	10	(第92図1)	(第84図1)
122	17	口唇も	口唇も
122	25	(第93図1)	(第85図1)
122	33	(第93図3)	(第85図3)
122	34	(第94図1)	(第84図1)
123	8	(第95図1)	(第87図1)
123	9	(第97図7) … (第97図1)	(第89図7) … (第89図1)
123	13	口唇外端	口唇外端
123	28	(第96図2)	(第88図2)
123	36	(第97図2)	(第89図2)
123	38	立端を欠く	先端を欠く
124	32	(註1) をを参考	(註1) を参考
126	第84図9	脚高の…脚高外端	脚台の…脚台外端
127	第87図6	「へ」の字の上に点である。	「へ」の字の上に句点を入れてある。
130	6	タイプのもと、	タイプのもので、
134	16	口縁内部	口縁内面
134	19	還元資料の	還元資料は
134	5	襷袖色	襷袖色
135	29	内湾口径の	内湾口縁の
138	第9表	摺鉢	椀鉢
138	第9表	第9表 摺鉢口径一覧	第9表 椀鉢口径一覧
140	第91図12	「」のへろ記号	「〇」のへろ記号
140	第92図50	「」のへろ記号	「二」のへろ記号
178	第14表-719骨出土状況	腰骨骨体第3層(1)	腰骨近位部第1層(1)
179	第18表19骨出土状況	肩甲骨・背椎骨	順序入れかえ
183	第119図	ブタ	ブタ
188	第24表	イノシシ歯牙出土状況	ブタ歯牙出土状況
191	第33表97骨出土状況	肩甲骨の完存	肩甲骨の近位部
第81図版		7の正面写真と11の正面写真	7-11 11-7
第90図版		9の正面写真と12の正面写真	9-12 12-9
第125図版	9	9(科)9(時)のL前上顎骨	9(科)9(時)のR前上顎骨
第126図版		ネコが29. 椎体の下になっている	ネコは28. 椎体の上にくる
第126図版	25	大腸骨L	大腸骨R
第126図版	28	28. 椎体	28. 腰椎体
第126図版	29	29. 椎体	29. 腰椎体
第128図版	5-10~14	上腕骨R	上腕骨R
第132図版	10	10. 寛骨R	10. 寛骨L
第132図版	5	5. 脛骨L	5. 脛尺骨
第133図版	10	10. 中足骨	10. 中足骨R
第133図版	9	9. 中足骨	9. 中足骨R

第4表 本土産陶器観察一覽

図、Pl.	地区	ナリ	層位	器形	部位	口径	高さ	底径	特徴	産地	年代
第64図 Pl. 73	1	し44	第1瓦層	碗	口縁部	14.5			龍鳳見込み瓦礫文。	肥前	1650年代～1680年代
	2	せ44	3層,黄灰色上面	碗	底部			6	見込み瓦礫文。	肥前	1650年代～1680年代
	3	し45	円形状集中1(L字土層上)	碗	底部			3	外体部下半に1条,高台外面2条,高台内に1条の圓線。	肥前	17C後半
	4	こ46	第4層,4号井戸	碗	底部			4.2	外体部下半に1条,高台外面に2条の圓線。疊付けに砂付着。	肥前	17C後半
	5	試5	攪乱	碗	底部			4.8	32:17印刷。	肥前	18C前半～中葉
	6	し40	攪乱	碗	底部			4.9	見込み蛇の目輪割ぎ。高台砂付着。	肥前	18C代
	7	し44	第2層	碗	底部			4.4	見込み蛇の目輪割ぎ。	肥前	18C後半～19C前半
	8	に41	第2層	碗	底部			4		肥前	18C後半～19C前半
	9	た44	第1瓦層	碗	底部			3.2	山水文。	肥前系	19C初～幕末
	10	し44	第3層	皿	底部				頸部に墨弁文。	肥前	17C中葉
	11	つ45	攪乱	皿	底部			5.9	体部内面つる草。見込み蛇の目輪割ぎ。	肥前	17C末～18C中葉
	12	け40	攪乱	皿	底部			4.2	見込み山水文。疊付けに煤付着。	肥前系	19C初～幕末
	13	せ40	表土攪乱	そばち	底部			6.5	山水文。	肥前	18C前半～中葉
	14		1号表	小杯					梅文。	肥前	1650年代～1680年代
第65図 Pl. 74	1	な61	攪乱	碗	口縁部	12.8			雲龍見込み瓦礫文。	肥前	1650年代～1680年代
	2		2号窯前面攪乱	碗	口縁部	13.4			雲龍見込み瓦礫文。	肥前	1650年代～1680年代
	3		黒褐色攪乱	碗	底部			4.6	見込み瓦礫文。	肥前	1650年代～1680年代
	4	し59	8層	碗	口縁部	11.7			山水文。	肥前	1640年代～1650年代
	5	た59	1層	碗	底部			5.4	見込み圓線内に花卉文。疊付けに砂付着。	肥前	1640年代～1650年代
	6	て57	砂利層	碗	底部			3.6	高台内に「寿福」を上下に合字?	肥前	1650年代～1680年代
	7		表土攪乱	碗	完形	11.9	5.8	5	外面丸文。見込み五弁花(32:17印刷)。見込み蛇の目輪割ぎ。	肥前	18C中葉～末
	8	な57	落ち込み(黒褐色)	碗	底部			4.8	高台内「大明年製」のくずれの款。	肥前	18C中葉～末
	9	に57	2攪乱	碗	底部			5.1	見込み五弁花(32:17印刷)見込み蛇の目輪割ぎ。輪割ぎ,高台砂付着。	肥前	18C後半
	10	な57	攪乱2	碗	完形	10.8	5.8	5.6	広腹型。外面山水文。見込み岩波又は千鳥のくずれ。	肥前	19C前半
第66図 Pl. 75	1	に59	攪乱	碗	完形	10.8	5.8	3.8	外面,見込み格子目文。見込み蛇の目輪割ぎ。	肥前系	1820年代～幕末
	2	に57	赤褐色	碗	完形	9	4.6	3.5	外面山水文。	肥前系	1820年代～幕末
	3	に57	赤褐色	碗	完形	8.9	4.7	3.6	外面唐草文。	肥前系	1820年代～幕末
	4	に58	黒褐色	碗	完形	10.8	5	3.8	外面帆掛文と鳥。見込み蛇の目輪割ぎ。	肥前系	1820年代～幕末
	5		表土攪乱(塗物)	蓋物	底部			6.2	外面唐草文の一種。	肥前	18C代
	6	に57	攪乱2	蓋物	底部			6.8	体部外面下半,高台に圓線。	肥前	18C代
	7	に57	攪乱	蓋物	完形	8.6	4.6	4	蓋物の身。外面花卉文。	肥前系	18C末～幕末
	8	に57	攪乱	蓋物	完形	10.3	8.6	7.2	蓋物の身。外面波文。	肥前系	18C代
	9	な57	攪乱2	鉢	底部			7.2	見込み花か宝文。蛇の目凹形高台。	肥前系	19C初～幕末
	10	に57	赤褐色	皿					見込み五弁花文。高台内蛇の目輪割ぎ。	肥前	1640年代～1650年代
11	な59	攪乱(淡黄褐色)	皿	底部			5.4	疊付けに砂付着。	肥前	1640年代～1650年代	
12	に57	攪乱1	皿	底部			10.2	粗放な芙蓉手皿。見込み山水文。	肥前	1650年代～1670年代	
13		2号窯前面攪乱	皿	底部			10	粗放な芙蓉手皿。見込み文様は不明。	肥前	1650年代～1670年代	
14		表土攪乱	皿	底部			4.7	見込み唐草文。疊付け砂付着。	肥前	18C後半	
15	に57	攪乱	皿	底部			6.4	見込み宝袋文。	肥前系	18C後半～19C初	

第4表 本土産陶器の概観

年代	PL	地区	ナリ	層位	器形	部位	口径	器高	底径	特徴	産地	年代	
第46代	PL. 75	16	2	埋土	皿	底部			8.2	見込み定袋文。	肥前系	18C後半～19C初	
第47代	PL. 76	17	2	に57	攪乱2	碗の蓋	口縁部	9.2		端反型の碗の蓋。外面唐草文の一種。口縁内面蓋文。	肥前系	1820年代～幕末	
第47代	PL. 76	1	2	な60	第3層	皿	底部		5	見込み山水図。外面草花文の一種。	肥前系	19C初～幕末	
第47代	PL. 76	2	2	な57	攪乱2	皿	底部		5.6	見込み山水図。外面草花文の一種。	肥前系	19C初～幕末	
第47代	PL. 76	3	2	に57	赤褐色	皿	完形	10	2.2	5.8	見込み山水図。口縁。輪花型の皿。	肥前系	19C初～幕末
第47代	PL. 76	4	2	に56	攪乱1	皿	底部		8	見込み千鳥図。高台内無軸。	肥前系	19C初～幕末	
第47代	PL. 76	5	2		2号窯(前壁部)攪乱	皿	底部		5.5	輪花形の皿。外面唐草文の一種。内面芙蓉手。	肥前系	19C初～幕末	
第47代	PL. 76	6	2	な56	6層上	皿	底部		9.4	見込み山水図。蛇の目凹形高台。	肥前系	19C初～幕末	
第47代	PL. 76	7	2	に57	攪乱	皿	完形	10.2	2.2	6	見込み山水図。外面草花文の一種。	肥前系	18C末～19C前半
第47代	PL. 76	8	2	な62	攪乱	皿	完形	10.2	2.1	6.6	外面唐草文の一種。内面菊花散らし文。	肥前系	19C初～幕末
第47代	PL. 76	9	2	な56	攪乱1	皿	完形	12.2	2.2	6.2	口縁内面四方だすき文。見込み山水図。	肥前系	19C初～幕末
第47代	PL. 76	10	2	な60	第3層	皿	完形	7.8	1.9	4.2	内面網目文。	肥前系	19C初～幕末
第47代	PL. 76	11	2	ぬ56	攪乱層	皿	口縁部	12.2			輪花形の皿。内面の文様意匠文明。	肥前系	19C初～幕末
第47代	PL. 76	11	2	な57	落ち込み、暗褐色	皿	完形	15.2	4.3	8.8	輪花形の皿。口縁。蛇の目凹形高台。内面山水文。	肥前系	19C初～幕末
第48代	PL. 77	13	2	な57	攪乱	火入れ	完形	9.2	7.8	9.8	外面施と竹。	肥前	19C初～幕末
第48代	PL. 77	1	1	こ41	第2層	碗	底部		3.3	白磁。	肥前	17C後半	
第48代	PL. 77	2	2	な・に60		碗	完形	11.2	5.6	4.1	白磁。	肥前	17C後半
第48代	PL. 77	3	2	に57	攪乱2	碗	底部		4.5	白磁。	肥前系	18C	
第48代	PL. 77	4	2	に57	攪乱	碗	底部		5	白磁。見込み蛇の目輪刺ぎ。	肥前系	18C後半～幕末	
第48代	PL. 77	5	1	と42	第2層	碗	底部		4.7	白磁。	肥前	18C～19C	
第48代	PL. 77	6	2	な・に60	攪乱	碗	底部		4.8	白磁。見込み部分を蛇の目輪刺ぎ状に泥状の砂を塗り、焙煎を防ぐ。	肥前系	18C後半～幕末	
第48代	PL. 77	7	2	に57	攪乱	皿	底部		4.8	高台部無軸。見込みに砂目1個あり。	肥前	1580年代～1610年代	
第48代	PL. 77	8	2		攪乱	皿	底部		6	白磁。見込み部分を蛇の目輪刺ぎ状に泥状の砂を塗り、焙煎を防ぐ。	肥前系	18C後半～幕末	
第48代	PL. 77	9	2		表土攪乱	皿	底部		8.9	青磁。蛇の目凹形高台。	肥前	18C～19C前半	
第48代	PL. 77	10	1	さ44	第3層	皿	完形	10.7	3.3	3.6	口縁。胴下半・高台部無軸。	肥前	1580年代～1610年代
第48代	PL. 77	11	1	た42、ち42	第1瓦層、第3層黄灰色土	皿	完形	10.7	3	3.6	胴下半・高台部無軸。	肥前	1580年代～1610年代
第48代	PL. 77	12	1	せ47	第1層	皿	口縁部	12.6			胴下半無軸。	肥前	1580年代～1610年代
第48代	PL. 77	13	1	さ40、き42	攪乱、北井戸	碗	底部		4	内野山窯産。外面緑釉。内面透明釉。高台部無軸。	肥前	18C前半～中葉	
第48代	PL. 77	14	1	こ41	井戸中	皿	底部		4.5	内野山窯産。内面緑釉。外面透明釉。見込み蛇の目輪刺ぎ。高台部無軸。	肥前	18C前半～中葉	
第48代	PL. 77	15	1	ち43	第3層	碗	底部		4.4	見込み鉄絵。外面胴下半・高台部無軸。	肥前	1580年代～1610年代	
第48代	PL. 77	16	2	な57	攪乱	皿	底部		4.3	肥前産の可能性強い。見込みに山水図を描く。	京焼系	18C前半	
第48代	PL. 77	17	2	ぬ59	攪乱、黒褐色	皿	底部		4.7	京焼風陶器。見込みに呉須絵で山水図を描く。高台内印銘「木下登」?	肥前	17C後半	
第48代	PL. 77	18	1	た42	第1瓦層	皿	口縁部	11.5		鉄絵により植物文?を描く。胴下半無軸。	肥前	1580年代～1610年代	
第48代	PL. 77	19	2	な57	攪乱	皿	底部		7.6	大皿。胴下半・高台部無軸。	肥前	1580年代～1610年代	

# イノシシ歯咬耗度分布

